女子文壇

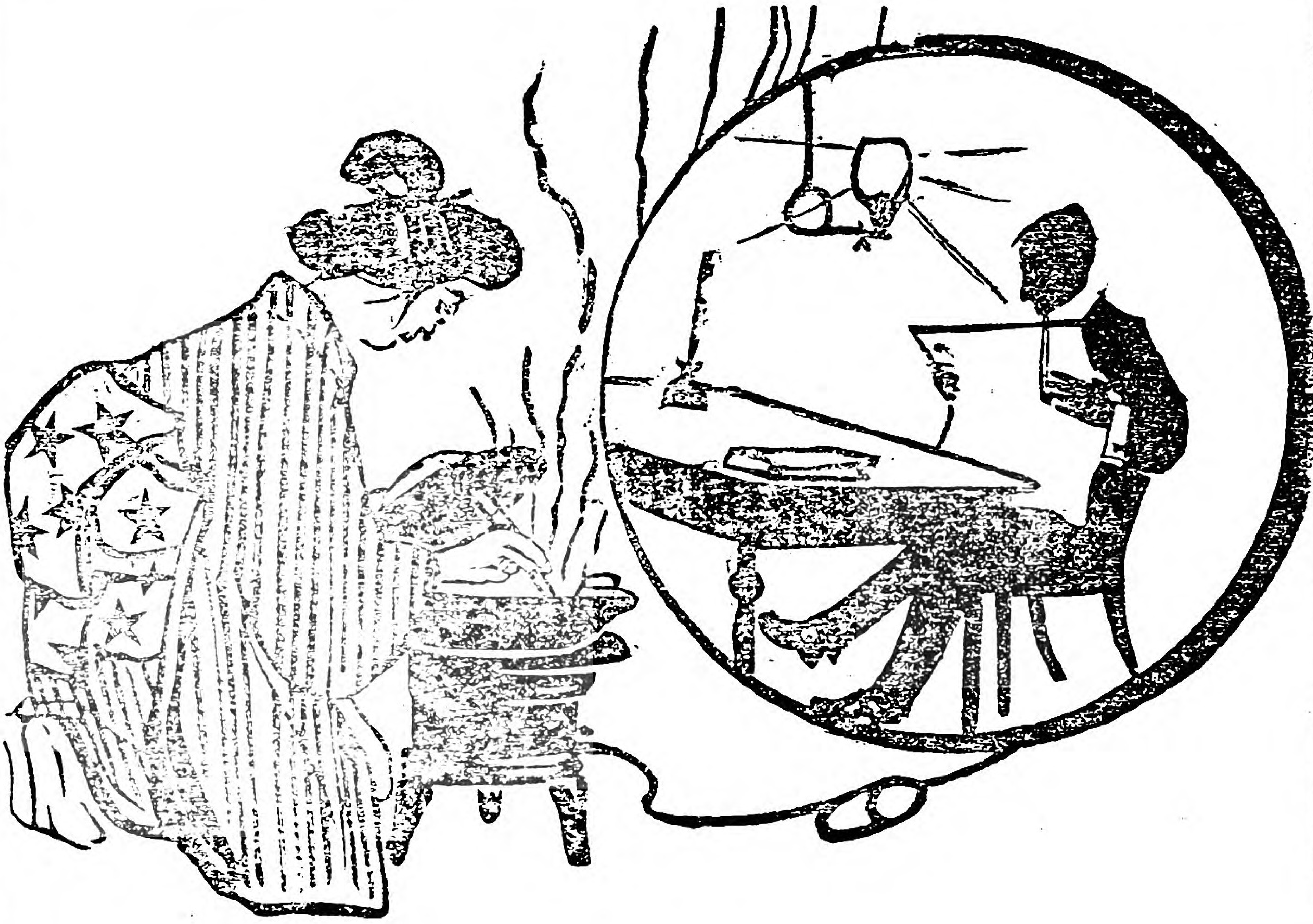
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可　明治四十三年十二月廿五日印刷納本（毎月一回廿五日印刷納



第七年第壹號

一月號

東京
女子文壇社發行



アカリとヘッツイ

春のむつ言

旦那「瓦斯燈を使用して初めて、白晝を欺くと云ふ句の眞意義を悟ることが出來た。明るくて陽氣で、萬物を美化するの點に於て、瓦斯は實に燈火の王だ。理想の燈火だ。

細君「それに御値段が安くて、先月などはあんなに御客樣で、大抵毎夜十二時過まで點けましたに、御拂は僅か一燈五十錢の割なんですもの。なぜ今少し早く之を用ひなかつたかと後悔致しますの。

旦那「この頃は、大層御馳走が出來るぢやないか。

細君「御臺所の瓦斯代が經濟に上りますので、其の費用を御惣菜にまはしますものですから夫に瓦斯は清潔で火の元の心配もなくお煮物も早く出來て、三なども大喜びですの。

旦那「これも全く瓦斯の賜物か、僕も大喜びだ。ハツハツ……

神田錦町

東京瓦斯株式會社

女子文壇目次

巻頭口繪

新年號（第七年第壹號）

日英大博覽會名譽賞牌受領



壽美禮おしろい

◎壽美禮おしろいは即座の化粧に適し使用最も簡便にして濃くも淡くも自由にして殊に多量の花精を含有し溫雅なる芳香を放ち湯上り等に用て爽快を覺へ美は益々艶を發揮すべし

◎煉製水製粉製其他各種純白の外肉色種々有れば如何なる人の如何なる化粧にも適す

◎壽美禮洗粉は西洋色白くなる洗劑にして朝夕用ふれば皮膚のあれる事なく滑に汚を落し色白く美しきに至るべし髮洗ひに用ひ髮のねばりを取り油あか等を生せず凡て半襟を洗ひてよごれを落し總て物を潔白する性あり

◎賣捌處は全國到る處有名の小間物化粧品店及藥店にあり

東京東両國元町
製造本舖 壽美禮堂
電話浪花二七六五番

壽美禮煉白粉（ねりおしろい）
壽美禮水白粉（みづおしろい）
壽美禮粉白粉（こなおしろい）
壽美禮打白粉（うちおしろい）
壽美禮あらひ粉

ねり製 極大壜四十錢 大壜貳十錢 小壜十貳錢
水製 大壜廿五錢 中壜十五錢 小壜十錢
洗粉 別製罐入 金五十錢
綿、紫、紅彩紫番ひ罐入 八錢
大袋入 貳錢 小袋入 壹錢

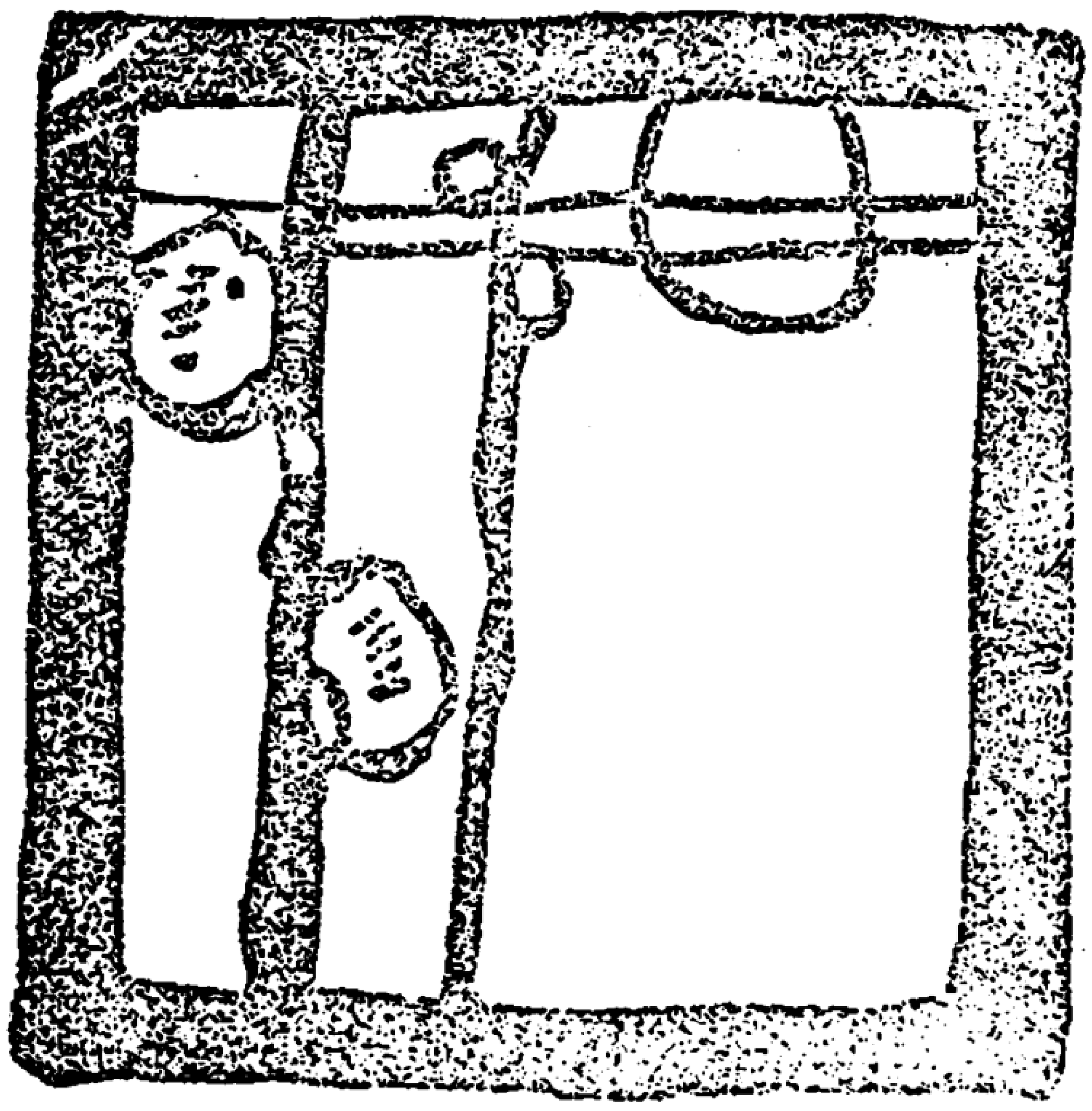
明眸

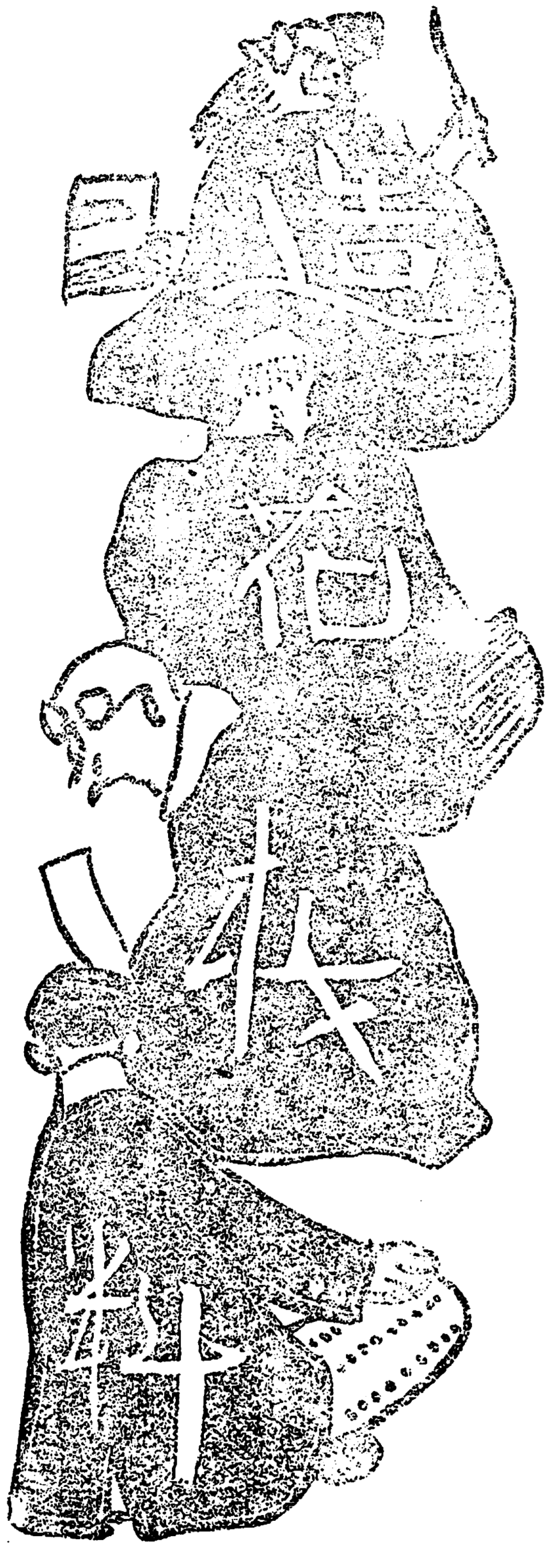
女子文壇第七年第壹號附錄



太田三郎筆

東京駿市大江印刷




造花材料

新年附録 日本名所家族旅行雙六

婦人世界

正月一日發行 六巻第壹號 定價一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分同二圓五錢

○人情論……村井弦齋

（實用手藝な弦齋夫人料理談 本號には餅の料理）

▽身に泌みて忘れ難き母の一言……（矢島、棚橋、跡見、三輪田、山脇各女史）

▽五十年前の私の花嫁姿……池田松子

▽未婚の男女は如何なる配偶を選ぶか……嘉悦孝子

▽正月の子供の遊びと食物の注意……加藤博士

常盤御前論

浮田博士 鳩山春子 箕作博士 吉田博士 安部磯雄 矢島楫子 三輪田元道 鈴木光愛 小林 杉浦重剛 宮田脩 西田敬止 其の他

▽北白川宮より御降嫁ありたる有馬伯世嗣夫人の平生……一記者

▽わかめとお多福の先祖は誰れか……武田豐四郎

▽米國から日本へ新婚旅行……森久保喜太郎

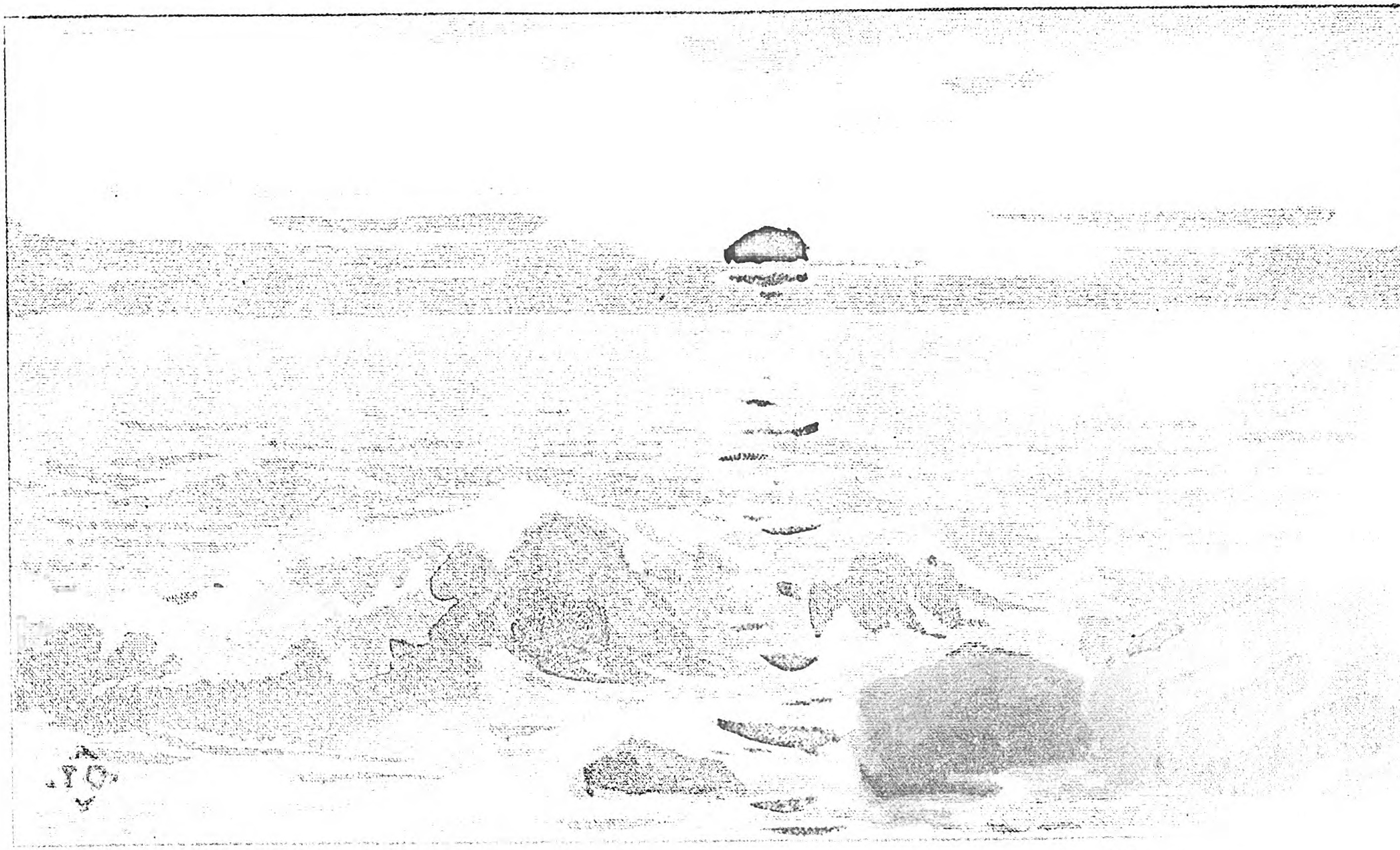
▽嫁入り當時一番に困つた事……（丸山夫人、天野夫人、金子貞子）

（下田歌子女史、毎號本誌に執筆さる）

○女學校卒業生は實際役に立たぬか……下田歌子

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 （振替貯金口座三二六番）

初日の出



[illegible]次郎筆

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明　清浦子爵　高山三兩博士の實驗有効御證明　東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀　其他大家より多大の高評を以て迎へられたる特許エンゼル香油は毛髪を黒化滋の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる「ヘリオトロープ」「バイオレット」「ホワイトリリー」等の高雅なる香芳を有し御使用後は馥郁として長時間保ちて まず故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方は日夜エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升



●定價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天赫壜花用特製三圓五十錢の四種で送料は市内は何れも七錢内地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地
エンゼル商會
電話 下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

最新美容法

一冊送料共金廿七錢
振替送金は金廿八錢
切手代用は三錢を十枚

本書は醫學に藥學上の學理實際と幾多令嬢令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有効の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髪法 髪の毛を美しくする法●髪の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止める法●毛をのばす法●ふけを取る法●ちゞれ毛くせ毛薄毛赤毛白毛等をなほす最良法等其他種々

美顔法 愛嬌と愉快●顔を洗ふ最良の方法●油の多過ぐる顔と油のたらぬ顔●赤すぎる顔と青き顔との療法●顔を醜くする食物●しわのよらぬ法●歯を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせるをこえる法●鼻高くする法●髪をよくする法●おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまづ等の最良療治法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさかさ毛手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●睡る時の心得と寢具●選擇はかくの如くすべし●醜婦も其の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顔色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す●化粧品の撰擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇を薄くし又は厚く見する法其他種々

服裝法 服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服「縞」●衣服にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帯のしめ方●前のあわせ方等種々

これ内容の大略のみ、眞に婦人の寶典也、眞に少女の必讀書也、御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め

發行所　東京神田錦町三ノ二　振替東京一六一八番　學友社

にきび そばかす

●はたけなどにて御困りの御方は獨逸皮膚病專門大家カボジー博士の處方によるカボジーといふ特効藥を一日も早く御用ゐなさる事をおすゝめ申します。もし又御望みの御方には小包料共金五十八錢にて一個宛御分ち申し上げます。

東京神田錦町三ノ二學友社書店内　高柳孝子

朝香宮妃允子内親王殿下





公爵島津忠重氏令妹ため子

（學習院在學）

公爵島津忠濟氏令孃しげ子

（學習院在學）

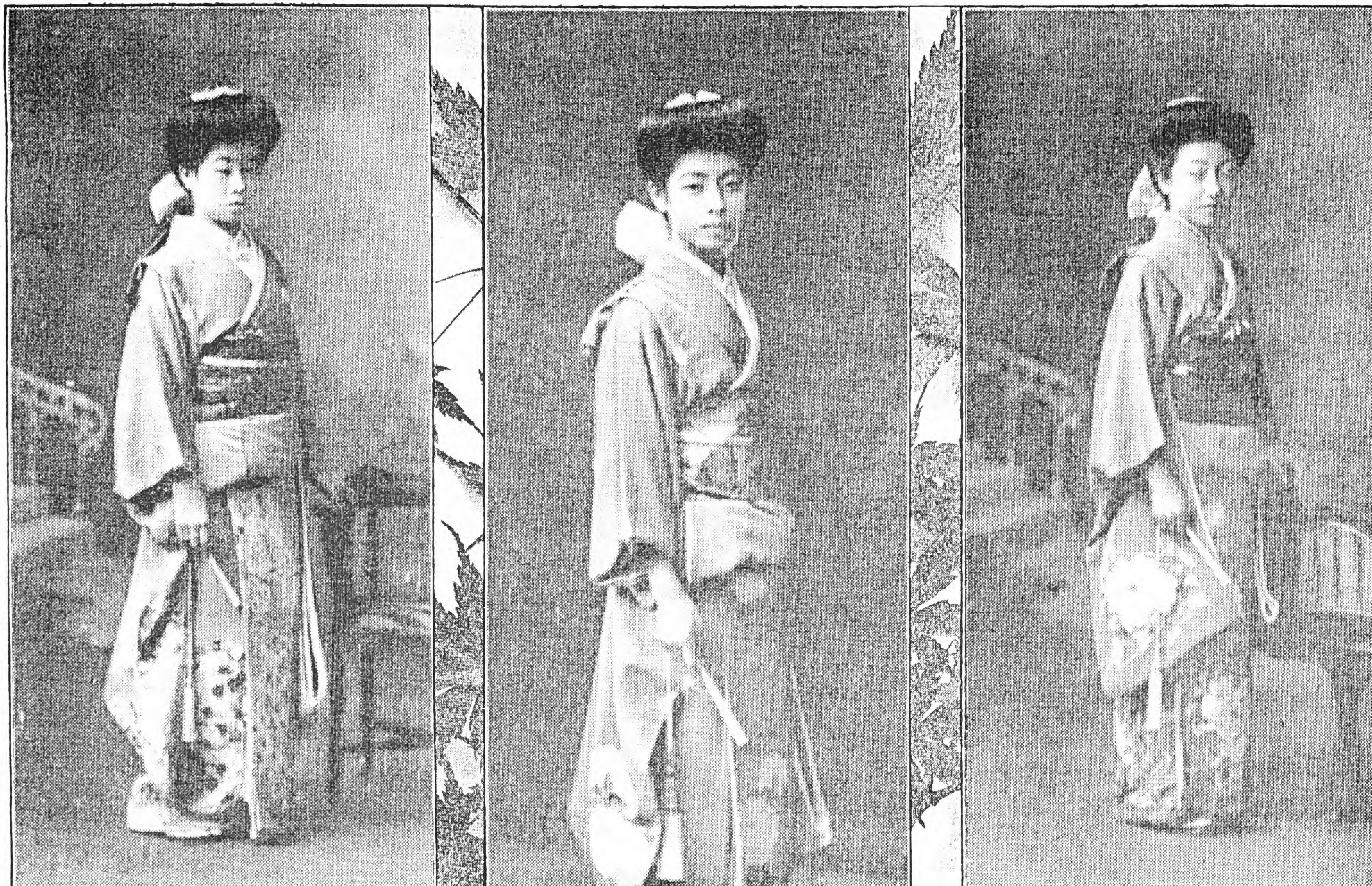


實用 文字速成通信教授

西本願寺法嗣令夫人衽(キヌ)子



司法大臣岡部長職子の令嬢



三女盈子　長女榮子　二女豐子

毛ぬき 新剤

従來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價壹圓
特製參圓
内地送料十五錢
海外三十五錢

飲んで色白くなる薬

藥名ビオール錠
壹劑壹圓
參劑半參圓
内地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的の美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

専賣特許 毛生液

ノーブル液は多年の實驗より發明致しました品でいか程年久しき又は大なる禿にても或はぬけ毛、赤毛、生へ際の惡しき、眉毛口ひげの薄き類に塗て目立たず劇藥など少しも配合しませんから危險の恐れ更になく實に有効確實なる模範的一大靈藥であります

定價大瓶壹圓●小瓶五十錢(送料各貳錢密封八錢)
東京市東兩國横網町壹丁目十九番地
西森五友館

婦人相談

月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵券三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地
笹山梅野

馬上の婦人



（本欄記事參照）

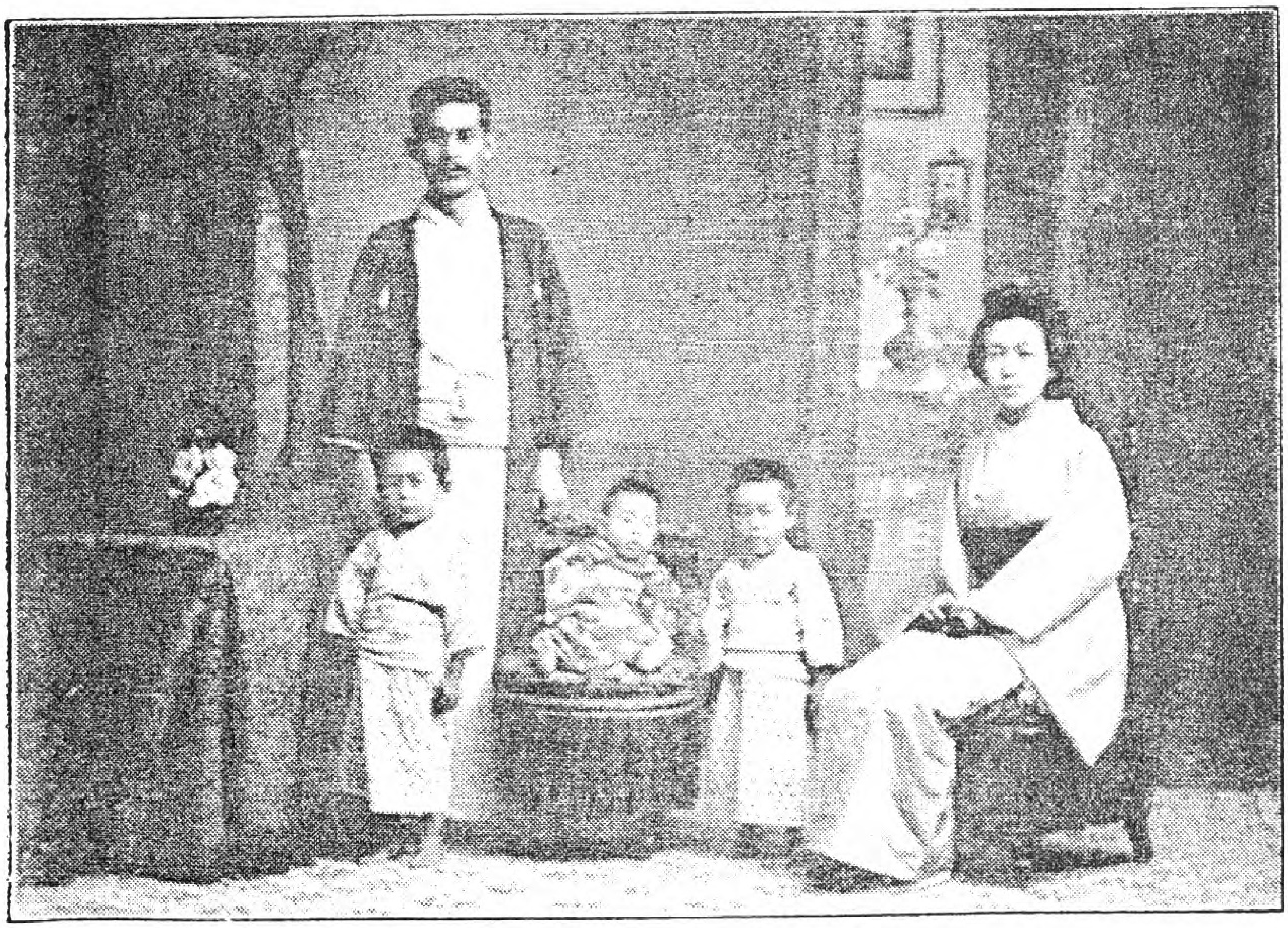
法學博士江木衷氏夫人榮子

加納子爵の家庭



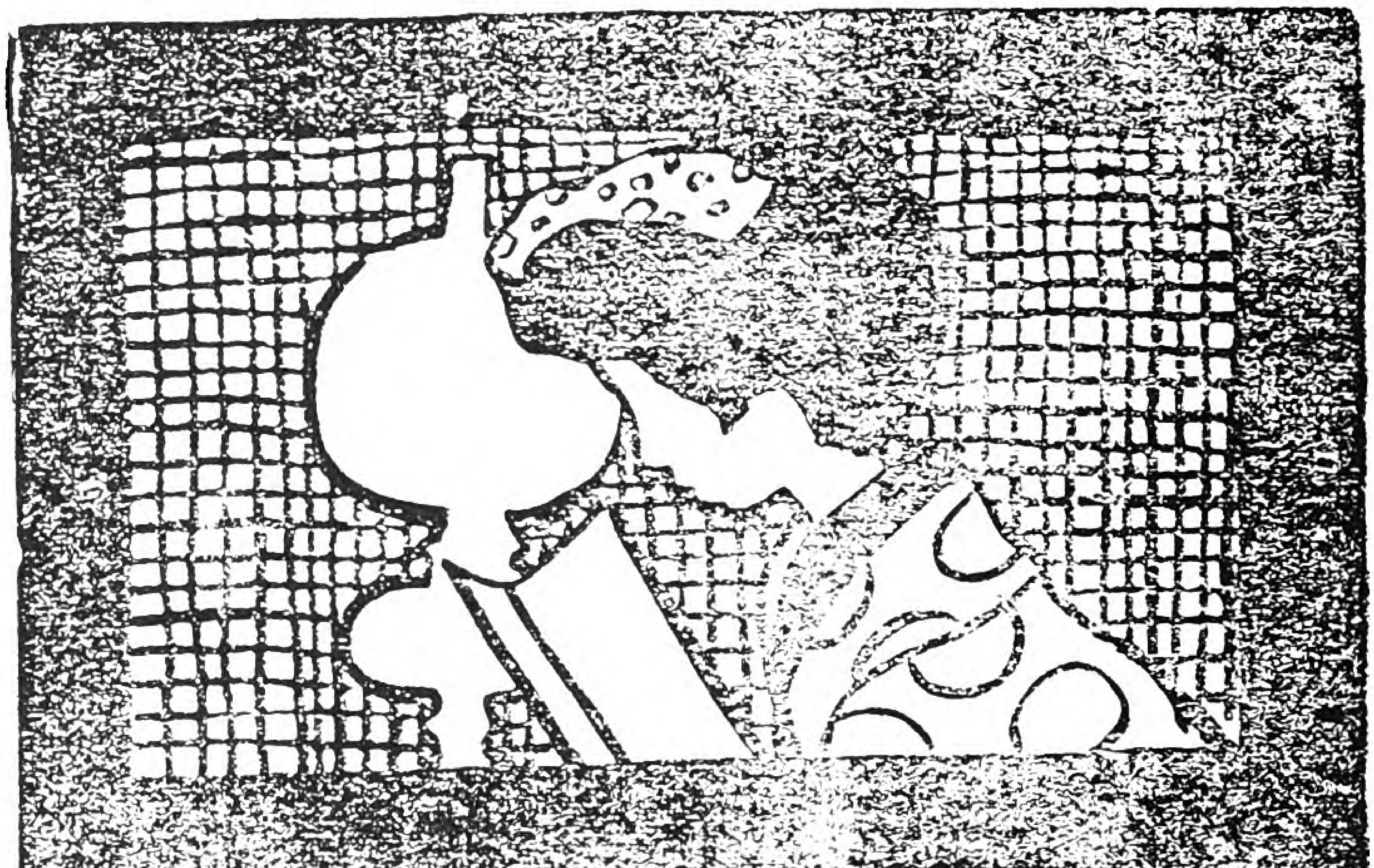
（前列右ヨリ）加納子爵、同夫人、令嗣久郎氏、（後列右ヨリ）五女夏子、阿野子爵夫人國子、久郎氏夫人、武田大佐夫人、野出理學士夫人八重子、四女治子

（本欄記事參照）



成女高等女學校長宮田修氏の家庭

新年の讀物　夢二畫集



書名	版	定價	送料
春の巻	七版	五拾錢	八錢
花の巻	四版	四拾錢	四錢
夏の巻	六版	五拾錢	八錢
旅の巻	四版	七拾錢	六錢
秋の巻	再版	五拾錢	八錢
冬の巻	新刊	五拾錢	八錢
繪物語　サヨナラ		七拾錢	六錢
繪伽　小供の國		卅五錢	六錢

發行所　東京麹町三丁目二番地　振替東京二〇九一四番　洛陽堂

新春と共に内容を改め更に紙數を增加す

婦人畫報

一月一日發行 正月の卷 一冊廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

伏見宮妃殿下 二女王殿下
松方侯爵金婚式當日の光景……
鳩山氏二夫婦のかるたと百合さん
小兒の遊び▼和歌子の日遊び……
岩倉公爵の三令孃▼日向高橋夫人……
令孃の樂しき三ケ日……
毛利公爵邸に於ける令女會大會……
御前の講演 十二名家 令孃
婦人慰問會紀念會……
山階宮女王殿下

新春號二大附錄 滿谷畫伯筆二頁大三色版美人畫 水仙 榊原蕉園筆 新裝

久邇宮三女王殿下
名家の庭園いろいろ……
閑院宮御邸島津鍋島諸邸の門松
岡部司法大臣官邸に於る婦人談話會
新裝の梨本宮三殿下
正月の笑ひ初め……
乘馬の江木博士夫人欣々女史……
井上侯爵の家庭と銅像除幕式……
姫宮殿下御歌留多……

讀物

虛僞の進步と眞正の發展 井上博士
思ひ出づる古山の春…… ましら子
正月の衛生…… 加藤博士
樣々な正月の風俗…… 坪井博士
國土の膨脹 家庭の進步 尾崎行雄
笑ひ顔の研究…… 源學士
名婦鑑、勇婦いや…… 遠山稻子
古歌に表たる梅花と寒月…… 水穂
醬油、鹽、砂糖等の用ひ方 西村學士
我家の新年 加納子爵、目賀田、北里、〃藤三夫人
女學生の文章と家庭の正月
正月のお惣菜は何がよいか 里子
皇后陛下の御歌
家庭正月の遊び…… 巖谷小波
新年と婦人 六大名家
心理上より見たかるた…… 大洲學士
亥の歳物語 瀬川學士▼年の始めと女
呉服物の買ひ方▼假名…… 岡山高蔭
家庭十二ヶ月▼家の仕事 宮川すみ子
新版の書籍…… 澤柳政太郎

東京麹町區飯田町四丁目四番地 東京社 振替口座一一八一八 電話番町二三三九番

村井弦齋先生御證明最良髪油

みみけ油及みやけ香油

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

定價表

特大	八拾五錢
大	四拾五錢
中	貳拾五錢
小	拾五錢

右送料各拾貳錢

代理店 女子文壇社用達部

●みやけ油 宮内省(於第一回貿易品博覽會)御買上の光榮を蒙りたる最良髪油なり僞物あり東京人形町通みやけ油本舗木村三宅堂製と長髪美人商標に御注意を願ます販賣所至る所の信用ある店にあり

兩陛下御詠

御勅題歌かるた

壹組壹圓 送料十二錢

遊戯首魁 **明治成功合**

壹組十二錢 送料二錢

百人一首 **歌かるた**

壹組特製壹圓八十錢 一號壹圓二十錢、二號壹圓、三號八十錢、四號五十錢、各送料十二錢

舶來 **トランプ**

ゴム引、壹組壹等貳圓、二等壹圓五十錢、三等一圓三十錢、四等壹圓、五等八十錢、各送料八錢

東京市日本橋區馬喰町三丁目廿番地

かるた問屋 **西村商店**

振替口座一四五七五番

梅どく りん病 ち疳症 わきが

生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮諸病 血の道 ヒステリー 月やくとまりたる病 子なき人

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび た蟲等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精早漏 發育不充分 記臆力減衰

▲病状を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央藥院

やせる薬

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり凡て身體ふとりすぎてお困りの方へ害なく●やせて中肉美容となる新藥を希望者へ分與す郵券貳錢送れ詳報す

東京市小石川區第六天町

池田製藥部

肥滿病新藥（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶく〱と肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◉ぶ〱とふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◉ふき出物多き人◉脹滿◉ぶつ〱逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば色は艶白となり程よくやせて暫つて美顔紛[illegible]たる美人となる事を保證す

諸孃姉の福音



藥價 一劑一圓五拾錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◉世界唯一 **月やく下し藥**……見よ……病める婦人……月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最强度……其効極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人月經不順二三ヶ月の月經閉止月經滯りは一二劑にて必ず流下す四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絕なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲藥價一劑六十錢二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京京橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 **小宮愛生堂**

母と愛兒



正金銀行倫敦支店長巽氏夫人しげ子



日本銀行書記長加藤友三郎氏令嬢千代子

紳商柴山藤兵衛氏令嬢光子

三井銀行員葛西貞藏氏令嬢ふみ子

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區銀座二ノ十　河村愛子



ミキヒ

藥學士藤本理先生が苦心の結果發見せられたる奇藥タウルー

ミキヒとは藥學界の泰斗者の藥學士藤本理先生が十年の苦心と注ぎて漸く血を使用して脱せ

時種の奇藥にて苦腦を脱せしむる

◎希望者は本品購求前又は同時に本劑を使用し本劑の效たるを確信の上使用を乞ふ

明書を要求せられ其特效を確信の上御使用を乞ふ

◎藥價　症用五十錢　送料市內四錢地方八錢

販賣所　東京市本郷區切通坂町三十四番地　長田藤平

振替口座東京二六九三

懷妊避妊自由自在器

子のできる器及子のできない器

（全用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

醫學得業士

（齋藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許

アシトア

atocia.

（膣内挿入小器具）

本器は森村婦人科日東病院長醫學得業士齊藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして膣内へ避妊器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器即ち本器により膣内へ子の孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懷妊**することを得らる故に子の無き人は用て目的を達すべく又本器によりて膣内へ避妊藥を入れる時は決して妊娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て**避妊**の目的を達し得らるゝも共に衛生無害なるは勿論年賀數年確證する所なり且つ本器へ病毒豫防劑を入れ使用する時は**梅毒淋病**其他の病毒を皆て傳染する患なし又慢性子宮内膜炎膣炎等の**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れ使用せば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼のコンドーム、サック及子宮サックの如き不決の念なく天然の感觸を鋭敏強劇ならしむる世界唯一の理想的新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る婦人衞生上必ず使ふべき要用の貴器なり。但し詳細なる說明書及使用法并に藥品に添附し小包郵便密封にて送付す。（正價）ニッケル製壹個金壹圓拾五錢、純銀特別製參圓拾五錢は郵券代用試驗增し。着金即刻送品す。

世界一手專賣元

東京市神田區五軒町十九番地

（電話番號下谷五百四十六番）

日新館藥房

快活



女子大學教授井上秀子女史



梅原大阪商業會議所理事夫人柳子



藤井前代議士令嬢　美保枝子



後藤毛布製造會社長令嬢　つむ子



紳商赤星鐵馬氏令嬢　ふさ子

新發明 美容術
肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を發見し實に奇効顯著の美容新劑價並製壹個廿錢特別製壹個八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥
サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製造の「サーサパリラ」は峻烈なる**消血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服藥なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効
ペーアス石鹸

壹個代價郵稅共八拾五錢▲三個入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず當館に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し蒸るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々簇出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

有効保險 前代未發
秘傳奇術

全壹册正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目録大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治す法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香油製法●美顔クリーム製造法●音聲を清亮にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず疲勞へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●狐憑必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に〇れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を〇〇す藥法●堅き女の氣を〇〇す藥法●陰〇を長大にする藥法●そばかす必治法●女を〇〇にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生衆中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●乘船に整れたる時醒ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰を術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒字夜光の奇術●老人終身髪取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服藥新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服臓を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを治する法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疳瘡の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る易の法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●檢黴豫防の奇法●思ふ時目を發す法●年齢により房事の疲散●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新舘商店**

女子文壇

第七年第壹號

明治四十四年一月一日



一人舞臺

ストリンドベルク作
鷗外譯

人物

甲、夫ある女優。
乙、夫なき女優。

婦人珈琲店の一隅。小さき鐵の卓二つ。緋天鵞絨張の長椅子一つ。椅子數箇。○甲、帽子外套の冬支度にて、手に上等の日本製の提籠を持ち入り來る。乙、半ば飲みさしたる麥酒の小瓶を前に置き、繪入雜誌を讀みゐる。後對話の間に、他の雜誌と取り替ふることあり。

（甲）　アメリイさん。今晩は。クリスマスの晩だのに、そんな風に一人で坐つてゐるところを見ると、まるで男の獨者のやうね。

（乙、目を雜誌より放し、頷き、又讀み續く。）

ほんとにお前さんのさうしてゐるところを見ると、わたし胸が痛くなるわ。珈琲店で、一人ぼつちでゐるなんて。お負けにクリスマスの晩だのに。わたしパリイにゐた時、婚禮をした連中が料理店に這入つてゐたのを見たことがあるのよ。お嫁さんは腰を掛けて滑稽雜誌を見てゐる。お婿さんと立會人

とで球を突いてゐるといふわけさ。婚禮の晩がこんな風では、行末どうなるだらうと思つたの。よくまあ、お婿さんになつて、その晩に球なんぞが突けたことね。お嫁さんもお嫁さんで、よくまあ、滑稽雑誌なんぞが見てゐられたことね。お嫁さんの方がひどいかも知れないわ。今お前さんのさうしてつくねんとしてゐるところを見ると、わたしその連中を見た時のやうな心持がするわ。

（給仕女、入り來り、甲の前にチヨコレエト一杯を置き、又出で去る。）

今になつて思つて見ればね、お前さんがあの約束をおしの人を亭主に持つた方が好かつたかも知れないと思ふわ。そら。あの時さういつたのは、わたしが初めよ。勘忍してお遣りとさう言つたわ。あの事をまだ覺えてゐて。あの時お前さんがわたしの言つた通りにすると、今はちやんと家持になつてゐるのねっ去年のクリスマスにはあの約束をおしの人の二親のゐる、田舍の内にお前さんは行つてゐて、さういつたつけね。もうもう芝居なんぞは厭だ。こんな田舍で氣樂に暮したいとさういつたつけね。なんでも家持に限るのだよ。それは芝居にゐるも好いけれどもね。その次ぎには内といふものが好いわ。そして子供でも出來ようもんなら、それは好くつてよ。そんなことはお前さんには分からないわね。

（乙、さげすむやうなる顏色をなす。甲、チヨコレエトを匙へしやくりて飲み、提籠の蓋を明け、中にあるクリスマスの贈物を示す。）

御覽よ。内のちび達にこれを遣るのだわ。

（人形を一つ取り出す。）

これがリイザアのよ。好い人形でせう。目をくるくる廻して、首がどつちへでも向くのよ。好いなや

ないか。このコルクのピストルはマヤに遣るの。

(コルクを塡め、乙に向ひて射撃す。乙、驚きたる表情をなす。)

こはくつて。わたしがお前さんを撃ち殺すかと思つたの。まさかお前さんがそんなことを思ふだらうとは、わたし思はなくつてよ。それはわたしが途中から出てあの座に雇はれたのだから、お前さんの方でわたしを撃つのなら、理屈があるわね。お前さんだつて、わたしがあの地位に坐つたのを怨まないわけにはいかないでせう。それはわたしのせいぢやないのだけれど。事によつたらお前さんのあの座から出て行くやうになつたのを、わたしのした事だとお思ひかも知れないが、それは違つてよ。お前さんはさう思つたつて、わたしそんなことをしやしないわ。こんなことをいつたつて駄目ね。なんと云つたつて、お前さんはさう思つてゐるのだらうから。

(次ぎに上沓一足を取り出す。)

これがあの人のよ。この鬱金香の花はわたしが繡取をして、それを職人にしたてさせたのよ。わたし鬱金香が大嫌ひさ。だけれどあの人はなんにでも鬱金香を付けなくちやあ氣が濟まないのだもの。

(乙、目を雜誌より放し、嘲弄の色を帶びて相手を見る。甲、兩手を上沓に嵌む。)

御覽よ。あの人の足はこんなに小さいのよ。そして歩き付きが意氣だわ。お前さんまだあの人の上沓を穿いて歩くとこは見たことがないでせう。

(乙、聲高く笑ふ。)

御覽よ。かうして歩くのだわ。

(甲、上沓を嵌めたる兩手にて、卓の上を歩く眞似をなす。乙、聲高く笑ふ。)

それからおてるとね、こんな風に足踏をしてよ。「なんといふ下女だい。いつまで立つても咖啡の出しやうを覺えはしない。おや、このランプの心の切りやうはどうだい」なんぞといふのよ。それから歩いてゐるうちに床板の透間から風が吹き込むでせう。さうすると足がつめたくなるもんだからさういふの。「おう、つめたい。馬鹿めが煖爐に火を絶やしやあがつたな」なんかんといふのよ。

（片々の上沓の上革を、片々の底革にて摩る。乙、朗かなる聲にて高く笑ふ。）

それからどうかすると、内に歸つて來て上沓を穿かうと思ふと、目つからないのね。マリイが棚の下に入れて置いたでせう。あゝ、こんなことを言つてこゝで亭主の蔭事を言つては濟まないわね。あれでも氣の優しい素直な男だわ。お前さんもあんな男を亭主に持てば好かつたのだわ。何を笑ふの。それにね、あの人は堅いのよ。わたしより外の女に關係してゐないといふことは、わたし受け合つても好いの。なぜ笑ふの。いつかもわたしに打ち明けて話したわ。そら。わたしが諾威へ旅稼に行つたでせう。あの留守に、あの厭なフリイデリイケが來てごまかさうと思つたの。ひどいぢやないか。わたしの内にゐる時なんぞに來ようもんなら、わたし目をほぢくり出して遣るわ。世間で彼此云つてわたしの耳に這入らないうちに、あの人が自分で話したから好かつたわね。フリイデリイケばかりではないわ。一體なんだつてどの女もどの女もあの人にでれ付くのだらう。なんでもあの人があの役所に勤めてゐるもんだから、芝居へ買はれる時に、あの人に贔負をして貰はうと思ふのらしいわ。事によつたらお前さんなんぞも留守に來て、ちよつかいを出したかも知れないわ。お前さんだつてさう底抜けに信用するわけにはいかないわ。兎に角お前さんがそんなことをしたにしても、あの人が構はなかつただけはたしかだわ。どうもさうらしいわ。それだからなんとなくお前さんはわたしに對して不平らし

い樣子をするのだらうと思ふわ。前からそんな心持がしてよ。

（二人極まり惡げに顏を見合す。）

それはさうと、兎に角今夜はちよつと内へお出でな。そしてわたし共に對して意地を惡くしてゐないところを見せるが好いわ。少くもわたしに對して意地を惡くしてゐないといふことを知らせて貰ひたいわ。なぜだか知らないが、誰を敵に持つよりも、お前さんを敵に持つのは厭だわ。かう思ふのは最初にお前さんの邪魔をわたしがしたからかも知れないわ。それともどういふわけか知ら。わたしもよく分からないわ。

（乙、甲を物珍らしげに見詰む。甲、深く物を案ずるらしく。）

一體わたしとお前さんと知り合になつた初めのことを思つて見ると變だわ。なんだかお前さんが氣になつてね。ちつとも目が放されないやうな氣がしたのだわ。往く時も歸る時も、なりたけお前さんの傍に引つ付いてゐるやうにしたのだわ。なんでもお前さんを敵にすると大變だと思つたので、わたし友達になつたのよ。でもどうも仲がしつくり行かなかつたのね。お前さんが内へ來ると、あの人がなんだか困つたやうな樣子をするぢやあないか。それが又氣になつてね。なんだかから着物のしたてが惡くつて體に合はないやうな心持ね。そこでどうにかしてあの人にお前さんに優しくして貰はうと思つて、いろ／＼骨を折つて見ても、駄目だつたのね。その内お前さんに約束の人が出來たでせう。さうするとあの人が急にお前さんに恐ろしく優しくし出したのね。なんだかそれまでは心の内を隱してゐたのが、もう向うも身の上が極まつたのだから、構はないとでも思つたらしく見えたのね。それからどうだつけ。わたしは燒餅なんぞは燒かなかつたわ。それが又不思議ね。それから生れた女の子の

名付親に、お前さんをしたのね。その時わたしがあの人に無理に頼んで、お前さんにキスをさせたのね。あの人はかうなれば為方がないといふ風でキスをする。その時のお前さんの様子つてなかつたわ。まあ、度を失つたといふやうな風ね。それがその時はわたしには氣が付かなかつたのだわ。そして長い間その事を忘れてゐたのだわ。それに氣が付いたのは、實はたつた今よ。

（劇しく立ち上がる。）

なぜ默つてゐるの。さつきからわたしにばかり饒舌らしてゐて、一言も言つてくれないのね。そんなにして坐つてゐて、わたしの顏を見てゐるその目付で、わたしの考への糸を、丁度繭から絹糸を引き出すやうに手繰り出すのだわ。その手繰り出されたわたしの考へは疑ひ深い考へかも知れない。わたしにもよく思つて見なくちやあ分からないわ。一體お前さんはなぜあの約束の人をよしてしまつたの。なぜあれからといふものは內へ來なくなつたの。なぜ今夜もお出でといふのに、來ようと云はないの。

（乙、何をか言はんとす。）

まあ默つてお出でよ。もう言つてくれなくても好いわ。わたしにはひとりでに分かつて來てよ。あゝ。そのせいだ。そのせいだ。さうだわ。さうだわ。さうして見れば何もかも分かるわ。きつとさうだわ。ほんとに、ほんとに厭なこつた。もうお前さんと同じ卓に坐つてゐるのも厭だわ。

（乙の前の卓の上に置きし品物を隣りの卓に運ぶ。）

わたしがこの上沓に鬱金香の繡取をさせられたのは、お前さんが鬱金香を好いてゐるからだわ。それから。

（上沓を床に擲つ。）

夏になるとメラルへ行つてゐなくてはならないのも、お前さんが海が嫌ひだからだわ。それから男の子が生れたのにエスキルといふ名を付けさせられたのも、お前さんのお父つさんがエスキルといつたからだわ。考へて見るとわたしはお前さんの好きな色の着物ばかり着せられてゐる。お前さんの好きな作者の書いた小説ばかり讀ませられてゐる。お前さんの好きなお數ばかり喰べさせられてゐる。お前さんの好きな飲みものばかり飲ませられてゐる。わたしはこんな風にチヨコレエトを飲ませられてゐる。わたしがチヨコレエトを飲むやうになつたのも、考へて見れば、そのせいだわ。ほんとにどうしたといふのだらう。考へれば考へるほど、大變な事になつちまつてゐるわ。何から何まで、わたしはお前さんの通りに爲込まれてしまつてゐるわ。癖まで同じやうにさせられてゐるわ。なんの事はない。お前さんの魂がわたしの魂の中へ、丁度蛆が林檎の中へ喰ひ込むやうに喰ひ込んで、わたしの魂を喰べながら、段々深みへもぐり込むのだわ。こんな風にせられてゐた日には、いつかはわたしといふものが無くなつて、黒い糞と林檎の皮とだけが跡に殘るに違ひないわ。今さう思つて見れば、最初からわたしはお前さんの傍を遠ざかりたいと思つてゐたのだわ。そしてどうしても遠ざかることが出來なかつたのだわ。なんでもお前さんはその黒い目で、蛇が人を睨めるやうにわたしを見てゐて、わたしを化してしまつたのだわ。今思つて見ればわたしはお前さんにじりじり引き寄せられてゐたのだわ。兩足を括つて水に漬けられてゐるやうなもので、幾らわたしが手を働かして泳ぐ積りでゐても、段々と深みへ這入つて、たうとう水底に引き込まれるんだわ。その水底にはお前さんが大きな蟹になつて待つてゐて、鋏でわたしを挾むのだわ。それが今こゝにかうしてゐるわたしだわ。ほんにほんに憎いつたら、憎いつたら、憎いつたらない。さうしてぢいつとして坐つてゐて落付き拂つて、默つてゐ

るのが癪に障るわ。今の月が上弦だらうが下弦だらうが、今夜がクリスマスだらうが、新年だらうが、外の人間が爲合せだらうが、不爲合せだらうが構はないといふ風でゐるのね。人を可哀いとも思はなければ、憎いとも思はないでゐるのね。鼠の穴の前に張番をしてゐる鶴のやうに動かずにゐるのね。お前さんには自分の獲ものを引きずり出すことも出來ない。追つ駈けて攫まへることも出來ない。お前さんは只獲ものゝ出て來るのを、澄まして待つてゐるのね。いつでもこの隅のところに坐つてゐてさ。この咖啡店では、お前さんがいつもこゝに坐つて、傍の人をぢいつと見てゐるから、こゝの隅の方を鼠落しと云つてゐるわ。その雜誌を見るのも氣に食はないわ。誰かが病氣になつたとか、お金を無くしたとか、誰かが跡を雇ひ次がれないことになつたとか、いふやうなことを調べてゐるに違ひないわ。そんなにしてゐて獲ものを待つのだわ。水先案內が、人の難船するのを待つてゐて自分の收入にするのと同じ事だわ。だがね、やつぱりそのお前さんは可哀さうな女なのね。まあ、手負ひのやうなものだわ。手負ひが自分の身をはかなむやうに、お前さんも自分の身をはかなんでゐるのだわ。お前さんの意地の惡いのも、手負ひの意地の惡いのと同じ事だわ。わたしはお前さんを憎んでやらう憎んでやらうと思ふのだけれど、どうも憎むことは出來ないわ。兎に角お前さんはちびのアメリイちやんだわ。あの人との關係なんぞも、實はどうでも好いわ。それかなんのわたしの邪魔になるものか。お前さんのお蔭でチヨコレエトを飮むやうになつたとして見ても、お前さんでない外の人のお蔭でチヨコレエトを飮むやうになつたとして見ても、わたしに取つては同じ事だわ。

（チヨコレエトを一匙飮む。物體らしく。）

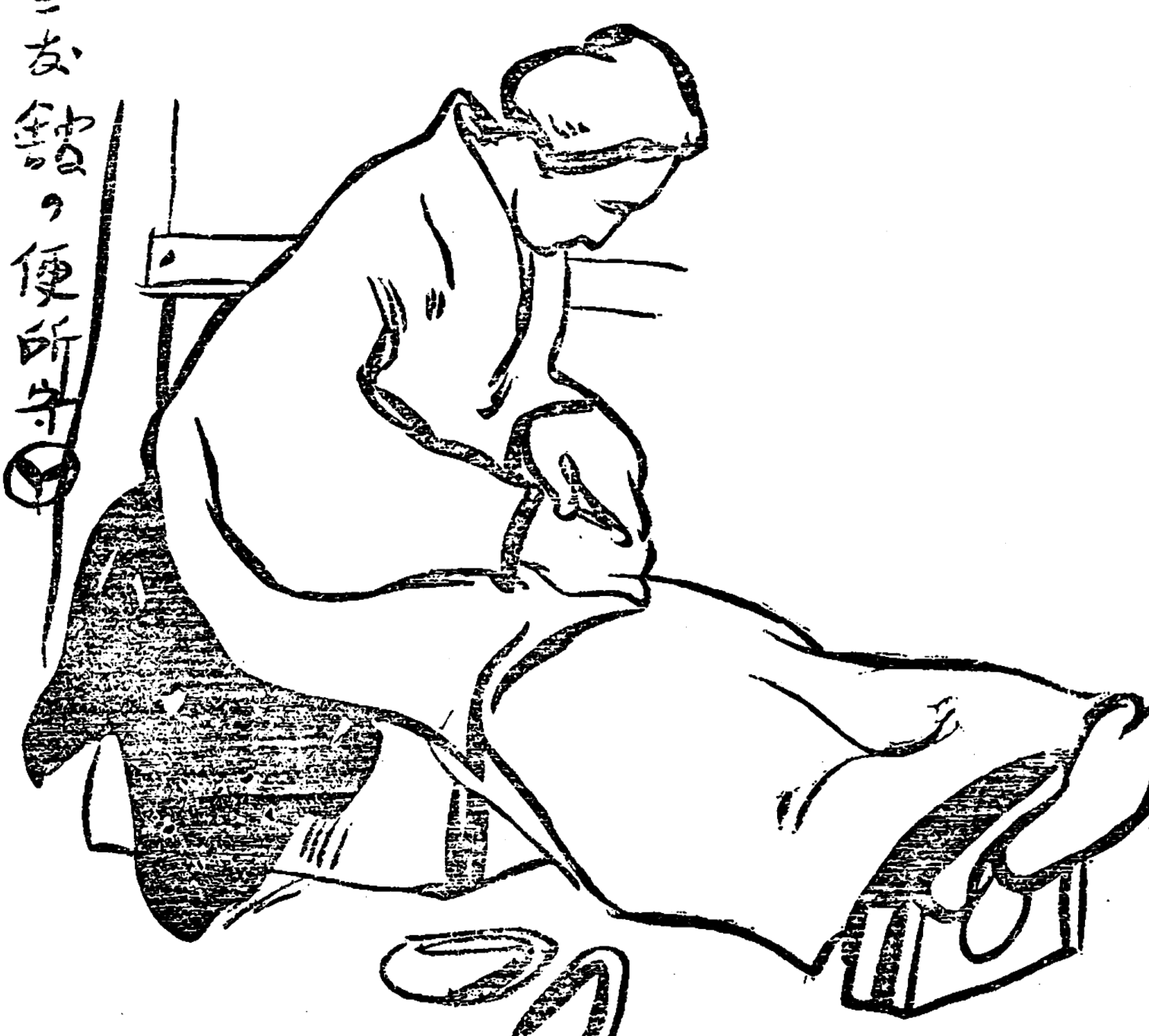
チヨコレエトを飮むのは藥だわ。お前さんの好きな色の着物を着せられたとして見ても、それも好い

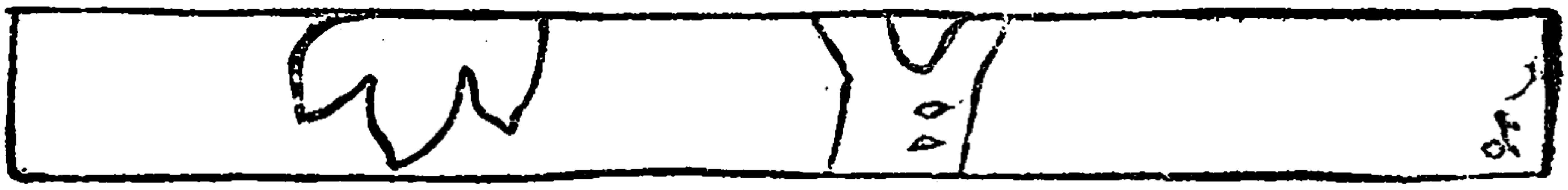
事よ。その着物をわたしの着たのを見て、わたしをあの人が可哀がつてくれるから好いわ。兎に角勝つたのはわたしで、負けたのはお前さんだわ。どうもわたしの見たところでは、あの人はもうそんなにお前さんの事を思つてはゐないわ。お前さんの積りでは、あんなにしてゐる間に、わたしの方でいつか引き下がるだらうと思つたのでせう。そしてあんな風にしてゐたのでせう。そして今になつては後悔してゐるのでせう。ところで御覽の通りわたしは引き下がらずにゐるわ。わたしだつて亭主を持つのに人の好かない男を持たなくてはならないといふわけはないわ。兎に角考へて見れば、どうもわたしの方が勝つてゐるやうだわ。わたしの食べ物も着物も癖も何もかもみなお前さんに貰つたので、わたしの方からお前さんに遣つたものといつては何一つないわ。さうして見ると、わたし盜坊ね。お前さんは目が覺めて見ると、わたしに何もかも取られてしまつてゐるのだわ。それをわたしは取つてあの人に可哀がられる種にしてゐる。お前さんが持つてゐては、なんの役には立たないのだわ。幾らお前さんが鬱金香が好きだつて、いろんな人を迷はせるやうな癖を持つてゐたつて、とうとう誰もお前さんと一しよにはならないでせう。とうとう御亭主を持たずじまひでせう。お前さんの好きな作者の小說も、お前さんが讀んではなんにもならんのだが、わたしが讀めばあの人に可哀がつて貰ふ種を目付ける種本になるのだわ。幾らお前さんのお父つさんがエスキルといつたつて、エスキルといふ名を付ける坊主はお前さんには出來ないわ。なんだつて默つてゐるの。默つて默つて默り通しにしてゐるの。わたしいつもこんな時は、そんなにしてゐるのがお前さんの強みだと思つたわ。だけれど本當はさうぢやないかも知れないわ。お前さんにはなんにもいふことがないのかも知れないわ。お前さんはなんにも考へてはゐないのかも知れないわ。

(立ち上がる。床に落ちたる上沓を拾ふ。)

わたしもう行つてよ。この鬱金香の上沓も持つて行くわ。お前さんの鬱金香の付いてゐる上沓も持つて行くわ。なんでもお前さんは誰にも物を教はらないで、誰にも頭を屈めないでゐて、とうとう枯れた籐のやうに折れてしまふのだわ。わたしそんな事にはならなくつてよ。左様なら。いろいろ教へて頂戴したのね。難有うよ。お前さんのお蔭で、わたしはあの人が本當に可哀くなつたんだから、それもお前さんにお禮を言つても好いわ。わたしもう行つてよ。そしてあの人を可哀がつて遣るわ。

(去る。〇完)





涙

正宗白鳥

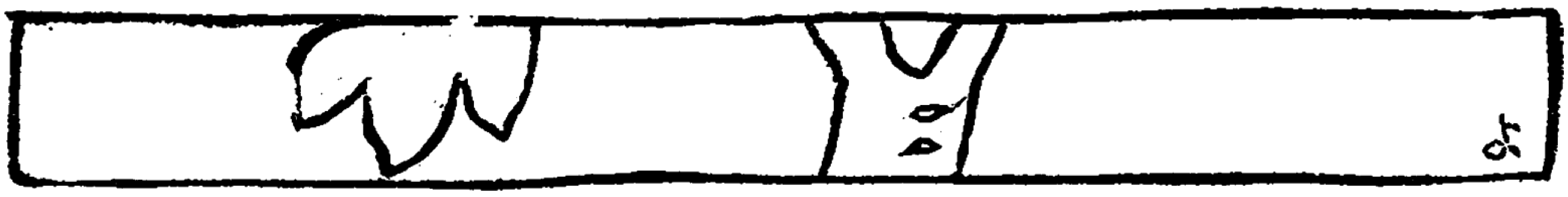
「泣くのが一番の樂みです」と、私の知つてゐる或女が云つた。泣ける芝居でなければ面白くない。泣ける小説でなければ面白くない。他人の身の上を思つて同情の涙を流すのも樂みだ。自分の境遇をわざと悲く思込んで泣くのも樂みだ。

涙は外に現れた人情の結晶と見られることがある。歌にもなる。詩にもなる。女ばかりではない、涙のない男と云はれるも。あまり快い者ではない。

私はその女の言葉を聞いた時、ふと自分の涙を考へた。これまでに幾度目に涙を浮べて泣いたであらうか。

四つ五つの時分まではよく泣叫んでゐたさうだ。三歳の時に手づから熱湯で炒粉を掻ませながら、思ふやうに茹らないと云つて、茶碗を投げて泣入つて、暫らく息が絶えたこともあるさうだ。が、そんな小い時分の事は少しも覺えてゐない。

記憶に殘つてゐる最初の涙は、確か八つ九つの頃、近所の遊び友達と爭つた時のそれである。我儘に育つて、自分の家の中では何一つ思ひ通りにならぬことはなく、遊びに出ても親の威光で多少の幅が利いて、友達仲間で隨分無理を通してゐたのに、その時始めて自分の無理が壓へられたのだ。その



友達は漁夫の子であつた。黃い綺麗な帆立貝の殼を持つて、私の家の垣根に沿うて通つてゐたが、私はそれを見ると、俄に慾くなつたので、側へ駈寄り、いきなり手を掛けて、「その貝殼を私に呉れい」と云つた。

その子は目を張つて首を振つた。

「外の者と代へてやるから、それを呉れい。根木でも半紙でもやるから」

「そんな者よりや、この貝殼がいゝ」と、その子はわざと見せびらかすやうに、貝殼を高く上げて振つた。

私は言葉では無駄だと知つて、武者振りついて奪はうとした。が、しかし相手は容易く屈服しなかつた。「やるものか〳〵」と牙齒を剝出して、片手で私をあしらひながら、片手で貝殼を握締めてゐた。私は滿身の力を揮つたが、何の甲斐もなかつた。

「お前のお母に云付けてやる」と、嚇すと、

「云付けるんなら云付けて見なされ」と、相手は平氣だ。

「もう家へは來させんぞ」

「行かいでも構はん」

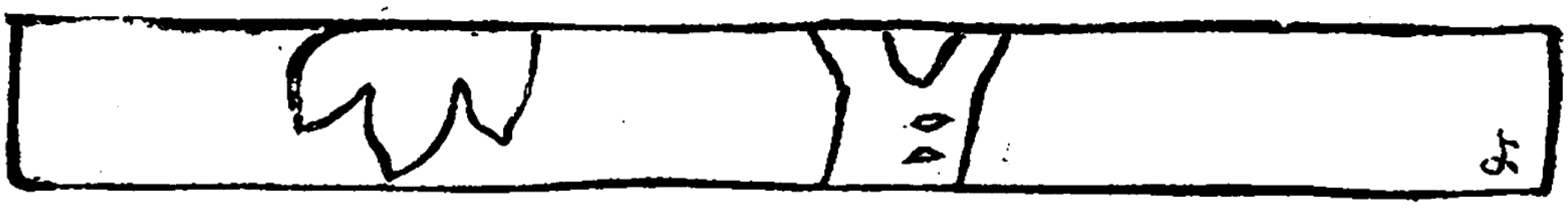
その子は通掛つた他の友達と連立つて、嘲るやうな顏付して顧み〳〵行過ぎた。私は獨り垣根に添うて突立つたまゝ、二人の後を見送つてゐたが、涙が何時か頰を傳つた。そして、やがて聲を出して泣いた。

「どうしたのだい、何で泣くのかい」と、祖母が草取鎌を持つたまゝ、菜園から脊を延して訊いた。



私はます〱聲を張上げて泣いた。
　不如意の感じを私はその時始めて深く胸に彫込んだ。わが家の垣根一つ越えれば、最早自分の我の通らぬことを知つた。浮世の風は始めて懐子の顔に吹付けた。

　十四歳の四月十九日――記憶力の乏い私でもその日は確に覺えてゐる――に私は村から二里あまりの或私塾に入學した。その朝下男に机本箱夜具などを荷はせ、父に連れられて家を出た。私塾の山奥から流れて來る小川に沿うて細い道を歩みながら、父からその塾の昔の有樣、新入生の蒲團蒸しに會はされる話など聞かされた。「始の間は年上の者に逆はぬやうにせい」と戒められた。父の心遣ひから寄宿舍へは入らないで、農家へ下宿することに極めてあつて、先づその家を訪ねて荷物を置いてから學校へ行つた。父は知己の會計掛に會つて學校の樣子を聞き、入學の手續をしたり、私の小學時代の友達を呼出して貰つて、私の事を懇ろに頼んだりした。
　宿へ歸つて、机や本箱を程よき所へ置いて一先極りがつくと、父は銀貨五六個を私に手渡しゝて、「これを小使錢にやるから、怠屈した時は、お菓子でも買うて食べい」と云つた。そして、煙草二三服吸つて立上り、「櫻が滿開ぢや」と向ひの山を見ながら、ゆる〱歸途についた。私は門口に立つて高帽を前のめりに被つた父の姿の道の角にかくれるまで見送つた。机の側へ戻つて、障子を開放つたまゝ、なす事もなく、只目の前の木立深い山を見、靜かな小川の音を聞いてゐたが、われ知らず涙が目に浮んだ。宿の者は午餐を濟ますと戸を締めて、親子揃つて野良へ出て、四圍は寂としてゐる。淋しい山の中に只一人棄てられてゐるやうな氣がした。もう一二ヶ月は家へ歸ることも出來ぬと思ふと

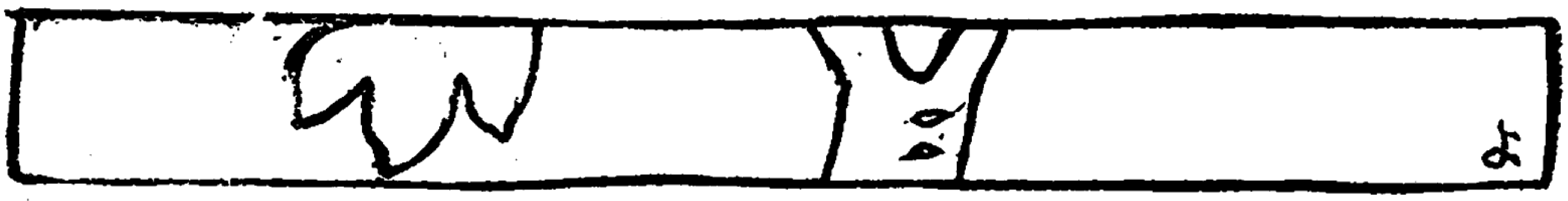


今朝別れて來た祖母や母や、弟までも戀しくなつた。

詮方なさに、五六町離れた學校の方へ散步したが、道端の駄菓子屋には、袴を穿き、ステッキを持つた凛々しい學生が、恣まに寢そべつたり、腰掛けたりして、喧く喋舌りながら物を食べてゐる。私はそれを傍見して羨ましくなつた。そして片隅に腰掛けて、遠慮しながら駄菓子を買つて、皆なの話に耳を傾けた。學課の事や、教師の批評など、どれも皆耳新しかつた。自分も今にその仲間入の出來るのが悅しくて、元氣よく宿へ歸つて、夕方まで一人低聲に詩吟などして暮した。

上京の折には涙は出なかつた。二三年の私塾生活は、家庭を離れた氣儘暮しの樂さを覺えさせて故郷を遠く去つて、旅の空に物思ふ悲さなどは、さして感ぜられなくなつた。都珍らしく學課面白く私の半生に若し華やかな夢のやうな時代があつたとしたら、先づその時分だつたらうと思はれる。手織木綿の地味な衣服を着て、擦切れた足袋を穿いて學校通ひしてゐたその時分の心には、世に望みが多く、將來にいろ／＼の賴みを掛けてゐた。新に手にする書物は新に眞理を語るらしく待設けられ、新に交はる友は新に自分に力を添へて吳れるやうに思はれてゐた。諸所の芝居をも大入場で見たり、立見で見たりして、都會の樂みを味つてゐるつもりだつた。

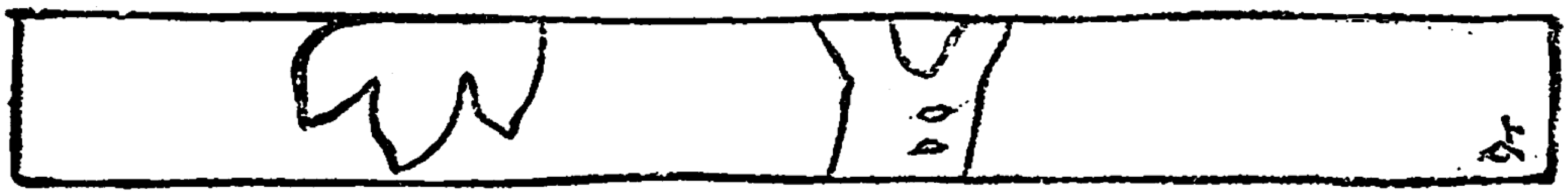
或二月の寒い日に、正午までの學課を濟ませて、直に歌舞伎座を見に行つたことがある。まだ電車のない頃だつたから、二里近い道を大急ぎで步いて行つた。和田倉門の前で鼻緖を踏切つたので、下駄を手に持つて裸足で步いた。芝居小屋の屋根がチラと目につくと、もう胸が躍つて足の先の凍るやうなのも忘れられた。



樂日近い所爲か、不評判な所爲か、入はそう多い方ではなかつたが、しかし、大入場へ上ると、人臭い息がムツと鼻を突いた。その息がその頃の私には悅しかつた。芝居へ來たといふ心持になれる。舞臺には山の幕が垂れてゐた。明るい外から急に薄暗い場所へ割込んだので、目がぼーつとして、繪本を買つても、その細い文字の役割などが讀めなかつた。下題は「藪原檢校」と「百物語」龜んだ手先の溫まつて、目も心もやう〳〵落付いた時分、幕が開いた。娘姿の福助が駕籠舁に窘められてゐる。懷劍を拔いて雲助に向つて武士の娘の手練を見せた。花道から突掛草履で、尻端折つた職人風の男が舞臺へ來た。「△△さん」と、驚いた聲で云つて、二人は月の光で顏を見合せた。が、その刹那私は溫い涙に睫を潤した。四圍の見物に一人として泣いてゐるものはない。

今から思ふと、それは詰らない芝居だつた。菊五郎の扮した役々の中でも傑れた者ではなかつた。むしろ大切の百物語の華かな美しい場面の方が、どの位大歌舞伎の特色を發揮してゐたか知れない。滿場の涙を絞つた芝居をも前後に幾度も觀てゐる。だが、私が一滴の涙を落したのは、只かの藪原檢校の一刹那だけであつた。寒氣を犯した後だつたから、舞臺の藝に一層の有難味が加はつたのかも知れぬ。幾重の山を背景として、知人のゆくりなく出會ふといふ淋しい中に懷し氣のある場面が、私の心を動かすに相應しかつたのかも知れぬ。

二十四五にして、私は最早如何なる芝居を觀ても泣けなくなつた。如何なる小說を讀んでも泣けなくなつた。嘗てユーゴーの哀史を圖書館で讀んだ時、フアンタイン(?)がわが子のために前歯を賣る所で涙を落して以來、人間の悲喜哀歡を歌つた如何なる詩や小說を讀んでも泣いた事がない。涙泉は何時の間にか乾いてしまつた。胸を劈くやうな思ひを幾度となく經驗するやうになつたけれど、私は最



早快く泣けなくなつた。

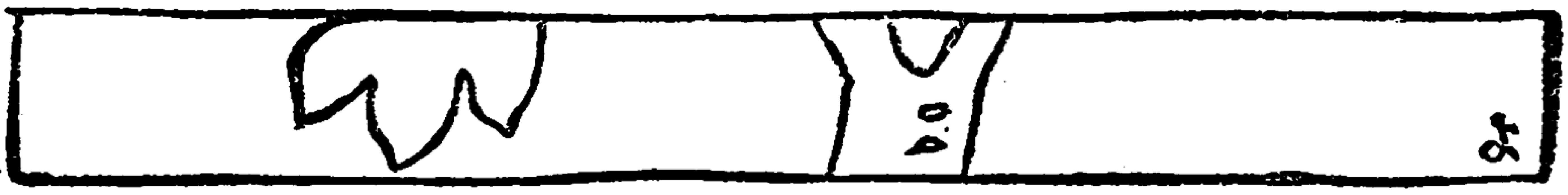
懺悔の涙、感激の涙、私はそんな者をも經驗したことがない。教會へ入つてゐた時分、祈禱會や感謝會で、會員が涙ぐんで神に祈るのを見て、自分も眞心から祈禱を捧げるならば、自から涙は目に浮ばねばならぬと、幾度か省たが、さて涙は一度も頬に傳らなかつた。聲にも感激の調が籠らなかつた。私は自己の行爲を悔悟する點では誰れにも讓らないつもりなのに、何故眞心は涙となつて現れぬのだらう。言葉に他人を動かすほどの熱を帶びぬのだらう。教會の或人々は他人の祈禱や感謝の聲にさへ動かされて泣くことがあつた。

「隱すところなく自分の罪を神の前に懺悔して、聲を揚げて泣くと、跡で雲が晴れたやうで氣が清々する」と、私と同じYMCAの一人が云つた。

「僕も浦上さんなんかゞ、顏にも聲にも熱を含んで祈るのを見ると、何時も羨ましく思ふよ。だけど僕にはそれが出來ん。眞心を以て祈うとすると却て聲が低くなる。祈つてもます〳〵胸に蟠まりが出來るばかりで、頭が晴々しくなつて來ない。涙に罪も洗はれてといふ讃美歌の意味は、一度だつて經驗したことがない。」と、私は云つた。

「そうかねえ、浦上さんの說教や祈禱は少しわざとらしい所があつて、僕は時々厭になる時がある。だけど、君の感謝や祈禱はあんまり冷淡らしい事があるよ」

「しかしその冷淡らしい時に、僕の心は一番熱心なんだよ。深く考へ込めば込むほど、僕は涙や血に緣が遠くなる。」



「君は僕とは異つて學者肌だから」と、その男は褒めるのやら貶すのやら分らぬことを言つた。

私は正直に斷食日——春の復活祭の前だつたらう——に食を斷つて、靜かに聖書を讀んだり默想に耽つたりしたことがあるが、その時だつて、我救はれたりといふ喜びの涙は出なかつた。

若しも私が十字架に縋つて赤兒のやうに泣けるやうだつたら、あんなに早く宗敎を棄てなかつたのかも知れぬ。泣けない宗敎は私には苦かつた。肉體から云つても堪へられぬほどに苦かつたのだ。

私達の友人が戰場で死んだ。友人仲間で評判のよい男だつたから、その死を惜んで泣いた者も少くない。斗酒辭せざる豪傑肌の或知人の如きは聲を揚げて泣いた。二三日目を泣腫したほどだつた。不斷熱情を含んだ調子で友情の美を說き、バイロンの友誼の逸話を屢々その例に擧げてゐた男ほどあつて、外目にも亡友を思ふの情溢るゝばかりに見えた。

私も亡友の才氣學識を認めてゐたので、その夭死を惜むの情はあつた。戰死の場所を聞くと、直ちに地圖を檢して、その最後の狀景をいろ〳〵に想像した。この世に多くの望みを抱きながら果敢なくも死して行く當人の心持を考へた。自分をその境遇に置いて、その斷末魔の苦みを推察した。人間は弱い者、下らない者だとも思つた。しかし哭泣もしなかつた。二三日寢食を忘れるほどの感興も湧なかつた。

その日亡友や私共の懇意にしてゐた家を訪ねると、「橋本さんの事を貴下聞いて？」と云つて、其家の母親は目に涙を溜めてゐた。

「えゝ、死んだそうですね」と、私が云ふと、

「家中で今朝から泣通し！」と、母親は調子づいた聲で云ふ。成程小さい娘も大きな娘も今朝から母親に誘はれて泣いてゐたらしい。

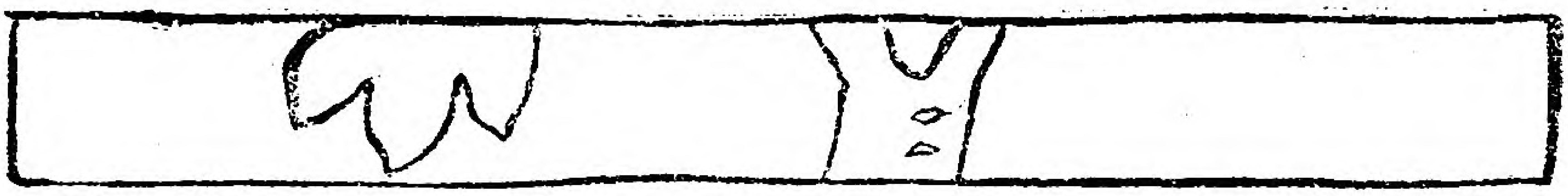
「あの方のお友達を見ると、尚悲しくなつちまう」と、母親は又新なる涙に咽んだ。娘達もそれに連れて、可憐な袂を濡らせた。

「貴下は泣かないの」と、母親は遂に私に非難らしい言葉を向けた。薄情者と云ひたそうな風だつた。しかし、私はどうすることも出來ない。四圍で泣かれゝば泣かれる程、自分には泣けなくなつて了う。私は過去を顧みて涙の少かつたことを思つて、何だか物淋しい氣がする。これから歳を取るにつれて、ます〳〵涙は乾くばかりだらう。若い間に泣きたいだけ泣き、笑ひたいだけ笑はなかつたのを後悔する。

「ぢや、他人を泣かせたことがあるだらうか」と、自分で問を發して見るのに、自分で泣かないだけに他人をも泣かせてゐない。苦めて泣かしもしなければ、喜ばせて泣かしもしない。婦人の涙からは殊に私なんかは縁が遠い。紅涙潸々は小説でこそ讀み、芝居でこそ觀たけれど、自分自身に經驗したことはない。

「本當に干乾びた一生だ。」

と、獨りそう感じてゐたが、ふと思出したことがある。それは未見の女から一二度手紙を貰つたことで、その手紙には私に思ひを寄せてゐるらしい文句が書いてあつた。「一度あなたにお目に掛つてお話を承まはりたい」とか、「あなたのお宅の側までまゐりましたが、心弱くて思切つてお訪ね申すことも出來ませんでした。そして家へ歸つてから獨りで泣きました」と書いてあつた。又「あなたは婦人に對し涙なき御方と度々承まはり居候へば、御冷笑の材料ともならんことの恐ろしさに、宿所姓名は申上兼候、失禮の段おゆるし下されたく候」とも書いてあつた。



するど、私も過去に少くも一度は女を泣かしたことがあるのだ。

しかし、それにつけても、「涙ない人」との評判を取つたのが殘念にも思はれた。私の目は何故もつと容易く涙を浮かべる術を知らなかつたのであらう。

モデル女の夕　(七)



ひまなひと

與謝野晶子

奧さんは座つた足を少し横にして、松井さんの前の新聞を取らうとした。奧さんの色の白い額に下つた後れ毛が、緣の傍は無花果の葉と一緒に動いて居る。

『今日の新聞は面白いことは一つもないのよ。』と、松井さんは煙草に火をつけながら云つた。

『さうですか、少し頭を平凡にしたいのですから、その藥には好いでせう。』と云つて奧樣は、何かの新聞を一枚自分の手許へ取つた。

『パンは食べないかい。』松井さんは自分の食べ殘した盆の皿の上のパンを顎で差して云つた。

『澤山ですよ、見るのも厭。』

奧さんは顏を顰めて居る。

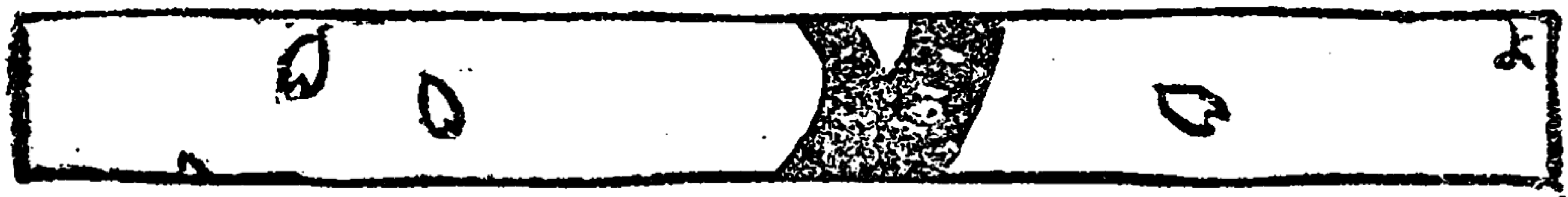
『變だねえ、朝飯も食べないだらう。』

『ええ、さう。』

『變だね。』

松井さんは奧さんの顏をじつと見て笑顏をして居る。

『厭なこと、そんなことを思つていらつしやるの、もうそんなこと云ひつこなしにして頂戴、私は腹



が立つて來ないのですから。』
奥さんは顔を少し赤めて居る。目は濡色をした大きい目である。
『さう腹が立ちつぽくなつて居るのも變だよ。』
『變だつて好いのですよ、十七日ね、今日は。』と云つて奥さんは新聞に目を落した。
『ふん、平井君が門司から船に乘る日だね。』
『さうですねえ。』と云つて　奥樣は一面を雑と見て仕舞ふ。松井さんは朝顔が見えるやうに右向に座り變へながら、奥さんの新聞を讀んで仕舞ふのを待ち兼ねたやうに、とき／″＼横を見るのである。奥さんよりも松井さんは遙かに美くしい、三十五六の鬚の無い男である。
『平井さんが居なくなつて、私は眞實に寂しいのですよ。』
新聞の中を表に疊みかへながら奥さんはかう云つた。
『さうだらうね。』
『あら貴君。さうだらうねなんか、逆らつてはならない病人にでも仰つしやるお返辭ね。ふんと位云つてお置き遊ばせよ。』と云つて奥さんは新聞を其處へ置いて、横にある机に片肱を載せて、大きい美くしい目で松井さんをじつと見た。
『さう云ふ身體になると何でも癪に觸るのだね。』
『あら、また。』
『まあ然しさ、よく泣いたりするぢやないか、この頃は。』
『餘所の男が餘所に行くのを送つて行つて、貴君の傍で泣いたりしてはいけないのでせうけれど、私

は何も惡い心ぢやないのですから、いくら泣いたつて好いのです。』

『何のこと、それは。』

『平井さんを送つて行つて私が泣いたことですわ。』

『さう、泣いて居たね。』

『でも好いでせう。貴君。』

『さうだとも、けれど母さんは平井が好きだね、全く。』

『一番好きね。』と云つて奥さんは點頭いた。平井と云ふのは法學士で、今度臺灣總督府の役人になつて赴任した男の名である。

『僕にだつて平井は隨分親切をつくしてくれたもんだ。』

『私はね、昨日も一昨日も、今頃は京都で、平井さんが木谷さんに、夏子さんは病氣らしかつたとか子のために疲勞をばかりして居るとかゞ私のことを心配した話をしていらつしやるだらうと思つてね。』

『ひどい自惚だね。』

『でも好きな人同志つてそんなものですよ。』

『局外者なんだね、僕は。』

『その場合ではさうね。』

『何だつて好いさ、僕はもう老爺になつたのだから。』

『あら、さうぢやないわ、六つ違ひでせう。私は何だか違はな過ぎると思つて、この頃では氣の毒に

なつて居る位ですよ。』

『さうかね、殊勝なこつたね。』

ぱた、ぱたと一寸程の無花果の實が二つ續けざまに土に落ちた。

『貴君、木谷さんは何時學校をしまつていらつしやるの。』

『來月の十日過ぎには來るだらうよ。』

木谷と云ふのは文學士で、今は京都大學の講師になつて居るが、もとは平井と一緒に松井さんの畫室に來て油繪を習つた一人である。

『私はあの人も好きなんですね。なんだか待たれるのですもの、平井さんだつてさうなんですよ。東京に木谷さんがいらつしやる頃は、よく私と二人で木谷さんの惡口を云つたりしたもんですけれど、今度なんかも京都で木谷さんに逢ふことが嬉しくつてならないつてやうでしたものね。』

『さうね。』

『木谷さんも私の心持ちを知つていらつしやるのね、去年いらつしつた時、平井君はこの頃遊ぶやうになつたさうですね。奥さんはそれが私だつたら、きつと惡く仰つしやるでせうつて云つていらつしやいましたよ、私は氣の毒になつて、きつとさうでせうよと云ひましたわ。』

『眞實だよ、きつと惡く云ふよ。』

『ねえ貴君、私が自殺したら一番最初にあの人を呼んで頂戴、私は何だかあの人に私の赤黒い血が見せて上げたい氣がしますね。そんな時なんかきつとよく世話をして下さるに違ひありませんよ、貴君は氣味が惡いでせう。棺へ入れたりするのは皆あの人がしてくれますよ。平井さんにはそんな死骸を



見せないで頂戴、氣の毒ですわ。桃色の玉のやうな心の人ですものね。』

『僕は何色だらう。』

『貴君は水色位よ。』

『まあ好い方なんだね、はつ、はつ。』と松井さんはをかしさうに笑つた。

『一番太切な人はその位に思つてないぢやあ駄目ですわ。』

『好きな方ぢやないのだね。』

『好きぢやなくつて夫婦になつて居られるものですか、貴君だつてさうでせう。』

兩手を机の上へ並べて、指の先を目で見て奥さんは云ふ。

『どうだか。』

『それぢやお嫌ひでせう。さうなんですわ、木谷さんだつて云つたことがあるわ。』

『何をだい。』と松井さんは極めて眞面目な聲で云つた。

『木谷さんはね、先生の戀は餘程前からもう醒めて居ると云ふことを僕は知つて居るのですつて。さう云つたのですよ。けれど私はその言葉の中を開けて見やうとも、中を何だと考へて見やうともせずに、その言葉を箱のまゝ出して來てときどき眺めて居るのですよ。中を開けて考へて見る時節が來るかも知れませんから御用心遊ばせよ。』

『ふ、ふ、でも仲の好い夫婦だつて皆さう云つてるよ。』

『噓ですよ、仲が惡いわ。』

『噓だ。』



『嘘だ。』

『嘘だわ。』

『序に母さんの好きな人の店おろしをしないかい。』

『さう澤山あるものですか、厭なこと。』

奥さんは机の上にあつた男扇を手でいぢつて居る。

『關君は。』と松井さんが云つた。

『あの人は痩ぼつちの弟と思つてるだけ位。』

『それでも今の處では一番仲が好いね。』

『さうですよ。けれどあの人は私の惡口を日記につけて居る人よ、きつとさうですよ。』

『日記を見たの。』

『けれどソウでないかも知れないわ。』

『何を云つてるのだ。』松井さんは笑ひながら煙草の煙を細く口から吹いて居た。

『私はお金が澤山あつたらあの人に半分だけ上げます。』

『母さんよりは金持だよ。』

『さうぢやないわ、次男ですもの、それに痩ぼつちの人は何だか氣の毒ですよ。』

『僕も氣の毒組だぜ。』松井さんは左の手の袖を捲くり上げて、二つ三つ叩いて見て居る。

『痩せて居るものですか。貴君は人の話の中で僕もとか僕はとか云はないで居られないのでせうか。
ねえ云はないで置いて頂戴な。』

『思ひ出すから出るのだよ。むづかしいこつた。』
『私と話するのが厭ならおよし遊ばせよ。私は胸が苦しくてなりませんわ。』
『氣の毒だね。』
『私ね。この間關さんにね、空豆の蒸したのを賣つて居るのを見ると、一度食べたいやうな氣がしますつて云つたのですよ、そうしたらね、貴君、その翌日關さんが奥さん空豆を買つて來ましたよつて仰つしやるの、そして風呂敷の中からお出しなすつたのが二寸程な新聞紙の袋でね、盆の上へお開けなさると二十粒ほどありましたつけ。奥様、まづいものですよつて、口を尖らしたり、鼻の先へ持つて行つたりして皆一人で召上りましたよ。私はそれを見て居てね、關さんは奥方に異見をする役だからえらいと思つてね。きつとさうですよ、私が役者をどんな物か買つて見たいと云つたら、あの人はまた一錢程役者を袋へ包んで來て、口を尖らしたり、鼻の先へ持つて行つて食べて見せますよ。』
『そんな男だね。』
『賴もしいお弟子ですわ、戯談ぢやありません眞實にね、あの人は貴君が困る時が來たら涙を零し零し金のさいかくに歩きますよ。』
『河邊君も好きぢやないか。』
『さうね。』
『嫌ひぢやないだらう。』
『嫌ひぢやありませんけれどね。』
『母さんの好きな人の中であの人が一番綺麗だね。』



『それはさうですがね。私はあの人が好きになれないのですよ。平井さんだの、關さんだのはいくら好きになつたつて貴君に惡くはありませんけれど、あの人はさうぢやないのですよ。ねえ貴君、世間の男はどんな男だつて私は貴君の妻だと思つてますよ。けれど河邊さんだけは私を唯の女だと思つて居るのですもの。』

『自惚の強い人だね。』

『さうぢやありませんよ、けれどそれが自惚と云ふものなら、世間のどの女でもあの人にだけはその自惚が持てるのですよ。』

『さうかね。』

『この間、横田さんね、そら日本語が不完全だつて、あのお話の時ね、さう仰つしやつたでせう、河邊君は奥樣に手紙を書かうと思つて筆を持つたのだけれど、代名詞に適當なものがないのでよしたさうですつてね、私、あの時ね、何だか笑ひたくなつてね、河邊さんはあゝでも、手紙では、人の奥樣のことを戀人に用ゐる代名詞では書かれなかつたのでせうよ。あゝ胸が苦しい。』

と云つて奥樣は左の手で乳の間を押へて居る。

『そら豆が欲しくならないかい。』

『厭なこと、私は葡萄酒が飲みたいことよ、外のお酒でもいゝこと。』

『恐しい女のやうだぜ、そんなことを云つて居ると。』

『さうですか、ほんの一寸飲みたいだけですよ。』と云つて、奥樣はまた赤い顔をした。

冬の海

眞山青果

冬の十二月。

この頃の海を見る私の心は僂痲質斯患者の關節のやうに又痛み初めた。春にも夏にも、そして又風が松林に鳴る秋の朝の何の季節にも見られないやうな、侘しく便りない悲しい心持をこの頃の冬の海が持つて來た。

去年の丁度今日頃、私は都會の賑かしい賣出しの町を遁ぐるやうにして、この松原の中の家に來た、丁度まる一年になる。その間に種々の事にも遇ひ、又いろいろの事を考へさせられもしたが、今日頃のやうなタド〱しい鈍い悲しみに心を壓された事は一度も無つた。野を見ても海を見ても、又日が箱根山の彼方に落ちるその瞬間にのみカツキリと姿を浮べる遠い大島安房の半島を見ても、私は溜息も吐かれない一種の重い悲哀の中に身體を搖はせられるやうな氣がしてならない。私は一ツ所に立つて居られないやうな氣がして、何物にも心を吸込まれたくないやうな氣がして、神經性な臆病から唯何んの的もなく、海から野へ、野から林へ、林から小川へ、水車小屋の前の日和へ、土の赤く軟かい蜜柑畠へ、冬の日に背中を暖められながら歩るき廻つて居る。舊暦で云ふ十月の麥播き飯を喰べない中は死なぬと云つて居られる、この頃メツキリ多くなつた冬の蠅が瘦せながら日和に饑えて居る姿にも好く似て居ると思ふ。

光線が持つて來る明るい悲しみ。若しこんな事が云ひ得るとしたなら、私はその心持をこの頃の海から受取らせられる。日の明るさのみから云ふと、野にも海にも夏より明るい、と云つても秋の十月のやうに白く閃きも爲ない明るさと弱い暖かさとが顫えて顫えてそこら中に漂ひ擴つて居る。凝つと一所に立停つて足許を見ると、狐穴でもあるらしいホロ〱と頽れる赤土

檐の上に、枯れながら顫えながら落ちる黄色く弱々しい日光が、何んとも云はれぬ匂ふやうな悲味を心に滲ませる。踏めば草履の裏を濡らす濕つた土の上に、乾き枯れた茅の河原續きに日が呟き落ちるのも悲しい。

その明るい田圃中を納税に行つて歸る中産の農夫の頸を下げた姿が暫時の間見えて居る。こゝにかしこに葉を振ひ落された部落々々の尖つた防風林が透けて、その間から新藁に葺換えられた百姓家の屋根が低く空から壓付けられて見える。

朝、雨戸を一枚繰ると、海を出た冬の明るさが溢れるやうに枕元へ射し込んで來る。その咽ぶやうな明るさ！　壁の隅に死んだ姿を粘して居た冬の蠅は、その小さき肺臟が光りに働き出したやうに、急に幽かな翅の音を唸らせて障子へ集まる。

太陽と目とをつなぐ海面には、朝の日がニッケル鍍金を照返すやうに眩しく溢れ、浸し、かゞやく。光りの海は夢の惡しかつた朝の重たい頬にあたつて、眼に涙を滲ませる。

然雖…………

悲しい事には海は悲しんで居る。少しく目を外らして、日に動かされない他の一方を眺めよ。私はこの時海の表情は露骨に過ぎると云つたモウパッサンの言葉を思出さずには居られない。海はヒステリイを患ふる四十女の顏の如く、穩和しい悲しみと愼深かい險惡さに隈取られて映る。動かない深さの中に、その女の強い生存の欲望に觸れた人でなければ味ふ事の出來ないやうな、賴りない悲味と辷りの好い根强さを見る。

日に〳〵にその深碧から色褪めて、青瑪瑙の磨面に見るやうな一種飴色の光りを持つた海面は、一所日光にはしやぐと共に、他の所は衰へをなげく深かい物思ひに沈んで居る、その二つの顏が、矢張り三十女の心の底に鎌首を上げて相鬪ふやうに鬪つて見える。

中空に明るさがあつて、空も地も鈍く沈默して居るその態、恰も、この動き易すい海の心をはかりかねて

四方から默つて眺めて居るやうにもある。
波の音は白く低い。されど、恐しい險毒をその中に持つて居る。
心寂しき冬の海よ！
私はこの海の面を見て、毎日〳〵物を思ふて居るのである。

闇の夜の浪うちぎはのあかるきにうづくまりゐて蒼海を見る

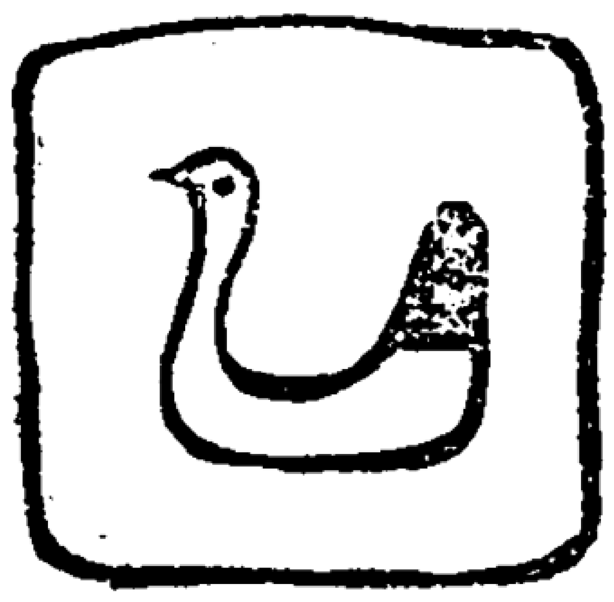
おもひみよ青海なせるさびしさにつつまれゐつつ燃ゆる身を

わが心海に吸はれぬ海吸ひぬそのたゝかひに瞳は燃ゆるかな

君かりにかのわだつみに思はれて言寄られなばいかにしたまふ

春の海のみどりうるみぬあめつちに君が髪の香滿ちわたるみゆ

牧水



妹に

水野葉舟

お澪さん

僕は又久し振りでお前に手紙を書かう。何だか、今夜はひどく胸の底に重つくるしいものがあるやうな氣のする晩だ。何だか、眞面目になつて、一生懸命にものを言はなくつちやならないやうな氣のする晩だ。

實は僕には、種々な事があるんだ。胸一杯になつて種々な事が一々重大な問題のやうに見えるのだ。その中のどれ一つをもつて來ても、とても箇單には言ひ盡せないやうな氣がする…………

お澪さん、よく今夜の僕の心持を想像して見ておくれ。僕は深くものの底に沈んで目を開けながら、種々と頭に集つて來る問題を考へて居るやうなんだ。僕には凡ゆる、人間に起つて來る事が、如何しても非常な

複雜した心持で、點檢された上で靜かにYesとかNoとか言はる可きものだと思はれるのだ。吾々の平生の生活はそれは、淺薄だ、輕卒だ、大抵の事が起つて來たつて、大抵の事で片を付けてすましてしまふんだ。だから、議論ではどんな立派な事をでも言ふが、それは空想になつてしまふのさ、でなければ、自分の淺薄なのを辯護する道具にしてる位のものさ。

吾々は、つまらぬ日を送つてるもんだね。これぢや駄目だ。吾々は如何かしてもつといゝ生活に、Betterな生活に入り度いと思はずには居られないではないか。だが、何がBetterだ？………斯う考へて來ると、第一に胸に起つて來るのはこの問題だらう。誰でも、これに向つて、何とはつきり答へ得るだらうか。

恐らくは、眞に何とも答へる言葉のある人は無い筈だ。僕にはさう思はれる。

或人は道徳をおさめる事をすゝめるだらう。或る人は神の愛と言ふ、神に救はれると言ふ事を說くだらう。しかし、僕は今はそのどれに向つても、一言、斯う言ふ事が出來る。

「人間は果して、理想だと思ふものを望んで居るばかりで、それで理想に達せられるだらうか？」

そしたらば、その人々は斯う言ふだらう。

「それは努力が入る」

僕は又、斯う聞き度い

「だが自分が空虛でも、努力が出來るだらうか？」

これに向つても、必ず賢い答が出るに違ひ無い、しかし僕は人間の身體に血が通つて居て、この種々と生存に對して本能を持つて居る事を思ふと、凡ての道徳も、信仰ももろく空想のやうに破壞されてしまふやうに思ふ。目を閉つて毛蟲が群をなして居る姿を思ひ出してごらん、丁度、あんな風に人間が動いて居る姿の後に見える本能を見てごらん、たとへ「神の愛」と言つても、それがどの位深い處から來たものか、一寸分らないやうに思はれるでは無いか。まるで何もかも見當が違ふやうにしか思はれない。

外にあるものをたよりにして、息を切つて馳けてば

かゝり居られないではないか。まづ、存在して居るものは何でも點検して見ようではないか？

今日は僕は或る小説を讀んだが、その中に You see yourself. と言ふ一句があつた。それを僕はたゞ考へて居るんだ。こんな言葉をかりに誰かからこの耳に囁かれたとして見たら、如何するだらう？、何時だつて、ギヨッとしない譯には行かないぢやないか。

僕なんか「自分自身を見て見ろ！」とこんな言葉を言はれては、心が必ずまごつくんだ、これは僕の心が充實して居ないからだ。全くさうだ。だが、これは恐ろしい言葉の一つだよ。必ず、誰れの身の上にも、恐ろしい言葉の一つに相違ひないよ。

「自分の頭の蠅を追へ」と言ふ言葉があるね。あれとは大違ひだ。あんな輕口の皮肉ぢやない、もつと言つてる人も、目をかッと開けてにらみ詰めて言つてる。

お澪ちやん

僕はね、今夜は、人間がどんよりと濁つた灰色をして見える、目も何にも無いものが、たゞ動き廻つて居るやうに見える。たゞ悲しいもののやうに見える。人間は決して樂々とやすんで居られる筈のものでは無いやうに思はれる。少しでも心持を正直にして、深く考へて見たら、人間の事は、隨分さう簡單に始末のつく事では無い。たゞ僕等はぼんやりして、この生活を見送つて居る可きものでは無いと思ふのだ。悲しくつても、つらくつても仕方が無い、そんな事を思ふのではないが、たゞ、この心が人のこさへてくれた信仰をあてに、暮して行く譯には行かないやうに思はれる。

勿論、とても僕にはまだ底の底まで分らう筈はないんだ。だが、こんな風な刺擊は受けないでは居られない。

この手紙を讀んだらお前は如何思ふだらう？……それよりも、僕はお前の耳にもその You se eyourself と言ふ言葉が、何時囁かれるかしれないと思ふよ。

今夜は一層、痛切にさう思はれるよ。

十二月五日夜

兄より

東西の女性と趣味

中村春雨

東洋の女性と西洋の女性との趣味の異同を比較して見るのも何彼の參考にならう。

先づ正月になつて、日本の若い婦人等の一般的興味を惹いてゐるのは歌牌遊びなどがその主要なるもの丶一であらう、そして正直に云ふと、その興味の半面以上は、男女交際の機會を得られる事に係つてゐはしまいか?、日本に於て男女交際の機會は、實に僅かにての遊戯の行はる丶時にのみ限つてゐると云つても、必ずしも過言ではない、若い娘と娘、はしやいだ笑ひ聲、罪のない叫び聲、青春の男女の自ら作り出す斯うした温味のある自由な空氣、華かな旋律をなす音響、一種の艶と潤とを持つた生きたオケストラの演奏せらるるのは、この場合を外にしては求められないのである。

或種の道學者先生は此をさへ禁止して、絶對的に若い男女の間は傳染病患者的に離隔せんとする向もあるらしい、成る程然うしたら此の種の男女接近に伴ひ易いいろんな弊害に陷る事丈は避け得られやう、併し飽迄こんな無形の器械的束縛を行つてまで始めて所謂賢母良妻が得られるなら、その賢母良妻なるものは畢竟萎び切つて、血も生命もない一種の人形で、家庭なる者は唯、飯や菜の製造所、乃至赤子の製造所たる以外何の意味あるものでも無くなつて了ふ、か丶る人間生活は寧ろ呪ふべきものである。人間の青春時は生涯に唯一度、美しい花の咲く短い期間で、それが去つたら再び取返す事は出來ないものである、「明日の事を考へる」といふ方面も人間に大切な事ではあるが、「今日を

今日らしく」暮らすのも亦至極肝要の事である、明日明日と許り云つてゐては、その明日は遂に來るものではない、今日の歡樂、今日の興味を充分に享樂しつゝ生活して行かなかつたなら人間に生れて來た甲斐は無いと云つてもよい、これは決して青年男女に放縱、佚樂を勸めるといふ譯ではないが、若い時にのみ感じられる樂は、出來る丈け、味つた方が、より善き人間的生活を營んだといふ事になるといふのである、その意味に於て、歌牌遊びから生ずる、青春の演出し來る活きたオケストラの中に、一宵を過ごすのは最も愉快なる、又興味ある生の一片である、その偶々起る弊害なども畢竟、平常から男女を離隔する風習から釀されて來るもので、その方面の訓練法の缺如してゐるのをこそ、反對に問題とすべき性質のものであらうと信ずる。

この歌牌遊びなどに對照して考へられるのは西洋のこの頃の時季の舞踏會である、この舞踏にかけての趣味は、西洋の若い男女に共通的のものであるが、殊に女性には必ず一通の修練が無くてはならぬ事になつてゐる、舞踏學校の設けなどもあつて、年頃の女性はそこへ通つて稽古する、その稽古中にも、同じく通學して來る若い男子などと手を取つて練習する事になつてゐる、そしてこれが中上流社會の令孃や夫人の、必ず交際場裡に立つの必要條件であるから、唯の道樂や嗜好とは多少意味が違つて來てゐる。

かく、西洋の女性は、男性との握手には若い時から慣れてゐる、イヤ、男女交際その者に慣れ切つてゐる從つて戀愛とか、結婚とか、一生の大問題に對する相當の理性と選擇的眼識とが養はれてゐる、斯の如くして彼等は青春時の、生きたオケストラの歡樂を危險なくして充分に味ひ得るのである。

此頃の季節には、啻に舞踏會許りでない、又氷上の滑走が若い女性の趣味を惹く重なるものゝ一つである歐米北部の諸國は緯度から云つても餘程高い圈內に在る、從つて冬季になると湖水や、河川が氷結して一大銀盤となる、その上で壯快な滑走が行はれるのであるが、この際にも男女が組合をなして、笑ひ、さゞめく

歡樂境を現出し來る、青春のオケストラは、この冷い氷の胸の上をも漂ひ廻るのである、彼等は解放されたる青春時を有してゐる。

この他、日本の女性の趣味は、演劇や寄席の上に多い、西洋の女性も然うであるが、彼等は莊嚴なるオペラ、ハウスを有し、此れに出入するのを無上の歡樂としてゐる、又音樂會などは彼所此所に開かれて、一季間、引切無しに、彼等の趣味を滿足せしめてゐる。これらは日本の女性の全く又は充分に享樂し得ざる地上のパラダイスであるが、そのパラダイスの門は西洋の女性に向つて廣く開放されてゐるのである。

季節に關係なく、一年を通じて、又東西を通じて女性の趣味の多く赴く處は、小說、詩歌等文學の上にある、日本の女性の多數が最も喜ぶ小說は、例の「不如歸」などであらう、讀んで泣くやうな程度のものでなければ、彼等はあんまり歡迎しないやうだ。一時、自然主義の文學が全盛を極めて以來、一般に小說の賣高は減じたらしい、現に數年前までは、小說は初版に必ず千五百部乃至二千部は印刷すると云つてゐた出版書肆が、この頃は一千部位しか出さないやうな狀況だといふ事だ、これは他に原因もあらうが、一つは有力なる小說顧客たる女性諸君が、あまり泣くやうな事を書いてゐない、否寧ろ讀んで忌らしいやうな感のする自然主義文學を歡迎しない、從つて近頃の小說は一般に面白くないものと、相場附をして了つた結果で、かかる成行を生じたものかとも想像される、自然主義文學の可否は暫らく措き、小說を讀んで、唯、哀れつぽいとか、悲しいとか、筋が面白いとかといふのに趣味を感ずるやうでは畢竟低級の讀者たるに過ぎぬ、人生の有りのまゝの姿——寧ろ一皮剝いだ人間生活の深刻な活畫を見て、その中に趣味を感ずるといふ程度に至らなければ、智情意の敎養の進んだ女性とは云ひ兼ねる、無論、これが文學の全體ではない、一方には、興味中心の文學も必要ではあるが、兎に角、感情一方の作物のみを喜んで、智識と感情との兩方面を見せる、一歩進んだ作物をも翫賞する丈の趣味が養はれて來な

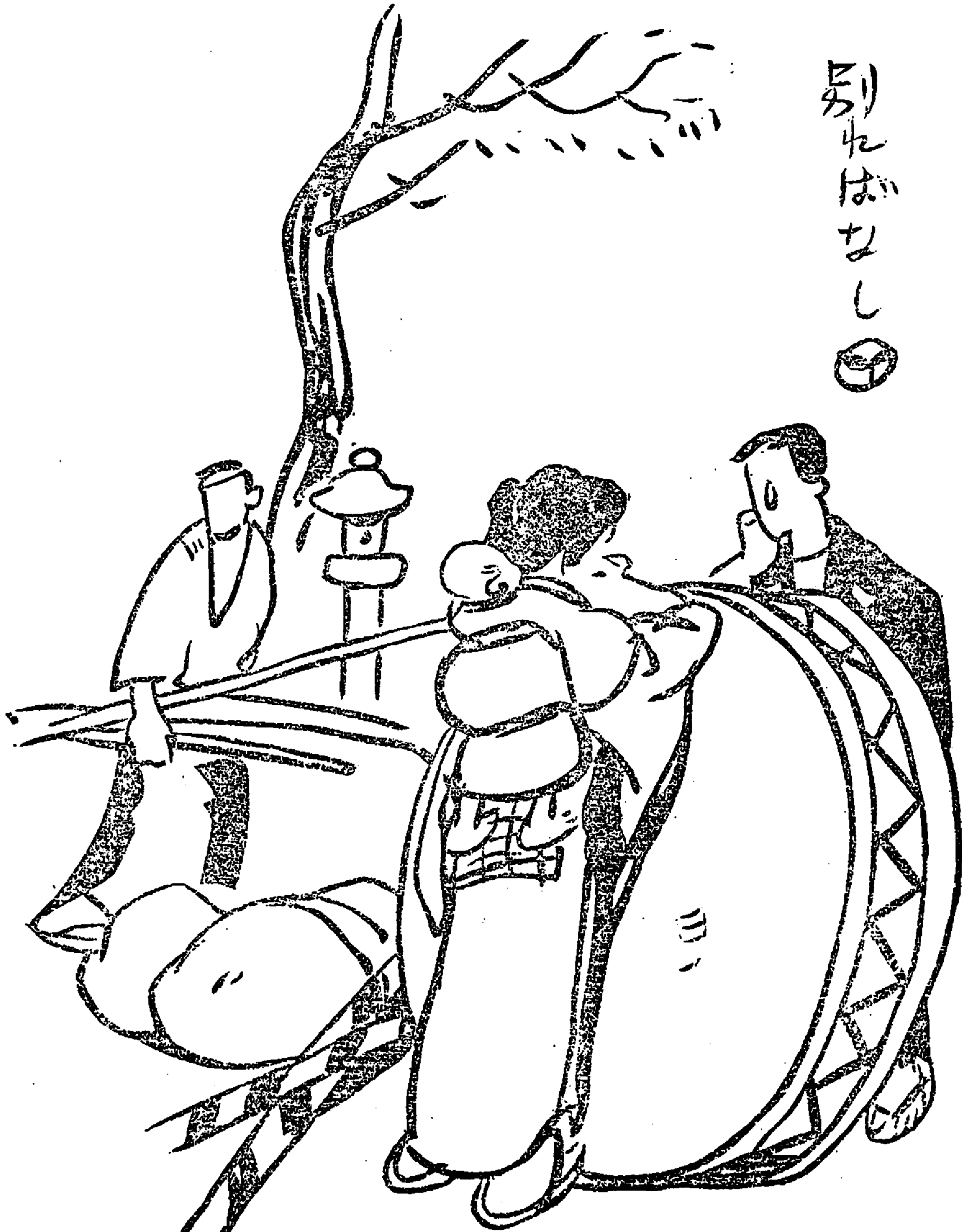
ければならぬ、無論、新らしい教育を受けた若い女性の人々は、この方面にも趣味を有してゐられる事は、推察するまでもないが、一般的に、女性の文學上の趣味の標準を高めて或意味に於る文藝保護者たる、その資格を十分に發揮するやうに望ましいものである、演劇なども、その有力なる保護者たる女性諸君が、舊臭い歌舞伎劇の崇拜者であつたり、粗雜至極な新派劇の隨喜者であつたり、甚しきは、俳優見物に行くやうな心得であつたりしては、新興國に適合はしい新演劇は何時迄經つても現はれて來ないであらう、從つて演劇を下等な娛樂と思ふやうな、在來の偏見は到底蟬脫する機會が到達せぬかも知れない。

西洋の女性の文藝趣味とても、必ずしも一概に高いとは云へぬ、獨逸で最近出版された「捨てられたる女の日記」といふ、一醜業婦の自傳のやうな、甘い小說は直に數十版を重ねるといふ大人氣であつた、讀者には矢張婦人が多い、その他、家庭小說的、物語的の小說が婦人社會で隨分持てゝゐる、併し多少教育のある社會には、第一流の作家、ズーダーマンとか、ハウプトマンとかの作物が喜んで讀まれてゐる、現に自分の下宿してゐた家の六十五歲の婆さん——普通教育位しかなさゝうな婆さんが、世界の大戯曲沙翁物なども讀でゐた、一日自分が買つて來た獨逸の大戯曲家ヘッベル全集が、一冊丈不足してゐるので、不思議だと思つてゐると、實はその婆さんが、自分の留守の間に持つて行つて讀んでゐたのである、日本で普通の下宿屋の婆さんに、近松ものを讀んで樂んでゐるやうなものは蓋し稀であらう、獨逸邊りでは、かゝる例は普通である。

一般に歐米の小說、戯曲の出版高の甚だ多數なのを見ても、女子の讀書の趣味のナカ／＼高いのを推知する事が出來る、第一流の大文豪の作とは云へ、露のトルストイ翁の小說は一作で八萬部以上、中には二十萬部賣れたのがある、イブセンの戯曲が初版一萬部、再版、重版と數へて行つたら何れ丈の賣高か想像するに餘ある、佛國の自然主義の大家、ゾラの小說は一作で七八萬乃至十萬、二十萬に達してゐる、男子の讀書の

趣味丈ではとてもこんな賣行にはならぬ、一般の女性の讀書趣味の進んでゐるのがその一原因であらう、演劇にしても其通り、新しい演劇の觀客の半數は矢張女性で占めてゐる。

この他にも尙、いろいろ比較すべき事もあるが、ザッとこれ位にして置いて、日本の女性諸君の趣味が各方面に向て動くやうになり殊に手近い文藝趣味の愈向上、發展して、文藝保護者たる資格の充實せん事を希望するものである。



お才の國（つゞき）

横瀬夜雨

雪の野は長く續いてゐた。頭をガラス窓にもたしかけて、行つても〳〵白い山白い木天地一色の白を見るばかり、さあさ押せおせ下の關までも押ばにがたが近くなる、にがた女郎衆は碇か綱かけさも出舟を二そとめた、口の中でよい加減に節を伸縮して汽車の進行に合してはそつとうたつて見た。たいくつしたのである。愛宕の山に入殘る月を旅路の友として……。

海はつさき近くで初めて見た。築き立てたように兩側に連れる雪のつゝみを突破して、直にあをぐろき海の岸に出たのである。

鐵路を走る汽車の音の轟々たるにまぎれもせず沖より來る海のひゞきを聞く、はろ〴〵としべりやのくにかけて見る目のかぎり舟一つ行かず、鷗の影すらささず。たゞ水と天と。

浪打際は柔かき曲線を描いて、雪は渚の巖の上に段段をなして積んでゐる。白く碧く且つ黄に、捲き回す泡浪は、岩の上に踴り上つては崩れ躍り上つては崩れる、浪の觸るるあたり雪は皆消えて、天は鼠色の雲の幾重にもたなびけるすき間からら〳〵たる光の矢を落とさうとしてゐる。あをく黄を帶びた水が海一面に脹れ上つてはあとから〳〵白い泡を嚙みながら陸をのぞんで走つて來るのだ。

嗚呼日本海！胡沙吹く風に煽られて、冬は鳥だに飛ぶを憚る北の海！ 空は絶えず曇り地はつねに雪ふる北國の海よ、わが行く道は新津に果つれど、新潟よりさらに北、海に添うて念珠が關を越え、行く〳〵荒れ

狂ふ浪に枕せば、飽浦の濱の埋れ草、飽海の濱にはわがおもかげに見るひとつまはあり……。

海を戀ひ海を慕うて若き心を躍らしながらなほ降り得ざる山の女――太田きし子をいたんで、飽浦に來よ暗き海の色、暗き海の聲、冬の海を見しめんと慰めたのもひとつまであつた、或時は紅燈の下に人に侍してあけの袂を翻して舞ひもせし利根河畔の若杉はま子と海に共に沈まんと契つたのもまたひとつまであつた。

雨の舞子を行きなやみながら、煙の中の五劍山を仰ぎし時も、砂白き大和川を越えてちぬの浦曲におもたき足を曳きし時も、あたゝかに、柔かに、海はわが心を浸しき、南、常陸の海は明るく、おき津はな松の海もあをきに、暗きかな北の海！

吁、やぶれたる憧憬よ、海をなつかしきものにしたのは曩昔であつた。

たける浪、くるふ浪、さらに浪と爭へる巖を見る、浪のかぶる巖は雪消えて、黝く、浪の底にかくるゝ巖は浪靜まれば紫に、高く立てるはあぐらを組める羅漢達、低く頭のみあらはせるは鰭の尖れる海豚とも見える。

浪を打ち、巖をたゝいてはひとり海を怒らしむるばかりか、風は乾き切つた砂を吹き上げ吹きためて、目も明かれぬまでに人を打つといふので、海岸よりにずつと板塀をめぐらして海からかくした停車場があつた、砂は知らず、一夜の中に二尺も三尺も積る雪が、辛き海のけぶりを伴ひて、今、列車を襲うたら？と思つた文目もわかぬ暗ならで、突きすゝむは雲の峰か霧の海か……。

ふと霞に浮べる筑波の山をおもふ、母の顏が頭の中へ浮んですぐ消えた。

高田で蓄音器を持ち込んで向う側へ座つた男、いつかなめてい毛布にくるまつて長々と仰にねそべつた、肱かけの外へはみ出してる頭には二の字がたのはげがついてる、東京歸の若旦那珍らしい物を家づとに貰つて來たのだと睨んだ、煙草をふかさぬのは感心だが、だらくはしさうな肌合だ、反對の側に瘦せた洋服が

ゐる、本を讀むぢやなし、窓に凭るでもなし、始終靴を湯ダンポの下へ入れてだまりこくつて人を見る。

ＷＣの建札は雪の中へ斜にかしがつてゐる、鯨波は海水浴の盛り場だといふが、今は海岸に人の子一人通らず、黒い巖が浪をかぶつて立つてるばかりだ。

中等はあつたかかッぺなと呟いて窓の下を通る婆さんがある、淺黄に染めた眞綿の三角なのを肩にあてゝゐた、窓へ腰をかけるようにしてのび上ると海が見える。

やはり暗い雲が沖を罩めてゐる、動くのは浪のうねうね白く立つ泡ばかりである。

暗くかゞやける沖の雲、大魚の群の突進するに似たる沖の浪、目ははるかなるながめに疲れて、心はだんだん沈んで來た。

朝から卵のうでたのを一つ割つたまゝ雪の中を長く行くせいか腹がしくしく痛んで來た、信州までと母をいつはつて物好にも越路の空に來た罰だ。

任他、憂き身世にいくばくの苦楚に堪へ得るか、一つには小室より淺間の煙の束するを見、二つには暗くしづめる日本海の光を見べく、われから放り出した命である、生れて三十三年、一日として明るい生活を送つたこともなかつたし、母の爲に生くるが生の全部か人を呪ひ人を咀ふがせめてもの復讐か、それすら知らぬ、子身孤立、無期にわたるわが涙をかなしみて、むかしは夢にあはゞ死なんと契れる人があつた。

夢にあはば死ぬといひしか、あひければ死なんとはいはず、二夜さながら

あはゞ泣く君とおもひし、うつむきてもの言はぬ人とおもはむやわれ

「今日こそ」頬とずれ〳〵に眉をよせて來つと告げたるあはれるり子は

落ちんとするかしらかかへて袖ながら邇かしめし手のしなゝかなるも

釋くはなな重ばかまのしたのしごり帶　ほそきを恥ぢてぬか伏せてありし

おなじ舌におなじ誓約をのするらむ、あはれむかしの、今のひとづま

＊　＊　＊

わが握れる秘密は他に語るべからず、かへりみれば信濃の山は雲ぐもり空遠けれど、彼のひとづまに代りてわが夢を守りし人すらいたづらなる冷笑をとゞめて去つたのである。

むざんなる印象なりしかな。

自分ははじめて女子の通性を知つて、その純潔とその貞操とに對する憧憬を棄てた、娼妓をあはれむに先だちて人の妻をいたまねばならぬこともさとり得た。必要なきに身を夫の家に賣る人妻と、萬止むをえずして涙をつゝんで辻に立つ人と……笑止なるかな女に何が有る。

澁色に塗つた石油タンクの遠く近く突つ立てるのは柏崎である、かねの手に建てられた倉庫の家根が海にまで續いて、はては淼々たる水となつてゐる、家根は白く四壁は煤に海はやゝ底光のする鉛いろを湛へて。

柏崎より路南に折れて一歩一歩日はやうやく暗れはじめた、けれど米山のトンネルのべらぼうに長い暗やみを通る時も灯はつけなかつた、一つの草も見ず一本の木も生えてゐぬ廣つぱを信濃川と知らずに越えた時もまだ點けなかつた、さあさ參りましよ米山の藥師と甚句に殘れるよね山は、嫂さんは歩いて通つた、お才も歩いて通つた、山百合がたくさん咲いてゝそれや綺麗でしたのとお郁さんは語つたけれど、雪の中に咲く彼岸花すらまだ出ぬ、トンネル掘の坑夫等にからかはれ嬲られて泣き泣き通りぬけたお才は十五であつた。足の底から傳はつて來て頭から肩から全身をかする大音響、トンネルぐらゐ氣もちの惡いものは無いのに、短いのゝ幾つも連なれる碓氷と違つて、一つのくせに長いし、黒暗々たる大鐵橋の上をくろがねの車が轉つて行くのだ……。

直江津には巾着を編むことの上手なKがゐる、長岡に近づくにつれて千手町のSを思ふ、北越美人のタイプを備へてゐる女だ、はげしい文章を書く時もあるかはり、山も川も無き無法の詩を作る、停車場に待つててくれるかも？と思つたが、またも雪が降り出して、

珍らしくもなき立往生を喰はされた。長岡のプラットホームは建物からはずつと離れてゐるので洋傘をつぼめたなり汽車の中へかけ込むとようなたやすいことにはいかない。見送に來たらしい四五人の洋服が外套を頭巾でと冠つて窓の下に立つてる、頭巾も白く袖も白く裾も白い、言ひ合したように三々五々歩きながら車中の人と語る、新潟へ着くまでには四時間おくれますと驛夫が告げあるく。

物賣の聲も何となく寂しい、一人偉丈なる新聞賣があつた、陣笠の小さいのを顎のくびれるまでに締めてかぶつて、しんぶーん、たいようとうなるように言ふのがその男の口から出る聲とは思へず、窓をうそうそと覗きこむ目が大きく、唇は微動だにせない、素手にかゝへた新聞は一枚も賣れなかつた。

列車の家根を人が歩いてランプが下げられた、柵を透して沈んだように雪の中に暮れ行く町にも灯がはいつた。雪はます〱降る……。

こらこら、まだ早い〱。

簑笠でたちの男女あり、女は底すぼまりの籠を負ひ男は手ん手に木の鋤を杖ついて十五六人、箱の前を尾から頭の方へ過ぎようとするのだ、笠も簑も雪だらけになつてゐる……。

もつと片づけてから歸らなくちやいかん、見ろ汽車はこの通り動けなくなつてる、あとから來るのもかうなるんだから、冷たからうが皆きれいにしてくれと驛長に喰ひ止められてあと戻りさせられる所であつた、旦那さん、わしらアだけも歸らしておくんなさいやあとでも言ふのであらう、ちつとも美人國の美人らしくもなき嬶たちがじぶくつて、どつこいしよと軒下に簑ながら籠ながらゐしかるものもあつたが、慰撫いたらざるなき旦那さんに免じて皆戻る。笑ひたいような泣きたいような妙な面を笠の下にかくして大股にかへり行くほゝかぶりの男もある。

降つたる雪かなと嘆ずるまでもなく、ステーションの内外雪は三尺積つたのか四尺積んだのか、どこを見ても土の色が無い、風吹けば綾に、風止めば縦にかげ

ろふの天霧の飛ぶが如く、うんかの目を打ち眉をかすむるが如く、霏々として降る雪の中をば一町ほどあと戻りして線路に下り立つた手あひは、男は一人一人女をそばに立たしておいて背後から背負つてる籠の中へ鋤で雪を撈つては入れる、女は懷手して一杯になるのを待つてゝはわきへ行つて撒ける、若い女でもあつたら籠へ入れるふりして笠の上へ撒けはせぬかともうれふる。

長岡は兄が新婚後第一に足跡を印した土地である、嫂の嫁いだのは自分が二度目に足の起たなくなつた年で嫂とおなじ十八であつた、春まだ淺きさらぎの夜を、點しつらねた大ろふそくの光のかげに美しき人として見たのも、明くる日の朝次の間の障子のきはに立つて花やかな姿を驚きの眼を以て見たのも皆十五年の前である、郁子さんはよめ入りて六ヶ月と經たずにはるゞゝと兄のあとを追うて長岡へ來るまで自分の唯一の友であつた、よく手をひかれてはお室へ遊びに行つた、わたしたばこが呑みたい、お母さまに叱られるか知ら？と笑ひながら言ひゝゝした、八歳から覺えたのだといふ、よくおこられるので戸棚へ入つて呑んだのを見つかつてそれからうちでは許されてゐたのといふから、おやお上んなさい、内しよにして上げますとすすめたけれどついぞ烟管を手にしたのを見なんだ。長岡では荒屋敷に一家を構へて若い主婦として買物になども出たといふし、雨の夕、雪の朝、郁子さんを見た人も現に長岡に在らねばならぬ、こちらの女は四十になつても六十になつてもぴちやんこの島田を結ふ、丸髷の人は外來人の證據なので、わたしなどもやはりよその人なのでございましたと今でも寂しがつていふ。ぴちやんこに結ふのでは氣がないが、六十七十の婆さん達がどういふ顏でつぶし島田を頭へのせておくか、あひにく雪搔の女連は手拭で顏を包んだ上に笠が邪魔になる……。

五時深沈としてたそがるゝ雪の長岡をうしろにした行々線路をさしはさんで、鋤を荷ひ籠を負ひて立てる幾十幾百の男女に護られ、轟々、殷々、ひゞきを雪の

大野に傳へて汽車はまつしぐらに進む、危く窓へ壓されし落ちやうとするまでに雪の積れる處もあつた、脚下たゞちに谷々に臨んでほの暗き木立の中を行く處もあつた、川にあへど水の音を聞かず、藪をくゞれど折れ笹のひゞきを知らず、萱家の窓の七つ八つ赤く洩るゝ火をのぞみつゝ、滿天滿地の雪に心をおびやかされつつ、荒涼たるかなわがたびの路。

蒼然として遠くより暮るゝ松原があつた、一帶の山林、木くらく地白く、雪の野はまさに夜天の帷につゝまれんとするころだ、頭を手拭ようの白いもので包んでトンビを着た人が向うから來る、パッパッと雪を蹴つてたゞひとり急いでゐる、裾のひらくのが女らしいけれど、見る見る人は歩みおくれて、林や、森や、影たちまち消えて雪の夕やみ、雪の夜となつた。



對話　鐵道線路

河井醉茗

女。今、轟然と鳴つて汽車が來たら、貴方は逃るでせう、私だつて逃るわ、今は來ないと信じてゐるから安心して歩いてゐるのね、もしか此が何うしても逃られないと云ふ時でも、貴方は平氣でいらつしやいますか。

男。汽車が來たら逃ますよ、逃るのは本能です。

女。貴方に心中は出來ないのね。

男。サア、女のやうに單純になれたら出來るでせう、單純は美しいものです、女は毎も地平線を見て野を歩いてゐるのですね、直つきつめてしまふから宜い、つきつめると泣くか、死ぬかの二つですね。

女。死なれぬ女つて云ふのも出て來たじやありませんか。

男。私はシンプルを嫌ふのじやありません、愛する方です。併し近頃の世の中のやうに、凡ての人間が何も彼も分別しきつて居るやうになつたのは、少々あきたりませんね、そりや理屈の上では分つたとか、分らぬとか、いろ〳〵なことを言ふ人もありますが大抵は着々と實行してゆくじやありませんか。それだけ人間が賢くなつたのですね、所謂不言實行が多くなつたのですね、金を出せ、出さねば殺してしまふ、手取り早いじやありませんか。

女。マア驚きました、社會の出來事にまで御注意なさるのでございますね。

男。いや、文學の衰へた理由も其處にあると思ふのです、筋みちなんか考へたつてしやうがない、只實行さへすれば、默つてゐても生きてゆかれる、ね、然う云ふのでせう。今時甘つたるい戀愛などしやうと

考へてゐる女はないでせう、何うですか。

女。何うですか、私には分りませんが、戀愛も然うなると趣味でなくて、問題ですね。

男。男も女も問題として考へて居るでせう、生活の一部分ですもの。斯う世の中にゆとりがなくなつては何も彼も考へるべき問題です、詩や歌はありませんね。

女。仰るやうに不言實行が流行と女も危險ですね。

男。全く、夜一人歩きは爲てはいけませんよ。

女。汽車が來さうですね、來さうな氣がしてなりませんわ。

男。まだ何も見えないじやありませんか。

女。だつて見えたら大變ですもの。

男。見えたつて大丈夫です。

女。線路が少し顫動るやうじやありませんか。

男。毎も顫動てゐるでせう、私は線路に生へてゐる草も顫へてゐるやうに思ひます。

女。遠くで響がしますね。

男。暫く來ないから、もう來るのでせう、私は能く夜寢て居て、遠くの方でする機關車の響だけを聞くのが好きですがね。

女。近くでは——お嫌ひ？

男。好きも嫌ひもありません。暴虐ですね、破壞の襲來ですね。

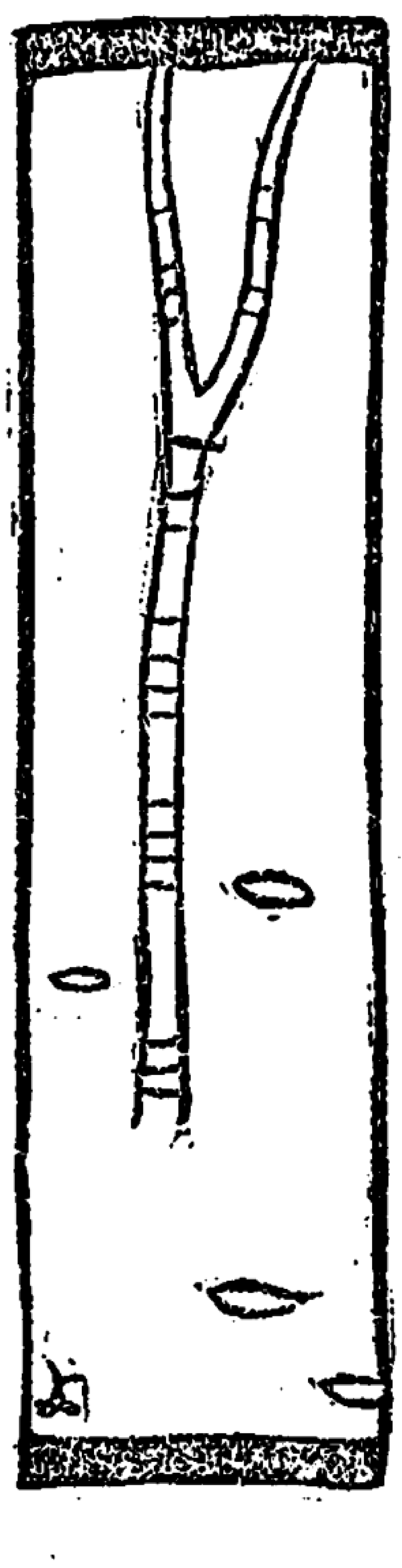
女。意識を奪つてしまふだけ、恐ろしいのね。

男。眞個に來さうだ。

女。貴方は其方の土手へお上りなさい、私は此方の土手へ上りませう、而して、暴虐をやりすです時、兩方から見てゐませう。

男。宜いでせう。

女。サア上りますよ。



寒月照梅花

しら〳〵と
白けたる夜の
月かげに
雪ふみわけて
梅の花折る

公任卿

宵に一旦ちら〳〵と降つたのは、垣の結目、板戸の端、廂、往來の人の頬、鬢の毛、帽子の鍔などにさらさらと音づれたが、やがて聲はせず、然るもの丶降るとも見えないで、木の梢も、屋の棟も、敷石も、溝板も、何より始まるともなしに白くなつて、煙草屋の店の灯、おでんの行燈、車夫のかんばん、荷〳〵もあかりのあるものに一しきり一しきり、綿のちぎれが群がつて、眞白な灯取蟲が、ばさ〳〵羽をあてる風情であつた。

泉鏡花



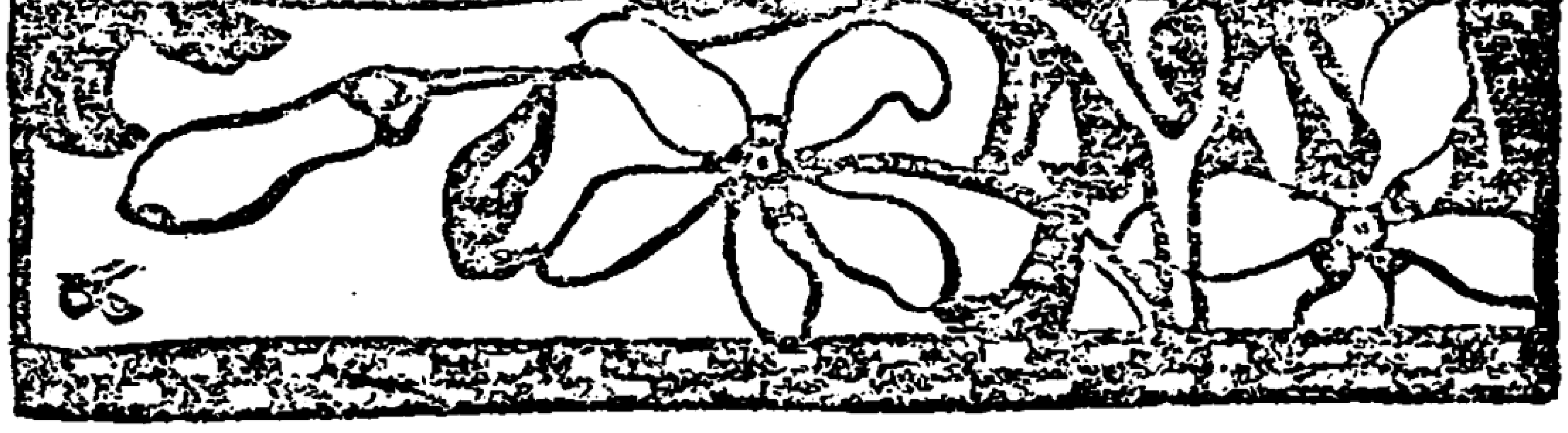
春日野は年の内には雪つみて春は若菜の生るなりけり　西行法師

梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れゝば　古今集

うら若みねよげに見ゆる初草を人のむすばむことをしぞ思ふ　在原業平

眺め居ればあやし五つに九つになりても見する一花水仙　窪田空穂

春の雪たわゝに降れり上加茂の村につゞける堤の松に　與謝野晶子



うつくしき
日和になりぬ
雪の上

太祇

梅毒根治新劑

本劑（獨名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばい毒根治特効

新藥なり故に黴毒及黴毒に關係して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ。ほう。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。そこひ。ゐれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治するを確證す從來諸種の藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢 試劑分壹圓九拾錢 特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

内服 トニチン TONITIN

本劑は瑞西國のオルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女生殖機不能即ち陰萎病、腎虚、神經衰弱、遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老年無力。生殖衰弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊症。冷症發育不全等に用ひ天下無比可驚奇効ある特新に發見せる生殖力を増進し生殖器を強壯ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効顯に如電光世にありふれし無効藥と同一視すること勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（獨名ヨードチツン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症々中症等總て肥滿質血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を遂退に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用て其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

藥劑分價送料共壹圓廿錢 試劑分六圓廿錢 特別製分九圓廿錢 着金即刻送藥す

世界唯一 麻病消渇の根治確證新藥 麻滅

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治療絶藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力強く峻烈なる一新藥を主劑とし麻病消渇の病原たる「ゴノコツケン」を忽ち滅殺する處方に基き製したる是を内服して酷せし新藥に付輕症は宜し重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式注射劑の如き狂暴無効有害のもの姑息劑と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證新發見藥

露骨發汗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち誓て根治し決して再發或は他病的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓用錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛生藥なり、即ち男女共腋毛の疾、はつぼうはげの疾、やけどの疾及びはゑぎはの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髪黑々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はえ藥とは其効力論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

特別製分 金五圓參拾錢 中瓶貳圓廿錢 小瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房（電話下谷二五四六番）

以下十五種の奇物は何にても遣つて居るから此奇術を見て思ひついた時(三重縣桑名郡矢田磧弘報館)で買ひ給へ

最新百種大奇術

代價郵稅共二十三錢、郵便切手又は振替貯金なれば二十五錢

日錄大要 切支丹バテレンの妖術●モルモット術●火渡りの大奇術●繩拔●十字架殺人術●人の力を取り我身を重くして持ち上げられぬ術●金錢自由吸集ノ妖術●錢を手の平につけ押しても取れぬ術●七八歲の小兒を重くして持ち上げられぬ術●初め輕くて後に重くて上げられぬ術●武道竹折術●一本の指にて大人を自由に揚げる術●ランプの火にて手を燒く術●太き火箸を指先にて自由に曲げる術●數人にて一人を押しても倒せぬ術●隱身術●不動金縛術●三人にて持ち居る棒を指二本にて取る術其他尙澤山記載し何人にも獨習し得る愉快の書である。

萬物製造秘術寶典

代價郵稅共廿三錢郵便切手又は振替貯金なれば廿五錢

(目錄)輕便寫眞燈法●蝋管蓄音機製法●輕便晴雨計製法●煙火製法●福壽玉製法●齒磨製法●石鹼製法●洗粉製法●香水製法●紙石鹼製法●のみ取粉製法●萬年草製法●メッキ法●リモナーデーやラムネの製法●ジンジャエール製法●滋養酒製法●蜜柑水製法●甘酒製法●味噌製法●醬油製法●水彩繪具製法●其他器械いらず早取寫眞法器械不用早印刷法等百餘種を記載してあるが皆諸君の家にあり合せの道具で出來る樣にしてある殊に早取寫眞術は最新の發明にて器械を用ひず僅かの藥品を混合して器械にて寫せし者と少しも變らぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の別なく何枚にても速に鮮明に寫し得る輕便大愉快なる寫眞法である、藥品無き地方は弊店より送ります、又器械にて寫せし通りに寫らざれば返金致します、又早印刷法は箱一つあれば繪でも文字でも何時にても大小の論なく原画の數百枚印刷する事が出來るから名刺講義錄引札其他如何なる者にても奇麗で安價に印刷する事が出來ます、一つ覺えて置けば五十錢以上の價値があります、夫れを僅かの金で是れ程澤山覺へたならば隨分安い者であらうと思ふ。 弘報館

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ樣に白色となる法●人間百歲迄生きる法●人の生死を前知する法●他人の年齡を當る法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●胎内の兒を男女自由にする法●顏を櫻色にする法●催眠術●書き損ひの字を拔く法●百日百夜眠らずとも氣力衰へぬ法●歌がるた大に必ずまけぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇術を澤山集めたる書物は廿三錢(郵券又は振替貯金廿五錢)

◎振替貯金口座番號東京壹六九貳八番 三重縣桑名矢田磧 弘報館

奇々妙々 手品種あかし

郵稅共廿二錢 郵券代用は廿四錢

本書を讀で酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなしである。(記載目錄)●豆腐ノ上ニテ獨樂ヲ廻ス術●盆ノ蕩ニ水ヲ入レル術●火ヲ喰フ大奇術●熱湯中に手ヲ入レル術●空ノまつち箱ヨリまつちヲ見セル術●帽子ノ中ヨリ色々ノ物品ヲ出ス法●黑いんきを金魚ニスル法●紙製ノ蝶ヲ自然ニ飛バス術●三尺ノ棒ヲ丸呑ミニスル大奇術●水ヲ燃ス法●清水ヲ牛乳ニスル法●銅貨ヲ水ニ溶ス術●すてつきヲ帽子ノ中ニ隱ス術●刄物ノ先ヨリ水ヲ出ス術●水中又ハ机上ニテ鷄卵ヲ踊ラス法(附錄)驚神的大魔術其他面白き手品が澤山載せてあるが皆子供でも出來る者計りである(弘報館)

實地應用 最新大魔術傳法

有効確實無効返金 一字千金前代未發の秘傳奇術法を百三十餘種を記載せる大有益の書物は郵稅共二十四錢

道具不要 家庭輕便 食パン並に細工菓子製造法

有り合せの道具で食パンや和洋菓子が子供にても手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵稅共廿二錢郵便切手又は振替貯金なれば二十四錢

日本全國 不思議集

目錄大略、化物屋敷●幽靈と物語●姥捨山●怪猫退治●狸の腹つゞみ●馬の化物●姿ノ大騷動●鏡ケ淵●歩く地藏●泣岩●殺生石●越後七不思議●大蛇騷動●八幡の森●狐火●其他珍談奇談を澤山集めたる破天荒の快書は郵稅共廿錢(郵券代用は廿二錢) 弘報館

一讀千笑 滑稽頓智笑話

本書を讀みて面白く退屈せぬ樣に暮すべし 定價廿錢(郵券代用は二十二錢)

簡易 素人治療法

感冒●子宮病●小便●痔●わきが●淋病●男女陰部諸病其他種々の病氣を手輕に治療し得る書物は廿四錢

男女 無上の快樂 郵稅共廿錢 郵券廿二錢

講談 一休和尚 郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

滑稽狂歌 百人一首 郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

◎卒歌集 郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

養鷄書 郵稅共廿錢 郵券代用廿二錢

◎禮法及婚姻 郵稅共廿二錢 郵券二十四錢

◎割引ヨリドリ五冊郵稅共一圓、十冊一圓六十錢、郵券一割增、

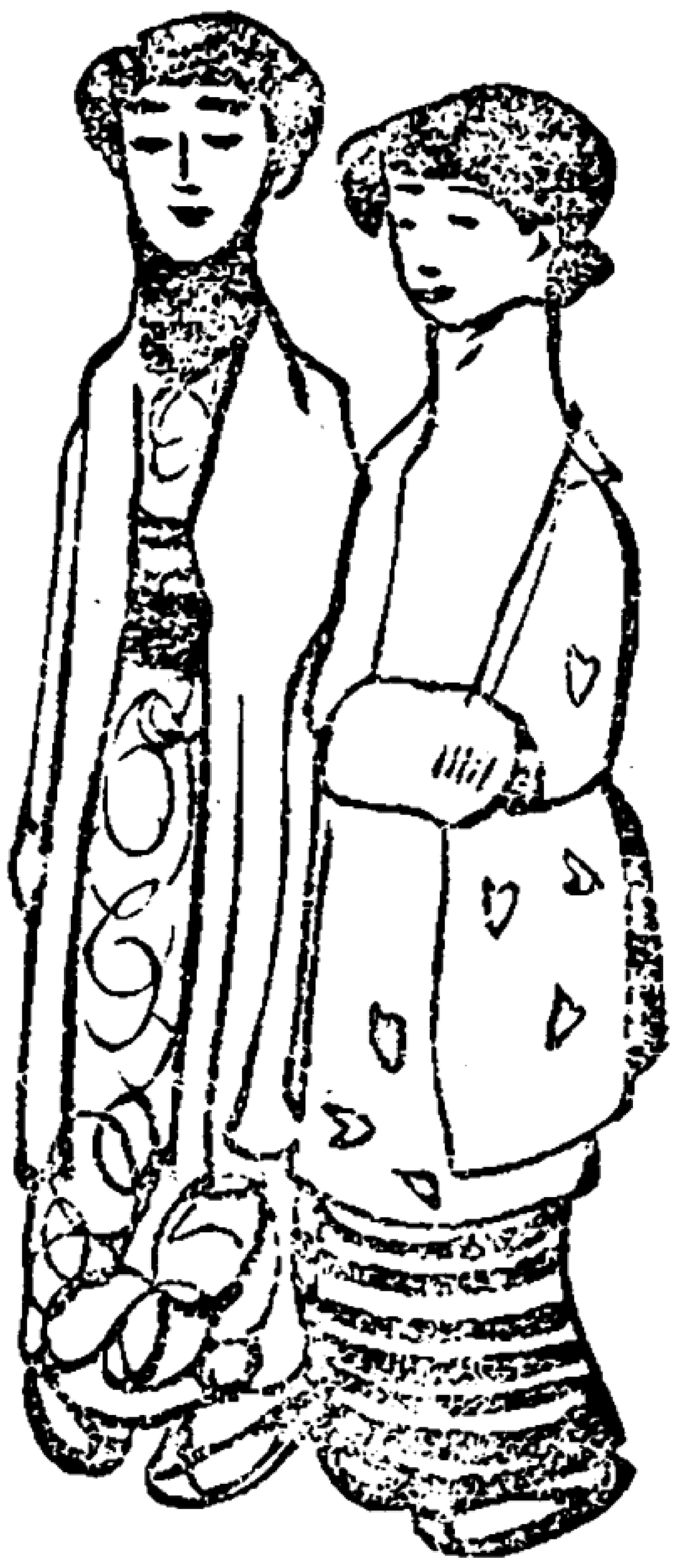
◎振替貯金口座東京一六九二八番 三重縣桑名矢田磧 弘報館

蕪村

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり
小豆賣小家の梅のつぼみがち
低き木に鶯なくや晝下り
誘入や浪花を出て長柄川
梅咲いて帶買ふ室の遊女かな

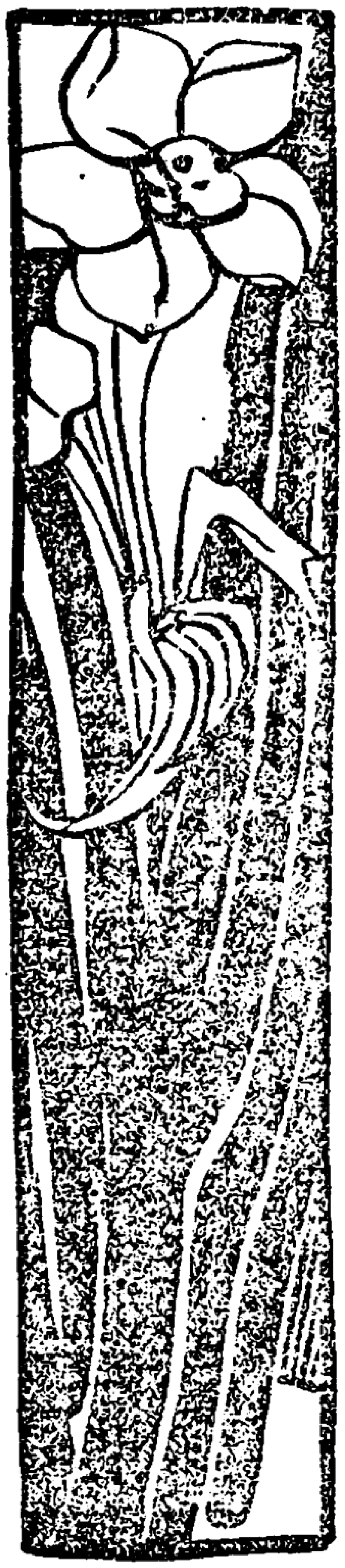
一茶

古さとや馬も元日いたす顔
例の通り梅の元日いたしけり
初空のはづれの村も寒いげな
垢爪やなづなの前もはづかしき
あつさりと春は來にけり淺黄空



今日は目出度うござんす、あゝしんとや、と腰打ちかけ、我身を横に投げ入れの、水仙淸き姿なり

近松門左衛門



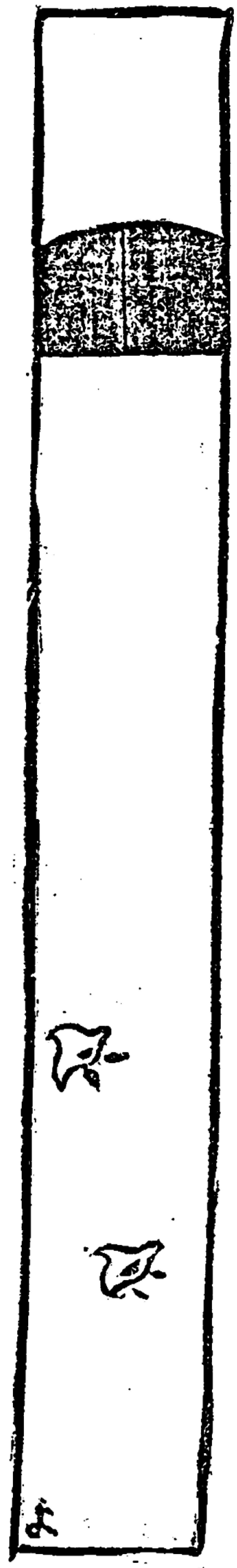
世の中は
思へばやすき浮寢かな
枕ながるゝ
利根の川ふね

枕流るゝ利根川の
舟に一夜の夢載せて
置く霜白きふなばたに
片しく袖は凍れるを
川面に深くたちこむる
霧は常陸につらなるか

横瀬夜雨

時代の化粧





公爵家の新年の儀式

九條公爵家

畏くも東宮妃殿下の御生家として、家門の榮え並ぶものなき關白九條公爵家の新年の御儀式は、如何に善盡し、美盡すことであらうと、是を伺ふに、必ずしも然うでない、虚飾を廢し、嚴肅と質素を旨として新年の儀式を行はれるのである。

曙光漸く明かならんとする元旦の午前五時、先づ邸内に祀られたる鎭守春日明神と、歷代の御神前に神神しく燈明を捧げ、公爵初め家族一同、並に家職の方方も參拜し、終つて、それ〲公爵に新歳のほぎ言を申上られるのである。

それより一同大廣室に團欒し、先づ大福茶と稱して梅干昆布を加へたる御茶をまゐり、次で屠蘇を酌み雜煮を祝ふのである、お雜煮は東京流で、青菜と、お餅ぐらゐを入れるのである。

床の粧飾は、目出度き軸物を掛け蓬萊山を前に飾る此蓬萊山は三方に蜜柑を積上げ、其上に熨斗昆布を載せる。

公爵が朝賀より御歸邸あそばさると、中食を召上られる、獻立は平素より更に鮮美のものを選み、二汁五菜と定つてある。

門松及び各室の七五三飾りは言ふまでもなく、現在家職の家令一人、家從四人、家從補二人は一室に、又老女、女中等はそれ〲の部屋に元日のお雜煮を祝ふのである。

公爵が舊臣に面會せられて、年賀を受けられるのは例年六日と定められてある。

德川公爵家

德川公爵家でも、新年の儀式は東京風に簡素を旨とせられる、舊藩地の風は殆んど廢された。

元日の拂曉早く御起床、家達公はお雜煮を召上られ朝賀の爲め御參內ある以前に、お座敷に出入する家職の男子廿八名を一室に召されて、共に御屠蘇を酌れる

公爵夫人も家職の女子二十七名を一室に召されて、じく元朝のお祝ひを遊ばされる。

年賀の式に出る家職は、男子はフロックコート又は羽織袴、女子も紋服であるが、年若のものは振袖裾模樣で出るから、一層晴れやかに、美觀を添るのである

島津公爵家

島津家も新年の儀式と云へば以前はなか〱むつかしいものであつた。近來は追々略式となり、此れと云ふ特別の一定した儀式もないが、只、新年の床飾りは一定してゐる。

掛物は狩野法眼の鶴龜、壽老の三幅對、生花は松竹梅に柳を生ける。御供の三方は一つに勝栗、榧の實、煎餅、納豆、くわしこんろ、野老、橙、白米等を盛るので、此をお手かけと云ふ。別に一つの三方には、小餅を四十餘個入れ、其四隅に大きな鏡餅を盛り、松を立て、又中央にも大きな鏡餅を供へて、其上に橙を載せ、三本の小松を立てる、此を、おにんりようと云ふ此のおにんりようと、お手かけとの一對を床の御供に飾るのである。

公爵が年賀を受けられる日取は、豫め廣告を以て發表する、其日は年賀の客も多く、自然に小園遊會が開かれるやうなもので、客には燒肴、鱈、昆布、蜜柑などの折詰が供されるのである。

鏡山のお初と現代式の女



衆議院議員　竹越與三郎

▲女の話は禁物

女の話？、それは禁物だ、男のことでさへ却々研究が出來ないのに、女のことまで研究して居る暇はない。殊にだ、日本の政界は頗る陰險で、政敵を瑕つけんとするに多くは女との關係を云々する、誰それは斯う言ふ女と關係があるとか、あゝ言ふ女と關係があるとか種々の揑造を並べて名譽を毀損しやうとする、だから政治家は女に接近することが出來ぬ、故に我輩は如何なる人の紹介があつても女には斷じて逢はぬことにして居る、訪問客に逢はぬばかりでなく、女の會合して居る場所へ出て演說したこともない、從つて女に關係した雜誌には筆も執らねば談話も載せぬことにして居る、斯う言ふ譯だから女に關した話は御免を蒙りたいのだが、折角の御賴みだから特別に話をしやう。

▲下女お初の思想

現代の教育を受けた女程矛盾した者はない、嫁して舅姑のある家庭に入ると、舅姑が封建時代の思想を以て、何事も封建時代的にやつて行かうとするのに直ぐ衝突する、衝突すると口へ出して言ふと言はぬとは別問題として、孰れも心中に舅姑が封建時代の思想を懷て居ることを笑ふて居る、其現代式の女が下女に對して如何いふ態度を採つて居るかと言ふに、自分の召使ふて居る下女が鏡山のお初たらんことを希望して居る下女と言ふ者は主人に忠義を盡すべきものと定めて居

る、主人の爲めには身命も投げ打つべきものと思ふて居る、成程鏡山のお初は主人尾上に對しては忠義を盡したには相違ない、然しこれは三代相恩の主人の爲めに復讐したのである、封建時代の主從と言ふ者は、代代主從の關係を續けて行くので、主人に受けたる恩義の大なることは言ふまでもない、斯う言ふ主從の關係からしてお初が尾上の爲めに復讐したのは當然のことである、然れども今日の主從は封建時代の主從とは全然關係を異にして居る、一ヶ月幾許かの給料を貰らうて使役されて居るだけである、主人の氣に入らねば一ヶ月の豫告もなしに、其日にも追出される身體である斯う言ふ關係の下女に對して鏡山のお初たらんことを要求するのは餘りに蟲がよすぎると思ふ、自分の都合の惡い時は、封建的の思想を笑ひながら、都合の好い時には封建的の思想を要求するのは隨分矛盾である。

▲二宮宗の實行難

二の宮宗が大分流行して居る。二の宮尊德を崇拜することも、善いことには違ひないが、今日の世の中に果して二の宮宗が行へるか如何かは疑問である、イヤ二の宮流の生活をしたなれば今日の社會では或は生存が出來ぬかも知れない、何故かと言ふに、二の宮翁の敎に從へば勤儉貯蓄をせねばならぬ、勤儉貯蓄と言へば勤めて儉約をして金を使はないのであるが、これが封建時代の樣に、一定の扶持を貰うて、之を子孫に世襲することの出來た時なら、成程儉約して金を貯めることも出來やうが、今日の樣に多くの人間には世襲財產どころでない、自分一代の財產も持つて居ない世の中では、上役の機嫌を取つたり世間態を飾つたりして辛くも生活して居るのであるから、二宮宗の樣に儉約して金を貯めて居る樣なことでは、職にも離れ人も相手にしなくなるから、折角貯めた金も食つて了ひ、結局生存することが出來なくなるのである、今の世の中では勤儉貯蓄なぞ言ふことは出來る人もあるかも知れないが、先づ實行の出來ぬ者の

方が多いと思ふ、これは其人の罪でも何でもない、社會の組織がさう言ふやうになつて居るのだから仕方がない。

▲切腹の不必要

封建時代と今の世の中とは、社會の組織が違うて居るから、封建時代の道德を現代に直に用ひることは出來ないことがある、例之封建時代の武士は、何か身に落度があつた場合には切腹して申譯をする、其時代に於ては誠に勇しい男らしい事に思ふて居たが、今日から見ると切腹は經濟問題である、封建の世に於ては、武士に落度があつた場合には、本人が切腹して申譯をすれば、其まゝ罪は免され扶持も家名も子孫に傳はるのであるが、若し切腹せなければ扶持は沒收され其家は闕所になるのであるから、家の爲め子孫の生活の爲めを思へば切腹するより外に道はないのである、斯う言ふ場合に已むを得ず切腹するのは要するに經濟問題の爲めに切腹するのである、だから封建時代の道德は一面に經濟問題が含まれて居たのだ、ところが今日では斯う言ふ場合に切腹して見たところで子孫が安樂に暮せるでなし、扶持を世襲することが出來るでもないから、自然切腹する者がなくなる譯で、士氣が衰へたのでも何でもない、若し今日でも切腹すれば經濟上の利益がありとすれば、切腹するものが無いとは言へない。

▲彼は何故に獨身なるか

藝術家たらんとする女が隨分ある樣だ、女の藝術家は夫を持つて果して平和な家庭が作れるか如何かと言ふとこれは疑問である、何故かと言ふに、藝術家となるには個性を發揮さすのが必要であるが、夫を持てば何所までも個性を押へつけて行かねばならぬ、玆に於て衝突が起る、個性を發揮させば夫に仕へて妻たる本分を盡すことが出來ぬ、では個性を押へつけるかと言ふと、そうすれば藝術家としての生命がない、夫と藝術とは到底兩立の出來るものでない、夫を持て藝術家

たらんと欲するは二人の夫に仕へると等しく、平和なる家庭を作る道でない、孰れか一方を捨てねばならぬ夫を持つ者は藝術家たることを止め、藝術家にならうと言ふ者は獨身で暮すより外に道はない、ところが今日の社會では女は固より男でさへも獨身生活が却々六か敷い、無責任なる新聞記者が『彼は何故に獨身なるか』など言ふ題下に、有ること無いこと書き立てゝ三面記事を賑はさうとする、獨身で暮さうが配偶者を求めやうが、それは個人の自由で、社會に何等の實害を與へない事で、然るを他人の私行に立ち入ることの權能なき新聞記者が、獨身で居るから怪しいなぞと獨斷的の記事を記くなぞは以ての外のことであるが、然し今の社會は斯う言ふ記事を歡迎するのだから情ない、西洋には斯う言ふことはない、西洋では男女間の事は法廷の問題となつた時は新聞に書くが、それまでは決して書かない、それは個人の自由を尊重する結果に外ならぬのである。

　日本では未だ獨身が目に立つのである。

▲敎育ある女が度外される理由はない

此前女の勿れ十五則と言ふものが出來たが、あんなことは西洋では當然のことで、態々勿れと言ふだけの價値がないのである、西洋の年少男女は交際は自由であるが、そこに嚴格なる規律があつて、日本の樣に不規律な交際はしない、殊に身分ある女は夜間一人で外出する樣なことは決してない、ところが日本では一方に勿れ十五則などを作つて喧しく言ひながら、夜間女の一人歩きなぞを平氣で許して居る、これ等は餘程矛盾したことゝ言はねばならぬ、これと同じく矛盾したことが未だある、それは敎育ある女と言ふと直ぐ度し難い女を聯想する、と言ふのは敎育ある女は自分獨り偉がつて、人を輕蔑する傾があるからであるが、然し斯う言ふ女があるとすれば、敎育ある女でなくて敎育のない女と言はねばならぬ、敎育を受けた爲めに若しさう言ふ風になるのなれば其は眞正の敎育でない、眞

正の教育を受けた女なれば決してさう言ふことはない筈である、教育ある女と言ふと厭な感じのするのは矛盾と言はねばならぬ。

△結婚と電車

日本の結婚前の女と西洋の結婚前の女とは考が餘程違ふ樣である、日本の女は如何しても結婚せねばならぬ者として居るから夫を選むのも比較的容易である、彼よりは此と言ふ樣に比較的意に適うた男を夫にする西洋の女は必ず結婚せねばならぬと思ふて居ないから其夫を選むのも絶對的である、氣に入つた男がなければ獨身で居るまでゝある、斯う言ふ決心があるゆゑ、滅多な男を夫に持たぬ、此人ならばと見込のついた男を發見した時初めて結婚するのである、さう言ふ男が發見ねば一生結婚せずに終る、恰度電車に乘る樣なもので、電車に乘らねば行かれぬ人は、如何に電車が雜沓で居ても無理にも乘らねばならぬが、電車に乘らねば歩くまでと決心して居る人は、乘客の多くない氣持の好い電車があれば乘るが、さう言ふ電車がなければ無理に乘つて厭な思ひをするより歩て行く、西洋の女は電車に乘られねば歩く人で、日本の女は乘れても乘れなくても、無理にも電車に乘る人である。

△獨身と或る西洋人の例

女の獨身について斯う言ふ話がある、我輩も知つて居る西洋人だが、非常な美人で獨身で居る人がある、何故結婚せぬのかと聞くと、其女は癲癇の遺傳がある其が爲め結婚すれば癲癇の子孫を作り人種の上に罪を犯すことになるからと言ふので結婚せないのである、然し美人であるから癲癇を承知で貰ひ度いと言ふ人もあるのであるが、癲癇の子孫を作るのは罪なりと言ふ理由の下に、如何に切なる申込と雖も悉く退けて居たこれが日本の女であつたら如何だ、癲癇を承知で貰ふてくれる人があつたら直ぐ結婚するであらう、イヤ癲癇を秘しても結婚するであらうと思ふ、斯う言ふ點が日本の女と西洋の女との考の違ふところである。

高き望低き望

羽仁もと子

◎桂庵の實話

此頃私が或る桂庵のおかみさんに聞いた事に「此頃は誠に女中が拂底で困る、たまに女中に成りたいと言つて來る人が有つても多く本人から望んで來るのは仲働きだが、一見とても仲働きとして見る事の出來ぬ婦人が、どうでも仲働きになりたいと言ひ張つてゐる。

全體仲働きと言へば、禮儀作法はもとより、お料理も奥から出るお献立の品々に味を付ける事から、煮付けかたなど、一々心得て居らなければ成らぬ、お仲と言ふ役は、そう誰れでも一足飛びになれる役ではない然しまあ女中の不足な時であるから、望んで來れば一應御目通りに連れて出る、するとお邸の方でも、不足で困つて居る所だから、大抵なれば先づ使つて見やうとおつしやるので、一時、望み通り仲働きとして住み込む事は出來るが、扨て住み込んだからが困難で、奥からは普通お仲へ申付ける事を申付けても　本人の方では心得のない事だらけ、やる事もやる事も失敗を重ねる、奥では折角雇ふたのに、役に立たぬので、不都合ばかり重ねられるから面白くない、又本人とても失敗ばかりして、面白い譯はないから、直ぐに厭氣がさして來る、そこで最後は奥からお暇が出るか、さもなければ本人から桂庵の方に引取つてくれとせがむか、どちらかに落ちてゆく、それで本人も悟つて了へばまだ好いが、あのお邸はあゝだつたが、外によいお邸をさがしてと、まだ夢がさめ切らない、それや之やでお

邸の方では女中の出入がはげしくて、とても此婦人にこそ仲働きを托してもと言ふ様な安心を得る事が殆どないと言ふ有様である、お針の方でも其通り、たかゞ銘仙位が縫へれば、すぐにお邸のお針仲に雇はれたいと言つて來る、お針仲などゝ言へばもう如何なるものを出されても、自由に針が動く様でなくてはならないものだから、それを銘仙位な事でお針仲に住み込むものだから、直ぐに又ふいとまをどちらでか取るか、やるか、實に此頃の婦人はどうして恁うも輕薄に成つた。ものだらうか」と言つてしきりにこぼして居りました。此は何んでも無い桂庵の愚痴の様に思はれますが、私はこゝに現今の婦人の一大缺點を見出す事が出來はしないかと思ひます。

◎實力に伴はぬ蹉跌

昔からの諺に「望みは高く置け」と言ふ事がありますが、おつしやつた本人樣はどう言ふおつもりでおつしやつたのか知りませんが、彼れをあのまゝ信じたのでは間違ひであらうかと思はれます。

お末くらゐの事しか出來ないのに、仲働きを望むのは成程望みは高く置いてありますが、其望みは空想に過ぎません、現在の自分には實力が伴なひません、實力の伴なはないものを、現實しようと飛んでゆくので堪へられなくて、引きさがつて來るので御座います。

豊臣秀吉の樣な人ですら、始めから天下を握らうと思つてかゝつた仕事ではありませんでした、私は望みを高く置くと言ふ事よりも、先きに先づ己を知ると言ふ事が必要だらうと思ひます。例へば、自分にはお仲位は勤められやうと思つても先づお末を望んで見て、そこで眞實の實力を試めして見る事であります、實力さへ有りますれば、よし自らはお末を望んで居ても、奥で其人に信用をつけて、お仲に引上げて使ふのは當然の事、又仲働きの勤めぶりが宜ろしければお奥に使ふのは無論の事です、かくして仲働きなり、お奥なりにつかへれば、ほんとうに其力が伴なつてゆくので、本人も誠に樂に其職務に盡す事が出來、お邸の方でも

信用を置いて使ひますので、安心が出來て自からそこに落付きが生じます。

◎婦人自らの破壞

聞けば此頃は看護婦の志願者が非常に多く、うちでも亦產婆の志願者が月を追ふて多く成つてゆくさうであります、それはそれだけ婦人の實力が擧つて來たとなれば喜ばしき事でありますが、はたして之が眞面目な婦人の自信によつて、かう言ふ形勢を見るのでありませうか、婦人と言ふものが多少でも社會にみとめられて來た今日、婦人としては最も眞面目に認められて來た位置を固めてゆく必要があります、いたづらに「認められて來た」と言ふ調子に乘つて、自らをかへり見ず、面白半分に、好奇心にそゝられ、虛榮心にかられて、輕卒なる徒よと社會の笑ひ草に成る樣では、婦人自らの破壞であります。

◎何事にも用意が要る

地方などの女學校を卒業されたかたが、東京東京と言つてより高き敎育を求めらるゝのは、無論惡い事ではありませんが、それには一家の事情もあり、兩親のおもはくも有り、さう思ふ樣に成らぬからとて、悲觀して了ふ事は無からうと思ひます。東京にさへ出て來れば何んでも出來ると思ふのは間違ひで、地方に居つて、心の習練の足らぬ人、卽ち譯も分からずに、ただ東京東京とあこがれて來る人たちは、よしんば東京へ出た處で、矢つ張り譯も分らずに、出來ぬ事に徒らに高い望みばかり置いて、終ひには何物も得ずに失望と落膽の月日を送らねば成らぬ樣に成つて來ます。

事務員を半年すれば、直ぐに記者に成つて見たいとか、看護婦を三月もすればはや產婆に望を起したりするのが、現今の婦人の一種の流行心の樣なものに成つて居るさうですが、之は婦人自らが、自らかへり見て自らに恥ぢねば成らぬ事でありませう。

仲々一つの事をさまで深くなくとも呑み込むまでには、少くも實着な月日が入用であります、あすこも、

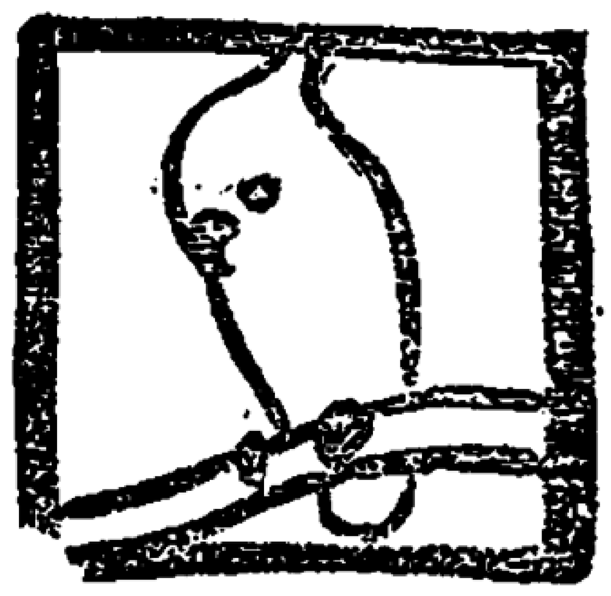
てゝも、腰掛ばかりで怖ろしい高い座る所ばかりを見上げて、あせつて居つたでは、到底そこに行き付く事は出來ません。

男、女に關はらず兎角若い間は眼前の、他の成功や名聲をばかり羨んで、其人が何れだけの苦辛と、何れだけの用意を持つて、今日の地位になつたかといふことを知らないのです。空虚なる自信は、氣位ばかりを高くして、其人の一生の爲には、何の得る處もなく終らしめることがありますから、人は必ず充實したる自信を持たねばなりません。

私は此女中の話と言ひ、看護婦の話と言ひ、女學生の話と言ひ、事務員の話と言ひ、形こそちがへ、品こそかはれ、其底に流れて居る精神を通して、現今の婦人の心裏の一端を知る事が出來ると思へば、誠に寒心に堪へぬ事であります。お互に多少でも認められて來た、婦人と言ふ名を辱しめない樣に、いたづらに高き望を起して脚下を忘れぬ樣、廣く周圍に眼をそゝいで其位置を眞實に固めてゆきたいものであります。

日本橋

帝都の中央に一大美觀を添へる筈の日本橋は、今から一年ほども前に着手して、未だ新しい橋が出來ません、昨今漸く橋らしい形が出來たくらゐのものです、而かも毎日〳〵朝から晩まで、大工、石工、女の人足其他幾十人の人々が絶えず働いてゐるのです、初めは川の底に杭を打込む爲に、水を汲むしかけからしなければならぬのです、機械を据えて杭を打込むやら、萬力の綱を十四五人の力で引張るやら、船から石を揚る畚で泥を運ぶやら、一人一日の力を一個として、幾千人の力が要るか知れません、而かも見てゐると、何をしてゐるのやら一向分りませんが、それでも最後には立派なる橋が出來上るのです、僅に一つの橋を造る爲にも、あれだけの隱れたる勞力の要ることを思へば、少くも人間永久に殘るほどの事業をしやうとか、他から稱賛されるほどの地位にならうとかするには、決して容易でないことが能く分ると思ひます。(SM)



浮世繪に表はれたる婦人の容貌

文學士　澤村胡夷

婦人の美貌といふ事には種々の動搖變化があつて、或は時代に依て、或は土地に依て、それぞれ著しき相異のあるを免れないものである。

時代に基く相異といふのはある時代と他時代とに於て各婦人の容貌に對する評價の相異を指すのであるが婦人の美なる容貌は如何なる時代に於ても美として存在すべきであるけれども、時代といふものは婦人の美なる容貌の種々なる典型の中で、自己に最も望ましい或種の典型を選擇するものである。換言すれば時代感情といふが如きものが、常に其時代に應ずべき美なる容貌の典型を決定して行くのだと考へられる。此點に於て所謂『現代的容貌なる』語が深長なる意味を保持し得るのである、けれども同時にまた時代の選擇した美人が必ずしも完全の容貌美を備へたる絶對的美人でないかも知れない。さうすれば現代的美貌なるものも意外に頼しからぬ語たるを免れぬ事となつて來る。

次に土地に基く相異といふのは各地方に於て容貌に特殊の趣を備ふる事である。即ち婦人容貌の局所的特徴とも稱すべきものであつて、地方に依て夫々其地方的特色を容貌の上に保持してゐる事である。面貌の中でも口元……唇の樣子などに於ては地方に依て注意すべき相異を發見する事が出來る。これは發音上の相異が主要なる素因となつてゐるやうであつて、口元を能く注意して觀察すれば彼等の地方的發音法の相異が口元の筋肉運動の特異なる方向を示してゐるが故に、例へば東北婦人だとか關西婦人だとか夫々多少の區別を

なす事が出來る。勿論この場合に於ても決して彼等婦人をして言語を發せしめて後に之を區別するのではない、少しも言語を發せしめなくつても能く筋肉運動の一定の方向を其口元の靜止的狀態に在る場合に於て現示してゐるといふのである。然に口元などの相異はやや先天的の色を帶てゐるのだが、尙此他に人爲的の原因に歸すべき婦人容貌の相異點の存在する事を忘れてはならぬ。是は或は加巧的と云つてもよいので、卽ち面貌を人爲的に變化せしむる所の仕方が地方に依て種種異つてゐることを云ふのである。

一體婦人の容貌に於て所謂美貌の一要件として眉毛の形を云爲する事は支那に於ても日本に於ても同樣であるが、此眉毛の剃方が著しく婦人の面貌を變化せしめるものである。俳優の扮裝する人物の種々の性格を表示するに就て彼等の眉毛の引き方といふものが色々に工風せられてゐるが如きは其の適例である。殊に婦人の面貌に於る感情表出に頗る價値あるものは眉毛の形式と云ふを憚らぬ。例ば双方の眉毛の間隔が著るしく迫つてゐる面貌は神經質の感を吾々に與る者であつて、感情の銳敏なる相である、或は嬉笑的な相貌では無いかも知れないけれど、少くとも怜悧な容貌と云ふ事が出來る、然るに眉毛の間が多少開いてゐる面貌は神經遲鈍の感を吾人に與へるものであつて、銳敏なる感情の表出には適當しない。從つて怜悧な容貌とは言ひ難い代りに、愉快氣な、且つ圓滿な面貌と云ふことが出來るのである。かくの如く婦人の容貌上眉毛の形或はその位置といふものは重要な力を保持してゐるのだが、此眉毛の形や位置を人爲的に變化する仕方が、地方に依て多少相異してゐると云ふことは注意に價ずる事實である。卽ち眉毛の剃方が地方的に夫々多少の特色を放つてゐることであるが、一例を擧れば東京婦人は槪して眉毛と眉毛との間を多少遏らせやうとする傾向を帶てゐるに反して、京都の婦人は眉毛と眉毛との間をせばめる事をば甚だしき興味を持つてゐないやうである。畢竟かくの如く人爲的に、或は加巧的に、婦人容貌の地方的特色を發揮してゐることも亦事實と

して存在することを知れば充分である。但し是に附言して置くべき事は前に述べた時代的容貌の相異に於ても無論此人爲的乃至加巧的原因に歸すべき要素を保存して居ることである。即ちある時代が、婦人の美なる容貌の種々なる典型の中から選擇した或種の典型に於ても他時代のそれに對して人爲的或は加巧的原因に歸すべき典型上の相異を含有してゐる事である。約言すれば時代の選擇する條件の中にも此加巧的部分が加つてゐることである。例ばある時代には三日月眉毛を歡迎する事もあつたであらうし、また他の時代には八の字かゝつた眉毛を採用した事もあらうといふに外ならぬ。



勝川春章の美人

然るにある土地に親密なる關係を保ちつゝ發展して來た藝術が其土地の感化を著しく受ける事は藝術史上の著大なる事實である。所詮環境と藝術との關係は史家の注意を怠つてはならぬ項目であつて、事象を形の上に表す藝術に於いては殊に痛切に其の必要を感ずるのである若し繪畫が女性美を表現することに於いてある程度の發達を遂げて、それが特に一定の地方に親密に關係を結んでゐたとすれば、少なくとも是等の畫に表現せら

れた女性美がその發達地たる地方的特色に飾られて居るであらうといふ事は强ち不當な推論では無からうと考へられる。か樣な立場から日本の浮世繪を考察して就中それに現はれた女性の容貌を見ることは必ずしも無益の業ではあるまい。

元來浮世繪といふのは當世の繪と云ふ事である。浮世繪の女性はその當時にあつては所謂今の婦人の反映であつたのだが、現代から言へばある過去の時代に於ける婦人容貌美の理想とも見られるのである。一體日本の古き時代には、婦人の容貌美を借り來つて佛菩薩等の所謂宗敎畵乃至彫刻の尊容慈相を現ずるに用られたことがある。それ故比較的古い時代に於ける婦人容貌美の理想的境域をも窺ふことが出來る。ともかく浮世繪の美人畵はその時代の中流以下の人々に歡迎せられたもので所謂平民性の繪畫であつて、一方では輕文學と密接な關係を保ちつゝ進んで來たのであるから、よく時代の趣味を現はし、また意外に一般的の嗜好をその美人の容貌に就ても示してゐる。

此浮世繪の美人の畵家の中でも、異つた二種の典型を夫々採用した流派がある。卽ち美人の面貌などに關して著しく異つた典型が凡そ二種あるが、此典型が相互に特異の點を有してゐるのだ、一つは西川派の美人で、他は勝川派の美人である。勿論浮世繪の流派自體から云へば、是の如き簡單な流派分では充分でないのだが、吾人は便宜上この二派の美人の典型に就て一言しやうと思ふのである。

西川派と云ふのは西川祐信を以て代表する事が出來るので、勝川派は云ふ迄もなく勝川春章を以て代表的作家とする。

今、吾人が西川派と勝川派とを特にあげて來たのには理由がある。その一つは西川派の美人が勝川派のそれと全然異つた典型を採用してゐる事で、第二は西川派が京都に發達して勝川派が江戸に生長した事である卽ち一は京都風を表し、他は江戸風を示してゐることである。勿論勝川流は西川流より少しく後れて發達して來たのだけれども、種々の事情から察すれば此兩者

の對立比較は決して妥當を缺いて居ぬと思ふ。

西川流の美人は圖にもあるやうに面貌が豊かで、所謂豐頰であつて、眉毛と眉毛との間が甚だしく迫つてゐない。次に眼の形が弧月形をなしてゐて、稍目尻が下つた氣味を持つてゐる。鼻が所謂團子鼻である。概括すれば圓味のある豐滿な容貌であつて、權威のある相ではないが、人を引附けるやうな溫味を保つてゐる惡く云へば稍間の拔けた面貌であるけれども粗險な相ではない方である

然るに勝川流の美人の面相は恰も是と正反對であつて、面貌は豊かとは云はれない、寧ろ面長の方で、頰も從つて豊にふくれてはゐず、西川派のそれがやゝ下ぶくれであるに對して細長くなつてゐる。次に眉毛と眉毛との間が稍迫つてゐて西川派の開いてゐるのとは頗る其趣を異にしてゐる。眼は少しく釣上つて、前者の弧形を成して眼尻の下つてゐるのに比較すると、甚だしく其樣式が異つてゐるのである。鼻は多少高く見えて團子鼻ではない。尚一つ面長である故に其額際も少しく狹まり、所謂富士額の樣式を取れるに反し、西川派のそれは額が廣闊である。概して言へば勝川派の美人は神經の鋭敏な容貌であつて、豊滿の相でない代りに權威を含んだ貌である。人を引附るやうな溫味を持つてゐないけれども冒し難き張を其容貌から想像せしめる。卽ち引締つた面貌であつて、寧ろ神經質的の美貌と言ふてとが出來やう。

かくの如く兩者が夫々其趣に於て相異してゐるのであるが、一體是等の相異は如何なる所から出て來たのであらうか、是が吾々の注目すべき問題である。單にかゝる容貌を偶然にも作家が案出したのだと説明すればそれまでだがさう簡單に云つてのけることが出來やうか何うかは疑問である。吾々の見る所では是等の相異は地方的相



西川派

異に原因してゐるやうに思はれる。卽ち一は京都を中心として發達した西川派の美人が京都地方に於て著しく認めらるゝ婦人の容貌を現してゐるのであつて、他は江戸風なる婦人に多く見る所の容貌上の特色を勝川派が發揮したと見ることと是である。此主張の可否は兎も角として、實際上婦人の美貌がその土地のある特色に飾れて現はれ是がその土地の畵家に依つて好んで現さるゝと云ふ事は全然あり得べからざる事とするを得ないであらう。殊に此實例は決して尠くない。若し果して吾々の推論の如しとすれば、京都風なる婦人の容貌上の特色と東京風なる婦人の容貌上の特色とが、端なくも繪の上に表されて少からぬ興味を吾々に與へるものと云はねばならぬ。

固より土地の相異から起る婦人容貌の相異は時代の撰擇する美貌に對して無頓着に其特色を保つてゐることが出來る。ある時代には重要視せられなくつても一種の典型として殘存することを得るものである。

最後に一言附加すべき事は卽ち加巧的に容貌を變化することに關係して注意すべき事である。西川派と勝川派との美人の容貌に於ける大なる相異は一は圓味のある面貌なるに對し、他は細長き所謂面長なることであるが、此二個の大なる相異に對する頭髮の結び方を注意せねばなるまい。圖にもあるが如く西川派の美人は當時流行した一種の髮の結び方をなしてゐるが、若し是をして勝川派の美人の頭髮の如く鬢の太く兩方に張つたものを用ゐたならば何であらうか、言ふ迄もなく此圓味のある顏は橫張つて隨分滑稽な面貌となるであらう。また是と反對に西川派のやうな結び方を勝川派の美人にさしたならば隨分長い顏に見えるものである。是等の事柄は婦人の容貌の上に大なる關係を保つてゐるものである。是に於て流行をどこ迄も趁ふてゐることは場合に依つては甚だしき滑稽を自ら演ずる爲に氣をもんでゐることになる。例ば簡單な例にて云へば、背の低い人が、縱橫のしま模樣の流行する時にこれを着て愈低くゝ見せることの如きは此類である。殊に髮の結方などは婦人容貌の上に大なる關係がある

ものであるから、此點に就て多少注意を拂はねばならぬ。吾々は現今の髪の結び方に就ては全く門外漢であるから、唯頭髪の結び方が婦人の面貌中の基礎とも云ふべき顔相の根本的形狀を支配する事のあるを指摘するに留めやうと思ふ。

頭髪の結び方の外に、尚一つ云つて置いてもよいと思ふ事は眉毛の剃り方と作り方とである。前にも少しく云つた所だが、元來眉毛は顔面のうちでも殊に人の眼に立つ點であるから婦人の容貌を形容する時に於ても或は三日月の眉だとか種々なる形容詞が用ゐられてゐる。『眉は仲秋の新月の赤石の浦に出るに似たり』と云ふやうな恐ろしく長い形容詞を用ゐてゐる者すらある。とにかく眉といふものは非常に人の注意を喚び起す點である事は是でも分明らうと思ふ。然るに此眉毛と云ふものは生れつきであつて決して加巧的には動かす事が出來ないものかと云ふに然では無いのである。吾々の見る所では此眉毛が顔面のうちでも最も加巧的たり得るものであつて、而も最も重要な、或意味に於ては婦人容貌の美醜の源泉とでも云ふべきものであらうかと思はれるのである。卽ち此の眉毛の形狀と云ふものは婦人には限らず、男性に於ても女性に於ても其人の感情生活を最もよく表出するものである。其上その形狀と顔面に於ける位置とは槪して



西川祐信の美人

其人の性質をも云ひ表はすものである。或はその人が聰敏であるとか活達であるとか、或はその人が遅鈍であるとか快活を缺いて居るとか云ふやうな事を想像せしめるものである。無論それ等の推察は實際には當らぬ場合もあるだらうけれども、設令邪推にしろ、誤想にしろ、かゝる想を人に起させる事は免かれないのである。畢竟眉毛の形や位置はその人を讀ませるものだと考へてよからう。

然るにこの眉を作るに方つて、無頓着な剃刀師は其人の面貌の形狀と云ふやうなものには一向之を顧みずに自己の氣に入つたやうな形に剃上て仕舞ふものである。言ひかふれば彼等は眉毛の形ばかりを知つてゐて、眉毛の形に對する顏面全體の形式だとか、眼だの鼻だのなどの狀態を考へないのである。其故顏の面積の餘程大きな婦人の眉毛を所謂新月形の細きものに剃上て仕舞ふ事があるのだ。か樣な場合にはその婦人の面貌は餘程間の拔けたものとなつて仕舞ふ。つまり眉毛の形を最もよくするのには眉毛の形狀に對する顏全體の形式と他の顏面上の特徵とを合せて考へることが必要であらうと思ふ。次に又眉毛のお作をする時に多少は眉毛の位置を動搖せしめる事が出來る事を忘れてはならぬ。此場合には前にも言た通に鋭敏だとか遅鈍だとかの表出はしを頗る著るしくなす者である。雙方の眉毛の形をどういふ樣な位置に立たせるかと云ふ事などは眉毛のお作りをする時には多少注意して置くべき事であらう。尚これ等の事は他の機會を得て言ふ事にしやうと思ふが、但最後に記臆すべきことは容貌の修飾と云ふ事は他の惡感を避けやうとする努力の發現であると同時に、或意味に於てはその人の性格に對する判斷の根據を投出してゐるものなることの一事である。


勝川派

笑のさま〴〵

小金井喜美子

笑の種類もいろ〳〵でございまして、一寸漢文の熟字から拾ひ出しても、例へば、微笑、哄笑、憫笑、冷笑苦笑などありまして、まだ此外にも熟字としては澤山でございませう。

其中で、女子に適切なのは微笑でございませう、微笑は女子の愛嬌ともなり、人の心を引きつける好い笑ひでございます。

哄笑は、ハハアと大聲を出して笑ふことで、罪も毒もない無邪氣な笑ひ方です、これも悦喜を表はす笑いでございます。

憫笑は、笑ふと云ふ字があつても、憫んで笑ふので普通の笑ひとは少し意味が異ひます。

冷笑は、善くない笑です、人から冷笑されるやうでも不可せん、またむやみに人を冷笑するのも不可せん人を輕蔑することになります、心掛の良い女子には餘り關係のない笑です。

苦笑は、失策した時とか、心に苦しい事のある時とかの笑ひ方で、餘り他に見せて好い笑ではありませぬ不平、不滿、苦痛に伴ふからでございます。

以上の中、憫笑、冷笑、苦笑などは不可せんが、凡そ無邪氣に笑ふのは、生理的にも宜しいさうでございます、併し笑ふにも、時と、場所とがございまして、むやみに笑ふべきものではございません。

女學生などが、敎室の中でむやみに笑ふのは不可ません、一寸他が誤讀をしたからとて笑ふ、分り切つたことを間違へたからとて笑ふ、質問したからとて笑ふ

其等は善くないことです、他の誤りや、困難を他から笑ふのは決して善いことではございません。

又、他人のお宅へ參りまして、次の室や、奧の室で笑聲のするのは、自分のことを笑つて居るのではないかと、何となく氣に掛るものですから、成るべく來客のある時は、家の者はむやみに笑はないことです、失禮に當ることがございます。

人が道を歩いてゐて躓いたとか、倒れたとかすると能く笑ふのが日本人の癖でございますが、西洋人ならば決して笑ひません、公德が缺けてゐると云つて、笑ふのを排斥します。

それで、女には毎時も微笑が伴ふて居れば結構なんでございます、新年の心持なども、此微笑を以て迎へたいと思ひます。

社會の上中下の階級を通じて、新年を迎へた時の心持は、大いなる歡喜が溢れてゐるので、何とも形容の出來ない、はれ〴〵した心になるものでございます。我等は何時としらずに成人して來て、今日から此世に生れたといふやうな心を持つ時はないのでありますが新年だけは不思議に心が改まつて、今日から世に生れたといふやうな新しい思想が起ります。

單に年と云ふやうな空漠なものでなく、纏つた或るものを得たやうにも思はれ、一家擧つて祝福の意を表はし、互に欣び合ふので、いつ斯んな心が入つたかと思はれるのでございます。

此の新しい世界へ轉じたやうな心は、人間全體の心から心に移つて行つて、世の中が何となく樂しく見えるのでございます、その美しい心は、必ず微笑となつて表へあらはれるのでございます。

その微笑は極めて自然なもので、女子には殊に永遠の性情を優美ならしむるものです、いつも新年を迎へたやうな心持で、其微笑の消えざるやうに致したならば其れに上こす幸福はないのでございます。

笑ふ門には福來ると云ふのも、然う云ふ意味を言つた諺でございませう、笑ふべからざるに笑ふことは宜しくありませんが、嬉しい時に微笑を含むのは、人間の自然の感情でございますから、此は誠に善いことでございます。

乘馬と樂燒

江木榮子

◎馬に乘て樂しむ

私が乘馬の趣味を知るやうになつたのは、未だ日も淺いことで、お話するほどの經驗もございませんが、馬に乘るやうになつた動機は昨年七月のことでございましたが、信州輕井澤の別莊に居りました時、或る日二三の方々と碓氷峠に參りました。私は俥でしたが、綱引、後押と云ふ仕掛で行きますると、他のお方は馬に乘つて、ずん〳〵と樂さうに登山られるのを見まして、しみ〴〵乘馬が羨しくなつたのでございます。

それが動機で、何でも馬に乘つて見やうと思ひまして、幸ひ矢來の酒井恭次郎樣も別莊に入らつしやいましたから、毎日〳〵朝から晩まで、夢中になつて馬に乘る方法を其お方に教へて頂きました、ほんとうは一ヶ年も稽古しなければならないのでございますが、つめて稽古したものでございますから、僅か二ヶ月の間に何うやら馬に乘ることが出來たのでございます。

迚も市中を乘り廻すなどいふことは困難でございますから、私のは只、夏の二ヶ月を輕井澤の別莊で乘馬するのが樂みなんでございます、乘りかけて見るとなか〳〵面白くて止められないのでございます、險しい山道とか、溪谷とか、迚も俥などで行けない場所でも乘馬ならば平氣で參れます、途中草花を摘んだり、絕景を稱美したり、興味はなか〳〵多うございます。男子方のやうに走らせる事は無論出來ませんが、それでも能く注意してゐないと危險なことがございます。

馬だつて、生物ですから、多少情を解して居りますので、始めの人が乘ると思ふと、なか〳〵馬鹿にして歩かないものです。それを馬丁が人參葉などを前に見せながら、歩かせては、稽古するのでございます、何んな方でも、始めは二三度も廐屋に連れて行かれるさうでございますが、私は幸いに未だ一度もそんなことがございませんでした。

昨年の大洪水の時に、永坂石埭先生などゝ御一緒に乘馬で、別莊周圍の侵水豫防の指揮をいたしましたが其時石埭先生お作の詩がございます。

追風鞭影紫絲硏　不許碧高列水仙
三十六鱗空潑潑　五花躍出巨濤前

私の次韶でございますか、お耻しい作ですがお目にかけませう。

幽花香散露光妍　來在山中未羨仙
一路忘機行緩轡　西郊秋色馬蹄前

◎卽席の樂燒

樂燒も面白いものでございます、御承知でもございませうが、和歌で有名な京都の蓮月尼は、自分で茶器を造つて、それに自作の和歌を彫りつけて樂んで居たと云ふ話でございますが、此文壇に關係のある婦人方でも、自分のお作を彫りつけるとか、燒きつけるとかなされたら、靜で好い娛樂のやうに思ひます。

茶器を自分で造るのは一寸厄介でせうから、素燒の物を求めて、それに和歌なり、俳句なりを自記して、藥をつけて燒くのでございますが、卽席に拵へるには西洋竈のやうなものがあれば、簡單に燒けます、一時間とたゝぬうちに出來上るのでございますから、卽席の遊戲にも、なか〳〵座興があつて、且上品な娛樂でございます。

一年をみな今日の日の心地して
のどかに世をば過してしかな

と、伊藤仁齋先生も歌はれたやうに、お正月の遊戲は、樂燒のやうな靜かな高尙な遊戲でもして、心を平和に保ちたいものでございます。

（記者曰、本號口繪に掲げました夫人馬上のお寫眞は新しく撮影になつたものでございます。）

加納子爵の家庭

佐々木好母

讀者は東京府下の大森に、加納子爵家といふ模範的の家庭が御座いますのを、早くから新聞や雜誌で御承知の事と存じますが、實際、彼の樣な御家庭が、今日の樣な時世に當つて、殊に皇室の藩屛と稱せられて居りまする貴族の中に御座いますのは、闇夜に照り輝いて居る白熱燈の樣に、ゆかしい心强い事だと存じます。約六年許りの間、私等は大森に住んで居りましたが、色々の事情から加納子爵家の皆樣と御交際を願ふ樣な事になりましたのです、何か御緣のありました事と見えますが、加納子爵家は私等の心の中には、確に宵の明星の樣に常に明に寫つて居りました。之は私等許りでなく、大森の土地に住んでおいでになり、又住んでおいでになつた方々の、等しく感ずる事であらうと存じます。

◎模範村の大統領

加納子爵家は、上總一の宮の舊藩主の御家柄で御いでになりますが、餘程まだ大森あたりが開けぬ前から大森に卜居なさつて御いでであります、そして其村、（入新井村）の種々なる公共の事業などの後見役の樣な事をなされ、其村の學務委員さへもせられておいでになりました。此入新井村は模範村でありますが、此村の斯樣になつたのも、子爵家の大に與つて御盡力なされた爲であらうと存じます。誠に平和の村の大統領の樣に、子爵は村民から尊敬せられ、丘の上のお宅は白館の樣に人々から思はれて居るのであります。

御當主子爵閣下は嘗て、鹿兒島縣知事として非常に令名ありし御方で、數年間と云ふ御在職中に、確か非常な眼病を餘り職務に御熱心のために得られたと伺つ

て居りますが、其間でさへも御職務をお執りになつたといふ事であります。鹿兒島に行けば今でも加納家は殆ど神樣の樣にも尊敬せられて居るさうです、之を以ても子爵閣下初め皆樣が、彼の地で何の樣に德とせられて居るか、また何の位、好影響を及ぼし、又彼の地の人心に、何の位深い印象を留められて居るかを、推察し得る事と思ひます。

◎信用組合の開祖

其後冠を掛けられて後も、子爵閣下を始め、御家族が國家のため、公共のために盡力して居られる事は、讀者の既に御承知の事と存じます。内務省が諸國に今盛んに、實施せらるる事を希望し、又奬勵して止まぬ彼の「信用組合」は實に加納子爵家によつて、始められたのであります。只今も實行せられて居りますが、此一村民の實物貯金の銀行たる、此信用組合の實に繁雜な事務は、

◎子爵夫人自ら事務掛り

として、從事せられて居るのであります。大概の婦人は一家の主婦たるさへ重荷であると云つて、折々は嘆聲を洩し、不平を云ふ人も居りますのに、子爵家の夫人といふ御身分の方が、自ら家庭を治められた其上に、此樣な事務さへも執られて居るのであります。決して今の華美な所謂上流社會の貴婦人方の樣に、交際社會に出るからと云ひ、慈善事業をやるからと云つて、家を顧みず主婦たるの役目が、十分に盡されて居ない樣なのとは、此子爵夫人のなさる事は全く異つて居ります。御自分の家庭を完全にしてこそ、色々の事業にも盡力なされるのが、よいのであらうと存じます。夫人はお話しによれば、御自分で女中さん達の縫針の稽古までも、御居間に御呼びになつて、敎へてお遣りになるさうであります。

是も一には、お子さん方が大きくなつておいでになるからでもありましやうが、是も皆獨立して、各自の事は各自でなさる樣な習慣が、ついて居られる事からと存じます。お子さんが御自分で靴を掃除なさると、伺つた樣に記憶して居るのは間違でない樣に思ひます

◎御丈夫な御家族

約六年許り大森に居りました間に、子爵家の方が御病氣だと云ふ事は、僅か三度許りの樣に思ひます、一

度は令孃の御一人、二度目は鹿兒島の高等學校に、遊學せられて居る二男の方が盲腸炎肋膜炎を、腸チブスの後に併發なさつて、日に幾度も電報の掛かつて參りし程の危篤にまで陷られし事、第三番目は夫人が何の爲めか、非常に御衰弱なされた事の樣に存じて居ります、此の樣な僅の場合の外は何時も健に、にこやかにして居られて、是も子爵閣下が種々なる御職務の外に彼の大日本體育會々長として御自分の御家族よりして、其模範を示されて居る事と思ひます。體育の事にも皆御熱心であつて、子爵閣下等を相談役として、立てられてある、

◎入新井村有志運動場

は、始めて閣下等の御發起によつて立ち、今は其會員中より選ばれたる委員の自治に任されてありますが御主人以下御家族は皆此會の會員であられます。此會は青年計りの運動場ではなく、老若男女を問はず此會員となれるのであります。春秋二季運動會があつて此村の交際の機關の樣になつて居りますが、此時は、會員以外の村の小學生も來る、そして、時には御隱居さんが提灯行列の賞に入られる事さへもあります。

大きくは日本、小くしては一村の中に於ても、子爵家は體育を奬勵せらるゝ事に盡力せられて居り、子爵家の高風は青年子女の心をも感化し、此村に此運動場ある事は、非常な良感化を及ぼして居ります。

◎謙遜なる御家庭

子爵家を訪問なされた方は、皆其取次に出たる女中の、謙遜にして明晰なる言語態度と、御主人以下の極めて平民的で、極く〳〵謙遜においでの事を感じ、皆驚き敬ひ、又極めて訪問者も快く滿足に感じ、うれしき事と思ひます。

度々御主人が停車場にて、又途中で、あまり立派な風をもして居ぬ人や、又制服の巡査などに横柄な言葉などを、成上りの人の樣に用ひられず、極めて謹嚴な態度で丁寧に話して居られるのを、お見受けいたしました。御主人計りでなく、上よりして御實行になられますから、女中、僕までも之に習つて、しとやかであり、謙遜なる態度を以て人を迎へる樣に習慣がついて居る樣に感じます。

◎平和なる御家庭

嘗て、子爵の御言葉として、「娘や女中の教育は長男に任せてあります」と云ふのを伺つた樣に思ひますが此に依つても何の位、御子息を信じて居られるかが、推せられましやう。此樣に、親は子を信じ、子は親を敬し、上は下を愛し下は上に懷づく、と云ふ御樣子でありますから、他の家庭に見られる樣な、聞く丈けでも不愉快な事は申す迄もなく、惡口にも伺つた事はありません。

衣服なども、夫人自ら率先せられて、餘程前より、御令孃方には、所謂加納式の改良服を、近年令孃方が成人せらるゝ迄は、用ひて居られました。そして御子さん方は、毎年一度二組に分れて、各地方に見學旅行を、率先して行はれたのも此御家庭で、令孃ばかりの旅行は其頃の雜誌新聞を飾つた事で、今こそ何でもない、普通の事に思はれますが、其頃としては破天荒の事であつたのです。此樣に凡ての事に進歩主義を執つて居られます。

◎珍しき食堂

近來御普請なさつて洋館が出來ました、その食堂には長いテーブルがあつて、食事の時は來客もすべて一所になつて、子爵閣下の左右の椅子に就き、大皿に盛られたる料理を十分に分配して用ひられ、決して主客の區別がない、此樣な事も日本の家庭としては珍しい事で、客としても非常に溫みを感じ、親しみを增し、立派な仕出しの料理よりも、何增倍、快く頂戴の出來る事でありましやう。

一つとして、快くない事はないのであります。

◎春秋二度の野遊會

子爵家では、春秋二度、其庭園の芝生の上で園遊會をお開きになります、そして其日の御馳走は大抵、そば、おでん、だんご、酒等であつて、此村の農夫及名譽職、先生、驛長及驛夫までもお招ぎになつて、之を野遊會と子爵自ら稱せられて、樂しく春と秋の或二日の午後を送り、且つ、送らせる樣な例にしてをられます。

一日は皇后陛下の、行啓紀念のために開かれます。

◎毎土曜の談話會

此御家庭では「家人の心得」と云ふものがあつて、時々婢僕に讀んでお聞かせになり、其中に御家族各自

の責任と、義務とが書かれてあり、日を定めて洗濯をなさり、女中等の匿しだてをする、習慣をつけぬ樣に日をきめて茶碗などの數を、改める定めになつて居りすべての事規則正しく出來て居り、子爵夫人始め進んで、仕事をせられます、そして夫人は皆の躾をよく正直に、働く樣に御敎育なさつて居ります。

毎土曜の夜は六時から、大概は定めの談話會を開き感じた事を、御主人始め、お次ぎの者も致す事になつてゐるのであります。之がまたお互に非常に參考になる事が多い、と夫人は申されました。此集會の如きは何處の家庭でも行はれる簡易な、修養兼意志疏通法であつて、此樣な事をして居れば、父の顏を幾日も見ないと云ふ樣な事はなく、各自の室ばかりに居て、自分勝手の事ばかりして居たり、又家族同志の意志の疏通を缺く爲めに、思はぬ不幸を來し、感情にも身體にも極めて變化の多い、青年期の子女を善良なる方向に導く事に氣がつかず、自分の子女の心持さへも知らず、顏を合はせる許りで、みす〳〵同じ家に居ながら、其危險に陷り行くのをも救ふ事が出來ぬ樣になる事をも未發に防ぐ事が出來ると思ひます。

また、前に言ひ遺しましたが、毎年村の小學校の基本財産として、各自の農作物、製作物の展覽會、共進會の樣な物を開いて、其發達を圖る傍ら其賣上代を寄附する時がありますが、此時には、子爵夫人及令孃等も、自ら製せられた物を出品なされます。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

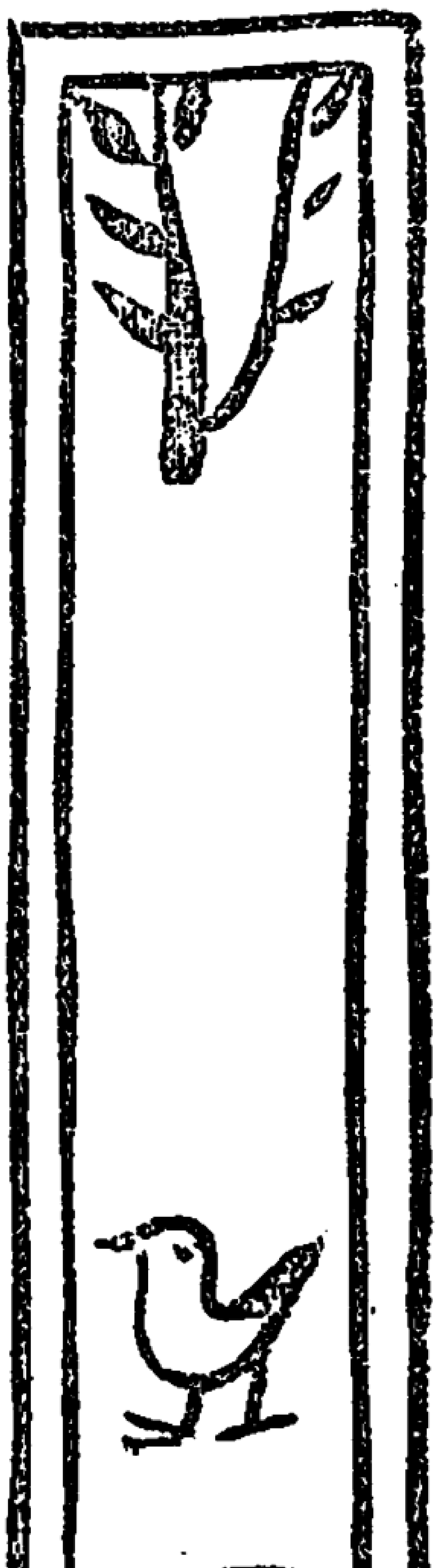
只今は子爵令嗣は既に、御結婚なされて居られ、且同居なされて居りますが、姑嫁の間は勿論、他の見る眼も羨しい位に、益々平穩に愈々榮えられつゝあるのであります。

健康と平和を以て、子爵の家庭は實に充實した模範を示されてゐます。

此後とも、此最も模範的な御家庭が、日本のために社會のため、新郎新婦のために、模範として益々健全に御繁榮御發達あらん事を祈ります。

本誌口繪にある寫眞は、子爵の御家族であります、參照して御覽下さい。

奧様ぶり



山の女

山脇房子夫人

始めて御目にかゝつたのは夏でありました、水色の吾妻すだれに、午後の涼しい風が動いて廣い應接間には置時計の音がはつきりと聞かれるのみ、と其すだれのかげから現れた夫人の星の樣なお瞳は、何より先きにハツとばかり夫人の全部を輝かせて了つたのであります。

お言葉もはき〳〵と齒切れの好い、一寸話の合間合間に繪團扇を斜に其の頭の方を左手でおさへて、じつと相手をおみつめなさるのは、夫人の最もお美しい癖で御座いませんか、どんな問題を持つて行つても必ずお話下さるのは殊に訪問記者のうれしく感ずるところです。

江木榮子夫人

鼠納戸の紋羽二重の二つ重ねに、葡萄地に千輪菊の裾模樣を散した縮緬のお被布、ゆたかた落した襟のあたり、又なく艶やかにお髪はいつも垂れ髮のお品よく、「さあ あなた、ずつとこちらへお寒いでは御座いませんか、ほんにまあ今日は御ゆるりなさいませよ」とお愛嬌こぼるゝばかり「いえもう、子供が御座いませんので、此通り人形を負ふたり、抱たりして樂しんで居ります」と、夫人の人形を愛される事は一通りや二通りのものでは無い、現にお人形さんだつての可愛らしい表情其まゝを寫眞に寫されたのも幾通りかある、全體に人に慕はるゝおたち、江戸の水で產湯を使つた某、某夫人等の美が繊細の美なれば、江木夫人の美は正に豐滿の美ともいふべきであらう、お生れは佐賀にておはすとか。

故三好中將未亡人

梅子の方と申して一中節の御名人と言ふので伺たつのは夏の初め、通された十疊間の好みにもそれと、現れた夫人はその眉のあとつやつやと、根下りの丸髷きはめて澁く見せたところ一風かはつた夫人とうなづかれたり。赤縞のネルのお一重を裾長に召してそつと靑葉の風をいとふての黃八丈の書生羽織、右手に銀の長管のおきせる、左の方に凝つた曲物のお煙草入れ、一口二口吸ふが早いかポンと拂つて、又つめかへる、こちらの問ひに對しては、極めて靜かに聞いておらつしやつて、ニツコリと先づ笑つてさて、おもむろに答へられる。

松崎悅子夫人

天然のハイカラに癖付いたお髪を根高の束髪にあげて襟のあたりで二三本波うたせた御樣子のよさ、お召のお單物にわざと肌襦袢をさけて、浮模樣の夏帶を、これも無雜作に結ばれ、透きとほる樣な素足に、紅緒のお草履ばき「ほんとにまあよくいらつしつて下さいましたこと、けれどもろく〳〵に、お話も無くつて――此度は唯ほんとにお遊びにおいで下さいましよ」とお玄關

までの御見送りにも、お愛想を忘れ給はぬ此奥樣の印象も深い。

芳賀博士夫人

「まあ御覧の通りの子供障屋、とんだ所へおいで下さいましてお氣の毒樣で御座います、ほんとうに斯うして毎日ガン〳〵と日を送つて居りますのが精一パイなんで御座いまして、あなた家庭を育兒がかうのと、そんな事を考へて居るどころでは御座いませんのですもの、オホヽヽ、十人の子供がそれでもどうにか皆一人前になりましたら、其時こそ經驗談でも育兒談でも致す番になりませうが、唯今の所はほんとの修業中で、あなた……まア召しあがれな、斯うして置きますとみんななくなつて了ひます」赤ちやんをお膝に置いて、ゆすぶりながら元氣よくお笑ひなさるお話ぶり、今も耳に聞えるやうで……。

目賀田逸子夫人

朝鮮とさへ言へば、誰方でも私をお引合ひにお出しなさる、私などの朝鮮に居つたのは、もうずつと以前の事で、私よりあとで歸朝した方がいくらもあるのに、なぜそなたへいらつしやいませんでせう、私が無遠慮で何んでもお話するものだから、皆樣聞き宜いと見えますね」此お言葉の通り、誠にお話のうかゞひ宜い奥樣、竹を割つた樣なのは此夫人の御氣象でありませうかどこまでも御親切氣が有つて、其御氣象にひきつけられて了ひます。

遠山稻子夫人

「私が遠山稻で御座います」と極めて御謙遜なる挨拶に、まづ其お人がらがお慕しい、おうちわを御用ひなさるにも、ゆるやかに風を御手に受けて居らるゝのみ、稍お頭を右にかしげて和歌の道は……」とお話し遊ばす所、いかにも〳〵わがくにの和歌心其まゝのお姿ゝ、つく〴〵胸に忘れ得ぬ印象をきざまれました。

おいとまの時、玄關で知らぬ間にこちらの包を取つてお手渡しして下さつた時には、たゞ夢の樣に頂きましたが、外に出てからも、いつまでも〳〵夫人の御心はなつかしく、私の胸に匂つたのでありました。

小保久琴子夫人

「さう言ふ樣で三度夫は入牢の身となりました、それでもう壺は公然と出來ぬ事、夜半人のねしづまつてから、そつと蠟燭に灯をともしまして夫にやる手紙を書いたり、又夫から來る手紙を讀んだり致しましたので、此通り近眼になりました……實際過ぎて來て見ますれば、左程でもない樣に思はれますが、其當時であつたら、ずゐぶんとつらかつたので御座いますよ」眼鏡を取つてそつと拭はれた御涙、女丈夫として如何にも氣高く代議士の夫人として、しつかりとした印象をあたへられたのは當然の事でありました。

森博士夫人

鷗外森林太郎先生の令夫人森しげ女樣といへば、短篇の小説もお書き遊ばす聰明な方、濃いお髪を束髪に、やゝ亂れたところを金の三枚櫛で止めて、太い眉毛に、高いお鼻、冒し難い品格を具へられて、見るからに端麗、星のやうな令夫人と思ひました。

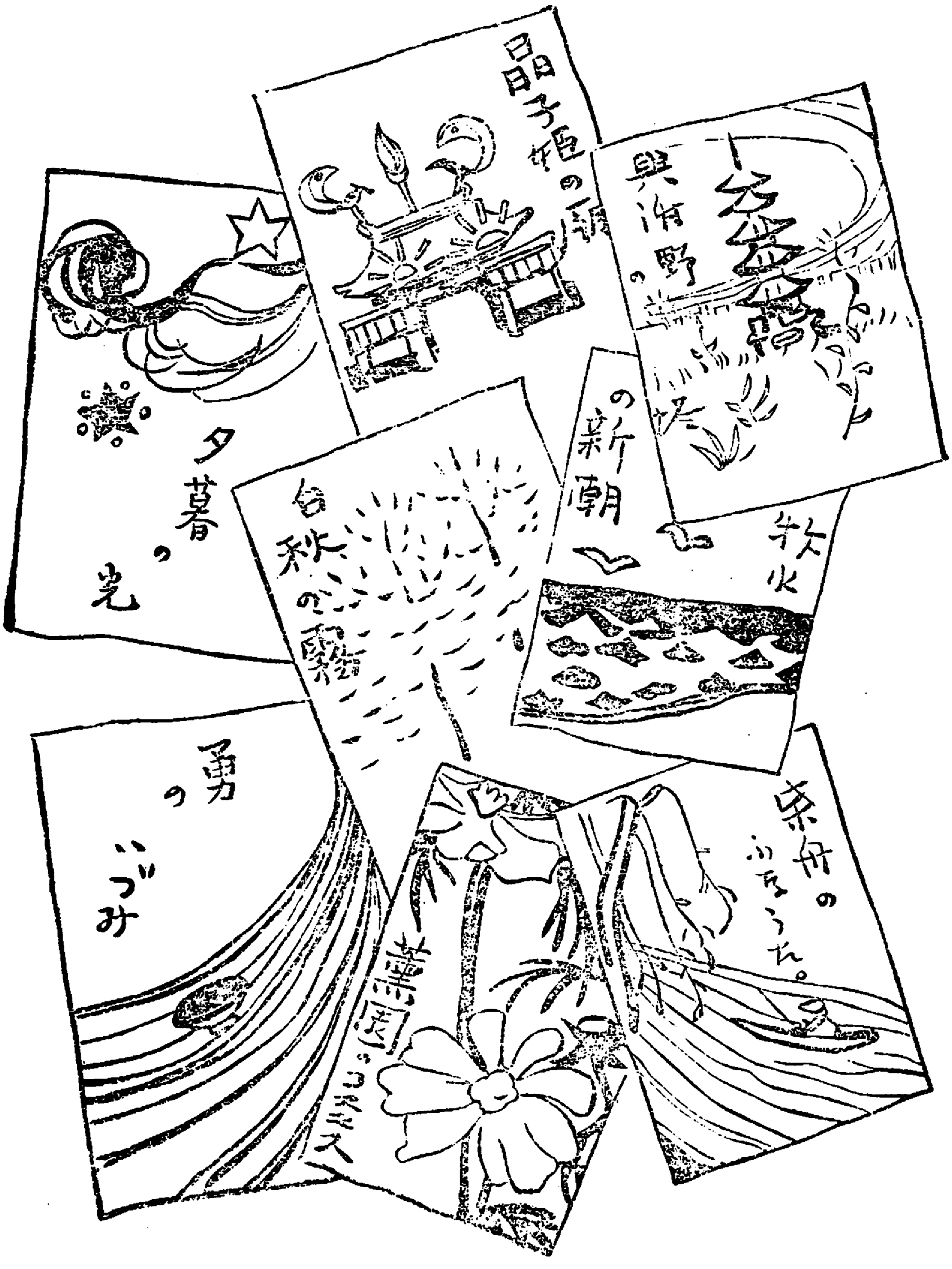
何かとお伺ひいたして『私なんかお答するところでは御座いません、ほんとに何かも出來ませんで御座いますもの』と御謙遜あそばす。

博士と御同席の時には、能く面白いお話を遊ばすやうに洩れ聞きましたが、不幸にして未だ博士と御一緒のお席でお目にかゝつことは御座いません、只美しい夫人のお姿のみを胸に止めました。

其他、彼の奥樣、此の奥樣と、敬慕すべき令夫人は澤山に御座いますが、未だ世の中に出て日の淺い私、追々皆樣方にお目にかゝる機會も出來ましたら、又其御消息をお洩らしすることもございませう。

繪葉書

歌壇八景



萬代恒志



婦人產前產後
子宮病血の道の妙薬
喜谷
實母散
東京市京橋區中橋大鋸町
本家　喜谷市郎右衛門

らい病根治新劑

▲藥名…レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿状菌の媒介による傳染症たるを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅し病根を斷ち一生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共
壹劑分五圓拾錢
特別製分拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは鮮なし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢
特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

記臆増進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボワー氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし劃代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智記力活潑となり記臆力大に増進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効あり如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること譬て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢三週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全快通に

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を適用せば半年以上の月經閉止及血塊にても必ず安全に流經す且つび月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し惡血毒血一を多年滯りの古血及掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を談み近時續々怪しき無効なる類似僞藥類はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日にて必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患びある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ本館へは山の如き全治者の感謝状續々及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を添附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分半分五圓拾六劑分五圓特殊拾貳劑分拾圓(患部の面積大なる人は大劑を求むるを)拾錢つゝに送金即刻小包郵送す(郵券代用割増し德川とす)

以上五藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

覆面野史著

現代男女の研究

目録ノ一部（スタイルの美◉婦人の眼に六種あり◉今日の女學生、乕石に金箔◉薔薇の花の居◉戀愛の成立は結婚◉婦人は愛憎に溺れ易し

たつた百部丈しかないのですから在るだけ前記の特價で御願しますす貰後れてグズ〳〵云はない樣にして頂戴

定價四十五錢
特價三十錢（稅共）

本郷區春木町
三丁目十五番地
菁莪堂書店
振替口座東京壹壹〇六番

男女 ちゞれ毛 くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的に矯正黒化し目良き光澤の出る最新發見奇液を郵券申込者に誓て美髪に治して差上げますから教授し種々と手を盡してお直りにならない御方は御遠慮なく御申込あれ詳細記載せる説明書を無料進呈致します

東京市麻布區村木町
岩阪澄子

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年「リウマチス」病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候御遠慮なく申込あれ

東京府大森
停車場東大畑
河奈とめ女

創作

散文

○屠蘇白散の記（天）

小松島　吉田紫花

十二月三十日。矢張醫者であつた曾祖父の代からの例で、私の家では毎年此の日に元日に汲み交す屠蘇を村内の或一部(三十戸程)へ配り贈る例になつてゐる。

父は未明から、肉桂、山椒、白朮など種々のものを小さくきざんで調合してゐたが、もう出來上つて下包をして下すつたので、私はそれを上包して上書をせねばならぬ、半紙で丁寧に包んで眞中へ楷書で「屠蘇白散」――と書いて、肩のところへ紅で「壽」の字を行書に、それに捺印するのである。

何といつても明日が大晦日といふ今日、殊には主婦の身の迎春の用意に何くれと心忙しい、行書でチョッチョと書き飛して置かうかなど思つたけれど、之も例かはらぬ我年中行事、送年の務の一つであれば神妙に書くべきであると思ひ直して襷をはづして兎も角も楷書で漸く書き終へた、私は今年で之を十三年書いて來たのである、其間たうとう習字は上達せずにすんだ、つく〴〵眺めて、アヽ終に下手であつたと思つたけれども今はもう字のまづい事などさのみ愁いとも思はぬが初めてこれを書かされた時には、どうしても他家へ出す樣なのが書けないで、それは十歳の年の矢張り今日であつたが、私は庭の飛石の上て一人べに蜜柑の皮をむいては頬張り〳〵してゐると、母が呼ぶので行つてみると、之をちと書てお見、四年生になつたらもうこの位書けるだらうといつて坐らされた、矢張り蜜柑握つてゐた、大事の物を書くのに汁がつくといふので半分程なのをとり上げられて筆を持たされた、然し屠

蘇白散などあまり馴染のない字計りなので四年生の私はお清書より六ヶ敷いと思つた。

力み返つて漸く一枚書き上げたが丸で字が上の方につゞまつて仕舞つて、つんつるてんにつり上つてたので兄がクス〱笑ふ、とても私には駄目だ「わたし、よう書かん」とかぶとをぬぎかけても、マアも一枚、あまり力みすぎるからだと今度は兄が字配りを定めて呉れた、が字配が出來たかはりに泣いてる樣なちゞけた字が一字一字に獨立して仕舞つて拾つて來なけりや讀めぬ、どうしても滿足なのが書けんので思はず涙がぽた〱落ちた、泣く事があるものかと母に慰められて、それならもう今年は兄樣に書いて貰ふから來年は上手にお書きといふので泣き汚した顏を洗ひに又蜜柑持つて走つたのであつた、翌年には早もう上手だつて褒られる程になつた、以來それが私の擔任になつたのである。

然しもう少しは上手に書く樣になつた十五の暮には母は世に亡かつた、二十の時には兄も亡かつた。

いつの年もこれを書くたび〱に私は其年の運命にくらべて、去年は斯うであつたが、來年は？と思はぬ時はない、今も壽の字を書くべく紅を解きつゝ又思ふともなくアヽ來年の今日はどんな運命の下に伏し轉んでゐるであらうと思つた、然しそれはあまり榮耀すぎると思ふ、未來は未來で又來るがまゝに受けて行くまでだ、それを思ひ煩うのは、次に出て來る幻燈の畵を裏へまはつて見に行く愚に似てゐる、其の間には今の美しい繪が消えてすむではないか。

とも角も饑寒の苦痛に泣かざるまでの中に生きて、七十に近い父の手になつた屠蘇に、紅筆で文字書き添へて人を壽く今の我が幸、儚き人生の歷史としては樂しい頁とせねばならぬ、昨の悲歎は只もう美しい歷史としてその愁の卷に納めて今日の淚の種にはすまい。

二十三年のわが春は、ふけてはあれど、この壽の字の紅はわが眞心の色である、床に生けてある南天の實も赤い、が、それよりもまだ〱赤いあかい燃ゆるやうな紅の色よ、壽の字よ、たれもののために色あせるな——。

さきごろ愛兒をうしなひて心は子をおもふ暗に迷ひながら筆縊みだれずおほふべき自己の秘密をあばいてきたなき戀をさへ語る群の中にひとり冷靜なる客觀の文を作る、物みな燒かざれば止まざらんとする長曾我部菊子の火の如き文と兩々相俟て双絕と爲す。

（夜　雨）

○冬がこひ（地）

越後　雅樂子

掃いても掃いても又ぢきに、敷いた樣になり〳〵した木の葉が、昨日の風で落ちつくしたので、急にそこいらが、がらりとした樣で、大きな聲出したら、どこ迄もひゞきさうに思はれる、私は二階へ上つて、今まで葉かげで見えなかつたお寺の御堂の外椽側のてすりや、鐘つき堂の釣鐘などを、珍らしい樣の氣で、しみじみ見た。

下女と下男は、南の畑の桑の枝をしばつた、廣がつてる一株の桑を、すつとすぼめて片手でつかんで、三本ばかりの藁で、くる〳〵と捲いて、しばつて置くのだ。

風が吹くとしばられたまゝ搖れて居る、こうして、長い冬を冷たい雪の下に眠むるのである。（ある日）

暖かい寢床からむつくり起きて、疊をふむと、冷やつとするので床の中で帶しめて居たら、何ですね今つからと叱られた。

細い雨が鋭どくふる、人足三人たのんで庭の植木を圍つて貰ふ、しきみ、椿、泰山木、楓などの大きなものから水仙、夾竹桃などまで、それ〴〵、松枝や、葭でつゝまれて終つた、もうもう來年の春まで逢はれぬのだと思つて、庭ぢうの草花や、植木の小枝などを少しづゝ切つて來て、下の方を絲でくゝつて大きな竹筒にさした。

午後、花壇のカンナや、ダリヤの根を掘つて、うまやの籾ぬかの中にかこつた、夕方雨がはれて、ごた〳〵した樣の灰色の雲のすきまから、七日ばかりの眞白い月がちらちらみえた。（ある日）

家のまはり中で、かこひ板のあるところは板をはめ無い所は葭で編んだ簾でかこつた、かこひ板は雨戸の障子のあるあたりまでの高さなので、其のはめた時の室の中の暗い事、これでよく小さな文字などがみえると思ふ。

今日も亦太陽は、暖かい光りも見せずに西の國へゆかうとする、私は小道を拔けて、田甫の畦に立つた、時々、刺す樣の風が、凋落しきつた田の面に、冷笑の聲を發しては、いづこともなく走つて行く。

南から、北へ亘つて連なつた、名知らぬ山脈、其の一きは高い頂だきには、もう眞白に雪が積つて居た。

あゝ、田畑を埋め、家を埋め、川を埋むる冬はいよ

いよ近づいた、私雪ふらぬ國が戀しい、あの山の向ふの向ふには雪の降らぬ國がある、暖かい國、暖かい國、と繰り返して胸がふるへた。

夜、大きな風が吹いたけれど、板がこひがしてある爲め、障子がそんなにガタ／＼搖れないので、心丈夫な樣な暖かい樣な氣持で、おそくまで讀書した。

（其の翌日）

午後、稻負ひに行く下女について、田甫へ行つてみた、薄赤い、生氣の無い樣の太陽がぼんやり照つて、上つ面ばかり暖かく、眞のひやつこい樣の風が、サラサラと稻をならす、ぼやけて毛並の惡くなつた小猫が、ヨボ／＼と、イナゴを追つて居る。

見渡す限りの、野、山、林、それらは、各々色を持つて居たけれど、決して美しくはなかつた、畦に腰かけて、此の天地の白妙になる日の近づいた事を思ふ。

夏來れば野も山もみどり、冬來れば野も山も眞白になる、此の國に生れて、此の國に二十年の命をのばして來た私は、雪ふらぬ國の冬げしきは想像する事も出來ない、小高い丘の上からでも眺めたら、南の國の野邊の冬げしきは、青いだらうか、赤いだらうか、夜雨さまはむしろ青の一色に歸すと仰つしやつた、けれ共鶉のかくれがなる草は枯れてと書いてある、じやあ、何が青いんだらう、矢張り分らない、私は唯つた一度でいゝ、眞白でない冬げしきを見たいと、つく／″＼思ふ。

下女の負つてる稻が歩るく度にゆれて、イサ、イサ、イサ、といかにもいゝ音がする、いゝ音だね、と云つたが聞えないのか、返事をしなかつた。土まみれの、大根を積んだ、荷車が私達の前を行く、水の中でザブザブッと洗ふと、眞白な美しい大根になるのだと、はがゆい樣の心持で後へついて歸つた。

夜、瞽女が二人とまつた、兩眼ともちつとも見えないのに、さつさと針に絲を通して、紅梅色の前掛の紐を縫けて居る若い方のに、これからどつちへ行くのときくと、上州へといふ、汽車でかいと、いふと、いえ歩るいてといふ、雨の日も風の日も一日中トボ／＼と歩るかねばならぬ日暮らしを辛く思つて居るだらうと思つてきいてみたら、案外呑氣な返事をしたので、驚ろいたけれ共、床に入る前「明日の晩は、どげん家へとめて貰ふやら」と、云つた言葉を寂しく聞いた。

雁木屋根に落ちる木の葉の音かと思つておた音が、

だん／＼大きくなつて、數を增して來て——雨がふつて來たのだつた。

十時半就床。

冬に先だちてこゝちに來るもの霜あり紅葉あり、雪三國峠に積めば狡兎化して白きうさぎとなると聞く、爐を圍んで栗を燒き寒燈の下にあたゝかなる南國の光をおもふ、君よこし路の冬にはたのしからずや。われ等には家族團欒して籠るべき冬の日無し一日白き山も無し、天つねに青くして雲うごかず、簇々たる麥萌えてみどりならざるはたを見ず（夜雨）

前半は私が見た、後半は夜雨が見た、何れも能く書いてある（醉茗）

○夢の佛（地）

夢のをんな

星を捲き落すやうな冬の夜風が、思ひのまゝに吹きまはり暴れちらして、天の一方には雲が低く黑くたれた宵であつた。半ば戶を閉した間口の狹い青物屋の店から洩れて淋しく道に流れる燈火、大根の青い葉にかくれた蜜柑の黃や柿の實の紅いのや、客の無い店の並



（天）風船　本郷　西牧克子

んだ河岸のまちの片側、うらかなしい冬の心持ちがすべての物に溢れてゐる。つめたい風がうしろから吹きまくつて行つた。

歸りゆく家もある。安らかに眠るべき床もあるに、何故に持つ放浪の心ぞ、亂れた髮の毛は額に頰にまつはつて搔きあげても〳〵ばら〳〵に落ちる。風に吹かれて町をひとりゆくわが後姿。

ゆきかひ激しき巷に立ちて、悲しみのあふれた瞳に俤の人の姿を求めしは去年、いまはもとむべき人の瞳もない、たづぬるものもなくなつた。過去は容赦なく追懷の一切を黑幕の裡に葬つてしまつたのだ。ひとりわれのみではない追懷の淚なるべき冬の夜、失戀の人の淚が凝つて化つたか、冷たいさむい星の光りが、いためる胸に銳くしみ入る。七人の少女が面合せてうち語るとみた七つ星を、つなぎし絲のきれてか、ひとつ一つにそがいながら離れて冷たくわらふやうな今宵よ星も月も冷たきはひとりのわれのみか、かの君が瞳にも靑い星はさむくうつらふ。冬の悲愁はその胸にもしみ入らふ。七人少女の俤とみしも今は冷たき星に返つたのだもの。暖かに抱くべきゆめも思出も荒れすさむ風にまかしてはたゞさびしい。

闇につかれた心にはたゞ光明が慕はしく、吸はれるやうな足どりで、ともし明るき窓に逐に心も身も歸つて來た。無言にほゝゑみかはす人のみ胸に、ありやなほ七少女がその一人とみし程ヶ谷の子がにこき瞳は。

戀はるゝまゝに戀はしめ、腕をとらるゝまゝに任せし少女も、みづから戀を知らざりし幼なかりし故、かの君がその唇にふれざりしゆゑに、われは彼少女をなつかしむ。

幼き人に年たけてそのかなしみを知らざらしめんためと迫らるゝまゝに、泣いて人より匿れし時、私も淸いをとめであつた。斥けられしわが心を思ひ、わが心を闇におとせし人の手の、あまりに冷酷なりしを思ふ時、血は盡く淚となりて下ると覺えし、それもむかし。程ヶ谷の事をそれとなく、はじめて見しは四月はじめ、白きおもて、髮のやゝ赤きを束ねて、幼げなる姿の、ゆるして頂戴ようちやん、あなたを人より奪つたのは私ぢやない。けつして、

心に叫んで、その姿が消えると共につめたい扉に縋つてひとり泣いた。

その淚をたれか知る、私は優しい處女であつた。

草に咲く花多き程ヶ谷の野の家に、生れしまゝの心の姿を保ちて少女となりし人があつた。花しをるゝ春の曉に生れて露とよばれ、眉の細き、夢を逐ふかの瞳肩のしなやかなるに紅くもえしは唇、小さき乳房の白きにはやくより夢は多かつた。野の花にみるなつかしさをそのまゝの俤を胸に刻みし人があつた。

海邊の町の、はなやかなる、若きうつくしき人。

　初戀の涙は紫の花に宿れるつゆともなるか、わが見し君が野の家に語りしといふ少女が戀のなみだも花ある丘に注がれたであらう。

　初夏の宵であつた。町から野の家に歸るといふ少女を送つて山路傳ひ歩んで行つた。程ヶ谷のまれらなる灯は杳かに見つゝ、花をわけ森を脫けて路をさぐりさぐりゆきゆけど、踏むみちは夏草の茂みにかくされてしまつた。くれなゐの下駄の鼻緒を露に濡らしながらなほもゆくうちに、しらみそめた山の峽から月が出た。

　水色の優しい光りは、野の丘を照らし森をてらし、草に埋もれたみちをてらして、二つの影をいつまでも青草の野に落して居た。

　　ゆめなりし、消えにし戀の
　歌の譜をいまはたぞひく
　いなづまの天にひらめく
　たまゆらのひかりのごとく
　あらはれていつかかくれし
　おもかげよ、ゆめのまぼろし。

いま別れゆく少女の情すくなきを怨みながらも、睫毛に餘る涙を見ては流石に心も動いたといふ、深綠のあぶら流るゝ夏の庭の、山茶花のこぶ／＼した幹には蟬が啼いてゐた。

　つうちやん僕はもう來ない、お前と逢ふ日もないのだ、大きくなつたらおまへはわすれてしまふだらうけれど、僕はおまへを忘れない、蟬のなく日に這麼こと云つてわかれた人があつたと夏が來たら思出してくれ、覺えておゝき、つうちやん、けふかぎりにおまへと二人はひとりづゝになつてしまふのだ。

人は云つたといふ。山をいでいづちゆくらむ秋の水、とみし俤の若き子をおもひみしは此時であつたといふわかれ來て夜はともしの蔭によつた、まざ／＼と浮びくる面影よ、小さき體を胸にあてゝ泣く程の情は更に無かつたといふけれど、愼ましげなりし髮のかたち、夢みるやうなる瞳のゆくへ、追ひゆくさまは闇にも墜ちやう、遂に孤獨の世なのだつた。

戀には流しつくせしわが涙も、とこしへに入より去りし少女のために注がれる。

すべての夢に追はれて現實に入つた人もわれも、さめて煩ひ多き身にかへれば、程ヶ谷の子の戀も、蔭の人なりしわが戀も、淡いまぼろしにすぎなかつた。夢のやうにかくれ去りし係の子の戀は、消えても、いまなほ、その瞳のみ胸にのこると人はいふ。

賤の苧環くりかへしくりかへす女心もさることながら、もはや醒めたまへ、君が戀の美しかりしことも、君が涙の清かりしことももはや知り悉した、更に新しき世に立ちて、新しき文字に生きやうとするには、今こそ覺むべき時、純情は尊むべし、而かも情のみに生きる能はざる人間の世界を見たまへ(辭若)

○秋の日記より　(地)

枯葭

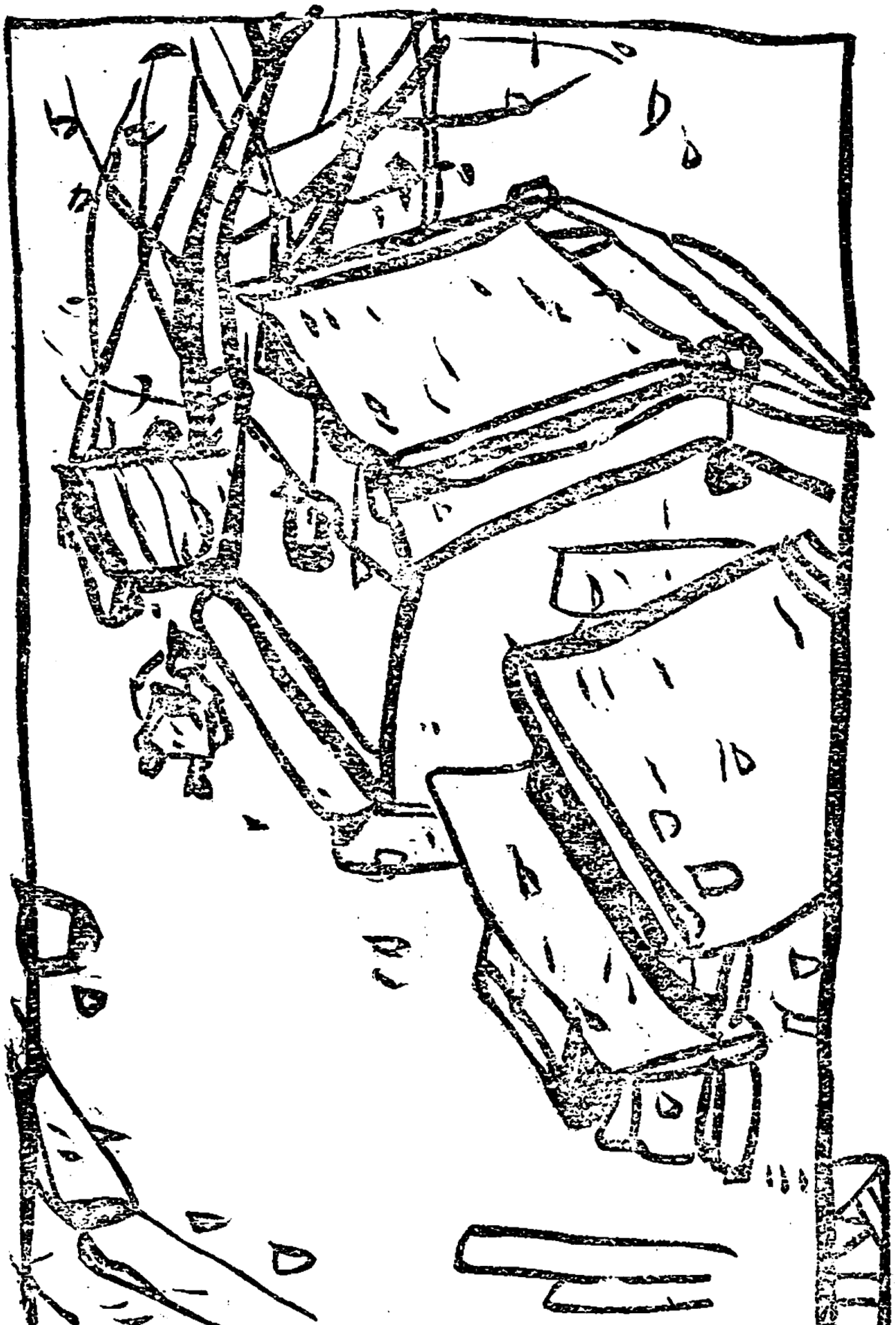
いつ聞いても必ず淋しさか懷しさを感じさせる桐の葉の散る音に、今更氣がついたのは黑い實と枇杷色のふつさりとした、これから冬を越さうといふ新芽とである。何のために植ゑたのか、この學校の庭には桐の木ばかり六本ある、それが半落葉して目立つてきた、新らしいものと殘つてゐる古い實と、その間からすぐ傍にまで迫つてゐる山の紅葉を見せてきた。そこで幾つともなく飛んでゐる赤蜻蛉が、少し西にまはつた澄みきつた空の日に映えて、月の映る水のやうに光る。

風もろくにない靜な日だ、誰か山の上で見おろしてゐるか知れないけれど、三坪ばかりの處へ敷いてある莚の上で、無口な叔父と二人で蟲干した本の部類分けをしてゐると、脊中がふくれるやうなあたたかさに手も顔も汗ばんできた。青いのや黃なのや紫蘇の樣な色の表紙のやおもに和綴ぢのもう標題箋が剝げて何だかわからないのを、中など繙げて見てゐるのだからなかなかやりきれない、そのうち前のいつも小使代りにたのむ○○さんが店から出てきて手傳つてくれる。通りかかつた△△さんも立ちどまつて「ああ懷しいのがあらあ、わしらが讀んだのはこれだつた」なんて云ひながら單語篇や國史略を手にとつて見てゐる。柵の外から「夜店がはじまりましたね」だの「土用干ぢやない秋干になりましたね」などと言葉をかけながら、皆十何年葬つておいた學問の骸を見るやうな眼をして見ながら通る。○○さんが「小さい袋になるから新聞紙より安いけれど要らないのは賣つておくんなさんし」といふのを「まあとつておきませう」と一冊のこらず大きな箱へつめてしまつた。叔父さんだつて以前の校長が使つ

たまた今日まで見たことはない本ばかり、これから後何時又この世の風にさらされるのだらうか、私は二度と見たくない。やう〳〵冷い風がどこからともなく吹いてきて塗りあげてから二ケ月も空であつたちんまりした藏の白壁にも屋根にも夕日は殘つてゐない、二人で荷つて來るさきに私は新しい藏の前に行つて重い大扉を明けて自分もあの本と〻もに入るのであつたらと思つた。

感強い、そしてフレツシユな感じを味はせる。何處迄も讀者をして自分の酸性に醱化しなければおかない威力ある筆つきが嬉しい。あらゆる醱酵素の洗禮を受けた現代人の胸には、もう弱い反應をうけつけない。自分はこの君の將來に甚だ多く囑目する（白羊）

此君の文章の缺點は乾いてゐることでせう、濕ひに乏しいので？



（地）私の村　赤坂　鈴木のぶ子

何を書いても考へは相當に持つてゐるが、さて胸に泌みるやうな情緒に乏しい（評者）

○黒烟（八）

柴井やよ

やるせない日は淺草へも行つた。好んで賑やかな町を通つてかんざしも買つた。活動寫眞も見た。戀人のもとへ嫁ぐ花やかな人と障壁を隔てゝ語り合つたのである。然しそれは畢竟映畫であつた。暗い心に映る華や

かな影に外ならない。消えた後は依然やるせない悩みのゆるゝのみである。

やるせないまゝに今夜は東京を去らう。東京を去つてあのうちに、苦しみに行かう。自由な自分の內を棄てゝ苦しみに他人の內に行く――莫迦なはなしだ。やめても宜い。やめようか。常識ではつまらない事でもつまらないこともまた面白いではないか。好んで苦しみ、好んで惱み、好んで嗤ふ。私は全くいぢけものだもの。

「芝公園の杉街道はうつろな光線の中にぼんやりつッたつて貴女を待つてゝよ。お別れに行かなくちやあ」と友はひやかした。「どうしてそれどころか、うちは大掃除で天手古舞なの」私は淋しく笑つて急いで內へ歸つた。手拭かぶつてたすきをかけて、ほこりの中にばたく〳〵働いて、煤も拂らつた。床の下も掃いた。いぢけもの相應な仕事ねえと私はほゝ笑んだの。

女に大切な着物でも私にはそんなに大事でない着物と云ふものをこうりにつめて本も入れた。ノートも入れた。「おばさん。今夜」「あゝ放浪の旅でないのが私には悲しかつた。東京はどんな顏して私を送つて吳れるだろうか。あたゝかいはなむけの言葉も、身の安全をも祈つてほしかないけども、何となく氣懸りにならぬでもない。ああ東京に離れて――と思うと何となくかなしい。

悲しかつたが新橋を立つ時は、活々しい銀座街のどよめきもきかなかつた。きゝたくなかつたのである。東京の空氣が私の吸ふ空氣の全部ではないから。見たのは毒蛇の息のやうな煤烟と、絕えず不安さうな旅人のひとみとであつた。

さ程の深みは無いが思つた丈けの氣分はきびく〳〵と出されてゐる文は決していぢけ者のやうでは無い、若しそのシニカルの態度で物事に對して精透な觀察を爲し得る時は即ち一段の進境あるの日であらう、今はあまり主觀に局してゐる、それももとより惡るくはないが、有望なる君の前途の爲めこの癈目をする所以である。（隆川）

断片的に强い印象を與へやうとする作者の文は、此處にも其本領を發揮してゐる（醉者）

自今散文の入賞は三名乃至五六名とす（記者）

佳作

○月の夜と雨の夜

牛込　平塚白百合

月の野路をあるいて露にぬれた足をふくと私は欄干

によつた。

青い清らかな月は欄間のすかしぼりの影を香のしそうな黄疊の上になげて、眼の下の屋根甍が光澤をうるませて光つてゐる。

せまい谷合の地のやうな溫泉町だけ、上へ〳〵と三階も四階も火の華が障子紙をにほはしてはなやかだ。

部室は父も兄もゐなかつた。むせぶやうに月の光がみな切つて物皆が靑い。

玲瓏玉のやうな夜だ!! すぐ前の湯烟はモウ〳〵と湯烟がしめて、その底を湯烟の向ふの火影が折々にじんでくる。今宵は甚句も端歌も聞えない。シンミリとうるほひのある空氣の底を湯川の流が、ダブ〳〵となつてゐる。重い力強い音が一定の間隔をとつて、何かの樂譜をきざんでゆく――。

私は引入れられるともなしに音につれて心の底まで沈默にひたつた。

前の貸本屋のあかるい光線の流れの中に、チラリチラリいろ〳〵の人がひらめいてゆく。

土地藝妓の田舍くさいのや、成金らしい繩のやうな金鎖からませた男、こめかみの靑い學生らしい男、單衣羽織の細肩な女、見るとにはないけれどいろ〳〵の意味を味はせて通つて行く。

町下の方を見ると、光線と湯烟とが混じた乳白色のドンヨリした奥に、あの孤立した癩病町は湯の香を吸つてねむつてゐる。

此處から見る癩病町は朝も夜もきつとなつかしい、そうして美しい町でもあるやうに霧の奥に隔てられてゐる。

ひるは! 心がこう叫んだ。

私はかすかに戰慄して夢からさめたやうに先の日見た醜惡な面ざしの人のより合つてる町を思ひ浮べた。

そうしてヒッタリ目をつむつた。

紫赤色にくづれ掛かつた女の顏、美人の末路なのだ。美の終極なのだ。

再び目をひらいた時には私は二つ青色の星のきらめいてゐる南よりの空をのぞんだ。

月の周圍の雲は黃樺色に光ぐまをとつて、階下の庭の萩の茂みあたりから蟲の音が、靜寂の絲をたぐり出すやう弱く細くふるへてくる。

雨が細々と降つてゐる。

しめつぽい秋雨だ。あはい溫泉の香と、綠をそいで

行く冷たい雨のしぶきが開いた障子窓からは入つてくる。

湯治客をあて込みの清元の師匠がダブ〳〵した身體をあぶなつ氣もなく、細い高下駄にあづけて、弟子宅めぐりに行くらしい。大ざつぱにわざとらしく八の字ふんで、心持裾をつまんでゐる。湯川にそうてとう〳〵貸本屋の屋根にかくれてしまつた。

今日は桐山でも大東館でも望雲館でも障子がヒッタりしまつて、欄干の手ぬぐひが千住邊の獸皮會社の干場を見るやうだ。

果物賣りが今日は桔梗の花を束にして賣りに來た。手にとつて見ると、市で賣るのよりより大きい輪。淺からぬ紫の色をめでゝ私は皆買つた。たつた五錢。

床の女郎花はもう敗殘の淋しい影がたゞよつて、水にふやけた根が異臭をはなつ。

活け終つて女郎花をすてながら庭に下りると、昨日の蟲の音はもうなかつた。萩のこぼれ花が二すじに雨に流れをしつらへて、苔の中に紫の名もしらぬ花がつつましく光つてゐる。

夜に入つて溫度はズーつと下つた。

ネルに單衣をかさねて羽織を着て柱によつてゐると黒い空がだん〳〵下つてくるやうだ。

旅館の火影も湯氣も雨氣にぼかされて、殊更乳色ににじつてゐる。

今日フツと見出した湯畑の湯烟の中に、とびちがつてゐた燕の事を思つた。どんなに肌さむく一夜をあかすだろう、誰かの歌に黒髮を貸そうとうたつたのが非常にうつくしく浮んだ。

こんやはこのまゝ沈默にひたりたい。

甚句も端歌もどうか聞えねばとねがつた。

けれど雨の夜をしめ〴〵とくらす人は少なかつた。

みどり邊からはしやいだ三味の音と太皷の音が沈滯した空氣を擾亂して漂つてくる。

一歩過たば惡達者の名を受けう、うるほひも有る、溫か味も有ると葉舟君の口眞似をしてほめればほめるのだが、うはのそらで書いてるようで、目を瞑つても散文なんかひとりでに出來てよといつた具合だからいけないのだ。（夜雨）

單に惡達者と云つて了ふと誤解があるかも知れぬ、此作者は所謂惡達者でもない、考へ〳〵して書いてある、達者ではない（醉茗）

○釘の音

麻布　まろ木ぶね

朝から溫かみの無い光の無い靑き海原の下の世界の

樣な日である。

まだ秋の始めだと言ふのに、冷えやすき自分はつめたくてならぬ手を懷に入れて、溫ためながら、好むと告げた日、愛に滿つる母樣が、何所からか手折つて下すつた、木犀の薫りみつ室に、ぢつと眼を閉ぢて居た。讀む力も書く力も思ふ力も無い、無意識な心をチックタック時計の音に、そそられるのが、悲しくつてならなかつた。靜に座つてゐるのは苦しくつてならなかつた。

書けとうながす樣にころんでゐる、机の上のペンをひろつて、「新しきみ靈へ」と書いたけれど、淚が走つて來たからよして、たゞやすらかなれと、聲秘めて祈つた。

十五で死んだ千世さんの、葬らるゝ日である、眞白な顏も眞白な體も暗黑な土の中へ、――新しき墓を作つて去る君に今日そゝがるゝ淚は無量であらう。自分の友は、自分が心の中に作る友のレコードは日に〳〵破れて終ふ、悲しいけれど、惜しいけれど。赤いリボンの色のみか知らずに醒めずなつた人が羨しい清らかな少女のままでさきだつて亡くなつた若き兄樣の名を呼びつゝ逝つた。人は惜むけれど、泣くけれど醒めずなつた君は幸多き人である。

柩をかく、人足共が無遠慮に話したり笑ひさわぐのが心苦しかつた。若き少女の長へに醒めぬ眠りは、どんな愛を結んで居るのか、あゝ、微笑失せぬ面影は、めぐりて咽ぶ人々の淚にそむいて。人は皆小さな石を握つて釘を打つ、柩をとづる釘を打ち込むのである、自



（人）　水菜子

青森縣　松尾ちよ子

分はどうかして其れだけは遁れたかつたけれど、さとく小母様に見付られて、さあ千世が喜びますからと石を握らせられた自分は、目を閉ぢて小さな音を二つ立てた、罪知らぬ少女に柩の釘ばかりは決して打すべき物ではないと切に思つた、自分は恐しい罪惡でも犯した樣に強く震へた。病みやすき胸はすでに〳〵烈しい苦を覺えて居た。遠いからと皆とゞめるので、自分は二町ほど送つた限で名殘り多き別れを柩の中の親しき友に告げた。

雲ひくゝたれたるお壹の町を柩は音無く離れて行く。葬送の人は皆默して長く長くつゞいて行く。幾度かうすれる柩の影を涙を拭うて見送つた自分は總べてに深き〳〵思ひ、をめぐらす性となつて來たのである。

この君亦やうやく感傷の時代に入る、順境の人はたやすく詩人たる能はず、且つ都會に住めば接觸すべき自然すくなし、たゞ物にふれ折につけて動き來る情緒のみよく人を誘ひて美しき詩に入らしむ。
知らず、尼寺に入り專念詩をおもはんといひし往日の熱心は未さめざるや、如何に（夜雨）

○杉葉拾ひ

羽前　深山木

去年の春も今年の春も蕨採りにきて、つゝじや藤を根こぎにしていつた山はすぐ下であつた。いつも年下の小さい人とばかりきては、日も射さないやうに見えるこの杉林の方には、なるたけ、ちかづかないやうにしてゐた。が姉とだと思ふと、われから先に立つてはいつた。思つたよりは木の間が空いてゐてそんなでなかつた。

私はなかへすゝみながら、仰向いてみると、高い梢に一筋の蜘蛛の糸がきら〳〵と金色にかゞやいてゐた杉は枯枝をまじへながらも、みな青々として、いまが一番生氣のある時のやうに思はれた。

まんなかは、やゝひろく平かになつてゐるが、奥の方は地の高低につれて太い幹の根元が上り下りして、不揃ひに見えた。

姉は携へてきた長い竿の先に鎌をしつかり結びつけたのをもつて、赤く枯れてゐる小枝をひつかけては、かき落す。苦もなく折れる。ポキン――ポキンと彈力のない音が、靜まりかへつた森の中にひびき渡つて、その度胸がはつとするやうであつた。私は落ちた枝を拾ひ歩いては一つところに集めた。

私はかき落すのが面白さうで、姉が腕がだるくなつたといふとすぐ竿をとつてあつちこつち落して歩いた

が、ともすると、枝が途中にひつかゝつて、つゝき落すには長い竿があつかひづらくて、いら〳〵した。

時々姉の影が見えなくなると、この林のなかに私ひとりになつたやうに思つて、凝ッと落つかず木の間を見透してゐると、青暗い奥の思はぬ方から朽葉をかゝへて出て來たりした。

どうせそんなに背負はれないからといふので、竿をすて、束ねにかゝると、はら〳〵と黄いろくなつた下生への薄つぺらな葉が散りゆく冷めたい風がこゝちよく汗發んだ襟にふれた。

二束づつ背負ふて林を出ると、茅山に淡曇りの空が明るく開けた。

も少し突込んで奥深い所が書いて欲しいと思ふ。かいなでの事象をこれだけに書きこなした作者の技量には敬服するが、只如何にも感じ方が淺い(白羊)

◎未亡人

安本はる子

赤飯の花がそこらに亂れ咲いた、晩秋の或日、稻刈る若い人等の赤い帶に、黄色な秋の日光が榮える三時ごろ、私は叔母と二人で、湖山池のあたりを歩いた。

「まあ暑いこと！　洋傘さしませう」叔母は黑色の洋傘を擴げる、年は僅三つしか違はぬのに！　私には思はず派手な空色の洋傘を後にやつた、無造作にぐる〳〵と引つつめた髮、細かい縞の御召、鼠色無地の帶、まあこれが二十を幾つもすぎぬ人といはれやうか、四年前には○○少將の令孃として、女學館の秀才として、東都に才色兼備をうたはれた身が、今では一尉官の未亡人として、花恥しい二十二の身を、喪服につゝんで裏日本の片田舍に、限りなき孤獨の生涯を終らうとはあゝ紅燈はなやかなりし、四年前の一夜、帽も眉深にふるふ手に朱の盃受けた時、かく成うとは夢にも思はなかつたろう、去年の風強かりし行く春の朝、紅の血を吐いて夫なる人が、今絶え入らんとする刹那にも、悲慘な未亡人の樣は思ひやれなかつたろう。

「赤とんぼがまア澤山に、彼等でも死を思ふ事があるでせうか？」「え？蜻蛉？　まアほんとに澤山！私なども蜻蛉に生れて來るとよかつたわね、何も思はずと、あんなにして、とんでゐられるのですから」

「けど霜の朝など枯れた草にとまつて、たえ〴〵になつてる時なんか、可愛想ですね、私などが丁度、それですわねえ」叔母の聲は曇つた、「でもとんぼは、自分がさうなるまで、何もその事について考へやしません

でせう　酔へるものは幸福なりですわ、叔母さん、ほんとに、何もくよく先の事を案じる事はない、その時とを、面白く、くらす事を考へませうね、とんぼのやうな氣に成つてよほゝ」「はア、でも思はぬわけにはまゐりませんわ、何の彼のと人の身はうるさい…」「あれく、御らんなさい、あの白帆の綺麗ですこと」私は叔母の言葉を打ち消すやうに、大きな聲で叫んだ「白鳥か何かのやうですわねえ」うつとりと泪を流したやうな湖の面に眺め入る若い未亡人の淋しい姿を、私は三歩の後に退つて、つくぐとみ入つた。

詠嘆の氣分多くまさつてゐる、由來本誌の散文に通ずるはこの詠嘆の風で、正に女性の作の長なる所以である、中段理性が顔を出してゐるが、それとしては効はない、たゞ裏日本の秋と花の如き寡婦と云ふ全體の哀れを取る(醒川)

○鹽梅

齋川幸子

酸い許りが梅の味ではありません。鹽加減、漬石の加減、それと比較した上での取出し加減で旨いまづいがあります。これが鹽梅と名がついて、總て食物の調理の味に用ひられる言葉となつたのであります。此は此鹽梅といふことに就て深い鹽梅を思ひます。外ではありません、家庭の平和といふことは、此鹽梅の取方より他に方法のないといふことであります。

世には家庭の平和は、唯慈愛・相愛に在るとのみ思ふ向がある様ですけれど、親子の間でも唯愛といふこと許りで平和が保たれるとは、私は如何しても思ひませぬ、到底親子兄弟姉妹乃至祖父母といふ骨肉の家庭に在つても、この鹽梅といふことが無くては、平和安靜は仲々困難なことと考へられます。そればかりではなく、家庭といへば大抵は日本では嫁といふものが居ります。舅姑といふものが居ります。現狀からは先づ家庭といふ人間の一團體に重なる政治家は主人其妻(即ち嫁)及び舅姑を通例一般と認めなければなりません。

既に骨肉内外に骨肉の關係によつて家庭となつてゐる嫁がゐる以上は、家庭に鹽梅といふことは第一の必要であらうと思ひます。

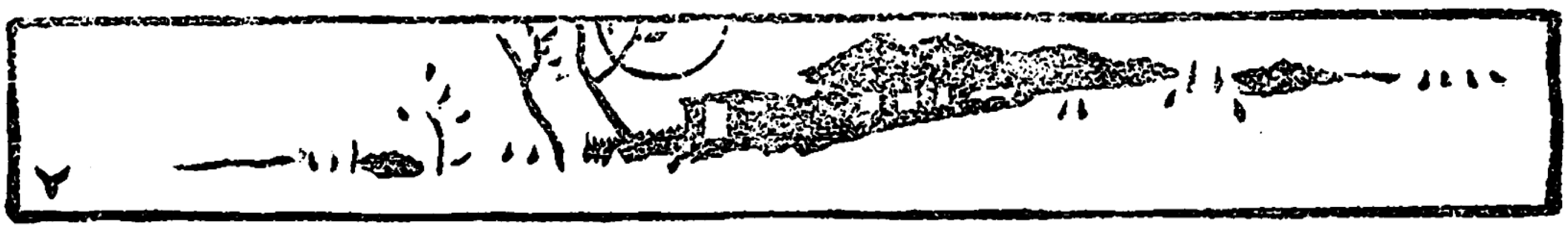
慈愛、相愛は自然に夫婦親子の間にあるべき筈のもので、此愛が無かつたならば家庭は劈頭から成立ちません。然るに世間には相愛、慈愛があつても少しも平和でない家庭があります。これは何故でせうか。私は唯鹽梅が至らぬからであると思ひます。

鹽梅は按排より作られた俗字であるさうで、其意本文の說明の通り呼吸、加減……つまり「丸い玉子も切りやうで四角ー」など云ふところであらう、しかし是れを簡略一遍のものと往々にして誤解したり「まアいゝ鹽梅にやつた」とか云ふ胡麻化し的のものに考へる人ありとせば如何であらうか、愛ありて行はるゝ誹にはそのうちにも暖かいところがある、交際社會の夜會などは實に華美な圓滑な鹽梅が鹽梅調子ださうだが、その奥に冷やゝかなものが流れてゐるは云ふまでもない、鹽梅の取るべきところは此論に遺憾なきまで盡されてゐるから評者は敢てその陷り易さ一弊をこゝに擧げた次第である、もとより論者も同感の事と思ふ。(醒川)

霜柱

三ケ島　よし子

霜柱踏みかへされて白菊の花くづされしおもむきをする
雲片に劣る煙も花火よとはやせみ空のものにあらねば
君が樹に木葉蝶ともならずして紅羽休めし心もとなさ
盃に似ると思ふや酒肆に入る小男のかへりみし月
赤き絲もつれしままに火となりしわれらが戀は心地よかりき
灰色の大き玉抱き三日月の沈むと見ゆるさびしき光
たのまれぬ黒髪ぞかし亂す日はわがあづからぬものあまた撫づ
ゆく秋を火のつく如き樹に見つつあはただしげに夕百舌鳥鳴く



目に見ゆるものの何よりわが思ふ君が姿はあざやかにして
美しき戀にしあれば捧げまし否秘めましと胸ぞふためく
山鳴らすほどはかしてしわが胸に似ずと思へばいとし木枯
大地すらものいはぬ日に引かれゐぬわれは歌もてさそはれしかな
飛ぶまでを落つる木の實と見よがしにいと美しき小鳥とまれる
山茶花の木の間の雪にさす紅の價を問はん秋の使に
似つきても見えましものを雪の日はててに來らぬつばくらめかな
天地はみな新しとたたへましわが年一つうとましけれど
歸りなば若き日暮れんこの戀は墓につづける道なりしかな
何を泣く二人の心相よりて一つとなりし淋さに泣く

春雷

夜雨

日記文は一月から散文の中へ合邦するといふ、それぢや僕を放免してくれるんだらうといへばうんにやうといふ、それでは助手の地位におくのかといへばまたうんにやといふ、忘れることを以て誇りとし生命とせる主義は相にくと自分を忘れてくれぬ。馬骨を五百金に購つたのは昔である、千里の馬があとから來るのだらう、仕方が無いから口の端へ灸をすゑられたなりでやつて行かう。弘子さんと柳子さんとは近くおそろへにやるを生むと聞いた、屋根の草さんは朝鮮へ、京子さんは仙臺へ、めでたいことがはたには續くけれど、未來永劫筑波山に花の咲くことはありさうも無い、また有られてはたまらぬ。醉茗君は命がけで生きてあるのだといふ、醉茗君の心もちはまじめであらう、自分は何の爲に生きてあるのだかさへても見ぬ、不忠實は不忠實だれけど、粉碎された心にはすべての美に對する愉悅も失つたし向上心もほろびた………。

むづかしいことは止めよう、つまらない。

あるくちとは、もう飽いたでせうと、よくなく草雲雀はいふ、友だちのうちへ遊びに行く隙はあるくせに、「おばあさんが大患なので心がみだれて……」と宮はいふ、女は正直なものだ、未亡人になるのを怖がつてる人があるかと思へば、これか三合の君と有頂天になつていちやつてるのも有る……

中山百合子の一周忌になつた。『茗荷の子』の譜を作つて同窓會で彈いた百合子、『人は去れり』を朗吟して幾十百人の涙を誘ひし百合子、百合子は死んで一年になる、女子に信ずべきもの通じで唯一あり、曰く『死』骨膜カリイスに罹りて將に足を削らんとすと告げし谷山さゑ子をおもふ。切らざれば全身を冒されて死し、切れば不具となるべき躯を悲しめる若きをんなの命よ、生とは何ぞ。

　　慇なるかな疽を發したる片足だに
　　　愛しめる人のあるものをあわれ
　君よせめて戀するなかれ癈人の
　　涙ばかりは人知らぬ世に

「わたしに言はして下されば、湖畔の女は二十三、早川雲雀兒は二十五、軍艦千歳の方は二十六、野にふる雨の筆子も二十六、童貞にてましまず美耶さまは二十一……泣くでせうか」と未亡人の君いふ。

十八の春とかある十七とか女の方は二つか三つ位はそつとしまつて知らぬふりをしてるのだから年は到底人に分りつこはない、江森美子君、早川花子の年を探偵すれどわからず、妹さんをつかまへて內々できくと、「あなたに二つ下の十八よ。」

ある時掃除番に當つたのだ、講堂隈なく拭いたかどうか知らぬが先生が見分に來る頃と見計つて、バケツを出入口の敷居の上へそつと置いた油を引いたのも多分其時だつたらう、うつかり入つて來た先生は足を敷居へかけるとツと辷つてどたくと小さな尻もちを搗く、一人の先生はいやといふほどバケツを向ふへ蹴飛して、一人は足を突込んでしまつて、こんな處へおいたのは誰だといふ詮議になつた、早川…何子といふか知らぬがそれへ出て「先生敷居は跨ぐものですか、のるものですか」先生ギヤフンとなつておしまひ。「柳町のしづ從姉さんがお友達の三枝子さんを連れていなで取りにいらしつた。仕方なしに私もお供するお二人共去年女學校を出られた方、級中第一の美人、高襟を以て自任して居られる方々たるもの私の樣に手拭など被らない、紫矢絣に美くしい帶お納戸のメ

ラソルをさした、三枝子さんと、あらい大島絣の袷に華美な友禪の帶を恰好よく締めた從姉さんの後にお供する私は手織木綿の地味な着物に白手拭赤だすきと言ふスタイル田に働いてゐる男女は皆こちらを見る」(しなの野の花)着物を着かへる隙が無いぢやなし、好んでそんななりしてお供するほどの大人物とも受とれず、作りものとしか思へぬ。況んや二人共、校中第一の美人とあつては勘定に合はぬ。

　兄樣へ「あゝ秋は憂き物、風にまで寂音がこもつて居ます。笑うて下さいますな、私は詩を習はうと思つて居ます、そこに慰安の影をみとめ樣として、逝く秋を見過して居ります。あゝ放浪の生活に入りたい、放浪の旅に出たならまはりの纏絲が解けて、どんなに軀がらくになるかと思つて仕樣がありません。あ、兄樣、これは極內證よ、大聲なんか立てちやイヤですよ。けれどそう思ふ許りで實行しようとは云つてやしませんから——。」(とさ軍子) あ、且那さまとなほしておかうかと思つたけれど、土佐ぶしの子なるこの君に薙刀などふり廻されてはこはいし、この上へうばんを惡くしてもしようがあるまいとがまんする。

「常磐の前とて昔は源氏の大將左馬頭義朝が北の方」(野菊)義朝先生いつ結婚屆を出したのだらう。義朝の子の義經がご妻は河越氏といふ、よもや靜御前といひはしまい。

「涙で曇る目で合掌してチーンと鉦を打つ」たへ子。一陣の陰風吹き來るあらはれ出る幽靈は誰ぞや。

「お母樣と又衝突つた、ぬぐつても〳〵涙が出てしようがない、姉は「あなたが餘り正直過るからだ」といつた「いくら親子の仲だからつて哀がなければ、ゆかれないぢやありませんか」ともいつた、ほんとにわたしは正直過ぎるのだらうか感情を僞つて迄笑つて見せなければならないのだらうか。自分の赤裸々をこそ喜んでくれると信頼してた、たつた一人の其人にもまたわたしは失敗してしまつて親といひ姉妹といつても、それは幼ない日の間に過ぎない猜疑嫉妬誤解!! 正直過ぎるといはれる、わたしは馬鹿の大馬鹿ものかも知れないなんだか考へてると暗くなつてしまふ。(悲しき日に)」(大分とよ子)痛ましいかな、少女のおもひはこれよりやうやく濁らんとす。

「見ると親鳥が九疋の雛鳥を中腰になつて暖めて眠つてゐる、小供を孵さすので一年中かた腹で、きうくつだつてブウ〳〵云ふ私は鶏よりは樂だと思つた。

お夕飯に靜枝が、お母さん、ハアー——キダアメて云ふ飴があるつてお隣の種ちやんが、お云ひなさつたて云たので大笑ひ」渡邊。ブウブウつてどこで音させるのです、口でだらうとはおもふけれど。頗あやしい音だ。

「明日は之れに二錢の切手、ペタリと貼つてポストへ投げ込むと上り二番位で「今は越後の風もやだ」と、グン〳〵上京してやがては編輯局の御世話になるのだと思ふと嬉しくてたまらない。それにしても來月號が待ち遠しいなア」……(千草子)

越後出る時や涙で出たが、またも沒とは知らなんだ。可あいさうに。

「お餅搗の方はよほど熱いと見えてすつぱだかでいらす、母さまもじばん一枚に腰巻といふお仕度」(長岡すゞ)。それぢや手が出て足が出るでせう、美人國のお方にも似合はぬ色けし沙汰だ。

　夕ぐれ椽に立つて、「私、柊や枇杷が今頃に小さい白い花を咲いてゐるのをみると秋の未亡人……秋つて言葉が可笑しいけど……つていつた風な氣がする」といふと「ぢや山茶花は?」妹がいふ、「さうね、常磐木の夫人かも知れませんよ、しかし山茶花も餘程淋しい花だから、妹位かも知れない」つて笑つた」鳥取はな子。信濃の前品優栗子と鳥取の安木春子はよく書くけれど落膽する、あくが拔過ぎてゐる事が一つ、すましてゐる事

が二つ、ちつとも個性が出てないからだ、あんまりお嬢さんなので困るとつくぐ〜思ふ。

「森の中は小さな群集と、汚ない露店、見せ物小屋とに、淋しい湯の村を賑はせてゐる。村の小女は白いものをつけて三人四人と笑ひさゞめいて行きかふ、林を通して放縦な旋律と、それに伴ふ淫猥な歌曲が媚びる樣に響く、疲れた心を妙にそゝらせて、歡樂を慕ふ樣な心がほのめく。」やとり木。自分がきらひなのはかういふ人のかういふ文章である。時代の人時代の文か知らないが、キザな青年文士の眞似なんぞしない方がいいぢやないか。

「カキオチルスグコイヒタチノニイサマ」鈴蘭。常陸には柿がない。とでも思つたのであらう、八月の洪水に稻が一俵位しかとれぬのみか浸水した地方は柿などたゞの一つもなつてゐず、常陸の秋は實際むざんなものだ、兄さはさぞ悦んだでせう。

「まだ見ぬ戀しい人の夢を見た、それは美しい夢であつたが醒めて苦しい現實にかへつた時は實に泣きたい位淋しかつた、あゝ運命の神樣に見はなされた此身は夢ならでは此樂しさを味ふことが出來ない。」(山梔)

越前に肺を病める女があつた、ねたり起きたりする長い間自分は缺かさず慰問の手紙を出した、母なる人叔母なる人がよく病人に代つて手紙をかいてくれた、涙に滿てる遺書めいたこともあつた。驚いて、懇ろに慰めもしすかしもした、隔日位に筆を執つて偏に其苦悶をうすらがさうとしたのだ、年賀狀も着かなかつたし、死んだのだらうと思つて再三母ぎみに照會したけれど何故か答へず四月東京である人より其ながらへをることを聞き、八月さらに結婚することを聞いた。

あなたもよく病氣をいふ(いつか足が惡いようにおつしやつたでせう)自分はむしろ皆さんの悲みが眞實ならぬことを望む。豐前耶馬溪に西といふ男があつた、足が起たぬので學校へは兄に負はれて通つたが年たくるに從ひてしばしば悲痛の文を作つて世に公にしたが、十九歲の秋くすりを仰いで死んだ。自分は西氏に比ずれば臆病なのであらう、ひとり足の起たざるのみならず英吉利病に犯されてより永く痛恨を留むる身である死よく一切を終らしむとは知れど、自分には事業がある、死の寂寥に入るに先だつてなほ生きてゐなければならぬ。

一人で生きて一人で逝くと泣いた人もあるぢやないか、あなた方は文字の上でのみ泣くことを知つて、案外平氣なのではなからうか。

先月の投稿に常陸下妻宮本きみ子といふのがあつた。此人はよく死といふことを人に語つただけ、夫と心の合はぬことを書いてあつた、家の妹が今頃繼母にいぢめられて庭の木の下で泣いてゐはすまいかと書いてあつた、十一月のはじめに下妻を去つてすゞめの宮で自殺して果てた、享年十七歲。夫といふ男は新聞には兄とあつた。きみ子は美しき女であつた、何故に下妻を去り何故に下野の一寒驛で死んだか、亡き人ならで誰かこれを知らう。

嗚呼死！　死はたやすく口にすべきものではあるまい。

廿三日　羽蒲團成れる夜　夜雨生

宮本流水女の最期

醉茗

右の記事の中にある宮本流水女の最期は其事が突然の爲め自分も少からず驚いた、夜雨の報を得て初めて知つた位である、何うして鐵道自殺などを遂げたものか深い事情もあつたことだらうが今は殆んど分らない地方新聞に僅か五六行の記事を止めたに過ぎなかつた、今は深く詮索する必要もなからう、流水女の才筆は本誌前號の小說欄及び散文欄にも現はれてゐる、才人は兎角不幸の境界に在るものが多いと云ふが實際である、其友人宮坂明子の君の寄稿もあるから左に揭ぐ。

吁!!! 流水女

宮坂明子記

わが女子文壇の小說欄にて近頃流水女樣のお奮ひなすつた事は私が今、喋々と云ふまでもなく、既に皆樣が御承知の事でございませう。その……その流水女樣は本月九日の夜、栃木縣雀宮驛附近にて敢なき最後を遂げられました。

私は流水女樣に逢つて語つたでもなければ、スタイルを拜見したのでもありません。只七月半からレターの交換いたしましたのみでありまず。其七月の半から今日になる迄四ヶ月の間に、僅か八通のレターの交換いたしました。けれど其八通のレターがよく流水女樣の眞情を語つて呉れました。一ツとして泪なき事象はありませんでした。是も强ち思想が合つて居つたからでありませう。

この十四日の夕方、突然一葉の葉書を流水女樣の夫たる荒井樣から送られました。其御知らせに依ると、私が流水女樣の唯一の親友にて、私にも遺書を送られた樣に、荒井樣に當てた遺書にあつたとの事でした。けれど、けれど……其の遺書が私の手に着きません。夫が私には堪まらなく悲しくてなりません。

遺書を送る迄に私を信じて居て下さつた流水女樣夫程に私を戀して下さつた流水女樣……私は如何しても流水女樣の、如何なる心情を抱いて居なさつたかを、誌友の皆樣に紹介せねばなりません。又紹介するだけの責任が私にあると思はれます。ですから貴い本誌の頁を借りて、小說に優秀であつた、流水女樣の厭世なさる程の苦痛の吐息………私に當てた重なる若き女の叫びとも云ふべき言葉を揭げませう。

誌友樣一目置いて、同情の泪給はれかし。

私白狀して仕舞ふは愛想づかしをしないで下さいねほんとに〳〵いつ迄も妹と思つて下さいね、私筆の先で可加減な事云ふのは嫌ひなんですから、ほんとに〳〵妹としてつき合つて下さいよ。

戀いちや可厭よ、私もう人の妻なのよ、妻つて變だけど矢張妻なんだわ、けれど表面許りよ、私は生涯孤獨なんですもの、一緒にゐたつて面白くもなけりや悲しくもない、沈默と沈默との睨つくらで、自分自分のライフをしてゐるんですわ、他人の樣に「家の爲」なんつて思つた事有りませんのよ、私どこ迄も「自己の爲の生活」をして行きますわ、他人の爲の生活なんかして行きたくないわ。どうせなる樣になるんですもの、甚麼悲しい事が有らうが苦しい事があらうが、皆一場の夢ぢやありませんか、私はもうほんとに然う思つてますのよ。私は甚麼事でもしますわ。

と云々、以上四十三年九月三日のレターの一節。

每日〳〵の雨、一體何時迄續くのでせう、私の心は疲れ切つて何を思ふ力も失せて只其日〳〵を茫然と暮してゐます。そしてその茫然とした心が堪らない程苦しくつて、何か强く〳〵思はうとしても、什うしても駄目なのよ、實際私憎らしくなりましたの、雖ど貴女のおハガキにも矢張呆然と暮してゐると書いてあつたので何だか味方を得た樣に思ひました。

私は二日程前から近所の裁縫所に通つてゐます。何の面白味もない、何の色もない心の人に交つて一日を暮すのが堪らなく苦しう御座います。夕方の薄暗い光の中を家に歸つて來ても、その家には暖味もなければ柔味もないのです。只灰色の冷たい家、私は苦しくなりました。柔かく暖いものを欲しくなりました。自己の爲の生活!!と叫んだ私、あゝ!!!私の心は漸々褪せて行くのです。私はまあ此先どうして暮して行くつもりなのでせう。

夫となり妻となつては只悲しい過去を苦しい胸で思ふのみです。乙女の血をうばはれ、自由をうばはれ、暗い悲しい室に義理や人情を思ふ樣になつては、もう〳〵終りですわね。明子樣！いつまでもバアジンでゐらつしやい、いつまでも淸い若い血を濁らせないでゐらつしやいませ。

私は一飛びに諏訪高原に行きたくなりました。然し〳〵其麽事只夢に思つて居ますのよ。

云々、以上十月十四日のレターの一節。

尙

逝かんとして逝くあたはず、天高う風淸き此頃を病床に呻吟いたし居り候。障子に戰く風の音をきゝ、子供等の嬉々として遊び戯るをきゝ砂沼のほとり懷しうて夢にも行かばやと思へど、一歩も外へ足ふみならぬ病の身、只全快になるを祈り居り候。母戀し妹こひ！と幾度か叫びしがそは皆まぼろしに映るのみに候、それに附け羨しきは貴女樣の御身に候、黃金波うつ稻穗の間に白の手拭姉樣かぶりにし、唄歌ふやさしうあちこちと飛び廻り居ます樣のなつかしうも眼に映り候。お暇の節やさしの御玉章病める子に惠み玉へ。筆持つ手顫ひて思ふ樣に書けず、かしこ。許し玉へ。

此玉章こそ流水女樣が私に送られたレターの中最終の通信となりました誌友皆樣にも以上に揭げた悲劇の文意に依つて、流水女樣の如何なる思想を抱いてゐなさつたかが了解されましたでせう。

十七歲を夢として若い血の巡り巡つてる、大理石の樣な肉體……天性なる美しき優れ！文才を藏してゐなさるマチリアル………憐れにも鐵路の糜に赤い〳〵血液と泪とを、露と消えしめし流水女樣の一生……實に憐れな口惜しき事でございます。

泣けど歎けど詮ずべもなき、流水女樣の最後………尙、歯がみ爲てやまないのは、私に當てた遺書の行衛でございます。夫のみが今更口惜しくつてなりるせん。

流水女樣御兩親樣も嘸御歎きの事でせう。餘り長引きましたから泪拭ひて筆をおきます。（長野縣諏訪郡玉川村にて）

秋空

長曾我部菊子

私に元氣のなくなつたのは、人戀ひしき思のほろびたのと同時であつた。あゝ精力、元氣あるものにして初て戀々の情火も胸に燃え、戀ひし得られるものにして、初めて、事にたづさはつて精力を凝聚し得られるのではなきか。

私は殘念だ、私は私の精力のなくなつたのが悲しくてならない。何をするにもうかうかして注意が長くつづかない、倦きやすく疲れやすく夢見やすき今の心が口惜しくてならない。

然れども、私に、戀々の情のほろびた事だけは嬉しい。人の戀ひしき心よ。その心ほどわづらはしきものはなかつたに、今かうして、戀とかかはりなくなつたのがうれしい。やうやく私は心安い。

此上ねがはしきは、「死」まで戀にわづらはされる事のなかれかし。戀ほろびて、努めに對する精力の火、熾に我心の底を燒け!! 私はそれを庶幾ふ。（九月四日）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あゝ、女として囚はれたる時は、何時世の事かと、女としての——女の私としての解放を夢見て、いかに激しく憧憬れたであらうか。

私は、あこがれあこがれて遂に上京の一事によつて凡ての叔父、叔母、知人、村人の眼から解放せられてしまつた。彼の人たちは、微笑と奬勵とをもつて、「女よさらば、自由の空にかけれ!!」「女よさらば、自、自をあかして思ふまゝにふるまへ。」と見送りの辭を寄せて呉れた。かへすがへすも、戀につまづく勿れと口を齊しくして戒めた。そして私は天下天下、一絲も身心にいましめ受けぬ婦人となつたのであつた。

既にかうして全く解放せられて見ると、此の心細い事、この苦しい事、重い重い、自分を耻ぢしめまいの責任に、夜寢ても、晝道をあるいても、常に氣も心も強く鋭くはりつめて、氷上一歩、かつまた一歩、戰々競々として足を運んで居るのである。

あゝ、これ幸福か、はた不幸か。

私のめざす務めは、自分の心靈の鍛練である。高き光りの標點に達したい願ひ。此事成さずんばおかじ。斷じて成さずんば止まじ。（同じ日）

戀にはぐれた私はあまりに自省の念、自己を惡む心の強かつたからなのだ。私は人なみの女である。私は人なみの心である。私には悔ゆべき何等の不足も身心にないのである。ないのではあるが、私は一歩すぐれてありたかつた。格別に目立つて美しくも清くも、高くも優しくも、慧くも可愛くもありたかつた。人に交つて見出されるほど特別にすぐれてありたかつたのだ。あゝ、私ほど、自己の心と、自己の形とを厭惡するものはあるまい、この自己を疎んじはてゝゐる故にこそ、戀にも、友との交りにも、華やかなる音樂にも、美しい衣の色彩にも近寄るのが好ましくないのである

自分を疎んじ、自分を惡み、うとましきが故に、惡きが故に、血の汗、涙の毎夜を閲してでも、自己を向上發展せしめんと企つるのである。苦しい克己、いたましい憂をしのんでも、私は、心を高く清く美しく、晴々しい光明の花園にまで、その花ぞの花の女王にまですぐれて向上せしめたくはかつてゐるのである。

人は夢よと冷笑するとも私にとつてはもの丶數にも足らぬ、私は強くその意地に立つてゐるのだ。

されば、戀を私は捨てゝたゞ一にすゝんでゐるのでもしも私のおもはくの「絶望」に達したとしても、私は戀にかへることは出來ない。

あゝ、たゞ一つよ、たゞ一つの光りよ。死か、しからずば、私は成さん。　（九月六日）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は理屈を知るものではない。また、理屈に生きたいとは思はない。然し、考へて思うて、更に更に、自己に適せる道を歩きたいがいつぱいに、人の語る理屈も聞きたく、自分もあらゆる事件の理路を辿つて、迷ひなからしめたい。考へてすると云はゞ技巧的に聞えてみすぼらしからうと思ふ。考へつゝ事をするのが、誰にもみすぼらしき技巧と見えるとしても、殘念でも私は、やはり一歩一歩思考しつゝ、感情を守り守り、知慧をあつかひあつかひ、おちついて靜に、事を爲しながら生きてゆかなければならない。

考へると云ふ事これは、今の私にとつて、生存の杖なのである。　（同じ日）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今や、秋は桐の落葉に、一歩を地上にふみ入れた、おとづれを示して、庭には萩の花早くけしきばみ、紫苑の花のつぼみは日に日にましてゆく。

○神無月の日記より

羽後　惠子

二十一日。公園の紅葉はやつと色づいた。孝ちやんから手紙。父樣が歸りなさる時送つたリボンのお禮、廿日もたつてから漸々よこすむだもの。――姉樣は毎日お肴許り召し上がるので、又肥えなすつたそうですね。私も此頃は大へん肥えましたの、もうぢき姉樣位になるでせう。――だつて馬鹿にしてゐる。きつと、父樣が何か仰しやつたのだろう。こちらに來てからはちつとも肥えはしないのに。茂ちやんと、けんくわしないでわけなさいと云ふてやつた畫葉書。父樣に分けていたゞいたので、けんくわしませぬ、御安心なさい。と書いてある。茂ちやんも何か書くと云ふてゐましたがもう眠りましたから私からばかり、とかいてある。來年の夏行きますから、其時太さくらべしませう。それまで、たんと太つていらつしやい。朝起こされてから、一時間も室にぐづ〱してゐる樣では、肥えませんよ。と返事のはしにかいた。父樣に孝の朝寢にも困るときいたので、讀む時の、嬉しさうな顔を、そうぞうしながら茂ちやんにもかいて入れてやる。

二十五日。起きたのは未四時前。家の中は眞暗だが、雨戸をくると冷い風と共に、二十三日の月がさと流れこむ。寒い朝だ。青白い月の光とまばらな星のまたゝきのすみきつた空にさえてゐる下で、米とぐ。米もとぐ手も、月光にてらされて青白い。何とはなしに嬉しくて、月を仰いで微笑むだ。ふとはなをかすめた佳い香！。見るとへいぎはに咲いた菊の花！。鮮やかに月光をあびてほの、白く匂ふもの、陰になつて闇にくつきりとうき出されてゐるもの、美しい！。共同栓にと手をけ下げて門を出た。向の方に電燈が三つ、いつも見るのだがこんな朝よりは月のない、殊に、雨のふる眞暗な朝がよいと思ふ。――しつとりとぬれた空氣をふるはしてしめやかなうるほひをもつた灯が、夢の樣にながれて來る時、しーんと物音一つしないあたりの樣と、よく調和して、一種のなつかしい匂ひがたゞようて居る樣で、一番私の胸になつかしい情緒をふきこむ。――五時の鐘のなる頃から東が白みそめた。寒かつた筈、となりの屋根は霜で眞白！。

二十七日。もやの深い朝だ。雁が鳴いて行く。母樣「あゝもう雁も來たな」と仰しやる。お飯の時も二度ばかり。見樣と思つて椽に出たら、「お前は雁を見た事がないのかい」と笑はれた。こんなほうたい等してると頭痛がして困る。それでなくとも逆せ性の私。片方の目がかくれてるのだもの。公園の紅葉が見える、濃いコバルト色に、高くすんだ空を背景にして、深い緑の中に、浮き出された燃える樣な紅葉に、四時頃の日の美しくてり映えた樣、私は雜誌もなにもはふり出して、窓によつた。

お白い氣も無ければあぷら氣も無い、安賣流行の文壇に涙をいはず哀傷を語らず、淡として水の如き情趣に富めるをよろこぶ（夜雨）

○雨上り

夢浮橋

肌襦袢を着ないといけないよとお母さんに云はれたのを、でも私、とばかりでた〱云ひながら袷を素肌に着る、すう〱と脇が究屈でなくつていゝとは云ふものゝ、ちつとどうやら脊中の方がおぼつかない、今更着替へて其れ見た事かと云はれるのも殘念だからとさんざ考へた末、のこ〱お椽へゐざり出て、ニヤン公の仲間入りする、何しろ昨日迄だら〱と向ひの小母さんの愚痴見たいに降りつゞいてた雨が急にからつと晴れたのだから雀は嬉しさうにチウ〱と枝から枝を飛び廻つたり、水たまりへ首を突込んではぶう〱と行水を使つたりして居る、塀外の井戸端は俄に景氣づいて、笑ふ聲怒る聲子供の泣く聲などが、雜然ともつれ合つて修羅場の樣だ、と「あゝ芳ちやん其竿拭いて此方へお寄越し、そしてそら其れへこれを掛けて隣りの小母さんの癇高い聲がするかと思ふと、「ほんとうに、久しぶりのお天氣で有難いのも有難う御座んすけど、大苦しみですわ、おしめの洗濯たけでも一日はかゝつてしまひますのね」と向ひの小母さんは又誰かを取つかまへて盛んに愚痴つてる、ぼやけた聲はしやいだ聲固い聲とがつた聲が私の腦をほしいまゝに走せ廻ぐつて段々遠くなつて行く、ふと私が今聲を出したらどんなのが出るだらうと

思つた、きつと寝ぼけた聲だと又思つた、暖い日光を肌一ぱいに吸つて精神統一正に成れりつて處だもの、無我の境に這入るのは譯はない事だと思ふとついおかしくなつて目がさめちやつた濁た血を洗ふ様なすが〳〵しい濡れ土の匂と、コスモスの後へ二つならんで干した雨傘の香りとこんがらかつて流れて來た、何と云ふ鳥だらう、ヒヨロヒヨロと可愛い聲がひさしの上でした。

いつになく長閑な文が出來ました(記者)

○尖頭の十字架

東京　布美緒

畫にしたら、さぞ美くしからうと思つた。下から上に這ひ上がつた蔦の葉が、奇麗に彩られて水の色は濃碧に艫の音聲に暮れてゆく神田川の流れ、駿河臺のあたり秋は深い。西の方遙かに落ちてゆく夕日に輝く尖頭の十字架、燦爛たる黄金の光りは中空たかく輝いて巍然たる會堂の建物よ。いく春秋の其昔、墳墓の地をば守るとて、押しよせし西歐の大軍、老も若きも、十字の旗は朝風にひらめき、額にかけし十字の光りは、ベツレヘムの野に此おなじ夕日に照されて、輝いたのであらう。いまし、高く低くなりわたる鐘の音、なやめる者よ來れ救ひの主の御もとに、人々さめよ、と呼ぶかの如く……私は、お茶の水橋上に立ちて仰いだ。落日の餘光空高く、金箭を射かへして輝く十字架、尖頭たかく、西の國の人々は、日没を稱するとか。げに偉人の終焉に似たりともいふべきか、うたゝ尊崇の感ひしと身をおそふのであつた逝く日をば弔ふが如く、はたまた人の世の汚れを、ぬぐふとて清めるが如く、餘韻は長く……一つまた一つ、響は遠く煙波をかすめて、霧のあなたに消えてゆく。消ゆるかと思へばまたも新らしく起る其のひゞき。

十字の光りは、次第〳〵に眠るがごとく、今は全く日の影消えて金星ひとつ、空たかく輝くのであつた。

ニコライの會堂は、單に建物として見る眼にいつも異彩を放ちます、此文も亦多少荘厳の格調があつて、能く書いてゐる(酔茗)



レター　新潟　水澤蝶子

○泣くにも泣かれぬ

周防　屋根の草

あゝ心がいら〳〵します、どうしたらいゝでせう、えゝどうやらこんどは理想どほりな處へ嫁ぎました、私はひそかに滿足して居ます、けれども何故でせう、心が亂れて〳〵いら〳〵ばかり致します、どうしてもおちつく事が出來ません、けれど投書はします、たとへ夜明しをしてもと宮子樣へ云ひました、おゝなつかしいつく波の先生へも……私は何やら書きたいです、書く事は山程あります、ありますけど、胸が何だかふるへてつかへて今は書くことが出來ません、文章につゞられません、或時は此度の結婚を非常に〳〵よろこび又或時は悲しみ泣きます、別ではなくもしもこれから文壇を愛讀する暇がなく歌も作られず一度は〳〵御てんさくをと心に誓つてるあの願事が思ひに止まるような事にでもなつたあかつきにはどうしよう――としなくつてもいゝとり越し苦勞の爲めに折角眞直ぐ縫つた針もぞろ〳〵と後へぬけます、あゝ氣がせきます、十七日といへば今直です、それまでにもう二枚も縫はではならずそれには學も一度はさらへたし。〇〇家訪問はかゝされず、あゝどうしませう文壇が見れませんもの、いそがしくつて……縫ふ衣のそばへ文壇をはべらしても、人に讀んで貰つては興味がうすいです。あらもう臺所の庭らつぱがなりじしたわ、それおとなりの戸もいれられますものこんなものは必と〳〵沒書でせうけど何か書ずでは氣が安まりません、あゝ先生……記者樣……「今の婦人」はおゝ右の袖の下にかくれてます、けれども〳〵まだ一枚もよみません、今夕來たばかりで御座います、只私は泣くにも泣かれぬ氣のもみ方をして居ります、やつと〳〵こんな事をこれ位に書きました、えゝ、沒書でもようございます、十三日の夜はもう十時に近い、十町たらずのポストへ今から走つてこれをいれて來ませう！

そんなにいら〳〵してもいけないでせう、此文章が活字になつて作者の眼に新しく映じる頃には、もう心持が變つて、ずつと落着いて居られることゝ思ひます、いら〳〵すると云つても、外の人のいらいらするのとは違つてちやんと自意識して、自分を觀照してゐる態度があるから大丈夫です。（辭者）

○幼き日の記憶

つね

淋しい國の歡樂

番小屋のぬくい床を轉ぶやうにぬけて林檎樹の中を飛び歩いた、日は今樹々の七分通り上段を照して霜融の銀色に光る枝チラ〳〵輝く眞紅い實落ち殘つた小さい葉までが僅にとゞめたその葉緑にありだけの光を吸つて勢よく空をむいて十分體を延して居る、夜の名殘りの冷めたい暗は音黒く根元に澱んで美しい沈んだ色に置きつめた霜の上をヒタ〳〵小さい草履のあとつけて走ると其の靜かな空氣が湧き返る樣にぞよめいて膝まで表した白い脛も小さい爪の先も見るまに紅さして來る、目脂がこびついてポコッとはれた瞼の中から幼い瞳を上樣に輝かせてやたらに飛んで行く蓬の樣に亂れたおかぶろの上にも、垢づんだ肩にも、袖口山にも梢もる光が金白銀の環をこぼした、たれも居ない林の中――何も響かない林の中――しな〳〵する小枝の先に一つ宛つり下つて幾萬の林檎が一樣に可愛い唇あいて見えない程に體ゆすぶりながら、聞えない程に歌ひ初めた、歡樂の歌――、淋しい國の歡樂――、ふと何所からかチヨキン――するどい鋏の音、次いでチヨキンチヨキン林の中は俄にそう〴〵しくなつた、と見ると強い光線がもう隅々まで領して今迄のかゞやきの色が見る〳〵沈んで行く、いつの間にかあのつやのないカサ〳〵した赤い珠つけた灰色の幹がスク〳〵とどこまでも煙の樣につゞいて居る、いつもの淋しい林に返つた。

夜のなまづおとし

ツオー〳〵ー地の底に流れ込む音がして、黒い水面はユタ〳〵立つ水輪を中央に吸ひ込みつゝ段々、深く落ち込んで行く、松火持つた叔父樣

と兩手を水に入れた祖父樣の裸體姿が一寸も動かぬ、段々と表れて行く四つの足をからんで、赤や白やチラ／＼浪がよつたり離れたり花瓣が散る樣のと忽ち松火が動いて叔父樣はかゞんだ、底の方でサラ／＼と鉛の珠のかち合ふ音、やがて網は瘤だらけな三本の手に上げられた、と見る一團のわだかまり、ギラ／＼と白い長い腹をねぢまげてもつれあふ、水を離れまいとする叫び—凄じいぞよめき!! 朱の樣な祖父樣の御顏に銀針の樣なあご髭がビク／＼動く私は恐しさに砂地のビクの傍にちゞまつて見て居る、後の藪蔭から靜な／＼瀨の音がきこえる。

文章は巧みだが、女性らしい素質を見出がたい（記者）

○秋感

尾張　華影

晝歩の月を雲と云つて笑はれた。

雷鳴り雹降りし秋の暮、唐紙を開けると木の香漆の香香水の香等が混じつた匂ひが強くする桐の簞笥の側に黑塗の簞笥が尙黑く其前にこちや／＼並べてあるのが鏡にくつきりと寫る前に立つた私の姿が美くしく見えた桐の簞笥の上をすうと引出すと裾模樣の重ね白の下着がいつ見ても能い入れる時は手傳つたから知つて居るが、懷かしい恨めしい、姉樣がこれは着て自らの家へくぐられるともう他の人、お召の裾模樣の重ねや縞お召の着物が樟腦の香に包まれて居る小引出しを開けるまあたくさんの足袋だ事母樣も大抵ぢあない着物からお道具まで何一つ見劣りのない樣に揃へて、外の人は父樣は母樣はと別々に相談してはなさるのでどれ程樂な　、此の夏から御病氣で一月も床の中で氣をもまれる醫師が止めるのに名古屋へ行つて又惡くなつて。もう是から娘としての姉樣も十數日其後は今までの樣に論もできない歐留多も思ふ樣にやれない髮を結ばしてと云つて、一時間なぶつても出來ないのでとうとうにげ出されて仕舞ふ事は尙更忙しい時は困るわ「富美ちやん／＼」と母樣の聲、夕暮白菊が匂ひ高く尙白く見える先程の二ッ輪の虹の跡へ星が一ッ二ッ現はれると花壇の中には入つて顏を見て居るピスがなつかしがつて尾をよく振るピス／＼と牛乳の瓶をガチャ／＼して見た。

靜かなる日、化粧室で髮結つて貰つて居ると花壇がよく見える瀨さんの窒蜂がたくさん居る何だか花を苦めて居る樣に早く歸る樣にと思ふ蛩が松の木へ四十羽程集まつて囂ましいお隣のお寺で經を習ふ小さい尼さんの聲がひゞいてくる日に五時八時四時八時と五度の勤めお正月は別事と云つて私等が松の內と云つて樂しく遊んで居るのに朝から午後十時迄お勤め一週大きい人はたくさんあるが二十二から十八九の人まで五人の人達とはお友達だ幼さい時はよく遊んだ皆七ッ八ッの時から尼さんになるので今では尼さんの高等女學校と云ふ樣の物の學校まで卒業して居る「貴女髮結ひたいの」「え髮があるから結ひたいわすゝきが原ぢあ見苦しいですから貴女どう思つて」「私なんか幼さい時から結いたいと思つた事はない、結いて赤い物つけてより着物など着て見えると重たくないか知らきうくつでしようと思ひます夏など大きい帶で苦しいでしよう」「いゝえ馴れてますから、薰榮さんお正月や佛日の時はえらいでしよう」いつかだつたこんな話もあつた何んな事があつても尼さんになりたくはない世の中の哀れな姿を一番よく代表して居る樣に、自分で何とも思はないでも人から哀れな物と見られなければならない情けない樣だ。

この人の文章はいつでも手がつけられないので、よい所はあつても落筆をつゞけさせて來た、一行の文が右の行と左の行とにからまりかけて三行ながらこんぐらかつてしまうのである、どんなに醉つぱらつてもこれまでに介抱したら感謝してもいゝでせう（夜雨）

○神無月の一日

鳥取　櫻草

十月廿四日嚢節句、雨のぶら下つてる樣な日だ。

「あのよーウー、可笑しかつたつてよー。獅子んなつとるもんの顏から火が出るだけ、何だか思つたら烟草の火せへ顏の萱の穗についただつて」とお菊といふ鼻を垂らしたのがいふと、ドングリ目のが「燒けなんだ所はたつた橫腹と足のまはりだきだつたつてなア。今どげしとるだらアなア」といふ「おめだちや知んなはらんだか。今朝死んだつちうに」と一番大きなのがいへば、お菊は「ほんにー、まア可愛やなア」と鼻を

ツンとずゝり上る。ドングリ目は愈々その丸い目を大きくした。

家廻りの獅子が、トン〳〵チキ〳〵トンチキチと面白い囃をして來た。サヽラ摺の長い脊丈もある樣な頭布を冠つて、獅子の眞似をするのが可笑しくてたまらない。一しきり舞ひ終つて、ドヤ〳〵と行くのに子守らもついて行つたので、嵐がおちた樣だ。私は又机に向つて鉛筆を走らした。日暮方とう〳〵雨が落ち出して來た。

十月二十五日、近頃に無く暖い日だ。

怠屈なので教室の玻璃窓を明けて外を見る。向ふの山が大分色づいて奇麗になつて來た。お宮の銀杏の葉が、風のある時は雪の降る樣にハラハラと、無い時は胡蝶の舞ふ樣にヒラ〳〵と絕えず散つて居る。かうじつと耳を澄まして居ると、どこからか微かに流れてくるので歌の主は誰とあたり見廻せば、遙か彼方の小田でお秋お春の姉妹が田を鋤いて居る。白い手拭に日を避けて、カチリ〳〵と打ち下す鍬の先が日に輝くあゝ何といふ平和な景色だらう。今の二人の心は戀も慾もない、唯歌つて居るのだ。私一日でもいゝからあの樣な平和な生活を送つて見たい。お春さんはいつも私を見る度に「先生さん方はそうしとつて食へるだがなア、うらアゆかめうて〳〵こたえませんだアよ」といふ。ふと打つ手をやめて此方を見たお春さんはあわたゞしく手拭を取つて會釋する。そしていつ迄も〳〵私の方を見て居る……。「先生、保平はうらの顏に墨をつけました」といふので、喫驚して我に返つてハタと窓を閉めた。

おめだちア驚いたことばを使ふね。死んだ百合子が方言交りの手紙をかいてあとから講義してよこすのが、まるでこれだつた。が燒け死んだ獅子といふのとあとで來た家廻りの獅子とは別なのですか。同じなのですか、わからんぢやないか(夜雨)

○背高より

京都　三宅壽賀子

はま子さん、私この頃何んだか道を步く時にゐんりよして步くのよ、雨ふりにでも高下駄なんか一寸ともはきませんのよ、私は何でこんなに背ばかり高いのでしよう、いやねほんとに、兄の友達なんか半鐘ぬすッ人なんて云ふし淑子樣たらいつも大佛さん〳〵て呼ばれるし、道を步いて居ると、大きな女だねーなんて云はれ、昨日も小さい小供が、大きな女の異人さんなんていふのですもの、一寸知つた人に逢ふ、と貴女一反では丈が足りよせんでしようねーつて、私大きいといはれるのは何によりもいやですわ、私そんなに大きく見えて、そんなに大くないですわね、でも兄と並ぶと、四寸も小さいのですもの私を大きい〳〵といふから、私もまけずいつたら建樣つたら「ではいゝ君は二十世紀式衞生的美人だ、一寸お顏は何だが……ですつてオホ……でも、いくら私が大きいたつて五尺二寸餘り位しれたものですわねー、まだ〳〵大きい方もいくらもあるわねー、そう〳〵昨日お隣の霜子さんと寫眞を一所に取ろうといつたの妹さんの六の方がそしたら、姉さんとお隣の姉さんと寫したら、お隣の姉樣は額だけ寫眞の上に出ることよつてほんとに大笑しましたのよ、ほんとに背が高いと損よ、年は大きく見られるし私はつく〴〵貴女がおうらやましいですわ、もう一寸でも小さくなりたいわ、筆もつとつまらんことばかり書いて御免下さいよ左樣なら。

年越の晩にざるを頭から被ると宜いと言ふぢやありませんか(記者)

○三人

金澤　むらさき

壹の内ボンヤリとお針をしておた。夕方頃、朝から泣き出し相だつた空からポツリ〳〵落ちて風もまじつて來た。夕飯をすましてはなれで本をよんだ。落葉まじりの雨が折々雨戶に打つける。隣家ではお客があると見えて三味線の音やら、藝者の艷めかしい笑聲やらがする。いつもの事だが蒼蠅い、厭になる。あんな下品な動物を相手にして一時でもいゝ慰籍を得られる人はほんとうに幸福だ。私は不幸でこんな商賣の家に生れたがやがて一本立ちになつたら、此樣な商賣は早くやめたい。是非やめねばならぬと、いつも思ふ事について考へてると音もなくスーッと襖があいて、君子が顏を出した。机から頰杖を放さず「何なの用事?」と

眼ばかり働かして云ふ。だんまりで笑つてゐるのでをかしと思つて「どうしたの」とせきこんだ。
「あき樣、私なの」と妙樣たら人のわるい、ぬつと飛だすんだもの。「いやだ此人は……さあこちらへはいつて頂戴。」君子も御仲間に入れて話した、「私がお座敷へ出ると戯謔口の一つも利いて騷ぎますけれど、ゝ人のをきいてるとつく〴〵恥かしいといふ氣がします。はやくこんな商賣をやめて眞人間になりたい。」と君子はいつものお婆樣じみたことを云つて私達を羨んだ。妙樣はあなた商賣人らしくもない事云ふのね。あなたの其口とその眼をもつてゐてこんなになつたんですもの。思ひ切り男子を飜弄してはなやかに暮したいのねえ。」つてまあ。君子は「そんな事すれば後生が怖しい。罪な事。」といつて笑つた。おそくまで話してたので家へは電話をかけて妙樣は泊る事になつた。雨がはれて落葉がはら〳〵雨戸をうつてゐる。（〇月〇日）

これも亦事實なりやといひたくなる、こんな商賣は早く止めたいとある、待合か、藝者家か知らないが、あんな下品な動物とは異つたりやな。（記者）

○悲しき日笑ふ日

岐阜　葛の葉

九日。法恩講を勤めるといふので、押しやつてあつた貨物をやり場に困つて、父さんがお前の室へ二ケ月計入れさして貰ひたいとの事に、私はしぶ〳〵返事はしたものゝ、何とは無しに腹が立つて〳〵悲しくなり一人泣いた、私の身の置場を押しせばめられるとひがみ根性でゝもあらう、けれども私は、此室へまでかうとは思つて居なかつた、とはに〳〵私の居處は安全であると思つて居たからである、私は世間の人にだつて一寸した人にまで頭をさげて、道をかする時は惡い處を歩き、頭を高くしないけれど、丸顔の靜子さんなど、餘程私を……した樣な事仰有る、いつまでもお若くて居らつしやい等Sの姉樣に話したら、あの人はYさんにも自分から良人があるで多忙だとかふれなすつたといふそんな人の言ふ事とりあげて頭を使ふんぢやない、と慰めて下すつた、けれども私の棲む天土をせばめた一人であると思ふけれど。



うれひ　牛込　鳥山花すみれ

私はいつまでも〳〵少しでも少しでも、と處女の命を保たうともがく爲めに、父樣は世間を憚るとあつて私に、私が十分の四分を命に求めて居た音樂をとり上げた、琴もヴアイオリンも、煤とほこりでめちや〳〵になつて居る、私は世間の人に音樂を控へてまで憚る必要はないと思ふけれど。

琴をひいて三味線だか胡弓だかわからぬような音を出したり、月に浮かれてうたふポンポコの唄よりもなほ不思議な歌を歌つたからとて、大日本帝國の臣民はお隣を憚からねばならぬ義務は無いし何ぼ親爺だからとて娘の自由を質にとる權利もあるまい。男まさりのあなたが泣いたのは尤だ、大いに同情を表する（夜雨）

○雨の日姉のもとへ

草　子

雨！あめ！私はもう倦きました。サアと人の來るかと音たてゝ其のまゝふと消え去る秋雨の、母樣お留守で只さへの淋しさを、深く胸にゐれたるのおとなひは堪へられません。アレ又傘にあたる樣なあの響……這麼日、尋ねて下さる方もないとは思ひ乍ら、幾度たまされて立つたか知れませぬ。ふだんは皆から離れて獨考へてるのが好き、夫に雨も嫌じやないのですけれど、今日は無暗と母樣戀しく姉樣懷しく、針の手は兎角たゆたひ勝で御在います。ゆたかちやんもおんもに出られず。御玄關の障子につかまつてドン〳〵と泣き顏して居りませう？御相手して桃太郎の唱歌でも大聲でうたつて見度う御在ます。無邪氣の豐ちやんと遊んだら結ばれた心も屹度とけませうもの、ねえ姉樣？

マー、又激しい横降りが參りました、しめつぽい空氣の心地わるさ。脆いコスモスもダリヤも、莖は折られ花はくだかれ、花壇は見る影も御在いません、竹添えてやる丈の時間もないので、可愛相で御在います。

もう、私青い空を仰ぎ度く成りました、赤蜻蛉の群とぶのが見度く成りました。夫よりもつと〳〵嬉しいのは、晴天になれば母樣が御歸京遊ばす筈ですから、待ち遠しいので御ざいますの。

豐ちやんの御ひる寢の間にでも、一筆おもらし下さいます樣お願ひ申します。どうぞ〳〵。

あゝいつに成れば晴れますことやら……。

これも美文式のお手紙（記者）

○腹切勘平蟲

下館　醜花

「お末ちやん仲ちやん早く來なよ、おたよ〳〵」て柿の木の下で、はあやちやんが頻りに呼んでる。杉の生垣の中へ頭を突込むでゐた、お末樣と馳けて行く。「どれさ」て云ふと左の手を披いて見せた。クモのやうな形した腹切勘平蟲がムク〳〵動いてる。さあやつて見やうつて三人して「腹切勘平、腹切つて見せろ」とど鳴りながら、はあちやんが蟲の手を其腹にあてた、と見る間にお腹から水が出た。そら切た〳〵早くお醫師さん〳〵て地べたへ穴をほる。

久し振りで振り分け髮のいたいけなりし十年前を夢見た。慾には、懷かしい故郷の光景、はあちやんお末さんの俤をもつとはつきり見たかつた。誰れの家の庭だつたか、いくら考へてもわからない。「毒けしはよござんすかね」て來た。まあいゝでしよ、て云ふと「赤たまでも買つとくんなさいな、お安くまけときますがあ……ね」てしつこくてしやうがないから今日は默て見てゐてやつたら、先でもじろ〳〵此方を見て行つた。色の白い奇麗な顏だつた。後からもぞろ〳〵七八人行く。紺絣に黑唐天の衿のついた着物、皆同じ樣な風俗「まああなんなに何人も」て云つたら母が「もうぞろ〳〵越後へ歸るんだらう」て仰言る。暖かになるといつ來るともなく來る。寒くなるといつの間にか一人もゐなくなつて了ふ。春來て秋去る。まるでつばくらのやうだ。

午後、君子樣が見えた。相變らずしやれてゐる。而し美しい。よく世の中を悲観したく〳〵と仰言る方だ。いつか「五時のリボン飾りて化粧してよく死を語る君をば憎む」て書いて見せたら「私の事ぢやあないか」て苦笑したつけが、實際此君を作つたので痛快を感じたつけ。昨日届いた下谷の敏子樣の寫眞を見せる。「いゝことね、ほんとうにいゝね」と云ひつゞけて終ひに「貴女、こんど二人で寫さうよ」て云ふから「いや、貴女みたいな美人と一所に寫すと私がおさんどんのやうに見られますから」て云つたら「あら、やあだ、あんな事ばかり、貴女の方がよつぽと美人だわ」だつて、憎らしい。下谷の從兄さんに、お前の顏は鬼門よけ

の鬼がはらだよ、杯と云はれた程の醜い顔を、美人だなんて、お世辭にも程がある。あんまりだ。泣きたい程口惜しかつた。

「先生が今文壇をお退きになつて了つては、誌友の大半は失望して退いて了ひますから………」と眞心から申上げた言葉でさへ「女はお世辭が巧いからな」て夜雨さんは仰言つた。すれば世の少女子が云ふ事は悉く身を飾る偽りの言葉だ、歎ぎの言葉だ。悲しい。

夜與青な無花果二つ食べる。甘くもすつはくもなかつた。

腹切勘平蟲つて、袋々もでせう、くねの下やきやらの根などに袋を作つてかくれてゐる、五吋のリボンは名歌だ、が其いしゆ返しに寫眞ぢやまゐつたでせう。下館は美人の多いところである、醜花と名のりたまふはけしからぬ、女の言は悉く虚僞だと大義憤をおこしたかと思ふと、青い無花果を喰べる。(夜雨)

○事務室より

越後　田中まつ

電燈の點く前十五分、ちよつと閑散になるのが、いつもの例で御座います。

高原の穗芒を吹きからしたる風は默して靜かに眠りに入らんとする西の空、强い夕光線が、受付の硝子窓を斜めに、私の頰の半面を照らして、テーブルの上に白い斜方形が築かれました。

その白い斜方形の前に私は、ヂツとまじろぎもせなく、靜かに椅子に凭れてゐます。

やがて私は辨當をひらきました。

廣い事務室には私一人――今十五分、電燈が、パツとつく迄は私一人でありります。極めて靜かに、ひつそりと、只電信機械のサウンドと時計のセコンドのみ最も意識的に明瞭にひゞいてゐます。

けれども戸外は今夕暮れに入らんとして、雜踏喧騷を極めて居ります。

かうした靜かな事務室の中に、喧騷した夕暮れの巷を窓越しにながめて、夕照の斜光線の長方形のテーブルの前に、私は旅の辨當を味ひつゝ、お母さんの事を再び思ひつゞけました。

決して御心配くださいますな。からだは極めて丈夫に熱心に、事務をとつてゐますから――。

家鄕を出で立ちましてから秋は二度びめぐり來ましたと同時に旅に滿一年餘すごしました。

仰せの如く朝晩は牛乳を頂き、なるたけ不消化物を斥けてゐますから決してお案じないやうにお母あさん――。

お母さん決してお心配くださいますな。お同僚はみなよい人々ばかり課長さんも、係長さんも、みなよい方々でいらつしやいます。

はい決して虚榮虚飾、ましてや女にあるまじきおこなひなど決して致しませんから、決してお案じ無く。

「いづれ鄕里の方へ轉任の出來るやうに心配してあげますから――」と仰言るのですか。はい誠にありがとう御座います。けれども當局は中々によい局ですし、どこへ行かうと同じ通信界のためですから――。しかし鄕里近くに行ければそれ程よろこばしい事は御座いません。お母さんのお側は矢張りこひしう御座いますのです――。

ふとパツと電燈の光り――。机の上の斜方形は消えて、强よい、華やかな白光線が、室内一杯みなぎりました。

やがて私は再び活動に入るので御座いますからこれで筆をとめます。

書簡文と題してあつたが此んな書簡文はない(記者)

○湖國の夕

近江　よし子

久しくあはなかつた友にあふような思ひで濱へ立つた魚つりたさにそつと竿を持ちだして崖の上でつつてもつつても魚が掛らぬので夢中になつて姉樣にしかられたのも早や十年の昔となつた。

廣い野原も相かはらず草ぼうぼうで、大きな石のポツポツと三間程水の中へならんであるのも阪本屋の三がいも湖も山も三年前に見た時と少しも異つて居ない異つたのは近所の人たちだと思つた。

こと〱と動く石の上をふみながら美くしい湖の畔に感きはまつてぼうぜんと立つた。

緑の色美しき湖のしづみかけた弱い光に波のキラ〱と光る靜かな上にいくつとなくならんだ白帆が見える向面にうき出たようにぼうと見える近江富士、ふもとを通る汽車の黒煙ゆるう空にまひ上がる車は見えぬあの山を一つ越えればなつかしい故さとの古城が見えるであろう明日は又淋しい家に歸つて毎日同じ事を繰返すのである。初秋のつめたい風がそつとほゝをかすつてどこからかゆつたりとした舟歌が夢のように耳に入る、ふと足音に氣はつくとみちやんだ「今夜の市に姉様や私も行くでお芳様もお行きや」と可愛いゝ口もとで云ふ。

富ちやん滿洲へ行つたら皆の云事ようおきゝやと云ふと「あんた一人のこつて居るのえなあ、私行きたいないけれどお父様居るから行くのゑえ手紙出しまつさ」悲しさうに云ふ……。

あゝ湖も暮れやがて空も夜のぶたいに變らんとするときうすくらい濵に小さな人と二人手を取り合つて立つた私は淋しい。（膳所にて）

長曾我部菊子に聞きたるあふみの君なり、尋常四年の學趾は悲しむに足らず、學ぶに、關西三十三州の旗がしら井伊氏の歷史あり、月によく雪によく雨によく風によき四つの緒の海あり、君よ天のたまふ所を空しうする勿れ。（夜雨）

○暗き灯の元にて

越後　曉の花

黄金蟲が灯とりに來るのもうるさいけれどさりとて戸も閉されず灯影になつた後へ蚊遣火をして父の衣を縫ふ、白地浴衣の姿も何時しか少くなつた、破庭の木立に風がそよぐ、蟲の聲は猶つゞいた。

電燈よりはランプ、ランプも大きいのよりは小さいのとおひ〱に寂しい心地のせらるゝもの、熱も低い。此麼呆然した灯の下に何をぞそぞ動いて居るのか？——暗い心を抱いて——夏はわけて華かな灯がよい、美しい灯に憧れやすい、蚊はあこがれて意識せずして命を失ふて了ふじやないか、美しい最後、小さい肉は憧憬に充満ちたまゝ靜かに死ぬ、なんて頗る詩的だけれど燒け苦む現狀は見るに堪へない、酷た。

足音は賑はしい、ぞろ〱と肩を並べて電燈の光る夜の街を散策する人を見ると妙に悲しくなる、母には捨てられ同胞もなく、意地にすねた私はたゞ一人の父にさへ折々はそむいてみた、何時も父ははろ醉ひの機嫌に「和女が縫物なんかしてるのを見ると離縁したお母さんの事思ひ出す」と云ふては「後悔したつて追ひつかないさ〱」つていふては暗愁に閉ぢられる私はそれがお氣毒で背むいた心を恐ろしく思ふ、慰籍する語さへ出ない、十九の今日までもお顔さへ識らで來た不孝の子、母戀ふ涙のほろ〱と頰を傳ふて。出かけた父の足音がする、父が好む壺坂寺も聲ゆかすかにきこゆる。

事實なりや。事實ならば千波萬波日に動いて浩乎たる大海これを望めども々かぎりあるべからず、惜むべし（記者）

○淋しい秋

草雲雀

思はぬ人にはまた逢うた。

紅葉紅色のまだ薄い空の翠の秋だつた。

なぜ逢うたか私には解らないけれど逢うと云ふから逢つて見た。

幾度逢つたつて私の胸にはなんの感興も湧かない、別に熱いあつい熱湯をさゝれるようにも感じなかつた。

昔のような言葉をくりかへされても仕ようがなかつた。返事するさへものういのだもの。

にぶれ秋の落日を追うて春に別れた人を描いて見た。處は木立の繁つた公園の後であつた。梢の高い枝の間からすみ渡つた空を眺めた。木立の影は長く斜に淋しい影を引いてゐた。雨風に荒されたベンチはくちようとして僅にさゝへてる醜い姿、哀れなかただとも見た。自分の影は木と木の間にまたがつて長いのを見た、そして淋しい影だと思つた。

『操を立てる、お父様だつて不服じやありませんか』と人は云つた。

『あなたは昔から人を誤解していらつしやるけれど末を案じる御兩親のお心も思つてご覧なさい』ともいつた。思はないでもないけれど、思ふ

と涙がこぼれるだけだとおもつた。『なんと仰有たつて私には解りませんから、あなたはまじめに後の半生を送つて下さい』私はそれより外に云ふことを知らなかつた。

いつか通り抜けてふりかへつて見た木々の梢は青かつた、空の翠は遠い〳〵處の樣に思つた。それでも秋だ、淋しかつた。

妻を求めて笑顏で送るようにすゝめたけれど、つひに求めず人は世を去つた。木枯すさぶ師走の中旬に木の葉と共に散つてしまつた。と聞いた時は言へぬ思ひが胸に迫つて心から人を葬つた。また廻つてくる日がいやでならないようにも思はれる。淋しい秋だ。

夢の女は意識せざるヂニアスなり、『見るも夢さむるも夢』は純潔無比彼女にして初めて作るべし、何ぞや君の壺盧をゑがく。(記者)

○懷姙日記

橫濱　小田切錦子

八月廿八日。

日曜と云ふと朝寢に定つて居る。髮が綺麗に結へたのを、姉さんかぶりして、夫と一緒に押入の掃除にかゝる。

マー洗濯物の澤山出た事。お晝はお禮に大好物のてんぷらを揚げる。午後夫は本町の圖書館へ行く、其留守に私は大苦しみして、遂に二度まで吐いた、寶丹を呑んだけれど効がない、床を敷いて橫になる、直ぐ起るつもりで九時。夫は早く歸つて、どうしたのだ〳〵と聞くけれど、私にも解らない。

九月廿八日。

去月の今日から寢附いたのだ、少し起て見樣と思ふけれど駄目、彼日から一日として吐かない事がないのだもの。頰がこけて仕舞つたわと云ふと、少し面長になつた方がいゝぢやないかと夫は笑ふ、午後津田のねいさん五目ずし持つて來て呉れた、すぐ前で吐く、「隨分强いつわり病だわ國へ知らせたの」「いゝえ又取消しの電報を打つ樣ではと來月に延したのよ」「そう丁度三度目だものねけれど此度こそは私が受合よ早くよろこばして上げなさい」「だつてちつともお腹が膨れてないもの」「マア錦さんてば今つから膨れ出したら後にはお腹にもたれて歩けない事よホヽヽ」

十月十五日。

ひどい雨だ氣分はもう前と變りない五十日餘も苦しんだ夫は橫須賀へ河内の進水式を見に行く初めて二階から下りて玄關まで送つた「貴方小汽艇に乘るのはおよしなさいよ海が荒れでもすると大變だわ」「よし〳〵己も早くお父樣になりかゝつたのだもの危い事はしないよ」早くお歸りなさいと別れる。今夜は十三夜さんなのですから團子栗お芋などもらふ栗ばかり食た、夫は遲く歸る外套から栗がポタリ〳〵と落る、今日の樣子を面白く聞く父よりの書簡中、自今樂に且つ男兒の安產を只管所禱致居候とあつた。

彼も懷姙し、之も懷姙す、天下泰平、五穀豐穰…ETAMO SAKAETE HAMOSHIGERU(記者)

○誓文拂の夜

岡山市　野ばら

市着物とつゐの大島を羽織つて白の絹手袋はめた手に神戸の伯母さまからのプレセントのヴエール持つて空氣ぞうりの音かろう……榮町でまちかねのあまり出かけて入らした「ようちやん」に行逢つてまあ〳〵がはち合せしてしまつた、今日は珍しくカムレツトに結つて、わざときどつて黑のリボンふるへつきたいやうなお召のはおり召して松風おりのショールかけてらつしやるまあ何て人でせう、通るわ〳〵男と女と美しい人と醜い人と——それらの人がみな二人を、ふりかへつて行く、武屋のかゞみへカムレツトと桃われがうつつた「ようちやん」のような美しい人を親友に持つて本統にほこりだと思ふ。いつまでもよつて手を握つたら、うら若いほゝに、おさへきれぬ笑をふくんで强く〳〵握りかへすゆびわがいたい!

すなみで忘名草に眞珠の入つたブローチをおそろへに買つた、〇〇町で六高の××さんにあつた三日の運動會の通券下さる、別れてから散々冷かしてやつた。

○秋

信濃　優梨子

バサ〳〵して柿の葉が落ちた。赤い實は矢張り高い處に夕日を浴びて居る。「駄目だなア」ガチヤリと長い竿を捨てゝ、弟はがつかりした樣に其實を見上げて居る。サアーツト風が吹いた來て、落ちた葉がガサガサと舞つて行く。土藏の屋根に居た鳥が、つと其實をつゝいて垣根の向ふへ飛んで行つた。

○敗殘

澁松　白菊

一時、市民の死活問題に上つた數萬坪の鐵工場大敷地はついに敗殘の影となつた。晩秋の夕日は淋しく彩つて四方はたゞ希望なき枯野原、所々にはほゝけた芒の穗が冷やかな風に吹き散らされて居る。夕やけの空も何時か暮れて、暗の幕は靜かに靜かに包圍してきた。

○赤蜻蛉

淺草橋　ひなげし

赤蜻蛉が連なつて何處となく北へ北へと飛んで行く。秋晴れの眞晝、それをじいつと見ながら南の窓で何となく考へた。「どうしたの?」「……あの蜻蛉何處へ行くんでしよう……」「みんなね、北の國へ行つて死んぢやふのよ」。赤いリボンの友は淋しい戀にはしやいだ聲でいつた。

○傷手

牛込　平塚白百合

弟が雀を擊つた。ハタ〳〵彈受けた雀はもがいて二三尺地をはなれた。あれ程迄努力しても生樣とするのになんで只一發の傷手にかう世の中から死の群に入つてしまつたのだろう。お花見、否參りません。團子坂へ、參りたくございません。そうして門から一歩出やうとしない。哀れまれるとうるさくつて、放て置かれると、淋しく無暗に人なつかしい。とう〳〵又銀杏の葉がちる時となつた。

○午後

富山　淺井きよ

明るい日に向ふて、私と共に秋の庭もひつそりと沈默を保つて居る。隣家の松の葉をつむ音が、チヨキ〳〵と小氣味よく胸に流れ入る。遠くでポン〳〵と煙火の音が聞える。納屋の影にコスモスが白く咲きみだれて、めんどりが一羽、目玉をくる〳〵させてすつこんで居た。

○夕餉

熊本縣　いと子

一家九人が賑はしく夕餉の食卓をかこむとお汁には貝がはいつてゐて、此間祖母樣のお話に、眞珠は正月十五夜に何貝でも口をあけてゐると月の光がさしこむで玉になつたのだと聞いたのを思ひだして何だか樂みの樣で箸をとつたがそれらしい物もなかつた。

○後姿

西多摩　葭枯

陸稻を刈つてゐるとの斜な畑で三人の男が小石交の土をかへす鍬の音と紅葉美しい山で時々小鳥の鳴く外は人聲一つしない靜けさを破つて、ふと石垣の下に起つた雪駄の音を追うて道まで出て見ると、母樣の藥とりに忙がしいといふ靜さんの黃色な羽織の後姿がもうものかげに——朝露の乾いた里芋の葉が面ふる人のやうにくる〳〵とまはつてゐるばかり。

○病院

京都　久芳清子

明け方の長い廊下には幾つも電氣燈が如何にも疲れ果た樣に淡く輝いて、偶に行かふ看護婦の白い服が劃然と浮び出る。ヅラリと十人程枕を列べて未よく寢て居る三等室の隅の棚には苦さうな灰色の藥罎がとり亂されて其内の一つには燃る樣な赤いダリヤが只一輪倒されて居る。妾はつとそれに清い水を漑いで出た。

○猫

草雲雀

猫は膝へのつた。重みはすぐには感じないがちきに重たくなつて足はしびれる。ぽか〳〵と衣を透した暖みは心地よいものだ。足を崩して見てた女子又塩を巻いて「おまへの噂さがでゝるじやないか」とポンと一つたゝいてやつた。でも猫は平氣で……。

○四疊半

河合萩枝子

先刻から机に倚つて恍惚と、蜘蛛の行衛に見入つて居た姉樣の、物憂げに振向く白い顔を、寂しい夕暮の氣がスーッと微めて行く、底冷たい縁はしつとりと流れて……。末枯の枝に儚く殘つた紅小萩。ほろ〳〵と散つた。ア又散つた。

○淺黃と赤

金澤　むらさき

馬鹿！馬鹿！何が悲しい？あの薄情男に離れて何を泣くことがある？そのやうに淡い淺黃ばかりを見つめずに、もつと濃い赤がお前のそばに——眼の前にあるのがわからないのか？火のやうに見えるじやないか。お前をまださめさせたくない！

赤い色が、輝く。

○思ひ出

丹後　仲田品子

ある思ひ出！

疲れた私は暗い寂しい町へ逃れて、電柱へもたれて靜かに更け行く町を眺めて居る。低い平家の屋並が街を半稀黑う影で埋めて居る、電柱が離〳〵となつて居る、「電話が掛つて居る」と耳を當てゝ遊んだ幼な思出。あゝ寂しい。何處へ逃れようか。ニコライの鐘ならぬ鐘がこーん、淋しい町の沈んだ空氣に波紋を起した。

○鼻

ひをとし

「鼻の先に何かついてる」妙樣は眸を俯せて、高い鼻を婉然として見た、私を侮辱してるんだと反抗心も起つたけれど、限りない淋しさが、ひし〳〵と迫つた、くるりと後向いてそつと見た、見える、矢張り頬が平行して隆起してるのが。

女としての弱者だ、私は。

鼻が氣になる。

○廢校

京都　森本俊子

晩秋のうら寒い風は、森から森へ、葉を散らしながら、ざわ〳〵と吹き渡つてをる。夕陽は斜に、壞れかけた廢校の白壁を彩つた。五年振の懷かしさに近よると、おぼつかない筆で、先生の惡口をかいた跡が、おぼろげに落ちかゝつた白壁に殘つてゐた。

しみ〴〵と再び見返つて去つた。

○初冬

土佐　横山まつ子

冬が來た。

黃色になつた桑の葉が、カサカサと落ちて、唐がらしが眞赤に熟れた畑に、生殘つた蟋蟀が、チチチと寂しく鳴いてゐます。其哀れな聲！

お父さまは、「今年も芋は豐年だ」と申されました。

○娘と母親

大分　岩田登代子

娘と母親は沈默つて針を運ばし續けた、「お前はわたしの若い時に、そつくりだそうだよ」母親はしみ〴〵と娘の顔を見ていたが、かういつて眼を細々した、娘は窃む樣にちらと母親の顔を見た、然し又ぢきに、顔をそむけた瞬間!! 恐怖反抗の色が明るみから暗い所へ走つていつた。

憎惡の念！

○さふらん

雪子

机の上に可愛らしい鉢植のさふらんが置いてある。母樣が知新園で買つていらしつたのだ。枯らすまい、餘りのびさせまい、形よく花をつけ樣と心配してつくらんでも、これがたつた一錢每年買つて來て見るに限るよと仰つしやつた。

私も然う思つた。

○私生兒

大阪　かつら月

「おや可愛のねどなたのお子」つて尋ねたら絹子樣は眞赤なお顔まー惡い事を言つた者だ 私は人から聞いて知つて居るくせにでもお生れなすつてから初めて逢つたんだもの 話を外へ轉じようと勸めたが急に出なかつた。

母が不幸か、子が不幸か。

初作

○野菊　（天賞）

大阪市西區
靭中一の七五　吉田　うすい

可愛らしい、優しい、野菊の花が咲きました。庭のすみの薄紫の花、私は詩的な花だと思ひますの。ほんとに床しい可憐の花！

丁度去年の今頃でした、或る君にさそはれて、近村をさまよひました折、はからず目についたのは此の花でした。路途に立つ石ぶみの根に、さびしう咲いてゐたのを、此の小さい庭の飛石の根にうつし植ましたの、枯れもせず、今年もこのやうに去年におとらぬ可愛いゝ花が咲きました。私は秋の七草のうちで野菊の花が一番すき。毎日私の友として愛してますのよ。

（評）その野菊のやうな文章です。

選者附けて言ふ、初めての投書として來たものゝ中には、此作より遙に上手な、老巧な、氣の利いた、立派な、堂々たる文章が澤山ありました。然るに、選者がわざ〳〵此幼稚な一篇を拔いて天位に推擧したことに就いては、一言を費さねばなりません。

一口に云ふと、他の多くの文章は、初めての投書らしいにほひがしないのです、もう幾度も方々へ投書した經驗のある人が、初めてのやうな顔をして來てゐるのです、それでは此欄をわざ〳〵設けるわけはないのです、此欄は何處までも、初めての投書家、乃ち初めて文章を書いて出して見たといふやうな方の爲に、紙面を與へたいと思ひます、上手な方は却つて此欄では落第するかも知れません、勿論選者はわざとへたな作を採用する理由もありませんが、上手らしい方は此欄に來ずとも外の欄へお出しになつた方がためになります、いくらでも上手な作を採用します、此欄は何處までも初心者といふことを標準として、初心ではあるが、文の素質が好いとか、見込のあるとか云ふ方のを採用しますが、だから餘り文字を上手に使つてあつても、下の方へ落されるのは此理由です。一度此欄へ出た方は、二度目なほ今一つ、序に言つて置きますが、一度此欄へ出た方は、二度目からは出せません、別の欄に出して頂きたい、別の欄へ載せるやうになるにはなか〳〵骨が折れるでせうけれど、しんぼうして、やつて頂きたい、記者は一度此欄に出た方の作物は、例へ投書になつても注意してみてゐやうと思ひます。

○大原寂光院にて　（地賞）

京都市淨福寺
今出川下ル　河原　撫子

クラシカルな大原女に、度々道をたづねながら、十一時過寂光院に着きました、美しい若い尼樣が御寶物の說明をして下さいました、本堂の柱に後白河法皇の御幸ありたりとあるので、何時かの晩に父樣に伺つた大原御幸を想ひ出しましたよ、この寂しいお寺に獨りでゐらつしやる尼樣に、何かローマンチツクな、物語でもありさうにおもはれてなりません、これから三千院に參ります。

（評）大原寂光院と云ふ場所を寫すのに、クラシカルとか、ローマンチツクだとか云ふ言葉のあるのは、一寸新らしい興を惹いて、面白いです。

○人形町まで　（人賞）

赤坂區青山南
町六ノ一二〇　小野崎　多枝子

今日は戌年戌月戌日の水天宮である。六丁目から電車に乘つた、もう滿員である。一丁目は黑山の人、我勝に乘らうとあせつてゐる、割引であるからなほこむ、私は苦しくて首を動かす事すら出來ない、電車がゆれる毎に、なだれを打つてよろけてゐる、其度に帽子を落したり、足を踏まれたりする人がある、車掌ものぼせたらしく一部の人が乘換を請求しても皆人形町かと思つて切らない。商人風の人が大部分を占めてゐる、白粉と油の香が鼻をつく、妙に一くせありさうな婆さんが、人の顔をぢろ〳〵見てゐる、どかうと思つたが足を踏まれてゐるので立つにはたゝれず、しまいに私の膝に腰をかけた、

思は痛いし泣きだしさうになつた、日比谷に來たこゝも赤黒山だ、乘れないで停留場から一丁も前から、ずらりと列をして飛びのりをする、年寄はとても乘れさうにもない、私は二時間も待つてゐるのですから、只そこに立たせて下さいと哀願するのもあはれだ、時間がたつ程増す計り、車掌のはさみをまげに透されて、とれないで嫁さんらしい人がなきさうだ、皆一度に笑つた、運轉手もすみの方におされてゐる。私をそんなにおしては車は出ませんとどなる。

銀座に來ては又一しほ、いよ〳〵苦しい、早く苦しい域から逃れたいと思つた、其他の停留場は素通りだ、皆後見送つてうらめ〳〵さうに眺めてゐる、人形町ですから支度を願ひますと云へば、皆一種嬉しげな笑を見せて、我がちに降りる、群集は潮の樣で一歩も踏み出す事も出來ない。混雜であらうとは想像して居たが、意外なのに驚いた。

（評）混雜したる電車の樣子が、かなり面白く書けてあります。

○獨りの夜

栃木 すゞき

お父樣は御用で御留守、弟は早くねたし、大きい廣い此の家の中に私獨り。一綴りの本讀み了へた、爹なべのかゝつた爐の火は消えたらしい、あてもなく本くり返す一寸の間、キシ〳〵ガタ〳〵、急いでランプをはづしたけれど、まだカタ〳〵とほやと、かさとが、すれ合ふてる、こんなに長かつたことはないのに、立ひざになつて居たけれどやつぱりまだカチ〳〵と。

分つた〳〵地震ぢやない、私が震へてゐたのだつた、ほんとの地震はとつくに了へてしまつたのだ。

勝手の方でキシリと音がする、はつと思つたけれど何の音か、おそかつたー、家の周圍の如何なるものもきゝもらすまいと耳をすましました。と頭の上で時計が長々しくもなる、數ふると十一時、今の中にどこにか音がしなかつたらうか。ぶる〳〵と身ぶるひする、寒いせいもあるだらうけれど。もう動けぬ、本の頁もこつそりはぐ、出てくるせきものみこんで私はたゞ耳をすましました。

（評）恐い感じが率直に出てゐます。

○思出て

長野 黑澤春子

今日の雨、昨夜の風に、一葉二葉と散り亂れていつしか信州の秋も寂れて終つた。まだ雨が止まぬのか、ぽち〳〵と軒打つ雨だれの音が急に烈しくなる、ざあーと思出した樣に强降りになつて後はどーッとからつ風が格子にぶつかつて又ばら〳〵と木の葉が散る。ア、淋しい夜だ、丁度昨年の今頃だつた、雨こそ降らないけれど、恁麼晩だつた。兄樣のお歸りを待ちわびて故鄕への手紙を書いて居た、都の十時勸業場の人足もやゝ靜まつたな、と思ふとけたゝましい時計の音に我に歸ると、サラ〳〵とペンの走る音が我乍ら寂しかつた、「戀—辻占—」と夜の寂寥を破つて谷底へ引入られる樣な女の一聲、再び夢から醒めた樣、草葉にすだくすゞ虫のそれより尙振付き度い樣な好い聲だ、バサン〳〵聲に似逢はぬ草履の音がして今家の前を過ぎ去つたらしい、私は机の上にペンを落した儘失戀に泣く女の樣に悄然として憧憬れて居た、セコンドの響と共に足音は段々遠ざかつて町へ出たのか「—辻占—」と闇の森から響く松風の樣に聞えた、チャラ〳〵と雪駄の音、續いてプウ〳〵ほうづきをならして窓下を誰か通る、プーンと强い香水の匂が流れ込んだ、もう十一時まだお兄樣は見えない、勸業場の爺さんが小路の戶にガタンと錠を掛けた、折柄「鍋燒—うどん—」と寂れた爺のよび聲、何と無く人生の悲境を訴ふるかの樣だ、チリン〳〵と格子戶の明く音がして、いきな女が呼び止めた、朧私は、此人達と泌々語つて見度い。頭が痛い。枕をもたげて寢返りした。ペンチャン〳〵艷つぽい三味線の音、金の人の叫び、浮男の俗歌が入り亂れて大分花が咲いて居るらしい、父母遠き身には獨りお兄樣の平和な寢息が忘れず懷かしかつた。

バサン〳〵と重たる氣な芭蕉の音がして……一年の樂しき過去を夢見つつ、不知——筆を走らせた。

朧、多情なるは都の夜、趣味無きは田園の生活、ア、神よ、只私の近き

將來は……。

（評）個性のない文章です。餘程苦んで書いてはありますが――。

○日曜日

埼玉　白ばら

樂しい日曜はめぐつて來た。束縛をはなれた自由な日、思ふが儘に過去を追憶して獨りほゝゑむのが私の例である。

今私は雜誌片手に、秋の日の明るくさす椽にでた。高い天……青い空……どこを見ても秋……私は思はず秋と叫んだ。

どこでか百舌鳥がしきりになく。思はず、其方へ視線をむけると、庭の柿は赤く熟して秋を告げてゐる。あ…秋…あの赤い色がだん〳〵こくなつていよ〳〵秋が深くなるのだらう。そして又寒い木枯にあつて、葉が散る、新芽を出す、青葉涼しい夏が來る、そして又赤い柿の秋となる。

あゝあの柿はそれを幾度くり返したらうかと思ふと何だかあの中に私の歴史がおりこんであるやうで、古い記憶が頭の中で走馬燈の様にくる〳〵まはる。

まづその一頁には、振分髪の其頃やさしい祖母様に抱かれて「ねよ」との歌を歌はれた事から、あつい夏の日をあの木蔭にさけて、おとなりの文ちやんときれいな草花を紙に包んでまゝごとをした事など、あゝみんな昨日の様に思はれるが、あゝあの可愛かつた文ちやんは、もう此間二人の母様になられたとか。今こんな事を御話してもきつと覺えて入らつしやらないだらう。けれど變つたのは文ちやん御一人ではないらしい。うちの祖母様の御腰もいつの間にか弓の様になつたし、おさげに赤いリボンの可愛かつた私でさへ、まあ母様より脊がのびて生意氣にも、世の荒波へ船出してゐるのだとはまあ自分ながらをかしい。して見ると獨り柿のみ變化がない、毎年〳〵同じ様に赤く熟して秋を告げる。あゝ柿の身が羨やましい。

（評）可もなく不可もなしで及第。

○病院通ひの一日

和泉　都子

電車はギッシリつまつて住吉から立ち往生のまゝで濱寺まで運ばれた、お蔭で一番先きに出ることができたので急いで向ふのプラットホームのベンチの片隅に腰を下した。發車には四十分も間があるので女子文壇を開いて讀みかけると横合から「モシ〳〵姉はん」といふ聲に返事もせず相手を見ると、茶縞千筋の手織の着物の裾をからげて、紺のもゝ引きの洗ひはげたのを得意らしくみせてゐる、年は四十を五つ六つ越えてゐるらしいやせた男であつた、「頸にきれまいてんのグリ〳〵できてんやすけ」見しらぬ人が何をいひだすのかと思つたが、思ひ設けぬやさしき慰藉者であつた「はい」と答へると「さうケ、うちの妹もな、それでデーケイ難儀してますんや、一昨年な、大阪の病院できつたんやよ、ほれにな、またこの春から大きに腫れてな、西京の病院できつてもろて、それからまだいまにぶら〳〵してんや、こないだからな、胸が痛いちゆうて寢てますんや、もうやせて〳〵ナ、こんだもうあかんやろちゆうてんや、丁度おまはん位な年でな、去年十九で嫁子もろたんやよ、可哀さうでナ」としまひはおろ〳〵になつて涙を目にいつぱいためてゐる、思はず私も涙がこぼれた、病める人、おなじ年頃の若い娘どんな境遇の人だらうと考へたがもう其上を問ふ勇氣はない、おなじ病に苦しむ身深き同情はよせながら其兄なる人を慰むべき適當な言葉を見出さない。無言のまゝで自分の身の不幸を繰り返した。こんなに病院へは通つてはゐるものゝ今に私もその娘のやうになるのではあるまいか、私はかまはないけど、たつた一人の母様にすまない――熱い涙は止め度なく頬を傳ふ、折柄ピーッと鳴つた汽笛にふと我に返つた。

（評）上方言葉の描寫は思ひつきでしたが、少し實際と違ふやうにも思ひます、よく注意して描寫してごらんなさい。

○投書

丹後　たみ子

これで三つ目投書し様と思ひ立つてから幾日になるか、これこそ出して見様と思つてさて二回三回と讀みかへして見ると、こんな物投書したつて到底駄目だと心の何處からともなくいひだす、それじや一層もう投書

なんか思ひ切らうと、すぐに折角苦心に苦心を重ねて作り上げた文を苦茶〳〵にまるめて屑かごに放りこむ、とかうしたのが今日迄に何回あつたか、今度こそは〳〵と思つて貴重な時間を——學校の復習も忘れて——費してさて作り上ると右の通り、もう自分ながら、あいそがつきて今日まで思ひ切つてゐたが、つく〴〵思へば何でも物は試つて事があるからと、曾て此校へ入學する時、試驗に躊躇する私を、祖父がいましめて下すつた事があつた、それを思ひ出して覺束なくも筆をとつた。其時から作つたものが三つだけど一つとして自分ながらこれはと思ふ程のものがない、時間はと見ればはや十二時、すると、これしきの事に三時間を費して居る。

もう皆寢靜まつて、時々鼠の走る音ばかり、思ひ出した樣に木枯が激しく戸を打つ。

早く作らう〳〵とあせればあせるほど、尚思想が浮ばない、やたらに筆先をかみくだいて居ると、不意に私の袖を引く者がある、びつくりして振むくと、五つの妹が目をこすり〳〵

「姉ちやんまだねんねしないの」

「あゝ姉ちやん、も少したつてからねんねするから、久ちやん早くおやすみ、寒いから風邪ひきますよ」

「だけど姉ちやんねんねしないとあたし一人で寂しいわ、美ちやん(二つの妹)は母ちやんとねんね」といかにもうらやましさうに一寸次の間をふりむいて「よう姉ちやん」と袖をぐい〳〵引く。私は何だか可愛さうになつて、つと筆を投げ捨てゝ床にもぐり込みました。投書の事も何も忘れて、次第〳〵に氣が遠く〳〵、妹の手はだん〳〵ゆるくなつてまゐります。

（評） 何でも物は試しだと、全く其通りです。



どうぞ　　陸中　李花女

○お松樣に

たみ子

お松樣、蘇芳色をした可愛い花がホロ〳〵落ちる頃で御座いましてね、綠したゝるアカシヤの青葉の蔭に花莚ひいてお裁縫いたしましたのは。あそこが昨夜の風に落葉で一ぱいになりました。ハラハラと只故もなう散る紅葉黄葉の中にも逝く秋の名殘が止められてあるのでは有りますまいか。北の國の秋は唯寒むいとより感じなかつた私も、今日は染みじみと逝く秋の寂寥を胸に覺えました。あの風の中を峰夫樣がゐらしたので久し振で歌留多を致しました。母が松年……とお讀み上げなさるや其お手の早いこと、私の所に飛んで來て「しめーッ」と、綺麗なそして張りの有る聲と共にポンと其札一枚だけお飛ばしになりました。それはお美事な者でした、木の札です者勢がありますわね、幾度致しましても決して「松」許かりはお見逃がしにはなりませんでした。何故で御座いませう、エ？お松樣、お嬉しくはゐらつしやいませんか。日曜にでも御出掛なさいませな、淋しい町でも峰夫樣の御宅が御座いますよ。エルムや柳の、音もなく散る木の葉がくれにチラ〳〵見ゆる白壁の家は誰方の？落葉の上をお得意の芝笛口に荒らゝかに歩み玉ふよと見

れば、それを打ち捨てゝ暗色に重苦るしく暮れて行く空を思はしげに仰ぎ玉ふ君は誰で御座いませう。

私の部屋からは良く見えますよ、けれ共人がらに見ゆる其お方が、時折林檎畑で大きなのを立喰ひ遊ばしてるんです者私はお可笑くて、全く本領發揮ね。アラ御免遊ばせ、蜂夫様にはシークレツトで御座いますよ、宜う御座んすか。ぢやさやうならつしやいましね、きつと。

（評）斯う云ふことを書いて嬉しがらせたり、嬉しがつたりしてゐるのが女と云ふものでせうか、これもない〳〵。

○錦江城下

ちくさ女

玲瓏一碧、秋の空は澄み切て、菊の花びら程の雲も浮いてゐない。稲田は收られて錦江城下に秋は更た。

例の通り十疊の間で私一人お裁縫する。今日も又淋しい波の音が、胸に沁みるやうに響いてゐる。

生れて今日で五十日、酒倉の二階の暗い〳〵わらの上で育た小猫は夕べ親猫が連れて來て、炭のひき出しの中に、寢かして居た。白く美しかつた毛が、薄黒くなつてゐる。日あたりの良い南の椽へ坐蒲團しいて、乗せてやつたら、互ひに長い尾にそばへながら、飛びまはつて悦んでる。日光の這入らない眞暗な天井から降りて、初めて此明るい暖かい日の光りを見た時どんな感じがしたらう。白い山茶花や、紅い楓や、青い木の葉をみた時、何と思ふたゞらう。

お腹がすいたらうと思つて、お魚をやつたけど、見向きもしなかつた。今は親の乳より可味しい物はないやうに思てるけど、も少ししたら、戸棚のすきから、魚引き出して食べるやうになるだらうと思ふと、厭な氣がしてならない。

私なんか此小猫位な時分から、慘酷な運命の手に囚はれて居た。二歳の時母に別れてから、乳ある村人にあづけられたり、義理ある祖母の世話になつたり、二人の継しい母の手にもかゝつた。なさぬ身の母から、母らしい愛を受けやうとは思はなかつたけれど、父から斯く冷遇されやうとは思はなかつた。弟が出來たもの、私が父と呼ぶべく、餘りに若かつた。常にひがんだ、猜疑の眼を以て、一寸の出來事も見落すまじくにらめてゐる母の側より、薄い祖母の袖の下の方が、まだ遙かましだつた。

あゝ馬鹿なツ！お前には過去の追想は、大禁物ぢやないか？そうです、禁物です、けれど忘られません。

私の十八の生涯は、涙の歷史です。仰いで、あや霞棚引く春の野を眺めた時も、俯して蟲の音を聞いた時も、私の胸からのぞく事の出來なかつたのは、母の事です。

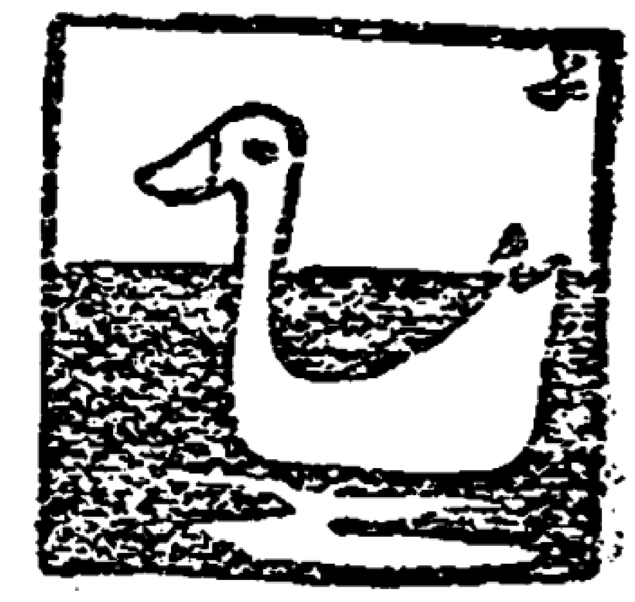
夜ランプの火を小さくして寢てると、何だかガサガサ云ふので、起きてみると、新聞紙の上をどこから這入て來たのかこほろぎが這ふてゐた。

（評）文章に味ひがあつて、何處となく人を引きつけます。

○鴨綠江

朝鮮　安部茂之

御隣りの坊ちやん（犬の名）を連れて鴨綠江の岸邊に遊ぶ、空は高く澄渡つて、ちようど綿を切つてなげつけた樣な雲が、はるか義州邊りの山の上にのぞいて居る、太陽は弱い光りを水面になげて、川の中に影を寫して居る、どす黒くにごつて居る水は、絶ず吹て來る冷風に、大波小波を造つて、岸邊の淺瀬にチャブン〳〵と音をたてゝ居る、山向うの高い元寳の山、ひくいが眺めの好さそうな珍高山をひざまづいて見て居ると、元寳の山の麓の方から支那人らしいのが、中腹に有る赤い寺をめがけて昇つて行く、お寺の屋根に白い小いものが見える、何であらうはとであらうか、アー飛んで去てしまつた、珍高山の寺の方から白い着物を着た人が、トボ〳〵と降りてくる、こんどは日本のお坊樣だらう、枯木立の中にかくれて了つた、川口の方で黒い鳥が輪をゑがいて飛で居る、いくつも〳〵重り合つた山のはるか向ふに、黒煙がうつすりと見え出した、汽船が來たのだ、どこからであらう、坊チャンはと見ると、後ろの方にチョコナンと座て水の動くのをまたゝきもせず見つめて居る、そーと抱き上げ歩き出した。町はづれに見ゆる黒板べいの小さい家を目あてに。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　西多摩　三ヶ島葭子

土つける木の根には似で美くしき落髪なれば櫛にかゝるか

○（地賞）　深川　佐久間貞子

むらさきにあざみ枯れゆく野の井戸の石のくづれに霜白くおく

○（人賞）　うき雲

戀するは培ひおきし花みなを神にさゝげてひとやに入ることと

佳作

○　丹後　伊志子

凩のものもわかたずひたぶるにふくが少女の身にかなしかり

○　神奈川　木村涙花子

人氣なき緣の雨戸をとざすとき春の夕もかなしかりける

○　尾張　佐分華影

菊に立つ帶麗はしき人そろふ重陽の日のものゝめでたさ

○　京都市　松木絹子

うなだれて歩む少女は姉に似て二十ならずて死なむとすらむ

○　芝　やよ子

梅もどき赤く小さき玉あまた君がかざしにつくりつゝ居る

○　德島　吉田紫花

少女子は紅絹の袂をのぞきけりしら玉椿うれしきがため

○　周防　屋根の草

海越えて吾れを迎へに來給はむ若人ゆめむ去年も今年も

○　牛込　平塚白百合

霧あはく秋の野草にふるころと思ひてありぬ山のゆふねに

○　京都府　竹村槇子

空俥のろく歩みて街の夜はあけ方近くならむとすらむ

○　會津　樋山伊勢子
わが心やがてこのごと黒雲のかたちとなりて天ゆくらむか

○　千葉　松崎きよ
悲みの世界に生くる少女とはいつよりなりし人見し日より

○　北海道　田山きよ子
戀なれば妬む言葉もうれしけれさうびの花のとげあるごとき

○　德島　野菫
鈍色の日の空古き日記の日に似るとしてゝろふるはす少女

○　福島縣　伊藤德三
ながめやる夕べの雲ぞ面白きよろこびの色かなしみの色

○　大阪　杉山かし
ほろびつる昔の戀を語るごと雨の小路にたんぽゝは咲く

○　鳥取　櫻草
秋風に木の葉こぼるゝ神木の空洞にもたれ物思ふ我

○　三重　きく子
この二人思はれ思ふ身となりぬ寄々にたゞ嬉しきものか

○　森こひし海こひしとぞ云ひつゞくわが二十とせの淡きかなしみ　土佐　秋のはな

○　我を見よかたちめぐり火ぞ燃ゆる戀亂ずこゝに來給ふや否　出雲　長崎君子

○　賜へるは一期の病さらにまた君を忘れぬ清き苦しみ　島根　むらきき女

○　秋の日の冷たき風は小柱の前に立つ子の髮亂しつゝ　新潟市　水澤蝶子

○　夕ぐれを桐の葉落ちぬわれに似るこの秋のおとろへ見るがかなしき　岡山縣　わかば

○　コスモスを愛でにし兄はコスモスのしぼむころより旅に出でにき　愛媛縣　山口たけ子

○　風や髮みだしたる狂人がほゝ笑みて行くさびしき夕　上毛　小澤碩子

○　秋空に悠かにとぶ白雲のかなたに見ゆるかつらぎの山　大阪　宮田玉紋

○　忘れえぬ中の一つの蒼白なる小石見いでぬ手箱の中に　京都市　松原きぬ子

○　冬の月われとひとしき罪の子が青きうれひにすゝり泣きする　讃　桃色

○　冬來る日南の緣にたゞ獨り立ちてしあればさびしくもある　岡山市　池田園枝子

○　かへり見ればわが來し野邊はことごとく花ちりはてぬあはれなるかな　横濱　小豆澤しげ子

○　いと多く男の子の來りわが胸に矢を射ると見る春の夜の夢　京都市　久芳清子

○　白鳥の羽の如くに淡雪の梅にかゝるが面白きかな　丹後　河村まさ

○　わが二十紅をまじへぬ衣まで秋の夕を野に泣きにゆく　富山市　淺井きよ

○　大阪　田野しか子

白雲のあとなく消えて朝日さし梅の林に鶯の鳴く

○　札幌　安達茄女

死の色ゝ曉秋の野にわれおきて肩ふるはせて日は沈み行く

○　群馬縣　美登利

見あかねば又もよみゆく玉章をそしらぬ顔に春風は吹く

○　新潟縣　岩井常子

初夢のをかしかりしを語るなるわが妹のはにづらふ頰よ

○　大阪　田野靜子

見る限りふる雪深き山里も君としあればのどけかるかな

○　北村翠子

何故に戀しと君は宣ふや心の病知らぬのみかは

○　三島曉村

秋の夜の村雲に似る吾が心西す東すとがめ給ふな

○　土佐　霞子

黑髮をきらんとなせば人ありてわが手を止めつる夢を見しかな

○　美濃　赤尾梅香

なさけある母のみひざにいだかれて夢をむすばむ日はまたなきや

○　大阪市　辻井信子

春來り櫻草もて花輪あむ君のさゝなど思ひて笑みぬ

○　埼玉縣　紅き花

夕ざれば放ちの髮の少女子は小窓によりて物を思へる

○　愛知縣　井村操

やがてこむとしのはじめに歌留多しておしろいぬらん憎きおん顔

○　信濃闇

せつなげに黑き息吐く煙突の上に默せる冬の空かな

○　淡路　濱田留子

少女子が針の手止めて目閉づれば木犀香り追憶のうく

○　山梨　吉田邦枝

またもなききよき少女とほこりかに云ひしその日のなつかしきかな

○　深山木

翁ひゐて思ふことをばひめず云ふまでにこゝろは君に馴れつゝ

○　熊本縣　山口靜惠

歸り行く片帆おぼろに暮行きて入江は寒しきさらぎの春

○　大阪　日高利子

おそろしき心なるかな僞と知りつゝ君が言の葉をまつ

○　伊豆　渡邊やす子

月清く秋風寒し今よりは遠き戀人悲しかるらん

○　伊豫　渡邊文子

この思淸く匂へる白菊に似たりとばかり文にするかな

○　石川縣　宮本登美子

あはれにも三年の秋を過しけり寂しき山の奥に住むひと

○　西茨城　田村波津子

裸木にきては鳴き合ふ鳥などもをかしとめでぬ冬籠りして

○　京都市　なでしこ

瓦斯の灯の青く照らすが嬉しけれ語りて胸のときめく時に

○　滋賀縣　林定子

ものたらぬ思ひこそすれ君と呼ぶほかに親しき言の葉なきを

○　長崎市　永井圭子

紅葉せる山の夕影美しき旅の夕は家も忘れぬ

○　京都市　うた子

あはれにも戀にもたへて病む人を君は知らずや花など給ふ

○　大阪　菊代

けふの後なやみつくらじかくとしもちかひはしつれ君をこそたのめ

○　札幌　たみ子

夕榮に紅葉あかるき木の下にうきこと忘れうたへりし少女

○　横濱市　村上美枝子

いつになく君はもだして物いはぬ淋しき日なり秋に入るらむ

○　本所　林白愁歌

火の如き心を受けて天地に獨り生き居る身を思ひ泣く

○　豐後　菅原芳子

うらわかき命ささげて思へるを別れむなどと口癖に云ふ

○　丹後　竹田雪子

少女てふよき名もいつか消えぬべき其の日かなしむおろかなれども
○　千葉縣　松ケ枝雪子

冬の海世の戰ひに勞れたる人の瞳に似てさびしけれ
○　札幌　幸坂隆子

我姉はやせにたる頰にほゝゑみを浮べてわれをむかへ給へど
○　明石　落葉子

孤兒の悲しみしらでわがへたる二十の家を出でて今日行く
○　筑前　笹つゆ

霜冴ゆる夜は月さへもつれなかり風の寒きに人のくるやと
○　千葉縣　板倉純子

初年の光の色のさしそへて寒しともなきしら梅の花
○　朝鮮　酒匂美子

あかつきの天つ御空に照る星はわれの心の道しるべせよ
○　山梨縣　澁谷とみ

秋の雨いつしか晴れて夕ばえの枯野をいそぐ鳥のうつくし
○　大阪市　山中百合枝

秋の野に遅れがちなる足弱のわがまゐらずる小き花束
○　横濱市　清きいづみ

わが胸は夜毎に瘠する月影の凍れるがごと冷たきがごと
○　伯耆　新田文子

そが外にまた人見じと閉きしより曇りし鏡きよらになりぬ
○　奈良縣　田村みどり

春をかし夕の籔に小狐の親をたづぬる聲をききつつ
○　福岡縣　眞砂

霜の朝手に持花の間より力もなげにこほろぎとびぬ
○　靜子

かずかずの思ひ出つくるくらがりの窓に來てなく夜の鳥は何ぞ
○　名古屋　加藤花子

ものにあき庭に出づればしら菊の一もと立ちぬ少女のやうに
○　會津　桑原仙子

さまよひし夕の岡の金色のいてふの中に灯の一つ見ゆ
○　福岡縣　角銅ゆきえ

魚をつる篝火消えて川岸に少女の如く朝の月ある
○　淺草　夕月子

思ふ事書かずと云ひて文のはし白きにゑがくダアリヤの花
○　惠子

わが友の人に嫁ぐ日我はしも呪はれしごとダアリヤを見し
○　石川縣　哲女

われ起きて魔のごとたてる山の森見てなく故も病みたればこそ
○　羽後　三浦ふみえ

蓼の花小雨の中にほのみゆる灯火のごといくつか立ちぬ
○　千葉縣　石井せき子

くだかけの啼聲いとゞ新らしく思ふもをかし元日の里
○　府下　竹内美津子

親兄も我に許せし君逝きぬ十九のやくのうらめしきかな
○　沼津町　山内花子

たからかに歌を歌ひぬ夕ぐれの赤き雲見て青き山見て
○　備中　西玉子

あゝまたも泪ながるゝかひなさよこのしらがねの笛吹き止めば
○　靜岡縣　富永ふみほ

雨の夜の萩の花散る奥庭のあたりに冬は來てやあるらむ
○　新潟市　吉田ひな子

春秋も分たず泣かん女てふ性をゆづりし母のおくつき
○　羽前　伊達まつ子

わがよわき胸は都のものうくてさびしさびしと夜毎文かく
○　府下　國分常子

四辻の自働電話に人よびてしづこゝろなく居るは誰なる
○　金澤　むらさき

ましろなる髪そそけたる媼らにかこまるゝ如落葉をおもふ
○　山口縣　椰其美奈子

みぞれする夜はわがしらぬみなしごが河原に泣くとをしへられにし
○　一枝

壁の上に白き髑見えて秋風に不二のおん山肩よるはしぬ
○　千葉縣　板倉みつ

くれなゐの梅の梢にふる雪はいろさへ香さへそむこころする
○　横濱市　千鶴子

夕ぐれは几帳のかげにものおもふ古人もおもはるるかな
○　大阪　かつら月

黄昏るる日ともろ共にわがいのちほろび行くをば知るがかなしき
○　土佐　重子

日はかなた伊豫路に落ちぬあはれなる秋の夕をわれ野邊に立つ
○　羽前　草玉萩

きさらぎや木に啼く鳥の聲聞けばなにとはなしに物たらぬわれ
○　諏訪　紫子

うらぶれし身にもあらぬにかにかくに涙流して憐みを乞ふ
○　宇都宮　八木澤りん子

星の夜にひとりたゝずみ歌ふ時身さへ魂さへいと清かりき
○　岩代　もくせい

おばしまに遊る涙なき身をもたせつゝコスモス渡るそよ風を見る
○　麻布　まろきぶね

初戀のわが胸の戸をひらくべき尊き鍵は神の手にある
○　齋川幸子

時ありて別れのありてこの戀のたのしと君は告げ給へども
○　上毛　森子

落葉踏み物聞山の夕ぐれに落栗拾ふ里少女ども
○　草雲雀

ゆめなればさめしあしたにかなしさの殘るならねど涙ぐまるる
○　三重縣　長井曉子

寂しさを如何に忘れむ別れ來し灰色空の目の前にある
○　神戸市　綠髮子

堪へがたき心の痛手かなしめる少女は家も都もすてぬ
○　濱松　平岩白菊

悲しかることの多くを歎きえぬ冷たき性と生れつる子よ
○　▲B

愛らしき小鳥の如き人なれどあはれつばさのいましめらるる
○　麹町　島白灯

店のさき瓦斯の光に輝ける秋の木の實をめでたしと見る
○　長野　白い花

冷けきくさりにわれはつながれてありと思ひし昨日のひがみ
○　横須賀　猪狩ふぢ子

黄昏るゝ秋の枯野の細道を僧の如くにわれ過ぐるかな
○　大阪市　夢園萩子

あゝわれは少女の街のまがりかどまがりてここに人妻となる
○　近江　須川しげ子

こは夢かまたは現か菊の花わが手にありぬ君がすさびか
○　信濃　白蓮女

紅葉濃き唐澤山の瀧つ瀬の上に青羽の小鳥舞ひたる
○　長崎縣　深見つゆ子

ともしびはじじと音たて病む君をまもるが如し秋雨のふる
○　信濃　ひなげし女

大神の歌に合してマンドリンかなづる如し君と語れば
○　麻布　ゆき子

隧道を出でゝ夜明けの停車場のほとりに見たるコスモスの花
○　陸前　小岩やなぎ

雷の裂きける丘の大木にわが身を寄せてなげく夕ぐれ
○　麹町　牧野嵐水

紅葉皆風に亂るれくるほしき我が此頃の心にも似て
○　播摩灘の女

少女てふ名に囚はれてしらぬまによわき人ともなりにけるかな
○　和歌山　木澤てる子

黄昏の風に櫻の花散りて小草の眠さめにけるかな
○　丹後　仲田品子

追はるゝが如く國をば逃れ來て都にあるはみなし子にして
○　鳥取市　糸澤登志

若き人いとにほやかに頬を染めて嬉しきさまに春の道ゆく

○　岡山　野ばら

初秋やコスモス散れば十八の少女心はすずり泣きする

○　備前　さくら女史

花やかにのぼる煙を見つつなほ夕となれば悲しみの湧く

○　土佐　横山まつ子

更けし夜の田舍の町のしづけさを破りて行きぬ君が御車

○　近江　みきは

セルビヤの花あかあかと日を受けてダリアとかたるはなやかさかな

○　南多摩　小澤濟

日暮れたり戸をとざしつゝふと聞きし声吹く風に涙ぐまれぬ

○　南多摩　櫻井靜子

別れ來て人を慕ひぬ秋の野邊かりがねに胸燃え立ちにける

○　京都　森本俊子

髮そりし童の如く背戸の木はさびしく立ちぬ行く秋にして

○　福岡市　建部艮久子

この人に語る情はあらずとも月にはしばしこゝろとゞめよ

○　德島縣　一山たつ子

くれなゐの初日をあびて少女子が羽根つき遊ぶ正月はよし

○　美作　水江新子

はたとせを歌に生くてふ友なれば戀の涙もおほかりぬべし

○　あい

山ざくらちるを好むとわが云ふを君うらめしと云ひ給ふかな

○　伊豫　賤子

願はくは鳥ともなりて君こひし戀しとうたひ春日遊ばむ

○　伊豆　土谷鈴子

小夜更けて蟲の音細るゆく秋や悲しき歌のあまた浮びぬ

○　大阪市　安達政子

ころころと淋しき學の聲すなり亡き姉君のおもはるゝ道

○　大阪市　露子

みにくしと何故我を遠ざくる罪あることはしりぞけずして

○　北　明星

雨の夜かどのはしらにもたれゐて御寺を見れば法の火ともる

○　星野白露

水の葉散る山路に來りみなし子は灰色雲を見て涙しぬ

○　中島幸枝

朝顔に消え行く人の何となく戀し懷し少女子なれば

○　松江白菊

美しき清き少女が戀ゆゑに泣くにも似たる白萩の花

○　東京　島貞子

いつしかと散りも失せなむ萩の花咲き匂ふ間に折りていにませ

○　石川縣　桐の葉

あゝ十九我世の春を歌ふべく惱き多き年は來りぬ

○　麻布　たそがれ

わが知らぬみたまつれるいしぶみにあき風さむく木の葉おとしぬ

○　廣島縣　香月

松風の音はいつしか絶えはてゝむせび泣くぞと秋雨ぞふる

○　青森　美能惠子

はげしかる戀の酒をばこゝちよく飲みたる少女すずりし少女

○　德山　寄生草

雨の夜やおもひを抱きわが眠る冷き閨にこほろぎ鳴くも

○　下谷　桂子

妹の花のしほれしごとくなる悲しき姿眼にうかぶ時

○　紅花

世にそむきおやに背きて泣きもせぬ心に似たるあざみ草かな

○　吳市　碓氷吳竹

しら菊が木の間をもるゝ淡き日をあびたる如きさびしき少女

○　伏見　英美子

われ泣かむ二十の春の悩みだし戀しき人をえまくほりすと

○　武田かつ

大雪やいとあはれなる小雀の我が軒に來て羽ふる朝よ

○　京都　三宅喜賀子

はげしかる戀の心をわれいみぬ清くあれよとねがふ世故に

○ 山城　木の花

み手により一枝をわれのものとせし山茶花は今ちる日となりぬ

○ 尼ケ崎　片葉

山風は岸の雜木の葉をとつて流の面に投げつゝぞ行く

○ 和泉　田中きよ子

秋の日はさびしと語り妹と磯邊に立てば燈火の見ゆ

○ 豐橋市　中川つる子

幼なさの未だ去りやらぬ春なるに二十ときくは離のことにか

○ 靜岡縣　鈴木靜子

わが過ぐる東海道の松の風昔に似たり月の光も

○ 淡路　内海千鳥子

わが君は玉敷の道行くらむかそのみやこをば夢見て日ふる

○ 兵庫　紅雀

木枯や白樺の葉の泣くが如露に落つ秋の夕ぐれ

○ 石川縣　折笠とめ子

三日月は雜木林の上に居てわがほつれ毛を夕風ぞ吹く

○ 長野縣　泉すぎ

云ふもうし云はぬもつらき一ことのこの頃胸にきづける少女

○ 前橋　みどり

老はわが頭ににぶき智慧おきぬ若きこゝろは日にくもりゆく

○ 千葉縣　七五三野菊枝子

春の月さくらの山をのぼる時やはらかにしも頬ふきし風よ

○ 伊勢　不二子

戀失せて若き命も滅びつる心に似たる月見草かな

○ 播磨　みどり

わが十九肩あげとりて淋しさをしみ〲思ふ春の一日

○ 靜岡　富永やすゑ

流れゆく水の清さをめでしれぬはたや野菊のはなのかず〲

○ 和泉　金田ふみ子

なきさめも胸に浮ばず秋の夜は悲しきまゝに夜を更しける

○ 熊本　宮野かずを

目とづれば遠き吾世のふるさとの胸に浮びぬ秋来し日より

○ 伊豆　村瀬春子

目ひらけば黒の翼の鳥あまた青空を飛ぶ秋のひるかな

○ 千葉縣　伊藤きみ子

病葉はちれりかずかに音のすれ衰へしわが脈のやうにも

○ 遠江　うた子

湖の廣きに似たるおん心いくつの山のかげうつすべき

○ 備中　伊藤福子

ある時は憎しと思ふ青白き女の顔に海の月さす

○ 京都市　松原きぬ子

初冬の日はうらかなしあれにたる町の埃りのわが額をうつ

○ 大阪　名なし草

宵やみに磯邊に立ちて只ふたり海原遠き漁火を見つ

○ 京都　なでしこ

夕燒の雲の色よし我胸の燃ゆる血潮にいとよく似たる

○ 靜岡　舟の子

咲きみてる朝顔紅に紫に露をやどしぬ朝日のかげに

○ 新潟　吉田ふみ子

少女子はこの戀みを忘れんと二三の人にもの云ひそめぬ

○ 府下　あや子

都近き住居となりし武藏野の林の中に時雨聞く夜は

○ 大阪　日野春子

朝の日のすきもる窗に美しき女の衣のみだれたるかな

○ 茨城　よしの子

戀といふはげしきいのち信濃なる淺間の山に火の燃ゆるらむ

○ 播磨　梅八重

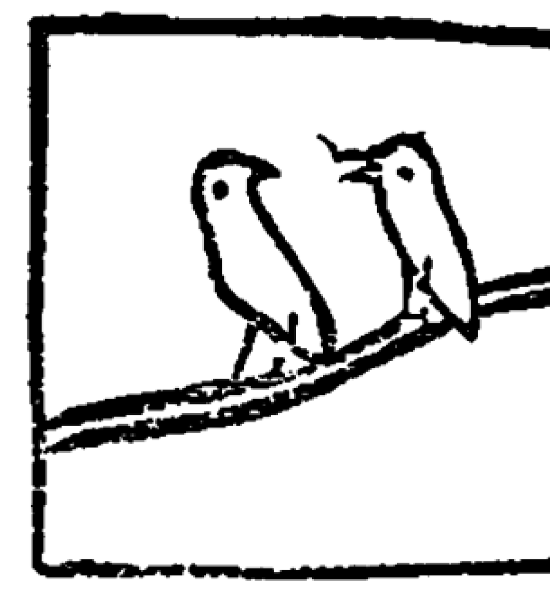
あたゝかき血汐のめぐり若き日を男の誇るストーブの前

○ 牛込　春鳥

きせ淚を一夜忘れて霜柱花壇の草をもたげゝるかな

小說

水野葉舟選



○若い人々（天）

田枝子

突然に後のふすまがあいたので、三人共ギョッとして顔を上げた。「何だ、直治か、いやに愕せるぜ。」三吉はイマ〳〵しそうに直治の顔を見た。「ヤ、今晩は、相變らず好きだネ。」直治は突立たまゝ面白そうに一座の顔を見くらべてた。お仲もおつたも今の瞬間に安心したやうなホッとした眼色をして、各自の持花札に眼をやつた。「直さんは性が悪いのね。忍足で來るなんて。」

「冗談ぢやない。お仲さん人聽が悪いよ、忍足だなんて、だが空虚でやつてるのに何も其麼にビク〳〵しないつて大丈夫ですよ。大威張りでいゝのさ。然し皆熱心だネ、實に感心するよ。」

「其な事アないけど、今夜三ちやん來ても談相手が誰も居ないんでせう餘りつまらないからつて始まつた譯なのよ。」

「其りあもう君樣方にしては御尤千萬だけどつたちやんまでいつのまにか熱心黨の仲間入をして了てるんだネ。」直治は長火鉢の前へあぐらを組で、懐手をしたまま皆に向つてうるさいと思樣に口を利出した。

おつたは少しポッとした顔を俯けて捨てる札を考へてみたが、其時から想が散て一心になれぬ樣に思へた

「三ちやんは青丹で、よろきをきめちまふとしてるんだわね。おつたさん、間ぬけな手を打ちや駄目だよ。」お仲はイラ〳〵した聲でおつたに注意した。

「大丈夫、出來やしないわ。」口では云たが、頭は呆然してた。直治は火鉢にもたれたまゝ少し目を細めて、時々氣取たやうに首をふりながら、義太夫のサワリ場や、新内の節を小聲で唄つてゐた。其をおつたはしらぬ樣な顔をしながら、其實氣にして耳を傾けてた。

「あゝ又三ちやんに勝れた。今夜は負通し。癪だネ。」お仲は荒ッポイ調子に云つた。おつたは散た花札をよせ集めて丁寧に切てた。「負けるの當前よ、三ちやんと私等は段違ひなんだもの。」おつたは云た。

「恐入りましたネ。」三吉は笑乍ら横になつた。長いきせるを引よせてスパリ〳〵と草煙の烟を吐出した。

大きい目球が充血して、いやな色に見えてた。

「もう十時だ、切にしやうね。」

「さうね。ぢやお茶でも入れませうよ。直さん隨分お退屈樣でしたね。」お仲は茶道具を出しに立た。

　おつたは花札を揃へて箱に仕舞た。私今夜いやに逆上せるわ。什うしたんだろう。」獨言のやうに云て顔を擡げた。「餘り夢中になつたからさ。」横から三吉が云つた。「今夜おつたちやん什麼して大鷲樣ゆかなかつたの去年まであんな大騷ぎやつたくせにさ。」

「お酉樣なんて……苦しみにゆくやうなもんですもの、充らない。留守居の方が餘程氣が利いてる。」

「恐ろしく大人ぶつて了たネ、愕ろいたな。」

「さうさ、もうつたちやんは小供ぢやないものネ。」

「知りませんよ。其麼事。」おつたは怒たやうな顔をした。

　直治は火鉢のフチへ肘をかけて丸い顎を掌にさゝへ乍ら情のある樣な目でおつたの顔を凝と見て笑つた。

「さあ、皆さん召あがれ？　太樓のよ。」お仲が菓子鉢を持つて來た。「旨そうだ……お馳走にならうか。」三吉は寢そべつたまゝ手を伸した。今用をたしに行たおつたは濡れた手を拭き／＼入つて來た。寒想な顔をして火鉢にくつついて坐つた。「今夜空のお星樣が一杯よ。」

「一の酉大當りだつたな。家の連中は大分ゆつくりだネ。いつも？」「えゝどうせ十二時過ぎよ。又グデングデンに醉て來るかもしれやしない。知らん顔して眠ちまふかしらネ。」「其こそ父樣が大目玉でせう。」

「や、ハイカラだネ、つたちやんは素的だネ、英語使ふなんて。」と三吉が突如に吐鳴る樣な聲をした、其でお仲も直治も一度に笑出した。「三ちやんは、覺えていらつしやいよ。」おつたは少し赤い顔をして笑乍ら三吉を睨んだ、「其麼怖い目をすると、お嫁に貰手がないよ」

「知らないわ。もう私三ちやん大嫌。」泣出想な顔をして又皆を笑はせた。而しておつたは無邪氣らしく乾燥で見せてた。「おつたちやんは此頃大變に肉がついて、格好がよくなつたよ。」おつたの横顔を直治はしげ／＼と見てた。おつたは一寸愕いた樣に直治の顔を見た。

「もうおつたさんはお嫁にゆけるんだね。いつだらうな、本當にもうぢきかもしれない、きれいだらうな。」

「直治、氣がもめるね」三吉が云つた。お仲は不快な顔をして其でも默つてた。

　おつたは其時急に今迄覺えない羞恥に身體が熱くなつて來る樣だつた。そしてもう其時は今迄のやうにグ

イ〳〵喋つたり、笑たりが出來なかつた。

○燔祭（地）

筆子

…貴家御都合は萬々御察し申上候へ雖、彼金子は小生唯一の資力に付、早々御返濟なき時は殆んど學費の出所にも差迫り、誠に困却致し候、最早年來の希望を擲ち、歸國の決心に相及び候處、さる友人の情にてやう〳〵自修致し居候次第に付、萬一一滴の涙有之候はば月々若干かを御返却下され度願ひ上候、それも出來ぬとならば是非なき事ながら、美津子殿だけは立派に學校御成功致さる〻樣然るべく、小生は此儘埋木となり山間に骸を曝すとも怨むまじく……。

此處迄讀み掛けて三津子の聲はかすれた。

「ふむ、何とでも云ふが可いや、無い物は返せないからな」

「さうですとも、澤田さんも隨分思ひ切りの惡い男だね、あんな金……」

と兩親は口を揃へて、冷やかに云つて、手紙を省みやうとはしなかつた。

木枯が時々雨戸を搖り、霜に更け行く夜は遠く、大通りの震動する音波を傳ふる、此室には、眞赤な炭火や明るい洋燈に暖氣を保ち、澤田なる青年が寒さに顫へながら書た此手紙は、反古の樣に投出された、けれど三津子は、一字一句男の心を味はつて、一人切ない思ひに泣いた。

「おや、三津は泣いてるのかい」と素早く母に見咎られたのが、如何にも自分の心の弱點を曝露した樣なので、誰が澤田なんかをッ、と心中に強い反響の叫びを起した、母親は一本鎗に言葉を進め、「何もお前が心配おしの事はないよ、そりあ彼樣な理由でお前には全く面目ないんだけれどね……」と未だくど〳〵呟くのを聞くに堪へないで、三津子は次の間の暗い冷たい疊の上へ、身を投げ伏した。今更古疵の皮をめくつて、氣の毒の可哀相のと云つた處が、何の私の慰藉となら處女の誇を剝奪された自分に一層唾でも吐き掛けてやりたいほど、厭な〳〵感じがする。

兩親は何やらこそ〳〵話し合つて居るのが、感覺の鋭くなつた彼には善く解る……と突然父が大きな聲をして「抛擲つて置け〳〵、奴に奈何手が出るもんか、萬一愚圖々々云ふ時あ、娘を疵物にされた事を持出さあ……」と云はれた時、三津子ははつと息を呑んだ。

「貴夫そんな事を……」と甲高い母の音聲に押されて話聲は又ひつそりとなつて了つた。

如何にも父の心が淺猿しいと思ふ私は貴父方の爲に遣れた人形ではないか、再び――永久にあの折を思ひたくない、出來る事なら、眞黒な墨で私の半生を塗抹して欲しい、鳥渡の間でも自分の身邊に省みたくない澤田の事、兩親の事一切吾念頭より斷滅して了ひたい兩親が澤田と私と近づく機會をのみ與へて、二人が戀の動機を造らしめた、それが世渡りの機巧であつて、澤田が田畑を賣つた學費金、二百餘圓は悉皆吾父母の手に消滅された。私は爲に利用された・・・三津子の血管は再ば逆流し出した、意識が鈍い自信も薄い、殆んど親の力で左右された當時を更に更に悔んだけれども情實を無視して、娘を利用した吾父母の行爲は餘に常識を逸しては居るまいか、結局澤田を養子にせよと云つた、然し私は他動的の壓迫の戀に甘んじたくない、若い〳〵身體故、と三津子は幾度か頭を振つて見た、澤田と私の配偶を强るのは、丁度父母が其罪から遁れんが爲めに、神の前に婚祭の供物を捧げる様なものだ、罪祭の壇に小羊



夕のなやみ　横須賀市　加藤としこ

を屠るもよからうが、穢れた私が燔祭の小羊とは云へない、三津子は涙が留度なく頬を傳ふては流れた。

無意味な戀の記念から澤田を氣の毒と單に思つたゞけ以上に、何等の追懷も殘らない、冷かな思ひ出に疲れた彼はさも倦怠に堪へぬやうに其處に横たはつた、「三津子、三津子、」と母親の呼聲がしたけれど、それに答へるのさへ億劫で、默つて隅の方に堅くなつた、すると間もなくぱつと火影が流れて「三津子、おや寢ちやつたの……風邪を引くよ」と云ひながら母親が這入つて來て、輕く背を叩いたが、三津子は身動きもしないので「困つた子だね」と戸棚から褞袍を出して、掛けてくれたのをば撥退けやうとしたが、それでも親だなあと思ふと、もう引占められた樣に、堅くなつて默つて涙を呑んだ、室内が以前の暗に返ると、格子戸が明いて、どうやら父が出掛けたらしい、長火鉢へとん〱と煙管を叩いて、母が何だか獨語を云つて居る三津子は確乎褞袍をかぶつて、彼方此方と寢返りした。

○去りゆく人（人）

富山市　淺井きよ

夏子と母親は疲れた淋しい眼付きで二階から往來を眺めて居た。

階下では、太つちよの女婦さんが、わいわい騷ぐ子供を相手にあいそよく芋を燒いて居た。

屋根を突拔いて居るブリキの煙突から、黄な臭い、青白い煙が夢のように流れ出て、雨のなかへまた夢のように消えて行く。

『もう田舍へゆくと思ふと、なんだか恁う淋しくつてくならないものねえ。』夏子は淋しく笑ひ乍云つた。

『あゝ。』母親は氣拔けしたように答へて、

『少しでも晴れて呉れると、恁うも氣もふさぐまいけど、それに突然こんなことになつたので、阿母さんはもう茫然りしてしまつた。』とやつぱり氣無さゝうに續けて云つた。

『さうねえ、妾もよ。』

『……』二人はまた沈默に落ちた。

小糠のような雨が横さまに降つて、道は恐しくぬかつて居る。

『歩けい、そらッ叱ッ！』轍が深く大地へ食ひ込んで馬はせい〱白い息を吐いてもがくのを、汚たない姿の馬方が、ビシリ〱とむち打つて歩かせようとして居る。

『可愛そうねえ。』
『エヽ。』二人は、細い女らしい眉をシバ／＼させて云つた。通り掛りの人が二三人かゝつて、やつと荷馬車が過ぎて行つた。あたりが急にけつそりと靜まつて何處からとなく、云ひ得ぬ淋しい空氣が、また盛り返して、此の邊をうろつき出したように思はれた。
向ふの家の塀越しに、ひよろりと出て居る桐の木の、枯れた大きい葉が、横さまにてもなく飛び散つて居るやがて、
『どうせ、田舍へ歸るんだから、うんと面白いことでもして氣晴らししませうよ。』と云つて、母はとん／＼と階段を降りて行つた。夏子は、それを見送つたまゝ別に窓から放れようともせぬ。只なんだか心殘りがあるようで、せき／＼と苛々してならぬ。何んでも彼んでもぶちまけて仕舞ひたいようにも思つた。今朝、荷物を送つてしまつて、がらんとした、何んにもない室を幾度も見廻した。
東京！そう、東京！長い間夢見て居た此東京へ來て夏子は未だ、若い戀の花を手折つたこともなかつた。これと云つて悲しかつた事も、嬉しかつた事もなかつた。
夏子は更に、「東京を離れるのだ。」と思つて見た、そして前と同じく悲しいやうな、苛々した想に耽けつた東京に別れる――と同時に、紅顏の優しい戀人と云ふものも別れて見たいように思つた、只涙が流れた――何とはなしに。涙は默つて頰を歐つた。
輕い雨の飛沫がしきりと頰を打つた。
軈て母は上つて來た。そして恁う云つた。
『夏ちやん、うんと火鉢へ炭をついでおくれ。』
手にお酒の銚子と小肴の造り身の入つた皿をもつて居た。
『炭をついでどうするの！』夏子は火鉢の前へ座つた
『いゝからうんとついでお呉れ。』
『そんなにつぐの、火鉢が燃えちまつてよ。』
『燃えたつて……』
『構はないつての、ぢやうんと……これつ位？』
『もつと／＼。』
『ホホ……』何んにするのか知らんと、夏子は變に思ひ乍もどん／＼炭をつぐ。
『かうして火でもいゝして置かないと淋しくつてねえ。』
『さうねえ。』火がかん／＼おこる。鐵瓶の口から、白い湯氣が玉になつて小氣味よくぷく／＼上る。半面を

火に照された二人の顔が、薄暗みにほんのりと浮いて見えた。銚子が見合よくつくと、母は鐵瓶から取り出した。そして、夏子に、

『夏子さん一つ――。』と盃をさした。

『お酒？――妾、眞平よ。』夏子は聲をひくめて手を振つた。

『お嫌ひ……？いゝぢやないか、阿母さんも一所になるんだからちつぽり位呑んだつて。』

『だつてホツホツ、生れて頂だいたこともないのよ』

『そう云はないで、氣晴にねえ、ほんの。』

『ぢやあ、でも何んだか。』

夏子は極り惡るそうに盃をうけた。ぷんと強烈な匂が先づ鼻をついて、胸がむか〳〵して來た。

夏子は、いやな顔して鳥渡甜めたまゝ下へおいた。飲ぬのではあつたが、どうやら二盃も重ねた。

頭腦が、があんと鳴つて心臟の皷動が恐しく高鳴り始めた。夏子はごろりと、火鉢の横にたふれたとき、

（秋の……夜は……長いもの……と……）

と、小聲になつて母は唄うて居た。

障子の破れ穴に風があたつて、ハタ〳〵と淋しく鳴つてゐた。

○灰色娘

横濱市　梅子

醫者から歸ると、明るい茶の間へ入て隱居さんの言葉の眞似をしたり、變な素振りをしたりして、若い下女を笑ひこけさせ、自分にもケタ〳〵笑ひ崩れてゐると、お徳婆が、「又齒が脱けましたよ……ほらもう隨分溜つたでしよ。」と云ひ乍ら紙片にひねつた、脱け齒を見せた。「へえ……何だか嫌やなものですね。」と下女は厭やらしい顔して眺めた。「汚いね、何うする積りさ。」と私が云ふと、「棺の中へ入れて貰ふんですよ。」「つまり齒から先へ死ぬんだね？」と私は汚い婆さんの顔を見た。「えゝ誰れでもかうなるんですよ。」「貴女でもね、」と云た風な顔をして、齒のないすつこんだ口で笑ひ乍ら云つた。「誰れが麼那婆になるものか、だがよく生きてられるね。」とでも云てやりたい樣な、厭やな癪に障て來た。而してあの忘れてゐた、厭やな問題がチラと頭に浮んだ。と下女は又下らない事を云ひ出して、笑はせ樣としてゐる。「もう笑ふものか、莫迦だね。」と心に思つた、何となく心が沈んだ。感へたくなつた。そして恰度午後に母の客が來たので、いつも思ひにふける

座敷がふさがつて了つた。茶の間では下女が婆やと咄してゐる、あゝ何てうるさいんだらうと思つて臺所の方へ行つて見ると、そこには秋の日が一杯當てゐる。私は早速座蒲團を持て行て日當りへ脚を伸ばして、後ろの壁へよりかゝる樣にした。而して手を懐中へ突込んで、眼をうす眼に眠て見たが矢張り落付いて考へる事は出來なかつた。屹度又何か云ふんだよ、何故だらう、默つてからやらせて置いてくれゝばいゝんだけれど……と思つた。そして流しの桶へ水道の水が、ざぶりと乘る、こぼれてゐるのを



洗濯　京城　横田月子

何の氣もなく、ぢーつと見て居た。と突然婆やが首を出して「まあ〳〵、お元さんつたら何うしたんですよこんなに水がこぼれてゐるのにまあ……………」と云ひ乍らグイと口をねぢつた。私は愕ろいて立ち上つた。あゝさうだつたつけと思たが辨解する事も出來ない位莫迦らしい、極りのわるい思ひをした。堪らなく苛々しくなつてきたので、當もなく裏口から出て見た。屹度又今の事を皆に咄すんだよ

そして「何うしてあの娘はあゝぼんやりしてゐるんだろう……」等と幾度も〳〵繰り返されるんだ。だが私は全く此頃はぼんやりしてゐる。昨日も散々攻撃された。「餘程變てるね、一體この娘は什うなるだらう……可哀想だよ全く。」とかうだ。私は口惜しかつた。今に見ろ……と云ふ氣が起つたけれど又机の前へ當もなく座つて黄色い葉に淡くさした日の光りや、風の戰ぎをぢいつとみつめてゐると、堪らなくうらわびしくなつてきて、ぼろ〳〵泪がこぼれた。そして私は其淋しさを出來るだけ強く、出來る丈け長く味はひたく思つたで全く日が暮れて了ふ迄、私は灯もつけずに座てゐたものだから、又呆れられた。あゝ家に居る中は叱かられて計りゐるんだ。嫁に行けば猶辛いだろう……本當に私は不幸だつた他所の娘とは違てゐる。「家出でもしたくなつた」と此間母に云つてやつたら「して御覧路頭に迷ふばかりだ」と云た。さうかと云て私は此儘家で仕事許りしてゐるのは、何だか苛々する程嫌らない、だが今見たいな男が、一緒に逃げてくれと云たら私は什うするだろう……迚も出來さうもない、何て弱い淋しい女だろう……戀らしい戀一つ出來ないんだ。こんな事を思ひ乍ら、淋しい十一月の裏街を歩いて行くと恰度バテンの工女がぞろ〳〵歸て來た、皆未だ若い樣だが何と思てゐるだろう……自分の身を淋しいとは思はないのかしら？だが何となく私は工女と云ふものは自由に戀等して、よくあひびきしたり、儲けた金を貢いだり、何をする間も、男の事が心にあつて、淋しみ等感じる閑もなく、例令髪一つ結ふとしても、心持ちが違ふのぢやないかしら？等と思ひ乍ら、いつか白粉を美しくつけた、問題になり相な一人の工女が、華やかに笑ひ乍ら喋舌てゐるのを、何となく氣を注けて見てゐたら、不意に「お元さん――」と云て肩へ手をかけた人があるので一寸愕いて振向くと、秋田さんが笑つてゐた。「まあいやに、愕ろかせるわね、何處へ行くの？」「歸るのよ、貴女は散歩？呑氣な人ね、何か面白い咄しがあつて」と秋田さんは、相變らず活氣がいゝ「面白い咄し處ぢやないは、だがもうお正月よ、年齢の事を想へると厭やになるはね……」「全くね。私なんか本統につまらないわ、年中コツ〳〵働いてさ、芝居一つ見るんぢやなしね、そてへいくと、華族や金持の娘たちが羨やましくなるわ、畢竟お金ね、熟々さう思つたわ、何て云はれても、お金をウンと儲けて、面白く暮らしたいものだわ。だから矢張り役者やなにか

一番生きて居て、面白いんでしよ……」と云はれて見れば、全くさうだ。「つまり充實してゐると云ふのでしよね。幸だわ、私達はつまらなかつたは、それでも、何んなに充らなくても、死ぬのは厭やね……」から云つたが私は餘りに自分が、灰色過ぎる樣な、堪らなく淋くなつた。

○菊日和

月靈子

隣家の細君が入院したと聞いて、晴子が吃驚してから既う三日になる。其の間雨がびしよ／＼佗しく降りながした。親しい間なので是非見舞に行かねばならぬとは思ひながらお天氣の都合で、遂のばして居たのを今日カラッとした菊日和を幸ひ、晴子は一も二もなく行く事に定めた。

お化粧が出來ると、着る物の撰擇やら見舞品の事やら、一々何でもない事に保を呼びかけるので、保は面倒臭くなつて、讀んでた本を投り出した。

『あら怒つちやつたの、いゝわ』

晴子は辛との事で庭へ下りた。と再すぐ引返して

『貴郎よ、貴郎』

『何だい？』

『あの私のお肚大きかないこと？』

『莫迦、最う晝になつちまふぢやないか、下らない事きかないで早くお出で』

『だつて……』晴子は被布の上から六月のお肚を撫でもじ／＼して居た。

『女なんて實に愚だね』保もとう／＼堪へきれなくなつて、笑ひ出した。

『いゝわ』晴子も何がなしニッコリして、今度は眞實に門を出た。

細君の寢てゐる病室は、二階の一番端で暗くて汚なかつた。這入るとむつと藥の香が鼻を打つて、まくれた壁紙が目についた。晴子は中へ這入つてもまだ、浮つたい心持に落付きがなかつた。

恰度細君が午前の手術を受けて、とぼ／＼廊下を歩いてきた。髪が蓬のやうに亂れて、見違へる程窶れて居る。

『まあお高さん』、晴子は周章立つて、細君を抱へるやうにして、床の中へつれてきた。

『私まつたく這那たあ思はなかつたとよ、あゝ餘程急だつたのね』

『えゝ』妻君は苦しさうに紫色の唇を、わな〱ふるはせて居た。

『誠に何より痛みが酷いもんですから』

『まあ、でも外の病氣と違つて……』晴子はいひかけて、這うした婦人病が果して他のいろ〱の病氣より輕いものかどうか、一寸わからなくなつて口を噤んだ其れでも細君は嬉しさうに微笑んだ。

外では百舌がキヽヽと、消魂しく鳴いて居る。カッと太陽のさした椽側に、黄金色の菊がキラキラ〱露に匂つてゐる。晴子は暫く凝として居たが、そつと立つて椽側へ出た。室の中が一層うす暗く慘めに見えた。

『あゝそれはさうと……』晴子は云ひながら、思ひ出したやうにまた枕元へきて坐つた。

『お高さんつき添への方でも？』

『えゝ否』

『へえ無いの？、まあ呆れた早瀨さんつて方隨分な方ね、私今日歸つたらうんとさう云つて上げませう』

『奧さんお止しなさい、駄目よ〱』

『お高さん、だから貴女いけないんだわ、私なんぞ少し何だとつけ〱保に云つてやるものだから、あのう何なの。お高さんなぞ「もう貴郞の所なんぞに居ない」つておどかしてやればいゝのに……』

晴子はさう細君を叱るやうに云つて、持つてきた菓子折を其處へ出した。

『まあ恐れ入ります』

『眞實に貴女餘り柔和しくしてゐちやだめよ』

晴子は細君の言葉には耳も借さないで、なほ這うくり返し〱云つた。細君もはじめは默つてきいて居たが了ひには眉を寄せて眼をしば〱させた。

『だつて奧さんとは年が違ひますもの』

『あら、いくら年が違つてたつて、同じことよ』

『おや奧さん、私が早瀨に、もうお前の所なんぞに居ないつて、喧嘩して出てきたら、貴女お世話してくださるの？』

『いやだ、お高さん、さう言つて威すんだわ、誰が眞實に出るものですか、さう云へば早瀨さん吃驚して止めるぢやありませんか、』

『否奧さん、――まあ奧さんなぞお若いから羨しいわね、私だつて奧さん位の年頃には、隨分早瀨なんぞ抑へつけてたんだけど、あゝもう年とつちや仕やうがない』細君の眼からはほろ〱泪がこぼれた。

何氣ない茶話位に思つて居た晴子は、細君に泣かれて吃驚した。今まで喋舌つたうちに、何處が氣に障つたのだらうと、考へたけれど何うしても思ひ出せなかつた。

小說選評

選者

△自分が本誌の小說を選評し始めてから一年經つた。さて第二年目に入る。この初めに當て、自分は投書家諸子に、種々と希望したい事がある。が、何よりも第一に言ふ可き事は停滯せざる事である。心の常に流動して居る事である。これが第一に重要な事であると思はれる。此言葉は味はふ可き言葉である。諸君が、心を貧しくして、反覆味はるべき言葉である。然り、流動し、活躍せる心、諸君は自らの心に自ら深く問はれよ。

▽諸君よ自然に僞りは無し。如何なる場合にあつても自然は眞實にして、深奥である。自然を見よ。心を鋭くし自然の中より、或るものを發見せられよ。その發見せるものを飜譯せられよ。藝術の境地はここに在り。自分のこの言葉を、特に諸君に送る所以は、たゞ私の心からではない。又諸君をして、誰れも彼れも藝術家たらしめんとするからでも無い。たゞこの心ありて後、初めて藝術の國の目を開くを信ずればなり。



小春　周防乘重よし

△今回は可成多数の應募であつた。それを之から順を追つて選評する。

△幼なじみ（幸江）一寸氣が付いた處もあるが、要するに人眞似である。

△悲哀（磯まつ子）上手に書いてある。しつとりしても居る。しかしも少し、何かを見て來て、ある在るものの中からよく汲み取つて來て用ゐると言ふ處に進んでほしいものだ。

△孝夜（櫻草）も一歩ふみ込んで書いて見たら恐らくいゝ作になるで

あつたらう。それに文章がひどく、古い。

▲二人限り（秋月鈴子）　子供の寢言を言つて居るやうな作だが、不思議に一部の氣分が出て居る。

▲お兼さん（小澤碩子）　も少し藝術の香がほしい。少しく乾きすぎて居る。説明だけでは、藝術の効果は足りぬものだ。しかし、何時も同じやうな作ばかりの本誌の中では一寸珍らしい境が畵いてある。

▲燔祭（葦子）　いゝ作だ。複雜した心持が包まれて居る。例の暗い陰がこの人々の一言一行の裏によく見える。

▲菊日和（月雞子）　才筆だ。なかく書き馴れては居るが、如何も大切な一點が缺けて居るやうだ。上手になつた、巧みに書けると言ふ事も悪い事ではないが、藝術の價値はその内に包まれて居るものゝ分量である事を忘れてはならぬ。分量とは所謂思想ではない。その人が自然の中より發見し來たつたものゝ事である。

▲幼氣（草葉露子）　この作も前の批評をくり返すにすぎぬもの、前の人の作より一層その感が深いものだ。

▲境遇（たか子）「たゝごと」である。

▲病院（佐藤きみ）　甘い作。

▲栗（みさを）　やはり何でも無い作だ。たゞお淸が栗を拾つて居る處が一寸いゝ。

▲此の男（野菫）　徹底して居ぬのが缺點だが、一寸いゝと思はせる處がある。

▲綠さんの心（島貞子）　亂雜だ。

▲上山さん（木村浪花）　幼稚。

▲妹（春子）　感情にいゝ處がある、しかし本誌では見あきる程書かれた材料だ。

▲娘ごゝろ（くれたけ）　別に難の無い作である。だが、それだけの作である。

▲灰色娘（梅子）　氣の勝つた、盲のやうな心の勝つて居る娘の心持の一つだ。だが、まだ反省が足りぬ處がある。もつと奥の方を見てごらんなさい。眞實はそこにあると言ひ度い氣がする。

▲去りゆく人（淺井きよ）　寂しい、情調が表れて居る。自由に心の流れて居る處も見えてる。

▲若い人々（田枝子）　達者な筆で一息に書いてある。強い香が何處かに張つて居る。横濱の空氣が感じられる。この人と梅子と云ふ人との作には、自分は可成望をぞくして居る。何とか、もつと突進して行つて貰ひ度いものだ。

で、以下の順でとる。

天、若い人々　地、燔祭　人、去りゆく人　灰色娘　菊日和　此の男　お兼さん　二人限り

◎此の男

徳島縣　野菫

一週間降續いた雨に、空色を覗く人も最う飽きて了つた。何時の間にか道はいぎたなくしるくなつてゐる。室迄が何所やら雨でも漏てしめつてゐる樣な氣がする。安江の家へは五日も前から一人の若い男が來てゐる、

安江は店の片隅で縫物をしい〳〵、ぬかるみの中を步む一人〳〵を顏を上げて見た。色々な布、裁縫用具を並べてある前や側には、近刊の雜誌も擴げてある。店の火鉢には母と若い男がゐる。若いと云つても三十を一つ二つは越してゐやう。

安江は此の男を子供の時から知つてゐる。此度は此の男心臟を病つてゐて大分快方になつたを幸、氣晴に出て來てゐる相である。留守勝ちな主人のかはりに男は其の火鉢の側に何時迄も默つてゐる。時々はふらりと出てゐない事もある。これが男が來た翌日からの殆ど日課である。安江は母がその男と面白相に語つてゐる時は、雜誌を見せたり、繪葉書ブックも出して來る又話の仲間にも入るのであつた。

昨日も例によつてふらりと男が出たあとで、安江は「お母樣、勝美樣は此度ちつとも話さないぢやありませんか」と話しかけた。

「氣が進まないのだらうよ」と母はなげやりに云ふ。

「だつて以前は彼んなに笑はしたに、此度の勝美樣は變ですよ、丁度私が今年伯父樣所へ行つてた時の樣ですわ」「何うして！」「だつて伯母樣が何かにつけ無愛想でしたもの、私何だかおど〳〵して……」

「そこがあるから、お金出してゐるんぢやないか」。

安江が心あるらしく話しかけたのはとぎれて了つた。

今年の八月、安江は音樂の講習に行つた。下宿は伯母が嫁いでゐて亡くなつた、今は全く他人の家だが、其恁ゆかりがあるので其所にきめてゐた。

安江は每年八月は面白く市に出て、物學びに、はた遊んでゐた。今年は近い所にすると云つて伯母の家のある町にした。自由に生きようとあせつてゐる安江にはきよと〳〵人の顏を見る此町の人、伯父なる人、後妻子供の無愛想にするにほと〳〵困じ、其上遊ぶ地もない此町が如何にも氣足らなかつた。如何にもみじめだつたのは、食事に呼ばれて「ハイ」とおど〳〵起つて行く心、姿であつた。で例年の市、我家をさんざあこがれてゐた。

其あこがれて止まなかつた我家が、人を居づらくさせてゐるのである。と思ふと何だか欺かれてゐる樣な氣がしてならなかつた。

遊びに出てゐた勝美と云ふ男がしよんぼり歸つて來た。珍らしく雨があがつてゐる。

九月と云へど少し冷氣を覺える、病氣後の故か、男は紺がすりに浴衣を重ねて、薄ぺらな羽織さへ被つて

ゐる。山の生れだが、出歩きまはる人なので着物の縫ひ方をむづかるのは妙であつた。で細高い身體にきちんと合つた着物は、手入れ迄偲ばせる。

勝美は、居間と定められた二階へ上つてゐる。

安江母子は、それには何の意も持たない風をしてゐる。暫くして下て來た勝美は、可成大きいかばんと、着物を持つてゐた。そして母子の顔をかはるぐぬすみ見て、藥瓶、洗面用のものをかばんの中にでそく入れた。今度は持て下りたネルの單衣を器用にたゝんで、叉二人の顔を見て例のかばんに仕まつた。

安江は「勝美樣最うかへるのですか」と針の手をとめて顔を上げて云つた。そして叉針を持つた。

「えゝ！雨がそんなに大した事もないらしいので」と勝美はうす笑ひして云つた。

勝美はかばんをちやんと整理して、例の火鉢によつた。折から隣りの人が來たので母は其人と語つてゐる勝美は例のだんまりやかと思ふと常に似ず二人の話をまぜつかへして笑はした。

叉かばんの側ににおりよつた。と思ふと紙を出して銀貨を包まんとしてゐる。安江の顔を一寸ぬすみ見た隣りの人がかへると、後は誰も聲さへ立てない…安江は何時か其所にゐなかつた。

○お兼さん

上毛　小澤碩子

田植で忙しい六月頃、方々の家で馬鈴薯を盜まれたそれも澤山では無い、極僅かだ、と言つて子供の惡戲では無い、だから別に盜んだ人を捕へようともせず、「此れは必然、氣の利いた盜人の仕事ぢや無い、乞食かあの林の重吉――穢多の爺――でもの仕事だらう」位に思つて居た。

或る日の夕暮、新田の傳さんが田圃から歸つて自分の家の畑迄來ると、不意に赤兒の泣聲がした、ドがさがさと音がして、其畑から向ふの桑畑を駈ける樣にして、人が東の道へ行つた、桑畑をすかして見ると女らしい、――でも何をして居たんだらう、うん馬鈴薯を盜んで……思はず女の居つた所へ行つて見た。案の如く少し堀つてある、「よし今日は一つ彼の女を尾行て見よう」と傳さんは急いで行く。

先道して女に出合つた、傳さんは「何處へ」と聞くと「一寸隣村まで」と女は答へた。

一太い女だ」と思ひ乍ら傳さんは回り道して家へ歸つた、その女、それは村内のお兼さんであつた。

「馬鈴薯盗人はお兼さんだ」と、夕方傳さんが見附けた日から二日許りの中に村中廣つてしまつた。と、巡査の耳にも之れが知れた。或る日巡査がお兼さんの許へ來た。

「コレお前は此間彼方此方の畑で馬鈴薯を盗りはしないか、盗んだらうな、惡戯をすると斯う言ふ有難い事が有るのだ、良いか「他人の田や畑に於て、野菜や果物を盗んだ者は、三十日未滿……たらずの拘留か、又二十圓未滿の罰金を徴收る」と、お前には二十圓の錢が出せるかな、それとも警察へ三十日拘留かれても良いかな、コレ確かに盗んだらうナ、何つ、知らぬ、噓言つては不可ないぞ、コレお前の仕事してるのを、見た人が有るが如何だ、其の人を此處へ連れて來て見やうかな、確かに盗んだろ、正直の事を言はぬと分署へ連れて行くぞ、良いか、何つ、惡かつ……さうだろ噓言つては不可ない」

　お兼さんは包みきれず、遂々白狀してしまつた、然し女一人に……夫は二年許り前死んだので有つた。「此次に此麼事が有ると必然許さぬぞ」と言ひ捨てゝ去つてしまつた。お兼さんはホロリとした、有難かつたので、之れ以後馬鈴薯は何處の家でも盗れなかつた。

　或る日の夕方、お兼さんが不意に居なくなつた。

「何處へ行つたんだらう」と村の人等は思ひ乍ら二日許過ぎた。すると三日目に「お兼さんは先日蝗獲りに行つた歸り町田樣の畑の、甘薯を盗つて警察へ拘引れた」と知れた。――天高く薯肥えてる秋で有る、蝗獲りの歸り甘薯畑を見ると、地が割れてる、下には肥え太つた、甘薯が有るのだ、お兼さんは急に心が妙になつた、思はず畑へ這入つた、で幾本か掘つて出ようとすると運惡く、傍の道を巡査の靴音、隣村の方から、來たので有らう、コレッと一聲、お兼さんは早速其場から警察へ――と譯は斯うで有つた。

　それでも十三日許り過ぎると、お兼さんは歸つて來た、顔が何となく青ざめて見える。

「何處へ行つて來ましたネ」と人が知らない風で聞くと「エヽアノ一寸武州の姉御の所へ」と言ふ。

「まあ圖々しい女だ」と村の人等は思つてる。

詩の言葉（一）

春

曉ひとり消えてゆく
星よ、雲井の路すてゝ
しばしは人の世に降り
廻らばいかに春の野を（有明）

むつかしい言葉は一つもない、能く分る、星よ、曉ひとり消えてゆくのは淋しからうに、暫しは雲なる路をすてゝ、人の世の春の野を廻つたら何うかと云ふので、空想的な詩想を穏やかな言葉で歌つてある、此句は今から十年以前に出版された蒲原有明氏の處女作『草わかば』中の「春の野べ」の一節である。

春の山まろき（晶子）

人にそひて今日京の子の歌をきく祇園清水春の山まろき（みだれ髪）

海の花、山の花（空穂）

海のはな山のはなもて路敷かむ夢もて來よや

夜を守る神（まひる野）此歌は春の歌として神秘の音調がある、海のはなと大膽に言ひ出したところ、類がない。

視よ、冬は既に過ぎ去り、雨も歇み
はて、
諸の花は地の上に顯れ、歌謠ふ時
は來りぬ、斑鳩の聲も我等の境に聞
え、
無花果の樹は其芽を出し、葡萄の蔓
は花咲きて薫しき香氣を放つ、我が
愛する女、我がいと麗しき女よ、立
ちて出でよ。（雅歌）

ソロモン雅歌第二章の一節である、ソロモンの雅歌は、句數僅に八章百十一節に過ぎないが、全篇優雅にして高逸、ヘブライ文學の花として世に尊重せられてゐる。此處に引いた一節を見ても如何に、春の來る心持がいきいきと表はされてゐるかゞ知れるであらう。

ひとゝせの熟睡を終へて
花すみれ野邊に咲きたり
海に、空に、山に、林に
もの皆はよみがへりたり
もの皆をうごかし、つくる
二つとは生命よ、愛よ（シエレー）

此れは此れだけで一篇の詩である、意味も能く通じてゐる、生命と、愛とが春の力であるといふので、菫を持つて來て、春を代表させてある。

春の娘子鶯（泣菫）

愛を春の娘としたので『春のむすめ鶯の、音色うらやむ蝙蝠、小夜の眠りを窺ひ、合歡の枝に忍び入る』と云ふ句があつた。

あゝ、世の歡樂あまきに過ぎて
夢路にまたがる春、そのうつつ
遠きは薄もや、近きは花の
ねむりか、心のまなこをめぐる
（泡鳴）

歡樂を歌つたものである、夢の如く、現の如

◎新派和歌を理解し得ざる人その爲めに、新らしき短歌を作らんとする人々の爲めに、既に短歌を作りつゝある者の更に向上發展を熱望する人々の爲めに、現代歌壇の久しき混亂に關ゐんとする爲めに、堅實なる基礎と充實せる内容とを以て、本邦唯一の和歌講義錄出づ！

和歌講義錄

第壹號紀元節發行

二月末日迄の申込者に限り
入會金免除

◎講師及科目

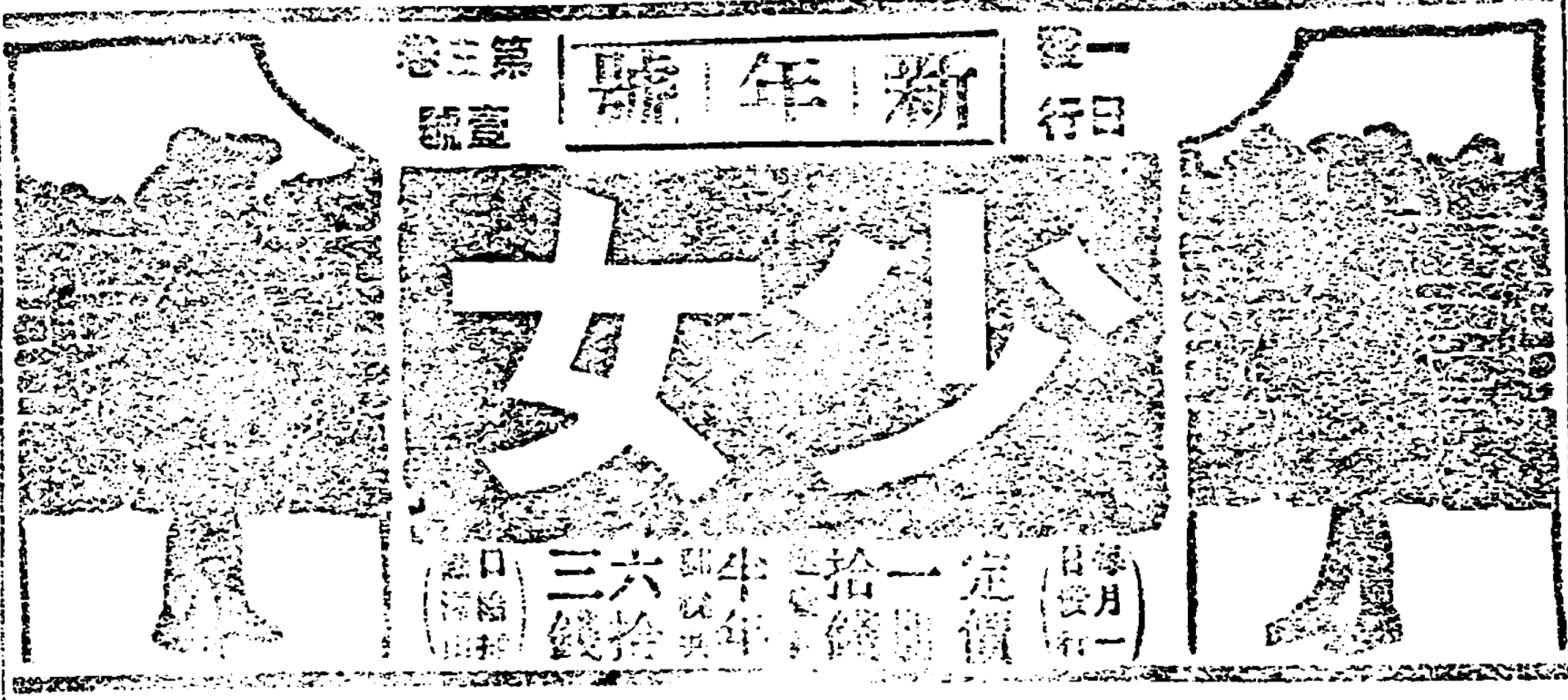
□日本歌學史……尾上柴舟
□新派和歌の沿革……太田水穗
□萬葉集講義……窪田空穗
□新派和歌講義……金子薫園
□詩歌流派論……岩野泡鳴
□新派和歌評釋……若山牧水

□伊勢物語新釋……水野葉舟
□長詩評釋……三木露風
□短歌と用語法……山田精一
□古今歌人評傳……名家數氏
□添刪實例……前田夕暮
□短歌の作法……前田夕暮

講義見本附き會則（一月下旬出來）無代進呈

東京神田旅籠町一
大日本短歌會
（振替口座東京一九五五五番）

愛らしき少女の讀物には一等評判よい　迚に試讀あれ



少女小說

おとぎ噺 お祖母さんのお年玉……與謝野晶子

◎二人やんちやん……佐々木邦

◎さよなら……楠田白茗

◎心の芽……一色醒川

少女對話 鳥の聲……河井醉茗

少女喜劇 仙人娘……海賀變哲

新年額繪 附錄（本誌二倍大石版極彩色）女王戴冠式の圖……岡野榮筆

科學

歷史小話 猪と八上比賣……澤村文學士

◎少女科學 動物園のお正月……佐々木好母

◎珍らしいお雜煮と甘いお屠蘇……富永醫學得業士

◎童謠……北原白秋

◎少女小品 幸福……兒玉花外

◎百人一首中の地名　さすらひ人

◎四十三年度各府縣投書成績

◎一に一を加へて億とせよ　後藤遍相

◎初春の面白い慰み

◎一本のマッチと十八粒の米　李家知事

◎懸賞折合せ繪新題

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替貯金口座東京壹七弐九番）

最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

都會の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の內容

東京の地と東京の女

▲芝居の書割のやうな不忍池畔 馬場孤蝶 ▲新しい觀察の盡きざる都會 蒲原有明 ▲大いなる未成品 戸川秋骨 ▲西と南の郊外 吉江孤雁 ▲張りつめた力 小川未明 ▲雪の夜の銀座 服部嘉香

街頭を歩める女の印象

▲植物園で逢つた女 北原白秋 ▲僅に殘れる印象 水野葉舟 ▲街の夕月 森川葵村 ▲三人の女（對話） 吉井勇 ▲油繪に入る女 木下杢太郎

詩に現れたる都會 河井醉茗 ▲暗愁に囚はれたる都會の女性 澤村文學士 ▲西の郊外より 水野千枝子 ▲南の郊外より 若川澄子 ▲日比谷大神宮結婚式の記事 遊蝶花 ▲上野より（對話） こうす會 ▲婦人席にてきわらび女 ▲東海道線 嘉濱柏

東京印象記

▲銀座 くに子 ▲神樂阪 白百合 ▲魚河岸 萬壽子 ▲日比谷 芳子 ▲根津 静子 ▲不忍 濱子 ▲芝公園 やゑ子 ▲谷中 霞子 ▲神田 樂子 ▲西片町 千歲 ▲美しい動物園 しげる ▲深川 ふみ

都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情

▲濁つた室に輝く電燈 やゑ子 ▲入京記 きく子 ▲鬪ひ疲れて 白山吹 ▲熱淚冷淚 湖畔の女 ▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう 常世草 ▲心の活動寫眞 夕ぼし ▲湯屋の三助に不快を感ず 萩花 ▲開放されたのか落伍したのか 葉隱れの花 ▲歎かれたる工女の戀 悔沼食腹子 ▲東京大阪京都 きく子

都會の實際的生活

▲生活の階級 霞子 ▲卒業式の前 つゆ草 ▲バザーの當日 靜江 ▲某子爵邸に遊ぶ 白菊 ▲お孃樣のお供 森英子

創作

▲（小說）卵淚 花子 ▲（散文）山みち 野ちみ草子 ▲（詩）白鳥 田中落葉子 ▲（戯曲）灰色の波 原田琴子 ▲（俳句）木の芽 坂照子

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番） ●賣捌各地書店●

地方の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

地方婦人の自覺と理想 下田歌子女史◎女が中心になつて働く 横井農博士◎行ける處まで行き得ない 田山花袋◎女性の自然の觀かた 小島烏水◎天然の美と婦人の美 大下藤次郎◎私の故郷 岸上文學士◎津輕海峽の婦人生活 岩野泡鳴◎下京の女 兒玉花外◎杉坂峠 澤村文學士◎雲雀鳴く野 夜雨◎颱風 長谷川文學士△富士登山は宜い 和田垣博士 日渡(?)子△鳥の鳴く磯 中小路八重子△田舍では讀書より仕事 津山稲子△周防の德山 武田貢△氣が利かぬ代りに人情に厚い 中村若子△幼い時は山へ成長すれば海へ 岸すみ子△信飛境上の深山旅行 辻村靖子△暑い方に向ふ 中野仙子△嫁して後忍耐強い京都婦人 松岡いと子（小説）漁父の母 小栗籌子 賣り桑 水野仙子◎海岸より 中村文學士◎琵琶湖しのぶ◎雨 川路柳虹◎伊豆の海岸 河井醉茗◎淡路の生活 一色醒川◎環鈴 色彩的區分したる大阪市の婦人 みどり女◎神戸 羅漢柏◎京近縣の女の特色 遊蝶花◎都會より地方へ 長曾我部菊子◎近畿旅日記 都江◎漁村の處女が最も活動する田植時（伊豆、伯耆、近江）富山と岡山の女 伊下枝子◎本州の南北兩端より（陸奥、北見）◎五年以前 山田邦子◎諸國通信（陸前松島、××町、和泉の南、伊豫松山、越前、備中山の名地より）雪と海岸△熱海△房州の渚△越後の海△秩父△高尾 地方の現在 石油の噴出 蒲原早蕨 其他 都會に憧憬れつゝある若き女の叫び きたい△私の淋しい心を察して下さい 北斗星△行きたいくと思ふ一念 桃の花△擂鉢の底のやうな土地より 上田けん子△嚴格に過ぎたる家庭 白百合子△船中より身を投んとしたる其後の私 訂女◎創作（和歌、小品文）

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
◎賣捌各地書店 （振替口座第壹七貳九番）

恭賀新年

併て讀者諸君の御健康を祈る

女子文壇社

社主 野口竹次郎

野口寛一

女子文壇主筆 河井醉茗

少女主筆 溝口白羊

寺田芳子

外一同

編輯部 小野喜一

松永和吉

外一同

く、もやの如く、眠りの如く、心眼に映ずる歡樂は、即ち春の相である、一語一語註釋しては餘り興味もないが、此れだけの句として歡樂の境を思ひ浮ばしめるだけの用意はある。

白雪とゞろと崩れ落ちて
雪消のひゞぎは嶺に起り（胡夷）

此雪は琵琶湖畔、比良の嶺の雪である、嶺上の雪解けて、春風湖上を渡る趣が此句の前後にあつた。單に雪消のひゞきと云ふことも、早春の心持に快く適ふ。

春に生れし妹の
よわくしげに地を歩む
草の若葉の幼だち
花になる日や遠からむ（醉茗）

此處の妹といふのは、姊妹と云ふことで、四五歲の女の子である、漸くあぶなげに地面を歩み出した頃のことだ、此句は『さくら草』の詩の一節で、さくら草になぞらへて、女の子の幼き日を歌つたものである、冒頭の句は『人の子ならばさくら子と、名づけまほしき櫻草、形ちやさしく匂ひ出で、わが稚心をうごかしぬ』

うてや鼓の春の曲
雪にうもるゝ冬の日の
かなしき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり（藤村）

『春の曲』の起首の句である、實に春の曲らしく、音調爽朗、日本の言葉、日本の音調の尤も純なるもの、今の新しい詩句などから見ると隔世の感はあつても、それだけ此種の詩歌には尊重を値ひする。

晴れ渡つた春の朝、光が
梢に、屋根にふりそゝぐ
屋根は音もなし（柳虹）

『空は吾らの上に晴れてゐる』と云ふ春のたのしい心持を歌つた詩の一句である、屋根といふやうな目前の印象を、何氣なく詩に入れて來たところに、新しい努力がある、第三聯には『巣立つた小鳥は空によろこび、伸びやかな翼を旅に向けた、騷立つ都會の上にも、光りは充ちてゐる』と云ふ句がある。

うるはしき綠の丘
なつかしき彼の丘には
靜かなる夢を敷きたり（露風）

『綠の丘、最上の地平』の一節である、綠の丘、斜に高まりて地平に接す、其丘の綠が靜かなる夢を敷き延べたやうだといふので、好い感じがする。

埋れたる冬の眠の
とけや出づ
春の光にものゝ蔓
南にのびて
勢ひかに、ふく芽はつはつ
野の胸に
きざしぬ、こゝろ（露風）

はつくは僅にと云ふ位の意、ちやうど二三月頃の植物の芽ぐむ野の心が、此詩の中に生きてゐる、感謝とか、慰藉とか、人工的の言葉を以て表はすことの出來ぬ或る大いなる天然の心に對して、毎に敬虔の念を抱いてゐるものでなければ、此の如き詩は思ひ浮ばない。

蕎麥の花

山田邦子

そばの花眞白になりて風のしむ頃を淋しう野に別れ行く

別れゆく日のあかつきをそゞろゆけば物刻む音のもるゝ家あり

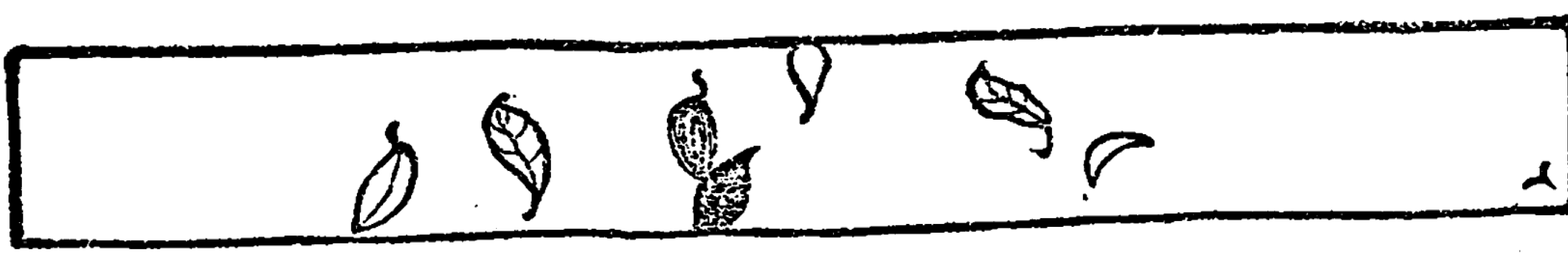
鳴く蟲よ我は去ぬれば明日よりは此家に灯もともさゞるなり（以上代々木の家を去るとて）

秋雨は小暗く降れり軒下に寂しや犬は目をとぢてあり

旅人は今し峠の一かくの日の射す道に歩み出でけり

パラ〳〵とみぞれの音す我が若さ強くにぎりてはなたんとせず

秋深し男よなれが足の毛の日にかゞやける悲しからずや



芝居見て何を樂しむ夕まぐれ身じまひはてし靜かなるむね

たゞに來つ身は暖かう丘にあり南の山に野火走る見ゆ

草に這ふ薄き日かげの身にしみて一人の丘の去りがたき日よ

別れ來つ雨きゝながらふりかへる更けたる窓のコスモスの花

薄日ざししみ〴〵旅のさびしさの胸にこたへてうれしき日なり

くもり日の午後の四時なり蟲の音を庭木の綠むねにしみくる

故さとも身のゆく末もやるせなく思はるゝ日よ庭のくもり日

一人病み一人みとりて五日經し女二人が雨をきける日

詩

河井酔茗選

○まつかな笑ひ（天）

府下　章子

秋の武蔵野
自分で自分の呼吸を聞た時、
夕もやが静に静に、又おどおどと
暗い薮に、冷たい水に、
動く――流れる
白い霧のしづかなをどり
青い霧の喪中の様な哀れなをどり
――うたもない――
だれもゐない夕ぐれの秋のむさしの
僅に生あるものは
雲の繁葉の末
白いねむりの茶の花の上を
こゝろよくスケーチングする
小さな羽蟲のむれ
私一人をなにがこゝへ捨ていつたの
青ざめた草の胸は顫へて
うたはない羽蟲の群は
ねるまへの踊りをしてゐるけれど
さみしいなあ
桐の木をこえて栗の木をこえて
櫟のはもれに
夕日がぬすむ様に笑つてゐた
まつかなわらひ――。

とびら

自分のまはりは、草があり木があり
ひろい原があり、それから森があり
其外を白い荒んだやうな
　街路がある
が又私の心の外園には
温い様な冷たいやうな
大きな扉がしきつてある
其温い冷たい扉を
多勢の人が叩いてゐる
おそろしい者が走つて來る
開くものかと叫んでみたが
おそろしい
多くの人が入つてきたら、どこへ
私はのがれやう
落日が静にほゝえみ
羽むしの群が靜にまひつかれる
靜かなきもち
又あわてたやうな私のこゝろ。

『まつかな笑ひ』の方は、殊更主観をむき出してないだけ、何處か心持はふつくらしてあるけれど、弾力が乏しく、うちこんで歌つてゐるとは思はれない、『とびらの』方は主観そのまゝを、きびしく歌つてあるだけに、人の胸に直ぐ響くには響くが、少し情味が乾いてゐる、併し二篇とも忠實な作詩の態度は確に稱揚に價する（評）

○綿の實（地）

港の女

曉秋の色褪せたる午後の空より
老いたる女の髪の如き
光澤失せたる銀色の光は
幾條となくなやましげに
ふりそゝぐ
虚空の下幾千町の地占めて
黄なる夢におち入りし
丈低き綿は
眞白なる柔かき實を無意識に
乾きたる殼皮より吐き出し
冷たき日光をむさぼり吸ひて
刻一刻とさめ行かむとす――折々に
物足らぬげにひそやかにさゝやきて
又額たれて息もつかず
努力にまどふ――午後のなやみ――

烏瓜

若き女を説くにすべての術つきたる

男の如く力失ひたる秋風の
笹の葉にひそ〳〵と口説けば
いとはしげに笹の葉は
額たれて冷たき幹に打ちふるふ
折しも葉かげより眞紅に熟したる
烏瓜は黄なる光に眩暈きたる如く
すばやく落ちたり――水の中に
白き眞晝の夢運ぶ細流は
事もなげに運び行く
まろき石、角なる石肌にふれつゝ
透明なる水底をまろびゆく眞紅の實
危し――危し――
白晝の水に從ふ赤き實の終焉
あゝ水よ白き夢よりさめざれ
赤き實よ　日光に醉しまゝなれ
我はたゞ一人覺むときを危む

二篇とも新しい、綿の實のなやみなど如何にも象徴的で、新しい、只、二篇とも文語體が殊更圭角あつて讀み苦しい、斯う云ふ散文的の調子は、餘程技巧が熟練した後に試むべきもので、下手な譯詩の眞似みたいに終るから注意を要す(評)

章子、港の女、代志子は詩壇の三人なり

○弧燈（人）

和泉　金田代志子

弧燈がともつて居る。
温かい母親の懷中で甘い夢を見る雅兒の樣に
霧の深い河岸路をリンゴ吸ひつゝ行く若人の悲みの樣に、
柔かいフランネルの手ざはりのやうに、
疲れた菊の花瓣から秋の光が消えかかる樣に、
暗にゑがいた彼の人の俤のやうに、
ほの淡く、蕭かに、淸く、悲しく、
震へつゝ燈つて居る。
靜かにも暮れ果てた廣い野原、
彼方の家――、森――、
大木の影の樣な川の堤は
しだい〳〵に闇に包まれて
死の樣な深い沈默を續けて居る。

斯くて何物もないかなたに
ほのかにも憂ふる樣に燈つて居るア
ーク燈の薄い光、
自分は一人暗の中で白い花をいぢり
乍ら
靜かに俤をゑがいて昨日の君を思ひ
悲しくも深い思ひに勞れた——。

此作者ほど女性といふものを沒却してゐる人はない、男子なら不思議はないのだが、女性なら實に不思議な現象であると思ふ(評)

○病床

福岡縣　角銅ゆきえ

恐ろしき
夢を見て眼は醒めぬ
夜は靜かなり。
闇の色
狹き室をとざしたり
濕然と——。
かゝる夜を
しと〳〵と雨の音
胸に沁み込む。
藥の香
忌はしきまで
室に滿てり。
寢返れば
闇中に息する聲
白く逃れぬ
我が思ひ
堪へ難き悲愁の
胸かき擾す。
あゝあはれ
悶え伏しぬ
「力」も絶えて——。

一語、一語、力を籠めてある、別に優れた作ではないが、たしかな作である(評)

○菜

播磨　濱の女

青い菜の香がする
白い朝の空氣の中から漂ふてくるの
だ
只わけもなく朝の野の土をふんで見
た
柔く濕つて居る。
褐色の土は靜かに若い菜の周圍を
取りまいてゐる。
白いものは消えた
透明な空氣の中に菜の香と濕つた土
の香とが漂ふてくる。
女が居た
菜を摘んでゐるらしい。綠の葉は勢
よくのびてゐる
動いてゐる白い手先を私はぢつと見
てゐた
默つて唯無意識の樣に動いてゐる
女は時々瞳を上げて空を眺めた
俯いて又摘んで居る
何を思つてゐるのだらう
冷めたい空氣は菜の甘いさゝやきを

選んで二人の間を往來してゐる
女は又瞳を上げた。

感じもよし、調子も併がない(評)

○ゆふべ

丹後　伊志子

たゞひろ〴〵と暮れゆく海の面を、
疲れたる目にうつゝなく見るかなし
さ、
「ゆふべ」ものみなをかくしゆけど、
ふか〴〵と我が倚る椅子の白き布被
をのみ殘すわびしさ、
はて遠くつらなる黒雲は目路を皆お
ほひ垂れて——。
あゝ月ぞこひしき
青白くふるふ月のくちづけぞよろづ
のもの欲りす。

同じ作者の毎に見る散文よりは宜い(評)

○秋の日に歌ふ

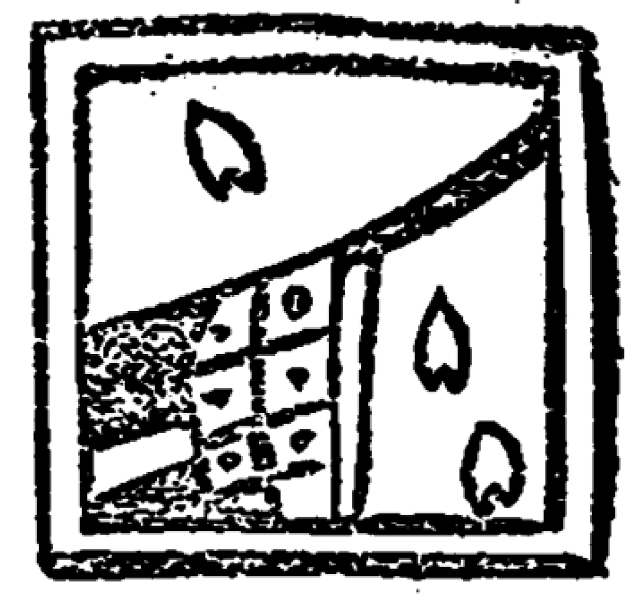
京都　秋の人

なつかしい秋の日の匂ひ——
深い愁にみちた晩秋の野には
あはれ淡々しい秋の花が咲き亂れて
私のさびしい涙ぐんだ眸になつかし
う滲み入る
心行くばかり豐かな空の微睡
わけもなく光れる茶褐色の雲は
南へ〳〵流れる——哀れな漂泊者の
如うに——
柔かな綿に包まれた樣な美くしい思出
戀人の匂ある唇の印象よ——
みすぼらしい落葉林の聲なき聲の慄
ひ地に惱む落葉のおのゝき
夕日は沈む
あはれ野よ山よお前は青ざめてゐる
あゝあゝ
夕日と色
暗い森の彼方には
望んでゐる人があらうに。

○哀しき戀

岩代　もくせい

立ちつくす我等が上に
病葉はハラ〳〵と
最後のキスを交しつゝ絶えず散り行
く。
常闇に
我等が影は深う沈みぬ。
二人は只に言葉なく
思ひ〳〵の追想に耽りつゝ、
蟋蟀のひた鳴く頃を
立ちつくしたる淋しき心
あゝかくて日毎々々
隔り行く二人の心
われはたゞ立ち別れ行く
其宵の靜かなる心に憧憬れぬ。



俳句

内藤鳴雪選

○（天）

聟にゆく人の愚かや秋の暮　出雲　長崎君子

○（地）

文燒きぬ葉末の風の寒き朝　麹町　島白灯

○（人）

帆一ッに湖廣しけさの秋　遠江　平岩うた子

秀逸

秋ぞ立つ淋しき事の日記して　信州　山本操

酒飲みに京に登るや秋のくれ　京都　森本俊子

たまくに人と別れて秋ひと日　新潟市　吉田ひな子

投げ頭巾都の人に貰ひけり　大阪　多野なみ子

夕榮のうすれて寒し雉子の聲　落合　小泉ふく子

鹿の子の人馴顔や小春町　越後　横田梅子

とたん屋根に又かしましきあられかな　長崎縣　深見つゆ子

門高き女の滄師や冬牡丹　伊勢　向井光子

トツの醉ひ天下の覇を占領す　信濃　ひなげし女

缺月や甃を送る門寂として　信濃　白蓮女

鍋の聲高らかに圖の春　近江　須川しげ子

徒らに榾火に睡る男かな　近江　須川まさ

顔一つ洗て見たり今朝の露　長野縣　白い花

父母のすむ庵あたり小六月　横須賀　猪狩ふぢ子

秋の海かへる白帆に黄昏れぬ　横須賀　本田今朝子

山が見え村が見え霞晴れにけり　福井　さよしもれ

楠の木に百舌鳴きしきる小春かな　備中　西玉子

古藏に酒の香や菊の花　備中　磯千鳥

霜白うおく草むらにまりのとぶ　備前　佐久間綠子

秋の夜を寺にやどする長さかな　濱松　平石白菊

紅葉山はれて又見る時雨哉　兵庫　道場松露

木犀に秋の祀や庭祠　越後　齋川幸子

朝寒や殊更白き湯女の顔　鹽原　山口ていこ子

よき人の詩に集ひたる月見かな　遠江　富永ふみは

痩せたりと我が腕さする夜長かな　沼津　山内花子

菊日和病の乳母を訪づれぬ　日暮里　竹内美津子

朝風に舞へる木の葉や秋ふけぬ　和泉　田中喜與子

紅葉の軒を埋めて秋深し　和泉　金田ふみ子

大比枝やめぐる麓の末枯るゝ　京都　三宅壽賀子

我が袖に雪より白し月の影　武田かつ子

夕日寒く古き館の菊の花　下谷　桂子

秋風に亂れ髪結ぶ女かな　豐後　伏見英美子

明放つ大御代の戸や初みそら　熊本縣　富野かずを

寒窓に句合はせしたり梅の花　京都　松木絹子

大雪の戸に旭は高う昇りけり　東京　谿湖

時雨るゝや雜木林の暮近く　山口縣　客生草

墓ありてきめく庭や蟲の聲　福井　明星

かへり路や紅葉擔いで手にひさご　大阪　植村露子

松一木枯野の景色成りにけり　大阪　安達政子

行年のなつかしき手紙哉　神奈川　木村浜花子
吐く息の白きにも似て今朝の霜　下野　たへ子
妹のリボンに吹きぬ春の風　麹町　芳子
火事映る城の櫓や松の間　横濱　三橋田鶴子
木の瘤に霰たばしる松並木　横濱　山崎京子
木の葉落て子を産む石の痩せにけり　越後　藤原泣黒子
ひらくと落葉の頭の立田川　越後　白石櫻村
ざれ書きの小倉百首や春を待つ　横濱市　千鶴子
白菊の一輪づゝを名殘哉　一枝
砧打つ響に起きぬ月の萩　小甫
元日を千里の旅の門出哉　山口縣　郡眞美奈子
睦しくすゞめなくなり霜の屋根　上澁谷　國分常子
秋晴れや朱に染めたる箕面山　大阪　花園女
山茶花やちらりと落ちて日の寒き　鳥取市　糸澤登志
飛ぶ蟲の這ふ日となりぬ冬隣り　丹後　仲田品子
落葉かく手に息吹くや霜の朝　前橋　みどり
蟲鳴いて吾が夜となりぬ草の庵　長野縣　京はぎ
初春や門の小川の水白し　京都　要司村雁子
殘菊に鼠の骸見たりけり　兵庫　紅雀
裏藪にさわぐ小鳥や初時雨　兵庫　菫の花
散らばつた花あつめけり冬日向　豐橋　中川つる子
一人出て一人歸りぬ冬のくれ　草津　富澤百子
太郎冠者も參れ今宵の月見せん　上野　茂木よしゑ
弟の座敷角力や小六月　播磨　濱の女
大砲の馬引きまはす花野哉　麹町　牧野銀杏子
行年を小錢計ふる女かな　福岡　赤田すみれ
時雨して息つきあへず牛二頭　陸中　李花子
浪の音いよく冴えて深雪哉　伏見　竹村まき子
蟋蟀や夕陽に長き柔の影　南多摩　加藤よし
君と乘る車の後を時雨れけり　土佐　横山まつ子
行く人に紅葉落ち來る一葉づゝ　羽前　草玉獄

秋空や小町を急ぐ魚賣　東京　芳子
初雪や朱ぬりの妹が下駄の跡　千葉縣　八木玉子
小春日や舞ひ來る蝶々白と紅　秋田　ちわ子
春風や見ぬ師の顔のなつかしさ　日高　鈴木すみ子
かりの音やあしのはな散る江の南　大阪　日高登代子
蜀黍に山間の秋豐かなり　山梨　吉田邦枝
水仙の薫りに晴るゝ時雨かな　千葉縣　染谷みどり
戯れに猫追ひ廻す小春かな　千葉縣　石井せき子
傘返す文にそへけり梅一枝　千葉縣　飯高白菊
山越えて乳母が宿訪ふ小春かな　千葉縣　高山英子
夕闇や枯野の中の小提灯　千葉縣　白井くら子
膳にうつるともしの影や雑煮餅　千葉縣　鶴岡きよ子
烏帽子着た女飼鳩ふ若菜かな　羽後　荻野おみよ
村人の御幸を拜む花野かな　羽後　菊地まき
桃さくや舟から見ゆる廓町　羽後　三浦文江
ぬけ裏や萩咲きのこる姥が池　淺草　夕月子
君去りて秋立つ朝の浴衣哉　淡路　林光枝子
雪の日や靜かに暮る温泉の町　遠江　加藤緻子
南窓に仙書繙く小春かな　佐賀　さゝ舟
寒月に人影見たり梅の庭　京都　松木絹子
なき友の歌思ひ出でぬ秋の風　靜子
初孫の笑顔も小春日和哉　福岡縣　上田與砂
月一つよしや野の殘り菊　奈良縣　田村みどり
寒月や伽藍の門を閉づる音　小樽　賤の女
川ばたにすりばち捨てぬ雪の朝　栃木縣　すゝき
明月や風の吹かざる女郎花　新潟市　星幸
傘さして行けばうるさし花すゝき　岡山市　池田園枝
卯の花や詩人棲むてふ家の垣　三島　村瀬春子
夕暮や菊咲く野邊をひとり行く　京都　美知子
桐の葉を落してとびぬ村雀　京都市　久芳清子
春風や緑り映る田子の浦　遠江　宮司みき子



雜錄



女教師の生活

田都

△生れて十七年世間へ出る初旅　うみの父母のはぐくみの眼たかさの外は、世の荒浪といふものなど露知らぬ私は、今「世間を知る」といふ名の下に、遠く故郷を離れて人の子を敎へる身となるのかと思ふと、そゞろうら恥かしくも、また恐ろしい氣がして、おづ／＼と車中を見まはした。「ヤア…よく一人で來たね」と白髮の田部校長に迎へられて、職員室兼應接室に導かれる。はづかしさに顏もあげられず、うつむいてると、二十四五人の眼は矢のやうに私に射る。「オイ君ッ尋五の宮崎の母が若い〇と一所に馳落したさうだな」「ヤ、さうか、ふるつてるなア」と男敎師らのひそ／＼話が耳に入る、あゝ神聖な筈の學校の先生もてんなくだらぬ話を喜ぶ凡夫のあつまりかと少なからず失望した。「ヤ君まだ肩上げがあるね、そりあとらなくちやいかんね」と八分もつまんだ肩先きを見つめられてハッとするともう悲さが胸までせきあげる、處女の第一のほてりは肩上です、それをとれとはあんまりな……「は、では今度母に問ひあはせましてから、御返事いたします」とからくも言つた、背後にくす／＼笑ふ聲がして校長は「おや今四五日待たう」とゴマひげを撫でゝ無暗に笑ひなさる、冷汗だら／＼、下宿に着いたのは午後三時机にがばと身をなげて心細さに夜更けるまで泣いた。

△先生の味ひ　昨日一日授業を見せて戴いたが、机間巡視がどうの、板書がどうの、豫備や提示や應用がどうのと話されたつて、私にはさつぱりわかりません。耳なれぬ熟語に一驚を喫して、無我夢中でした。登校の途すがら桑畑や菜の細道歩みながら只一人「氣をつけッ」「右むけッ右」「前進めッ」など口誦んでは、われと我口をおさへて赤くなる、まづ第一に心配なのは此

問題です。女學生としてゐるがへつた昨日の海老茶は、今日から田舍の先生の足にからまつてる、時計は容赦なくタイムを刻んで、第一時の鐘がなる、片田舍の垢じみた鼻たらしの男の子、女の子、皆私の丸たぼや、ブローチを珍らしげに口をあいてながめる。

校長の紹介で、靜かに挨拶をする、前方の八つ九つ程の子供らは互に「あれやあの先生は肩上げあるんだい、をかしいなア」と口々に笑つてる、最初から失望し、おぢけのついた私には、こんな言葉さへ身を刺されるやうだ。

第二時間めには、尋四の受持となつて、讀方の時間、氣をつけも口の內、臭氣が鼻をつく子供らの、後から敎室に入る、さて何といつたものであらうと、わづか十や十一の子に氣おくれがして、たぢ／＼となる、初對面の挨拶もそこ／＼に讀方を始める、昨日見たまゝをいい加減にやつて見る、定刻より五分も早いが、遊戲場へ出す、水をうつた樣な野に、わが敎へ子は考へもなく大聲でさわぐ、其都度私は罪でも冒した樣に眉をひそめて四方を見廻した、胸はちく／＼痛む。

△先生なぜそんなに考へてゐるの　昨日は馬鹿に早くすましたから、今日からはちとゆつくりと構へて、授業にかゝる、算術はなか／＼出來ない、手を後にまはし先生振つたスタイルで、机間巡視をする、一つ問題に費やすこと二十分、豫定の三分の一も出來ぬに鐘はなつた、昨日までは先生なんていはれるとしやくにさはつて反抗心がむら／＼起つたが、今日は先生と懷しげに集ひ來る吾が受持ちの敎へ子は、特別可愛く、嗚呼自分は師である、模範者である、といふ重い自覺が頭をもたげる。職員間では女學生氣取つてるわとか、乙うまじめだとか、だまり蟲の壁掘りとか、きくに堪へぬ惡口も、敎へ子故に凌ぎ得た。先生なぜそんなに考へてゐるのと膝にからまられると、人無ければひしと抱いてキスもしたくなる、お話して下さいと袂捕へられゝば、他人の子でさへこんなに情のうつるもの、自分の子なんてどんなに可愛いかと、今更思ふ。私は每日可愛い敎へ子故にあらゆる迫害に勝ち得た。

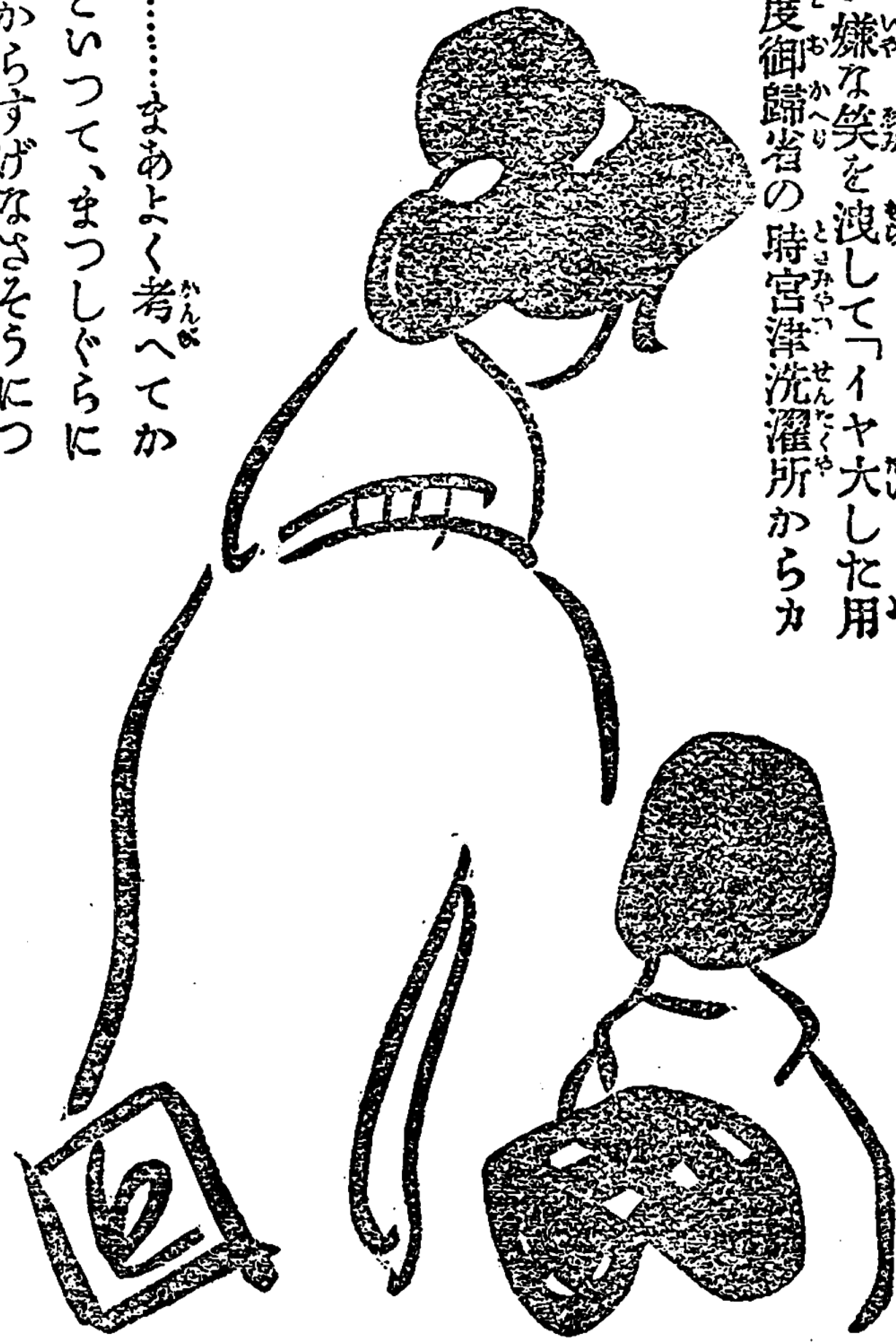
△誘惑來る　月日に關守なくて一月と過ぎ二月と暮して、事務にもなれ、最初に怪んだ熟語を臆面もなく吾が口から吐き出すようにもなつた、渡る世間に鬼はなく、六人もの女の同僚は、師範出や檢定取りの優しい方ばかり、男といへば父と兄との外に知らぬ私が、口惡の仲よしの澄枝さんから、餘りかへる程きかされ

た男教師の影口やあだ名。

今日放課後、掃除のすむのを待つて、突如と入口の戸を閉た五尺の人は大浪といふ尋六の男教師、ギヨッとしてざわ〳〵と寒氣だちがした。「何か御用ですか」と問ふと、堪へがたない嫌な笑を洩して「イヤ大した用事でもないんですが今度御歸省の時宮津洗濯所からカラーとネクタイとつて來ていただきたいですな、小さい物ですから」と一分許の赤ひげを撫でる。「は、それはわけもない事ですが、何分家はやかましやですから……女の方のなら差つかへないですが……まあよく考へてから御返事致しませう」といつて、まつしぐらに職員室にはいつた、後からすげなさそうにつづく大浪と顔の青い私と、好奇心らしく見つめたのは川瀬といふおしやべりの男教師だ。

△恐男病　校長に一寸と、手招されて一人靜かに伺ふと「まア、かけ給へ」と椅子をさす、「實は今職員間に君の事を兎や角いつてるが、君何か心あたりはないかね」と問はれてギックリ、「は、先日これ〳〵で」と話すと「ははあ」と考へられたが、「君はまだ知るまいが、大浪はダイナマイトといふ名もある危險物さ、近よらざるにしかずだ」と笑ひなさる、初めから男を恐ろしく思つた私は益々恐男病に取りつかれて男子には石の如く冷やかな態度でつきあつた。

△對手は九十度以上　後からポンと肩をたたかれてびつくり振りかへると、人惡な澄枝さん、も御掃除すんでときくと「御掃除所ですか天下の一大事出來よ」と大久保彦左を氣取る、妙にからんだ事ばかしで中なか話さないから、話をきいたら今日は御節句故、白酒をおごる約束できく、つまり私は白酒でお話を買ふやうな者だ馬鹿々々



おつかひに　古河幸枝

しいか。……

「あなたは可成りな人なかせね、そら南二階の黒紋付さんが、あなたに首つたけの、ラの字ですと、そりあ下宿へかへつても、君代さん〳〵とお口から取れないんですつてね、そして一人娘かしらだの、理想は何だらうなんて川瀬さんに聞くんですつて、川瀬さんてば『君峰山(黒紋付)が僕は可愛相だ、人もあらうに情持ずの君代君を九十度以上たあ側で見てる者の方がつらいせキヤツも憐れな男さ、若い盛りをくよ〳〵して』ですつてね、お安すく無いわ、御白酒ならがへなしに」とは澄樣もあんまりな……

▲まつぴら御免　昨日あんな話を聞いてから、胸が惡くてたまらなんだ、汚らはしい、白酒所ぢやない、小學校のへボ教師なんかまつぴら御免ですよ、これでも理想は大いわと雲も無い空を睨み返して、僅かに腹いせする、又其くせよく私の樣なおかめ樣に戀なんかする物好きもあつた者よと、をかしくてたまらぬ、知らぬが佛で昨日まで、何心なくお早う、左樣ならといつた其人に、口が重つて白々しくはいへなかつた。

▲辭職前十日　卒業式が間近で忙がしい、今日も一日生徒の成績や通信簿の記入、出席簿の整理でつく〴〵こんな無意義な仕事があき〳〵した、もう十日で暖かい家庭に再び愛娘となる事が出來ると思ふて、せつせと働く、澄さんがは入つて來て、君代さんはいゝわ、ぢつき此間來て學校の臭かいだばかしでむせ返つて逃げるのでせう、えゝかくしたつてちやんと知つてますよ。どうせ私も臭い蟲の仲間ですから、すつかり御見捨下さいとプリ〳〵する。

▲世間は知るべきもの　最初の希望も前途の光明も、皆暗黒面に葬られた死軀は、今車窓に横はつてゐる。澄さんや秋さんの眞心からの見送には泣かされた。午後六時、可愛い下女に荷物もたして、父母の膝下に歸つた。あゝ家程よい所はない。

今はよしや臺所に手足をうごかすとも、やさしき父母は心からはぐくんで下さる。世間知らずの娘でも、きつと世の荒浪にもまれねば、家鄉の味、父母の有がたさはわかりません、一度教師なり、事務員なりになつてもまれたお方はきつとなる程と思ひ當ることも御座いませう。

勸工場しらべ（第二博品館）

白木いと子

▲出店數と店員の總數

賑やかな廣小路の電車交叉點から上野の方へ向つて左側、入口の右手には繪はがき屋、左手には名刺屋を控へた三階建の大きい勸工場があります。帝國第二博品館といふいかめしい名のがこれ。此館を今御紹介いたしませう。

此館は創立してからまだ何年にもなりませんけれど新橋の第一博品館からみると、ずつと廣く、勸工場としては殆完全したものなので、櫻花に名高い上野に又一つの光彩を添へました。

此館内をよく見て歩くと中々見でがありますよ、新橋のもさうですが、此館でも階上へ昇るのに普通の階段でなくて、自然の傾斜で坂道のやうに出來てますから、大きに足が助かるのです。

品物を並べて居る店數は凡百四十軒。そして左の入口からは入つて、中央の三階休憩場までの店數は、右の入口から這入つて中央までの店數に殆倍する位多いのです。品物の番をしてる店員の數は詳しく判りませんけれど、一つの店に二人ゐる處もあれば一人の處もあり、二軒に三人宛の割合にして見てざつと二百人内外はゐるのでせう。そして

▲店の種類の多少

洋品店と玩具屋が一番多く、それに次いでは小間物屋、袋物屋、文具店などですの。少いのは水晶篆刻、寫眞器械、屛風、古着、佛器、足袋、西洋家具、樂器、測量器械、書籍、桶荒物などの店でこれらは皆一軒づつですが、瀨戸物、金物、漆器、組絲物等の店は多少の其中位を占めてゐます。尤も店でも純粹に一品丈を賣つて居るといふ店は尠いので、大概似たりよつたりの範圍内に纒めて了はなくてはならないだらうと思ひます。

店も大きさが一定して居ず、廣いものは兩側に陳列してあるので異ふ店かと思つてみると同一の商店なのです。こんなのが八九軒でざいますよ。

▲飲食店

は梅園の汁粉に壽司雜煮などの西村亭、また西洋料理店もあります。三階の中央休憩場には喫茶店があり、お土産の瓦斯燒菓子を賣つて居る店もありました。飲食店の他に理髪店もあつて、大きな鏡に通るお客の姿が映りますけれど、此館内で態々理髪する人はまあ餘りないやうですね。さう〳〵、それに寫眞屋が中央休憩場の處にありましたつけ。休憩場は悉皆で三箇處あるんですの。

此館内で注意することは、

▲女店員の尠いこと

でせう。男の半數もない位だらうと思はれます。それに試しに午前いつてご覽なさい。一層女の店員は寥々たるものですから。これは女の方はどうしても家事向の細い用を多く持つてゐるものですから、すつかり用を片付けてお晝前頃か或はお晝でもすまして出掛けて來るといふのが多いらしい。これが一つの理由であらうと思ひます。

女の尠いのはもう一つは又直に人の手に觸れるやうに品物が陳列してある都合上、女よりは男の方が多く番してゐるといふ意味にも取れるでせう。

館内商人は他に一つの店を持つてゐる者もあれば、單に此館内だけの勸工場商人として之れのみで生活してゐる人もありますし、それから又他に店を構へてゐるといふのでなく勸工場商人として此館内一つの店計りでなくて他の勸工場にも店を二三持つてゐるといふ人もあるのです。

處で店番する人の商買振はと云ひますと、總じて

▲女より男の方が商法上手

なことに氣がつきます。これは爭はれない事實です。女の店員も一體に親切で心地惡くするやうな事はないけれども、商買の調子、俗に「コツ」とでも云ふものでせうか。どうも男には及び難い。もつとも是れは此館計りでなく、在來、女の店へ坐るといふ事は男のそれよりもずつと近くに初まつた事ですから、一般の上に於てさうなので仕樣がありません。それからお客樣の出入の多いのも、

▲朝よりは晝、晝よりは夜

と云ふ具合に商買は繁昌します。一日のうちでも殊に夜の勸工場は美しい。晝間見れば埃目のたつ品物で

も夜は燈火の光に榮えて全然美化されてしまふ。輝く色彩の豐富な夜の勸工場へは入ることは誰しもさう厭惡な心持ではありませんからね。

一日の中でも人の出入の時期があるやうに、一年のうちにも又定まつた時期があつて、此館の

△一番よいのは花見時

なのです。此所は名に負ふ上野を控へた好場所ですから自然花見時分が一年中での繁盛時期で、館内の通路が客で塞へて後からの人は中々先へゆかれないなんて云ふのは此頃です。それから商法の振はないのは夏場、暑いのに勸工場へなんかと能く一口にも云ひますが、夫れでも夜は納涼がてら散歩に出掛た人が這入つて見る事もありますけれど、夏の晝間館内へはいつてでらんなさい。倦怠の色は何所にも溢れて、品物の番してる店員がよく居眠つて居る處なんかを見受けますよ。

△市中との價段の相違は

と云ひますと、『賣品には必ず正札を附し掛引を嚴禁す。値引したる者は規則により賣價五倍の罰金に處すべし』と一軒の店毎に掲示されてある位ですから無論掛引なんかは少しもしません。然して品物のすべてが市中商店のよりは一割高です。けれど其代り品物は正確ですから安心して買へますが、同じ勸工場でも神田小川町邊のから見ると少々高くなつて居ます。市内で品物の安いのは神田小川町邊でせう。

また面白いのは賣れない年程景物附の賣出しをするといふことです。此館で賣出の時には買物をすると、五十錢以下は賣殘りのつまらない景品を附けますが、五十錢以上には福引券を渡し、福引券一枚なら一本、二枚なら二本と福引券の數に應じて籤を引かせて、それに金高が記してあり、其金高だけの品は何と限らず館内の商店で請求する事が出來るのです。

ですから賣出をして景物をつける時は館内商人から金高の幾分づゝかを出金する事になつてゐます。

△お客樣の種類

はと云へば此館はどうしても田舍出の人が多いのです。これは場所の關係があるのでせう。で、お客樣の買物ぶりもお客樣の種類夫れに準じてゆきますから一概にかうとは申されませんが、何しろ神田小川町邊の勸工場に比べると、此館内の空氣は何處かおつとりしてゐると云ふ事が判ります。

私の見たる現今の婦人雜誌

白百合

◎女・子・文・壇・

普遍の雜誌のやうに文藝をおしるしにつけたのではない。本誌を開放して、讀者の自由なる舞臺に提供してゐる。

全體本誌には覺めたる女が多い。他雜誌のやうに何日迄も濃艶な華美な人形的な思想を持つてはゐない。

ある文章は女らしくないと誹謗る人もある。けれどそれが現代の女の持つてゐる思想であつたなら殊更つくり飾つて迄、生地もなくしてしまふ迄、技巧的に粉飾しなくともよさそうなものである。元來女子文壇は一歩他雜誌より先へ歩いてゐる。先へ歩いてゐるから迫害せられるのかもしれない。乍去さめたる女に對する道學先生の心配は杞憂にすぎないと思ふ。

何にしろ本誌は文壇に雄飛する土臺になつて婦人雜誌中文學雜誌として擧げられるのはこれ許である。其故か文學を愛好する人は必ず本誌を見てゐる、一般の文學界からも、餘程注意されてゐる。

◎婦・人・世・界・

南天の實のやうな華やかそうで淋しい雜誌である。

一體、此雜誌は實驗談とか、苦心談とかに非常に力を入れてゐる。讀者の中には是から世に立たうとする人も少なくないのであるから、貧乏時代に於ける我妻の内助、千幾人の子女を育てたる私の苦心等、ヴニチーに許り走らうとする若き心に鞭打つ文字は誠によい。けれど手柄話に落ち入つて内容がないのが恨みである。殊に將校夫人として御用商人の賄賂を斥けし實談などに至つては眉に唾して見るべきものであるけれど本誌の文藝問答、料理談、育兒問答、等は宜い。讀者の過半數は人妻が占めてゐる。一つは弦齋夫人の料理談があづかつて力ある事と思はれる。

要するに過去に執着してゐる傾がある。但し社會的に華やかなのは他雜誌の遠く及ばない處である。

◎女・學・世・界・

艶麗ダリアの花の如し。けだし適評ではあるまいか。

内藤千代子、花散里の筆に熱中してゐるのは高女の二三年生である。甘いそうして熱しやすい若き血をそゝるやうな記事が多い。

けれどこの中で引しめてゐるは、この頃見えないが河岡朝風さんのピリツとした刺戟のある筆致である。特筆すべきは與謝野晶子さんの雜記帳、男も及ばない痛切な書ぶり、誰でも心服する論である。

星ケ岡の花濕める日、お目に掛つたお姿は、忘れ得ぬ天才の人である。

そうして口畫も呼び、ものである。殊に令孃鑑に至つては婦人世界の花嫁花婿に相對して好奇心の瞳を集中させる。それ故だか男子の讀者をかなりあつめてゐる。

◎婦人畫報

病院の玄關でも、華族の應接室でも備へられてあるのは此雜誌。その三分の二は畫報といふ通り寫眞で持ち切つてゐる。讀者は紅のリボン右に掛けた切下げ髮の少女から老人に至る迄。その外讀物も相應に華美な女學生向きの記事がある。料理談もある。應接ぶりから見た現代の貴婦人などゝ一寸目につく記事もある。けれどこれと云つて印象のこるやうなものも少いやはり畫報は繪を見るべきもので、記事は儲けものとしてよむべきものである。

◎婦人くらぶ

新らしいやり方が婦人世界似よりの雜誌をぬいて、何處となく少々鳩胸でも腰のすわつたマガレットに六インチ巾のリボン、綺麗な瞳の少女をこの雜誌の化身だと思ふ。何となく氣がきいてる。そうして凡ての調和がよい。よし内容がさほど深くなくとも何處か引しまつてゐるけれど奥がない。氣ぜわしい氣がする。而しスツキリと心持のいゝのがとり得である。

とりたてると、美容問答に若き讀者をよほど引つける。そうして時々大家の小品がのつてゐる。つゞめて云へば瀟洒な萬人向きの雜誌であらう。

◎婦女界

婦人くらぶと婦人世界を折衷したやうな雜誌である。ちと表題の大きすぎるのもあるが、まだ生れて間もない事この位はしのぶべきであらう挿畫も豐富で記事も澤山ある。花形として下田文學士がよほど力を入れて、溫健な思想の普及につとめてゐる。

この雜誌には理容館主遠藤初子女史の美容術と、久保田米齋氏の衣服と顔のつり合などについて記述されたのが大もてゞあるけれど講談物を掲載するだけどうにか古い所があるやうに思はれる。

◎婦人界

如何にも女らしい雜誌である。けれど因襲にとらはれて居る樣な處が見える現代の敎育をうけた高島田の濃艶な京都式の女のやうである。水道でみがかれたのでなくつて加茂川でさらされたのだ。生氣にとぼしくどこかたるんでゐる。只綺麗で女らしい。これが私の見たこの雜誌の感想である、各種の方面からいろ〱の記事が圓満に掲載されてる。しかし浮き〱した華美な記事は少ない。

◎婦人の友

羽仁氏夫妻が十年一日の如く經營と編輯に骨を折つて居られるだけ、個性の著しい雜誌である。この雜誌は若い女に向かぬ、奥樣、主婦と云つた處に常讀者の大部分があつて、永く動かぬらしい。

もと家庭之友と云つた時分からつゞいてゐる家計豫算表は此雜誌の一つの特色である。

態度もぢみ、體裁もぢみ、實用一方の雜誌で且親切である、あまりぢみすぎて多くの人に知られないのは惜むべきことだ。

◎婦女新聞

週刊新聞の中でも尤も舊い方であらう、穩健を標榜して、少しも浮華なところはない代り、淸新の氣に乏しい、讀者は何う云ふ領分にあるか分らぬが、小學校の女敎師などは、必ず見て居るであらう。

此誌の特色は、其健實な論說である、能く調べた全國の女學界の近況である。

文學趣味もあるが、新らしくない。

發行日を誤らないのと、態度の正しいのとで相當の信用をつないでゐる。

最近日記

眠る前

加藤筆子
佐藤萬壽子
前島優梨子
夢の女

☆　　筆子

雨上りの朝日が心地よく一ぱいに照り渡つた。思ひ出した樣に母樣が「今日は納めのお朔日だ」と仰つたのが、いかにも重々しく聞える、處へ井戸端ではお隣のおかみさんが「もうあと三十日限ですねえ」と妙に沈んだ聲で云ふ、言はずとも毎年極まつた事、餘り珍らしくもない言葉だけれど、かうした思ひは丁度、吾吾の興奮劑である、空漠な秋に沈滯した人の心に、突として來るべき年と、行く年の瀨の境がそゝり立つ樣に印象される、而して、俄に眠から覺たる如く師走の寒空を、狂熱して世間では騷ぐ第一日だと思つた。現に私の家でも障子を張りかへたもの……。（十二月一日）

八重垣町では福引大賣出しが始まつた。酸漿提灯や紅白の幔幕で色彩された町は、いつになくでたく〳〵と狹隘しい、松や竹の匂ひはないが、自然と來む新年が忍ばれて、あゝまた一つ年とるのだと、急に壓石を一つ乘せられた樣で、「お正月が來て嬉しいでせう」なんて、云はれる都度に私は何だか泣きたい樣な氣がする。（二日）

松屋の階上に私は母樣と、澤山の切地の前に立つた。ひわ色に霞を刷いた縮緬や、眼のさめる樣な江戸紫の巴波に、櫻散らした友禪類を、あれの此れのと選んで居る頬はカッと上氣した。大勢の人のいきれ、衣ずれの音香水の匂ひは、室内の暖氣に淀んで重くるしく立籠つてる、かうして私も人並に、春を迎へる仕度をするのだ、這麼蒼い顏や、無樣なスタイルが幾程おめかしゝたつて一向に榮もしないのに……何のかのと、春着の御心配遊ばす母樣！あゝ親であればこそ、と衣持つ私の手は打顫へた。（三日）

今朝床の椿を活けかへてると、母樣は獨言らしく、芳さんのお老爺さんが居なくなつたから、今年の煤拂は手が足りないから、確乎働らいて貰はなくつちや、あゝ疊も座敷は是非換へねばならぬし、と急はしさう

に引かへ兄様は、一筆、年忘れにうんと御馳走の會をし
てくれないか」と至つて呑氣なもの。
お春さんとお清さんが、元日はお揃ひに日本髪にし
ませうと仰有る。ぽつ〳〵縫物して居ると、
郵便！繁様から新年宴會設立のお手紙。
あゝ私の様な眠た女でも、昔は流石に用事多忙だ、新
ホームの人となつた、誰様彼様をお察し申上る。（四日）

なつかしき故郷を後に、親も捨て友も將た戀も捨
てさ迷ひ出でゝ幾月……。またしても、弱い心を泣か
す様な手紙に接した。無名の主が誰であるかは解つて
居る、西北の空を見たら、白い雲が浮んで、心なき庭
の楓がハラ〳〵と散る。私は監督の眼を忍んでまで
も、同情を表する涙多い女ではなかつた。けれども此
急はしない月を、飄然漂泊の旅にある人をば非常に慈
愛の感に打たれる、復活の心なく、行く水の流にまか
せたらしい身の上の果敢ない事、さう思つて暫らく手
紙を繰り返した。（五日）

☆

蔦森子

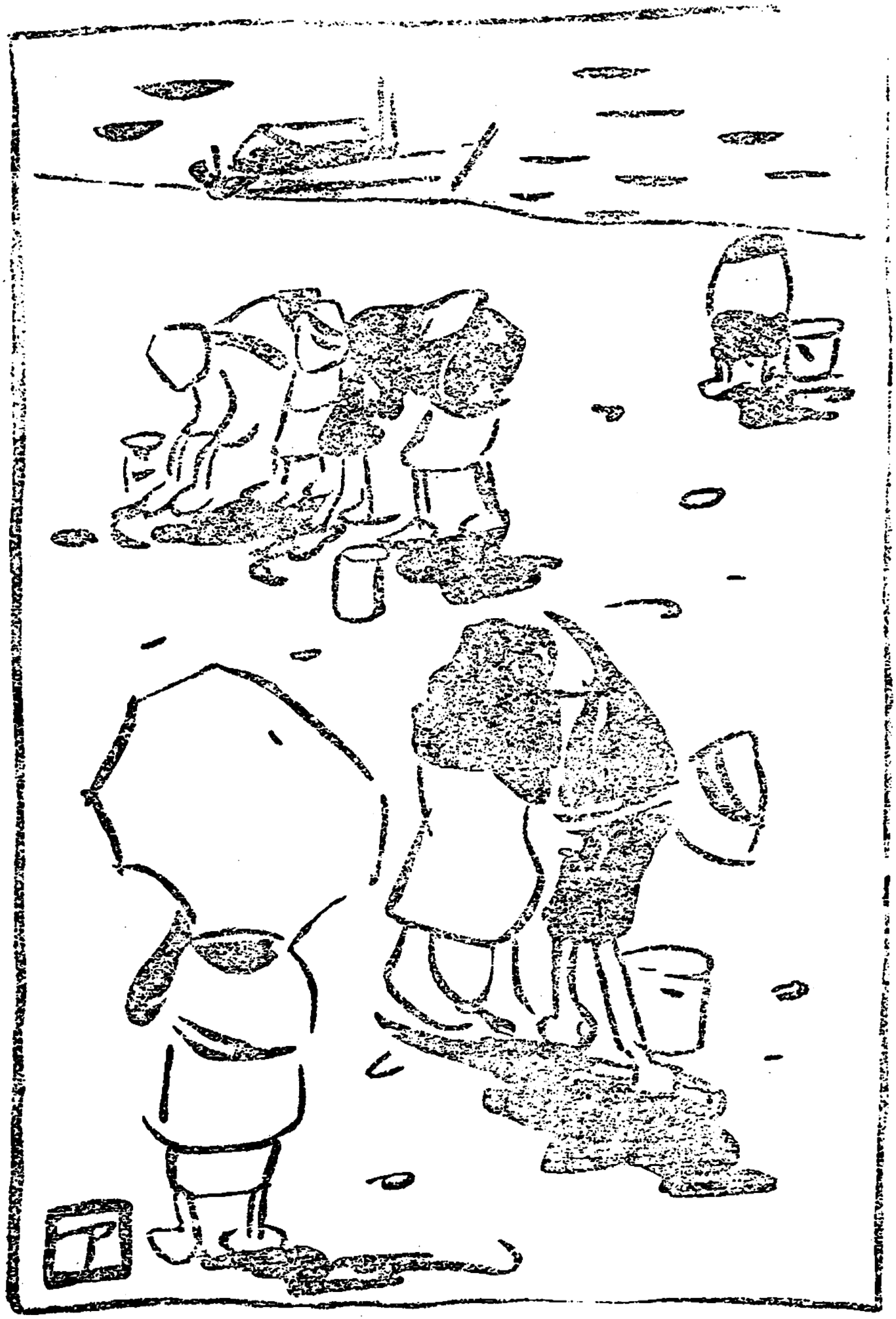
小雨のしと〳〵降る中を湯へ行く。
モーと立罩む湯氣に包まれた青い瓦斯の光が此上な
く懐しかつた。
皆瞳を耀かせて、跡から〳〵入つて來る若い女を、
片側一面に張てある鏡の中で凝と見る。なぜか妾は恐
しい人の前にでも出た様な氣がして、臆病氣に隅の方
へ小さく成た、そして青い強い光をあびて、おそれ氣も
なく鏡の前へ陣取つた若い女の五六人を偸む様に見た
水の滴る様な高島田の襟足美しい人や、壊かゝつた
銀杏返しの蠟の様に白い肌の痩た女も居た、中に西洋
婦人の頰を見る様な美しい皮膚の眼の清らかな口元の
愛らしい女が居た。○○の娘？俳優買の、人形食の、
とすぐ想はせる評判娘、あの初々しいかつらの様な銀
丈長の高島田をもぎ取つてやりたいやうだ。
青い光は何物をも美しく見せた、華かな電燈の下に
裾引く女も、闇にはたらく醜き女も、處女を粧ふ汚き
女も、神の如き清き少女も、皆同じ様に。小さき波う
つ湯槽の中は、誰をも溫かくやわらかにくるんで吳れ
る、妾は情ない氣がした。
裸に成つたつて汚い心は見えやあしない、あの美し
い皮を破つたら矢張汚い紅い血が出るだらう、あゝ忌
だ、忌だ、どこまでいつたら……。
彼の女？娘は襟へ濃く白粉をぬつた、顔へも……あ

あ妾もぬるんだ、歸ればすぐ寢るんだのに——。

やつぱり華かな都會のうづまきに卷込れて行くのだ大きな唐人まげに結つたのが恥しい。

（十二月一日）

昨夜から今朝へかけて幾度か足の筋や手の筋が痙攣た痛いのは我慢もせうけれど、もし動けなく成つたらどうせう、あゝそうしたら誰が世話する人があらう、追れて、いつそ彷徨ひて野に伏す！あゝ其れが妾の運命かも知れない。けれど、けれど病の原因さへなかつたら、矢張妾が惡いのかしら、人は心配しないで自分の利益な道に進めと云ふ、でも此の儘に默つて居たら遠からず一家は悲慘な終りを告げねばやむまい。あゝ妾はどうしたら宜いのだらう涙が止め度なく流れる。（二日）



汐干狩　廣島市　後藤あさ子

父と叔父の給仕を了つて二階へ上つた、窓の戸をくると赤い炎がパッと眼を射る、前の處で焚火をして居るんだ、向ふの納屋の敷石の上では、五六軒づゝ間を置いて焚火をして居る。

電氣を消して床へ入ると、窓の障子へ一杯にほんのりと火がうつる、天井にも足元の白い襖にも、中硝子を透して窓の張出した鐵棒の影が顫う。

妾は明前の街が見たく成つた、誰れかの下駄を突掛て腥さい店を出た、空には星が強く弱く光つて居る。角を曲る時、火の番が今晩は、と云ふ、何だか變な氣がした、室町の方を見ると靜かな眠つた街の軒々に瓦斯や電燈が燦然と輝いて、何處までもならんだ華かさ。犬一頭通つてゐない道は、常の倍にも廣く見えて、塵一ッ立ぬ寂しさ、さすがに朝らしい氣はするけれど、何となく物足りない樣だ。妾は日本橋の假橋の上に立つた。

薄暗の中に新しい日本橋は八分通り化粧した身を横たへて靜かに〳〵眠つて居る。

左りには、低く納屋裏の軒がつゞいて、幾艘か並んだ平田艜の上には、積んだ荷物の間々に、カンテラが赫々と燃て居る。向ふの七ッ倉は、黒く水面に浮いた影との間を消て、江戸橋の青い灯が二ッ三ッ水に細く流れて顫て居た。河岸の朝が明瞭と胸に刻み付られる。

なべやきうどん――と長く引た聲がふるへて遠くとほく消えて行く。（三日）

小兄樣が上等兵に成つてから始めての外出、皆なが星の三ッになつた肩を打つて、お目出度うと云ふ。

家に居た時はあれ程苦勞性だつた人が、生れかわつた樣に無邪氣に成つて肉も附た、顔も活々と輝いて居る。羨ましいと思ふと現在の事が、叉雲の樣に湧く、思餘つて小兄樣に其れとなく打明た、一年前の沈んだ顔があらわれた時、妾は叔母から堅く口止めされた事を思つて悔た、けれど妾が病氣に成る程心配して居るのに叔母に同情處か却つて妾を惡い樣に思つて當然の報だと云ふ口惜い、悲しい、つらい、あゝ何と云つたら宜んだか、妾を知つて呉れる人は一人も居ないんだ、「お前達が幸福で成人なつて偉い善人に成るのを草葉の陰から祈つて居ますよ」と云つた母樣が、今の樣子を御らんなされたら無御泣き遊ばそう。

「僕なんか何成つたつて宜けれど……萬壽ぼこには氣の毒だなあ――眞箇に可哀相だ、お互に惡い處へ生れ

て來たねえ……」小兄樣は鼻を啜つて堪られぬ氣に障子をハタと閉て奥へ入被つた。妾は唇も裂れよと強く〳〵噛だ。熱い涙が冷い茶碗洗ふ水の中へぽと〳〵落る。（四日）

昨日小兄樣から賴まれたシャツと股引を買つて、手拭を三本計り出しに父さんの用簞笥をあけたら、隅の處に手紙が四本あつた、ふと見ると越後の蔦から父の處へ來たので、六月が一本に、八月が二本、九月が一本で、まだ封が切れて居ない、よく見ると一度開封して又封をしたらしく〆の字が違つて居たり破れてゐたりしてある。

妾はカッとした、お父さんはなぜこう疑ひ深いのだらう、見たら見たで宜じやあないか、わざ〳〵封をしたりかくしたりしないで、直ぐ渡して下されば、親だもの子だもの、何も妾が人にかくして惡い行でもしやしまいし、かへつて嬉しう思う物を、あゝ忌だ、妾はどうしても父さんの心が解ない、一ッ家に住み乍ら用事さへなけりや一ト月でも二タ月でも言をかけて下さらないんだもの、何日だつたか「己は子供等の顏を見ると癪にさわつて堪らない」と、妾の居る前で荷主に話した事があつた、親の愛を受けない子程哀れな者はない、大兄さんや中兄さんのやけになるのも無理はないけれどけれど、あゝ矢張解ない。

「叔父さん誠に相濟ませんけど、小兄樣の處へ此品を持つて行つて下さいませんか」と風呂敷包を渡したら引たくる樣に取つて「ヘン人ッ小使だと思つてやあがる」と荒々しく出て行てうとした。

「誰れも居ないものですから……どうもすみません、是れは餘り少しですけれど車代にお持ちなすつて下さい」と一圓紙幣を出したら「ふンいらねえよ、電車もありやあ足もあるんだ」と下駄を穿乍ら「あゝ食客は情ねえもんだなあ」

妾は怒に躰が顫た、頭は混亂て、あゝ――（五日）

☆

優梨子

掃いても〳〵散つて不可ないからと、弟は黄色い公孫樹の葉を、長い竿で叩いたり搖つたりして落して居る。バラ〳〵ッと散る葉を幾度も〳〵浴びた頃「やア銀杏が生つて居る」と弟は大きな聲で云つた。「やぶにして置いたからだ、手入れをしなくちやア」と父樣は椽に立つて、遠くから黄色い袋を被つた小さい實を、凝と透す樣に見上げて被仰つた。

生るものを無理に生らない樣にするなんて慘酷だと、私は思つた。（十二月一日）

光子のお正月着がもう出來た。赤や白や紫の美しい色彩を持つた友禪の着物がふつくりと疊んである。私は其傍で今月の女子文壇をばらばらと繰つた。そして菊子樣の『此秋のかたみ』を讀んだ。幾度も繰り返して讀んだ。

菊子樣！お察し申します。喜美は貴女のお心の中を思つて泣きました。

あゝ私は幸福でした。私を限り無く愛して呉れる優しき祖母は、十里離れた母の家に、慈愛の瞳を持つて何時も私の行くのを待つて居て呉れますもの。



何か御用で　横濱　せい子

母が弱かつた爲に、五つ六つの歳を祖母の情けに育てられた私は、堪らなく祖母が懐しう御座います。戀しう御座います。

十月半ばの小春日の夕べ、私を門まで送り出して「もう是で今年は來られないだらうネ」と寂しさうに云つた祖母の顏が思ひ出されます。

あゝ私は幸福です

（二日）

久し振りでお茶の稽古に行くと、又彼の寫眞が目に着いた○○宮殿下御給仕のあの時の寫眞が………。あゝ厭だ。須美さんが居たら又二人はキッと指の痛い程强く握り合つて、昵と見合ふのだけれど……。さうした時の二人の眼には、何時も涙が一杯に溜るのだ

あゝ彼の夜。二日目の彼の夜――。白き女の顔――。園遊會の席ですら殿下のお傍は私達がつとめたものを……。(三日)

母「あゝ今日は日曜だつたネ」
私「えゝ、何故ですの?」
母「お師匠樣の家が餘りひつそりして居るから什麼したんだらうと思つたの」
私「何だか寂しう御座いますネ」
母「でもお前は何時も、朝から晩までシヤン〳〵やかましいつて云ふじや無いか」
私「だつて今日は聞かれないと思へば、又聞きたくなりますわ」
母「物事は何でもさういうものです。」
私「…………」(四日)

母樣は今朝の『報知』を見て被在る。私は明るい障子の際で、だら〳〵して縫ひにくい母樣の羽織を丁寧に一針宛返し針にして、襠を四つに附けて居ると、××町の叔母さんが被入した、そして
「上田へ菊五郎が來るさうですから、見にいらつしやいませんか」と母樣に被仰る。
「わざ〳〵長野から見に行くなんて、隨分呑氣な人だこと」と母樣は笑つて被在る。
「其麼事をかづけに、一度でも多くお母樣に逢ひに行きたいんですわ」と、若い叔母樣が被仰つた。
あゝ私にも何時かはさうして遠くから母を戀しがる時が來るのでせうか、離れたく無い、〳〵――。何時までも……(五日)

☆

夢の女

灰色の雲に溶けて師走のついたちは暮れやうとする。暗いてころ。

神保町に行つた。華かなる神田の町よ、暗き心のふるさとと歎いた港の町を離れてから、何の紀念も殘さずに、十七といふ齡もやがて、遂には過去に送るのだ。

いまは悼まぬ。逝けよ!逝けよ!!處女として華かに生くる命は葬られてしまつたのだもの、私の執着は餘りにいたましいものであつた。明るい町の人となつて更に、冷かなる新しい悲哀を覺えたのである。私はうなだれて歩いた。(十二月一日)

戸外を男の美しい聲で唄つてゆく。

母と二人ぎりの夜なんか淋しくて堪らない時、おかあさん唄うたつて聞かして、と云ふとよくあんな唄を、六疊のランプの下で針仕事の手を續け乍ら、ちいさい聲で唄つて聞かせて呉れました。よけいにさびしくなつては、たまらなくなつて、火鉢をかゝへて泣きました。

徒然のまゝに話しかけると、さうかと優しい笑を向けて、わたしが唄つて聞かしてあげやう。とペンを投げ例も聞く歌の細いふし、暖かな私の頰には、何かしらず、なつかしさ、こひしさに、とめどなく涙が流れた。（二日）

男みづからは、たゞかりそめの戯れに云ひ合つた女がそのために一生を誤ち、命を捨てるやうなことがあつたら、男はどうして其罪をつぐなふことが出來るでせう。男はへいきなものでせう、尊い心を冒されふみにぢられて、反抗もしえぬ女を思へば、強者の勝利を誇る世の男を呪ひたうでございます、あなたも男でいらつしやるけれど。

女とは斯の如きのみ。と仰つたけれど。（三日）

秋の潮の白く湧く日、海も天も灰色の雨に煙つた日など、校舍の窓に凭れて二階の琴の音をさびしく〳〵聞いてから、黃昏の町を行く時、河岸の家からお琴が聞えてくると、暗い思出に耐えられません。（四日）

私は世の中を紅の明るい華かな色に見ることは出來ないのです。暗く淋しい灰色の天地に生きて居るやうな心持ちです。花やかな歌舞のちまたに居ても淋しい心の底からしみ〳〵と淡い暗愁を感じます。人とともに同じ部室に居てすら、ある時は何しらず空虛な心に耐えかねて泣く、はなやかなるべき女とうまれながら謎に似た思ひを抱いて、みづから暗い日のみ辿らなければならない私は、不幸だとしみ〳〵思ひます。（五日）

☆

白妙

私は風邪を引いたらしい、感冒に罹りやすい私は罹つても癒すことを知つてゐる、私は自分の身體の事に神經過敏だと思ひます、聞いてみると誰も彼も感冒をひいてゐます、一種の東京と云ふ地の風土病なんでせう、私だけではなかつたのです、けれど私もいつのまにやら東京並の人になつたのです。（三日）

造花の流行

野村鏡子

造花術は今流行の頂上に達して居るかの樣に思ひます、造花など〻申せば初めは花かんざし屋位を想像したもので、又其技術も至つて幼稚なものだつたので御座いませうが、年々進歩に進歩を重ね今では文部の驗定にまでおかれる樣になつたので御座います。造花術のごく最初は、伏見とお仰る方が京都から御出でになつて、一ッ橋の女子職業學校にひろめられたものださうです。で以前はこれを專科としておかれた學校もごく僅かで、先づ二三に過ぎなかつた樣でしたが今では各技藝學校は申すに及ばず、女學校、小學校にまでもはびこり、其他市街にもそちこちに專門の看板が掛けられてあります。私が一ッ橋の學校に居りました頃、此科の生徒は百人足らずで御座いましたが、本校でも年々に增加して今では裁縫科に次での優勢ださうで御座います。かう云ふ有樣ですから近來は誰れも彼れも深い處迄は御存じなくとも、まねごと位はなさる樣に見受けられます。

◎造花の需用と成功

需用と申て我國ではまだ實用品の中には數へられてをりませんが先づ髮飾は云ふに及ばず、劇場、會場、店先の裝飾、徽章などにはなか〳〵歡迎される樣です而し何分にも日本では帽子飾にも餘り用ひられず、室內の裝飾にも洋室なら勢ひ籠花とか盛花とか申すところですが、純粹の日本室では矢張りしつとりと何流かの活花をあしらつた方が重々しく、どうも造花はふさはしくないので餘りよろこばれぬ樣です。

それ故之を專門に成功しようと云ふのはちとむづかしい樣に思ひます、と申て決して成功者がないと申すのではありません。立派にそれで生活してゐられる人も御座いますけれど、それは十人の同業者に對する一人の成功者で九人の者は失敗に終るので御座います。

或は御存知ない方も御座いませうが、四五年前に牛込水道町に造花株式會社と申すのが立つて六七十名の女工を入れてなか〳〵盛んに製作致して居りました。當時開かれた東京勸業博覽會に硝子製の六角堂を作り籠花にたしか一千圓かの札をつけて出品致したあれです。其當時は池の端にまで賣店をもうけてなか〳〵

盛んな樣でした。が博覽會が終ると共にだん〳〵衰微しいつか煙の樣に消えて影もなくなりました。一例を申せば先づこんなものです。市街にもぽつり〳〵造花店が出來ますが只美しいと人が立ち止まるばかりで、割合に價の高いものですから、もらへばともかく買ふのは馬鹿〳〵しいと申した樣に、なか〳〵思ふ樣にはうれぬ樣です。其内に花は色があせてくる、形がくづれてくる、かう云ふ始末で大抵は閉店されてしまひます。近來如何に造花が流行致すからと云つて、それは單に造花術が流行するので、商法とするのはまだ〳〵のぞまれない事と思ひます。

◎造花の手間賃と內職

造花の手間賃といへば先づ原料の三倍と申すのですから、どん〳〵賣れさへすればこんな割のよい商ひはありますまいが、何しろ前に申しましたとほり、實用品でないのですから、とかくローズ物が出るので、そうぬれ手で粟と云ふわけにも參りません。而し婦人內職としては美しくもあり、さまでに割がわるくもない樣です、がそれには自分にそれだけの技術をこしらへておかなければならず、又隨分面倒な仕事ですから、餘程すきなものでなければ出來ません。某軍人の未亡人で非常に造花に趣味を持ち日曜毎に二年間續けて私の許へ習ひに參つた人が御座いましたが、なか〳〵熱心でもあり、好きこそ物の上手なれで一つ教へますと必らず應用をきかして色々の物を作つてをりましたが、此人は今內職にして某特約店から注文を受けて來ては一生懸命に製作して、もうそちこち半年になります。注文は多く髮飾類で、時々は枝物等も作つてをります。手間賃は製作のものによつて割のよい時と惡い時とあるさうですが、何しろ一箇月十圓以上にはなるさうです。もつとも此人は具合よくいつてるので誰もかうと云ふわけには參りますまいが、少し技におぼえがあつてよいつてが求められたなら、婦人內職として至極ふさはしい物だらうと思ひます。

◎遊戯としての造花と腦力

本職にやらう內職にやらうと云ふのは別ですが、遊戯として少しやつておくのは樂しみなものです。細かい事のきらひな方にはとうてい出來ませんが、先づ應用のきく位にならつておけば何んの花でも見れば面倒一つで出來ます、と申しても天然の花に寸分違はぬと

申すわけには參りませんけれど、自分の腦力一つで或程度迄はまねられるものですからなかく樂しみなものです。

造花術は先天的の物で上手な人は初めから餘り見にくいものはこしらへませんし、下手な人はいつも下手な樣です。もつとも、初め見られない樣なものをこしらへた人だとて、ならつて居るうちに上手になるわけですが、どうしても各自の性質によつて上手下手はつきまとつてゆく樣に思はれます。此奈ものに腦力等はいらぬかの樣に思はれますが、なかくさうではありません。實物寫生等致します時はどうしても考へがかんじんで御座います。只數へられるまゝにやつてゆく位なら、どんなぼんやりした人にでも出來ますが、それではほんとの面白味はわかりません。どうしても自分で工夫をこらして作り上げて見なければ造花術の眞の樂しみは得られないので御座います。

囚はれたる商人の家庭

重子

囚はれたる商家の娘の氣焰を聞いて下さい。

今迄に幾度か私の口から漏んとして今日迄此の小さき胸にわだかまらしてあつた不平を告白いたします。

全體私は商賣はもうく嫌で嫌でならないのです、店が繁昌しようがしまいが、其んな事には一向かまはないで、地理が何の、理科が何のと騷いで居た時分が羨ましくつてなりません。何故此樣な商賣など始めたのだらう、實に實にめんだうでめんだうで堪らないのです、其んな事を云つては父母にすみませんけれど、何せ住むのなら繁華な、而して人間の文明た所を選まなかつたらうとうらむ事もあります、こんな土臭い人等を相手の商賣はもう懲り懲りです。あゝ今日は好いお天氣だと何時よりも早く起きても、又今日も店へ行かなけりやならないかと思ふと、自然と顏が曇つてきて何とも云はれぬ厭な氣持がしてきます、なるべくは店へ行かない樣にして奥に居ると、十圓でお釣、出してやる、又少し過つと五圓で、立つたり座つたりめんだうで仕方がないから店に居ると、裾を端折つて黒い太い足を出して、甚だしいのは土も燒けるやうな熱い道を素足で平氣で歩いて來る、今日はお暑う御座んす、つてやつとこさと腰を掛けて品を見る、何程に引けなんしよ遠いのに此家がえゝで云ふから來たんであんすか

ら、と長々と云ふ、小僧が種々云ふけれど、二三錢の所をいつまでも、いつまでも、根よく直切つてる、結局は何程か負けさせられる、一體田舍の人は、品は何でも直が安ければ好いと云ふ人が多いので、賣り難くつて仕方がないのです。其れはまだしも腰をかける席もなくつて、立つてる客もあるのに、買ふ時は早く早くつて一生懸命に急かして、品を見ると眼移りがして何れを買つて好いかわからなくなつて、其方を見、此方を見、席ふさげにずらりと並べて置かせる、ぐづぐづ暇を取つて、やつと買つたから速ぐ歸るかと思ふと、緩慢と人の買ふの見てる、いくら客が込んでも靜かに入用だけを話してくれるといゝんですけれど、向ふの家で話すのが聞える樣な田舍者特殊の高調子で、お米が取れたの、麥がはづれたのつて喋るんですもの、私見たい



きひ子　淺草橋　ひなげし

な愛嬌も何もない、商賣に不適當な女には、實際やりきれません。終には頭がガンガンして、顔がほてつて來ます、あゝ嫌だ、嫌だ、何故私は總領に生れてきたのでせう、兄か姉があつたらよかつた、其れ共弟が先へ生れてくれたら、妹が男だつたら何んなによかつたらうと無理な事も始終思ひます、店へ手傳ひ始めてから一度だつて愉快に思つた事はありません、其れに父が嚴格の樣で嚴格でない樣な、あまりむだ口を聞かない、どちらかと云つたら變人なのでせう、誰でも何だか側へ寄らない、母迄用のある時など私に云はせる。なんだらう自分の良夫に云ふのに人に云はせるのつて云ふと、速ぐ返事してくれないから、斯樣して皆敬遠主義を取つて居るのです。私はいつでも父と共にするのですから用のある時、六ケ敷事は必と私です、ですから

皆私には一目置いてるのです、之を誇つて私は好い氣になつて次第々々に氣位が高くなつて、叔父と衝突します。母とも半日位口をきかぬ時もあります、母の仕打が氣に入らないのです、母は母らしく女主人は女主人らしく一家を處理するのが當然でせう、其れに朝はおそく起きて、學校が後れたの手廻しが下手だのつて口やかましく云ふのです、何かすると早く起きる事がありますと、女中は勿論、罪もない妹迄種々叱言を言ふでせう、影では又始まつた一日許り早く起きたつて威張つてる、可笑いわ、其んなに人を使ひたけりや自分で毎日仕なけりや駄目なんて云はれます、用事があれば命令的にハッキリ言ひ付たら好いでせう、其れに何時でも謎の樣に、其れを仕なけりやならない、之を仕なけりやならないつて云ふので皆知らん風をして手傳はないでせう、すると知つてるくせに手も出さないつて斯うです。一度はあんまりですから、人を動すのは一家の主婦たるものがするのぢやありませんかつて云ひますと、側で從兄が其うだともつて云つて皆で見合せた眼には、冷笑が浮んでました。勝氣な私は目上でも誰でも氣に入らぬとやり込めます。叔父は、氣六ヶ敷常も八の字を寄せて、臺所の邊りに許り居て女中小僧を八釜敷使つて、自分は店へ出るのが大嫌な人お蠶食など少しでも後れやうものなら、方々へ當つて大騷ぎ、父母とは勿論、私とは大の仲惡です、店が忙しいのに圍碁など打つて遊んでて、私が一寸でも奧に居ると引込んで許り居るつて怒るんです、叔父だつて誰だつて此な事言はれて默つてる私ぢやありませんから、憎まれ口とは思ひましたが、叔父樣だつて遊んでるのが商賣ぢやありますまいつて、云ひましたら、蒼白い顏に疳癪筋を張つて、何ッ、生意氣な事言つて覺えてろ。斯樣風に始終衝突します、此叔父の所へ來て半年になります。此叔母とも私は氣が和合ません、二ッしきや年が違ひませんから名を呼んでます、叔母がする事が皆氣に入りません、之は私許りぢやありません、祖母樣始め父母妹迄其粗忽さに呆れてます、家は農家ですけれど、町へ嫁きたいつていふので、通例の事は何でも出來るだらうと思つてましたら、第一言葉の粗忽な事、始めは皆笑つてましたが、今日迄も直しません、其れに蚊帳を釣る事も。疊む事も出來ないのですもの、驚くぢやありませんか。髪を先へ結つてもお先へつて云つた事もありません、皆お茶お飲がりつて言はれますと自分で先へ飲むで、一度だつて戴きませ

うつて云つた事もありません、私等は姪ですから何でも粗忽にするのでせうが、其れではすまないだらうと思ひます。財産の違ふのは承知ですから、伯母樣が着物帶を廻すでせう、すると又お下りか、憎しいぢやありませんか、癪に障つて胸がワク〳〵して云ふまいと思ひましたが、全體私は氣位が高いのでせうが、性分として無言てる事が出來ませんで、お春樣あなたは最う家の人になつたのですから、何でも此家の家風に從はなければならないのですよ、第一に言葉を直さないと笑はれますからね、皆の出入の時は氣を注けて知らん顔して居ない樣にね、嫁て一二年間は窮屈でせうが、何事でも丁寧にしないと信用されませんからね、私がこんな事云つたら生意氣だと思ふでせうが、同家に居る間はお氣を注けて戴きますつて云つてやりました。こんな風でよく來られたと感心せずには居られません。其後は私が居る所へはきまいきまいとします、今迄は叔母と云ふ名に壓迫せられて居たけれど、敵對するなら默つてやしない、誰が服從などするものか、反抗心がムラムラと起きます、父は文壇愛讀の方とレターの交換等すると、見も知らぬ人と輕々交換してはならぬと嚴止るのです、遊藝だつて中途半端で希望通りに習はせてくれないし、斯して土臭い人を相手に一生を終るのかと思ふと、情なくなつて、泣き度くなる時もあります。

暢氣なる學校時代より
暗黑なる家庭時代に入る

みなしご

こゝ十餘年といふもの暗い寂しい家庭に人となつた私、そりや隨分悲慘なものでございますわ、人生の最大不幸といふ苦い經驗——未だ滿十歳足らずで慈愛の母に逝かれたんですもの、ハア來年が十三回忌に當りますの、私だつて生れながらに、此んな冷たい性質じや無かつたんですけれど考へるとこの胸がはりさけそうで、アヽ何故もつと早く母のあとを逐はなかつたろうと、ついね。母は十六で嫁つたのだそうでございますが、四十一の二月八度めのお產をして——女でしたが四日目に亡くなりました——姙娠中からわるかつたのですが遂に翌月五人の子を殘して逝きました。それは〳〵優しい、私が男子三人つゞいた後、且は初產に

姉を亡くした母の身には、何ものにも換へ難い、いはば愛の結晶物だつたんですね、そのくせどことなく威嚴のある、懷しい人格でしたのを、幼な心にもよく覺えて居りました。兄で御座いますか、一番上のはどういふものか學問が嫌ひでしたさうで、十四五歳の時から呉服屋へ奉公に參りましたんですよ、私にはどうも此の兄を兄として考へる事が出來ませんの、何故？つて自分にもわかりませんけれど、同じ家庭に起居した事がないので、どうも蟲が好かないのでせうね。中の兄は大好きでした、兩親も大變望みをかけて居ましたが、中々思ふ樣にならないもので、中學の五年十七歳の秋十月といふに脚氣が原因で、入院中歸らぬ旅に參つてしまひました。兄弟中一番壯健で自分も未來の海將をもつて任じてたのですが、實に人の命つてはかないものでございますね。只今父を初め私等姉妹がつゐとも柱ともたよつてますのは末の兄で御座いますの。自分の兄をほめるのも變ですが、誠に情の深い性質で私は此の兄が無かつたら一日も生きて居られないと思ひます、ハイ一昨年から臺灣の南の端へ參つて居ります。學校？一ッ橋を卒業したの。この兄も隨分苦勞して來ましたんですよ、何しろ力と賴む兄には逝かれるし上の兄は誰も打とけませんの――つゞいて母を亡くして、今迄の溫い家庭は急に暗黑になつてしまつたのでせう、兄ですか私と五つ違ひでございますよ、父は利己主義な冷たい人なんですもの、幼い弟妹ばかりでどんなに悶えましたか！私この頃よく兄が中學時代の日記をよんでは獨り泣きますのよ、何？見せて頂戴つて、マアおまち遊ばせナ兄の秘密がございますもの。そうですね同じ兄弟でも一人々々性格が違ふものでー―生れつきもありませうが、やはり境遇の變化もあるやうでございますね、もしや私が兄でしたらとうに自暴自棄を起して、今頃は放浪生活をしてますでせう、エ、來年は歸れるかも知れませんが、社の都合でどうなりますか、もう二十七といへば早い方は父樣と呼ばれる年ですけれど……實のところ義姉が出來るのが心苦しうございますの、さうかといつていつまでも兄が獨身で居られるものではなし、本當に私の身にもなつて考へて御覽遊ばせ。

今こそこんなに物質上精神上の心配が絶えず、臺所に許りくすぶつてますけれど、これでも女學校へ通つてた時代がありますのよ、學校ですか一昨年でしたか燒けましてね、ハア弓町のですよ、アラ御存じ、私

が入りまして直ぐあのゴタ〳〵がありましたの、そりやどうしても以前の校長が好きでございますわ。あれから校主が校長におなりなさいましたの、でよく式日など校長がお休みで、男爵がかはりにいらつしやいましてね、必ず、愚妻が風をひきまして——が十八番なんですよ、おかしくて〳〵いつも生徒がさきがけをやりますの、今日も愚妻はお休みでせうナンテ、随分失禮なお話しですけど、何しろ信じきつてた校長がやめられたといふので、妙に生徒の反抗心がつのつたものと見えますね、私？矢張りお仲間で御座いましたわ。

只今ではもう古い事御存じの生徒も無く、新築後は益々盛大になつて來たようですが、私達の時代はそりや不規律でしたのよ、私立の技藝學校のせいもありませうが、皆さん體操が大の嫌ひでソーッと逃げ出すんですよ、否へまさか家へ歸りやしませんわ、三階が裁縫科の教室なので、いつも其所へかくれて實技をやりますの、すると先生が不意に今日は出席簿をつけますから……ソラ大變、早く皆を呼んで來ないと裁縫科の不名譽だといふので、大急ぎで飛んで行きますの。

私は圖書の時間が一番つらう御座いました、小學校では好きな日本畫でしたが、急に鉛筆畫をさせられて初めのうちは全く泣きたうでございましたわ。洋書の受持ちは、つい先達て婦人雜誌に出てました『割烹夏季講習會へ行つて見た記』御讀みなすつた？ソラ、吉野先生てのがありましてせう、あの先生なんですよ、ほほゝ大層な勢力でございませう。アンナにやせて居らしつても珍らしいお子福者で、何でも五人とか皆男のお子様ばかりだそうですよ、此の先生がまた皮肉やで——いひ後れましたが一寸もお手本使はずで實物寫生ばかりですの——寫生の仕方が間違つてると、ヤレ其んな光線は無いの、あなた方は田螺の眼みたいだのと直き惡口仰在るんですもの、田螺の眼。ホヽヽどんな顔してるものか見た事はありませんけれど、おかしいことには國語の先生とお差し合がありますのよ、エヽ×先生と仰在いますの、二言めにはキット田螺の眼がお引き合に出されるので大笑ひでございましたわ。國語は眞面目にやりましたの、でも文典の時間はねむくて閉口いたしました、數學も好きでしたが先生が至つて性急でいらつしやいましてね、少し説明が淀むと『サッサト〳〵』つて卓をお叩きなさるんでせう、氣の小い者なぞ猶更つかへていへなくなりますの、そのかはり宿題でもキチンとして行くと御機嫌がよくて、

丁寧に説明して下さいました。

同級生でございますか、いろ〳〵ですがもう大半御嫁ぎなすつた樣で御座いますよ、赤樣のおでき遊した方もありますわ。私の級はお出しやが多かつたものですから、他の科の生徒に隨分惡まれて居りましたの、テニスコートも大概は日本畫と西洋畫の持ちきりでしたのが、私達の組が時折り顏を出すので、かげではひどく嫌はれたものですよ。選科の生徒は總體が大人しう御座いました、いつでしたか、もう餘程寒い時分でしたが、火鉢をかこんで勝手な話しをしてますと、誰が云ひ出したものかモデルが見えるから早く〳〵、つて呼ぶんでせう、ハア私達の直ぐ階下が洋畫の教室でしたの、ドアが細目にあいてたのでソーッとのぞいて見ましたの、ほゝゝゝ御覽なすつたこと有りまして？その時は女でした、エヽ今は男子も使ふそうですが、其の頃は未だ女ばかりのように覺えて居ります、髮はどんなでしたか忘れましたが、身體は斯うスベ〳〵してる樣に思へましたわ。これが後にも前にも一度きりですよ、その頃ストーヴといへば洋畫科より外に無かつたので皆がよく不平をいつたもので御座います。何と申しても學生時代が華でございますね、私なぞ家庭は荒んでますし、只今は御覽の通り三人ぎりなのですものつまりませんわ、東京が戀しくて〳〵嗚呼も一度袴はいて學校の門がくゞつてみたいと、つく〴〵感じます、あと一年といふ處で下つたのですもの、殘り惜しうございます、エヽ泣いて反對したのですけれど……父が生存競走に敗れて到底卒業迄やれないつて云はれましてね、今でも思ひ出すと堪りませんのよ。私が退いて直ぐ、其の時分未だ漸く中學の一年でした弟が地方へ養子にやられましたの、可愛そうでございましたわ、十三でしたもの——どんなにか嫌でしたでせう、それもこれも運命とあきらめて居りますけれど漸々兄弟の愛が冷却して行くように思はれて、心苦しうございます、此春縣立中學を出て自分では兄の跡を蹈みたいと樂しんで居りましたのが、養父母の異議で今はもう將來の望みも無く孤獨の生活をつゞけて居ります。兄弟はあり乍ら皆斯んなで散り〴〵になつて此先どうなつて行きますやら……。弟が地方へ參りました其秋、在校中の兄だけ東京へ殘して、父と妹の三人大阪の伯父に引きとられて、肩身せまう伯母や從妹に氣を兼ねて、二年を過しました。でも永らへばうしと見し世ぞ何とやらで只今から考へると經濟上の心づか

ひもなく至極呑氣で御座いました、もと〳〵兄が翌年卒業迄といふ約束で世話になつてたのが、延々にまた一年を暮して十九の末漸く此所へ移りましたの。

それからといふものは何もかも私の手一つで、切りつめた兄の送金より外に何の收入もなく、物質的苦痛を痛切に味ひました其れもはたに同情者があつて慰めてくれますのなら甘んじて受けますけれど……。

父の性格を御存じない方は、永の年月母の手なしに子を養育てたと大變溫いように考えていらつしやいますが事實は倒さまで、いたつて冷酷で變屈な性で御座いますの。私とても只一人の生みの親ですもの、信じよう〳〵と念じて居りますけれど……、毎日あの言行に接しては、つい嫌で〳〵どうぞして斯んな暗い家庭から逃れ度いとあせつて居ります。

妹も十五といへばもの皆を美しく見る無邪氣な花の時代ですのに、學校から歸れば笑顔どころか、氣六ケしい父に絶えず厭味や皮肉をいはれて、どうしてノンビリと春の樣な心になれませう、お友達にも何故そう沈んでゐるの？て尋ねられるそうでございますよ。

私がもつと優しくてやれば宜しいのですけれど……他人には涙もろいくせに、宅の者にはどうしても冷淡になつて情のある言葉を掛けてやる事が出來ませんの、つい僅かのことにも涙ぐむで苦い顏する妹を見ると、いひしらぬ反感が起つてムラムラと心が激して、前後の考えもなく當り散らしてしまひます。



あみもの　遠江　宮司みき子

こんなわけで皆樣のように花やかなるべき青春時代も、暗い寂しい家庭にとらはれて過して仕舞ひました眞實にもう此んな無意味な單調な生活は愛想がつきま

した、寝て起きて食べて、何の樂しみもなく我れ乍ら哀れなもので御座います。

　そうかといつて社會に立つて活動する程の才もなく又其んな事は事情も許しませんし、一體この先きをどうして暮したら良いのでせう？どうせ私みたいな者は一生斯うして不滿と不安の生涯を送るのでせうよ。マアく思はぬ愚痴をおきかせ申してすみませんのね、嘸おいやでしたでせう、もう二度と此んなお話は致しませんからどうぞおゆるし遊ばしてね。

師範出の女の苦しむ難關

登　春子

氣まぐれにかざした野菊の一輪を、恰かも、恐ろしい罪惡を犯した者でも見るかの樣な、嘲りの眼に射られた悔しさに、あの可憐な花をひきちぎつて捨てた事がございました、時雨降り注ぐ小窓に凭れて、色鮮やかな楓眺むる眼を、姿を、「物思ひは身體の毒よ」と、誤解られた事さへありましたもの、紫インキの若々しい男文字の兄の手紙、それは戀人のそれと思はれました事は、申す迄もございません、それは、私が師範學校に居りました當時の事。あゝ私は、かゝる間に、人生の花とも申すべき、暖い血潮漲る青春の過半を、徒費致しましたのでございます。

　神聖なる天職、第二の國民養成、何といふ立派な名でございませう。ですが、名實相伴はぬは、此の世の定めなのでございませうか、私は、殊に、私の職業に對してつくぐその事を思ふのでございます。「海老茶」「女敎師」「ハイカラ」「お婆さん」、聞く每に、罵られる每に、それが犇々と胸を衝きます。色褪せた袴、殺風景な筒袖、私はそれを着る度に、ぬぐ度に、命の糸を引き縮めらるゝ樣な氣が致します。あゝその嘲りを甘んじて受け、その不快さを朝に夕べに繰り返して、何を目的に、何を望みに、年といふ道を辿り行くのでございませう。私は、又茲に、華やかなる青春の期を送りつくしたのでございました。

　私は、美しい彼の青春期を迎へながら、高嶺の花を望むが樣に、憧憬れながら、眺めながら何の得る所もなく、過したものなのでございます。

　周圍に壓迫せらるゝその苦しさと、生活に伴ふ種々の苦難と、それと、年といふ恐ろしい魔の力に、敗れた私の心の傷手は、到底癒す事は出來ません。いゝ

え、醫やす術がないのでございます。何といふ不運な事でございませう。

せめて〳〵私に、それを定まつた運命だと悟り得る柔順な心と、慰安を得る道とがありましたら、こう迄はならなくてすみましたらうものを。いゝえ、全く悟り得ないのではございませんけれども、矛盾した私の心が強いて抑へたのでございます。

二十三といふ今年も、もう幾程もありません。人生の坂は、あと二段で登りつめてしまひますのですが、これ迄の様に、なるべく暇どる様に攀ぢて參りましてさへこの早さを、これからは、凄まじい〳〵勢で、下るとよりも寧、引き下されるかの様に、下らなければなりませんでせうに……。淋しうございます。

釣瓦落しの秋の夕暮を、野路に行きくれてあちらか此方かと考へる時の心、それは今の私の心なのでございます。そして、情といふ敗殘の骸の横はつた私の心には、もう理といふ恐ろしいものがはびこつて日に日に荒んで參ります。

昨年の夏でございました。母と兄とに結婚すべく迫られました時、承知の旨を告げながら、婚儀の前々日と申す日に、折角、母や兄等によつて繋き上げられたその縁談を、根底から壞してしまひました。母は、「もう二十二にもなるのにねえ」と泣きました。兄は、「何といふ生意氣な女だらう。もう闘はないから勝手にしろ」と叱りつけました。

又、此の頃、「さる田舍の大した不動産のあるその家の長男で、今は左程の地位でもないが、將來有望な、これはどうか」と、二三十里もある處を、態々調べにいつた父のかへつて參りました時、それと聞いた私は「こんな、男とも女ともつかぬ變な氣の女を、まあ……、餘程物好きな人ですわね」と申しましたら、「あれだ。何にも言はりやあしない！」と、兩親の呆れるそれが私には、戰の巷をかけめぐつて、勳功を立てた勇士の喜び、とでも申す樣に、譯もなく嬉しうございました。それでも、若々しい一番の大丸髷、福々しい子の無心の笑を見ましては、何處の隅からともなく、若々しい血の溢れて來ては、早くその時の來よかしと願ひ孤獨の淋しさを嘆いては居りますが、來る縁も來る縁も、惜し氣もなくこはしては、獨で喜んでをります。

だのに、小學時代二年下級であつた女教師が、さる教師と結婚すると聞きました時、冷笑ひながらも、すぐ後から取殘されたいといふ不安の念に襲はれました。

『今の婦人』批評

六篇

其一

草葉露子

例によって駄評御免し下さいまし。先づ巻頭の寫眞何よりも嬉しく、美しい血――ます子樣眞實の御境遇でせうか、私は之をほろ〳〵涙を流し乍ら三度繰返して讀みました。婚約者――例の氣の利いた筆の使ひ方、現代的女の面影が能く現れてゐるでは御座いませんか。白き月の沈む頃――は赤坂の静江樣でせう、温健な筆の跡、クベックの叔父樣の事などありますので左樣でせうと思ひます。懐妊日記――お目出度う御座います。旦那樣の事をやどと仰しやるのが見るも夢――此方獨特のしんみりした調子で終始一貫した態度。面がはり――我々のくわしく知り度いと思つたY樣とR樣との事だつたので、思はず好奇心に燃ゆる眸をあげて讀んだ。我が眼に美しく映じたる色彩――いづれをあやめ引きぞわづらふと云ふ樣な華やかなもの、白百合樣などのは、此處作者大得意と申上度い位……死なれぬ女――萬事を一死に任すには、私共はあまり複雜に育てられたとは、全くです。正氣か狂氣か――は夕ほし樣ですね、いつも面白い事を仰しやいます事。大川端のゆきかへり、氣のきいた寫生文。母に縋りて――何と云ふ滑い美しい御心なんでせう。母のない私はしみ〴〵と御羨やましく存じました。あなたの御心づくし丈けでも屹度御病氣は御全快なさいませう。理髄なる生活に倦む――此筆はどうしても笹子さんに違ひない。健實と云ふよりも少々荒い方だ。其丈けしつかりはして居るけれど……。夜の自然を愛す――痛切な叫です。私は最近田舎に住んで、一擧一動眼を付けられるのに困つて居る一人で御座います。まして處女としては尚更の事でせう。引いて歌ふや獅子の出――無邪氣な御孃さん細君評判記――おそろしい口否筆の達者な御孃樣だ。行末が安じられるなど、云ふと、夜雨樣ではないけれど、逆襲がこわいからひかへませう。對話三人女――は未だ少く言葉使が下手だ。地方の方だから無理もないけれど、雨をとことはどなたでせう。不得要領の要領を得た書簡、自我の擴張發展とは成程巧い事を……と感心致しました。神香爐――では、あら電あら電と……が可愛らしい事、眼に見える樣です。現代婦人の進歩――は此前の水平線と云ひ此度のと云ひ、御親切な御注意と感謝します。先づ私などは運命服從論者――所謂向上心のない意氣地のない方に屬します。御説は成程と合點のいく事許りです。自分でも進歩的態度を取る樣に氣をつけませう。多年の間深く女性を研究して御出で遊ばす先生の眞面目な御意見として、思はず襟を正して讀みました。

六年度最終の増刊としての今の婦人も、良成績を以て現はれました。充實したる内容……千差萬別、華やかに美しく面白きもの悲しきもの、個々別々に夫々興味深く覺えました。寸筆辭若先生を始め記者樣御一同の御安心さこそと存ぜられます。來るべき新らしき年を待ちつゝ、こゝに擱筆致しませう。

其二

雪子

豫て月波なる師の許より、再三のお言葉のあつたことゝて、まつさきに開けたのが、若杉樣の面がはり。もう覺悟はして讀むだものゝ、小女

の熱烈なる戀の餘りに匿めやすいのに、驚きました。なやましい人の影若い二人の女の姿がまざ〳〵と見える樣です。呼瑠璃子樣なぜ尼にはならなかつたのです。隨分人々の記憶を呼び起するり子樣です、私は胸を躍はせながら、涙して讀みました。

若杉樣のお寫眞を見ては、其お作と餘りに違つたお姿に少々吃驚しましたが、でも吸ひつきたい程可愛らしい、優しい方となつかしい想ひがします。

夢の女樣の見るも夢、醒むるも夢。題からして詩的です、ゆふ暮の街の淋しさと、失戀に泣く若い女のなやましい姿が思ひ出せます、若くて戀を失ふた此君も又可憐な人でせう、今安らけき生涯に入らせられたと聞きました。しづかな樣な方ですが、お寫眞の行丈が短いらしくて、氣にかかります。

佐藤蔦蓉子樣の美しい血。實際泣かされました、おやさしいお筆づかては云はずもあれ、君にも又此經驗をもたせらるるかと。

うすゆき樣の實約者。襖ごしに人の談しを聞く樣で中々面白く、成程と讀みました。

山田くにえ樣の與へられたる生命。何にしても感心な方です。どうして思ふままがこんなに書けるのでせう。本誌投稿家にして沒書の憂目に一度も逢はなかつた、くにえ樣のお姿を思ひうかべました。

山崎千代子樣の死なれぬ女。水死の女は穢らいと思ひますが、死耻を曝すのは加何にも殘念です。お言葉には、うなづかれぬ節もありますが何しろきついお筆先と伺ひました。

長曾我部菊子樣の木槵。「秋の彼岸」を見て、ふつと小説の東吾を思つた、田端へも行きたい樣な、なつかしいやうな。「ネロ王の榮華」、うす色の幕ごしに活動寫眞を見て居る樣で、丁度夢に夢を見て居る樣だつたとでも申ませうか。「此頃の思ひ」、讀み終つて私は思はず愁然となつた、眼を閉ぢて考へねばならぬ、熱涙は頰を傳ふて寂しかつた。人事とは思はれない。「華壇」は何ともない、思ひもない。菊子樣、切に御健全を祈ります。

鈴木春子樣の大川端。丁度自分で、川端を往き復りした氣が致しました。讀むでしまつて、始めて春子樣のお作と氣づいた程だつたですもの失敬。

雨をとこ樣の良人の選擇に迷へる女に與ふる書。淸さんなる人、迷ふでせう、私だつたら三人共不合格にしてやりますわ。淸樣よ、迷ふ勿れ熟考に熟考を重ねた結婚でさへも、尙、悲痛は强く優さしく責めますよ。迷はずにお考へなさい。

夜雨先生の袖香爐。豫告を見た時には、又どんな、しんみりとした文が伺はれるのかと期して居たのに、少々あてはづれで、一寸氣ぬけした樣にも思つたが、讀みては一首毎に、ここにも又君が暗愁は偲ばれて、思はず涙はさしぐまれました。三誦四誦――。

醉茗先生の現代婦人の進步。私の心をいつのまに先生は覗いて行かれたらうと思ひました。兩手を膝にして、拜聽せねばならぬお說と伺ひました。

優梁子樣の母に逆りて本當に感心な方と思ひました、私等のやうな我儘者にはよい手本なのです。氷をかく音は寒むさが泌む樣でぞく〳〵しました。澄さんの樣な人は私の友にもあるかも知れません。

迷へる女樣の私の心を動かぬやうに縛つて欲い。これこそ、よみさして半を過ぐると、私の心裡を書れたおやないかと疑ひました。只婦人世界を見るのは私は大嫌ひ、あの邊に私とは一寸違つた考へもあつた。

初鹿野道子樣の白き月の沈む頃彼女は眠れり。女學生にありそうなこ

とでした。御愁傷お察し申ます。金髮の頬の色美しい人を見る感がした月夜花樣の獨寢の枕に響く霰の音。どなたでせう。此人は〳〵?と思つて心をこめて讀みました。

吉田紫花樣の夜の自然を愛す。北山がくづれたなら阿波が見えそうでなりません、夜の自然は誰でも好でせう。愛らしいお眼を見ては、中々臆病な方とはうけとれませぬが、催眠術はそんなにききめがあるのでせうか。

安木はる子樣の覺めたる日記一寸今思ひ出せませんが、成程今の婦人の云ひそうな事許りだと、感心して讀むだことだけは覺えて居ます。お寫眞が百合子樣にそつくりだそうなとは、けふ都の友よりの音づれ。我眼に美しく映じたる色彩。どなた樣も誰方樣も、詩にきたへた色彩は流石に違つたものと感心致しました。月波の紫色が一番見たいと思ひました。

さくら貝樣の廿四で緋紅色とは憎らしい。これはまだ讀みませぬが、只「土佐縣でどなつた」と云ふのがチラと眼についたので、私は土佐人だけに見逃すことが出來なくて、一寸二三行熟讀したのです「あの親類で繼物採山有てえけんいふたから一日すけに行きましたあんたとこお人が少ないよつてお樂でよかりませう」これは一體何といふお言葉ですか私には一向にわかりかねます。似ても似つかぬ雪と墨。土佐縣と云へば土佐は他國とは非常にアクセントからして違ひます。

未熟な私がお上手なお作を、こんなに申たのは失禮ですみませんが、只自分の思つた丈を書きました。

これを書く迄には、未だ以上たけしか讀むで居なかつたのが、如何にも殘念でした。

妄評多謝。

其三

蛙の兒

「今の婦人」二百頁の内、夜雨樣の前世紀式のお歌と、醉茗先生の不得要領……御免遊ばせ。六ッかしい論文とを除けば、全部私共女の領分として開放された文藝の園である。才ある女、賢い女を集める事は女學世界もします、若き少女の熱血を注ぎて光彩さんらんたる文を作り、望は天に至り涙は草を沾ふ迄でに眞の命あるものを見るは、唯わが『女子文壇』有る計りでございます。邦子樣、菊子樣、ます子樣、お年も多く手腕もずつと上級でいらしやる方々の文は憚りさま、評したら睨まれよう し、こはいから申しませぬ。けれど邦子樣など前程の熱もなく執着もないように見えます。菊子樣の一種人の肺腑に透るお聲は痛々しうて……一生懸命に書けなくなつたタイムの力を悲しみます。

私共は考へるには未だ早い、それはどうしたつて平凡なお孃樣の一人であることは否みませんけれど、それだけ私共の心は純である、まさに白熱に燃ゆる力がある、前途があると思ふ。現在に滿足する事は私共の堪へられぬ苦痛で。去年と今年と違ひのない文章を作る迄でに滯つてゐる失望を思ふと涙がこぼれます。三ケ島よし子樣は私共と同列の投書家であるけれど「スバル」では特別待遇を受けてゐるといふではございませんか、邦子樣はま子樣は「創作」でどれだけ頭角を現しましたか知ら、女は實力以上に買はれると云ふ。それにしても水野仙子樣、永代美知代さまの中央公論に出るまでにおなりですわね。

「今の婦人」で邦子樣などのお作に失望した事が大きいだけ、せん子樣の「見るも夢さむるも夢」に胸を打つて喜びました。詩といふには俳居がない、散文といふにはあまりに調子が高すぎる。野も勝れ山もぬれて

隔は静に草村の中に忘られた玉を打つてゐます。月寒き神奈川の海、濯を込めたる久莨岐の野、人に別れてまた遭ひ、涙を寂しき墓地に流して青山の燈を花下に懐しんだせん子様は、どうして夢見る女となつたのでせう。私は私は……何といはう、絶頂に達した喜びを抱いて小川様の爲めに起つて床の間の箏をはぢきました。

つね子様はおつしやつた、一本獨立した大きな〳〵木を仰ぎ見るようで何て言つたらい〻かわからぬ。と、妹なんか、外のは見ない切角の美しい印象が消えてしまうものといつて、伏せてしまつた。櫻の花の匂にぬれて、ともしび輝く青山の町 どんなにかく〳〵せん子さまの涙は美しかつたらう、と思ふと心がをどつてなりませぬ。

「今の婦人」には四十何人かの御作がある、若杉様のあばいた驚くべき秘密もある、けれど皆しはずに下さい。山路るり子の謎れなるを思ふより、傷められた御心を抱く、病詩人の御心を思ふが辛ふござゐます。筑波の露よとくとけて、樂しきうたを咡けよと思ふけれど、あ〻露は幾度もとけませうとも……私には仰ぎ見る氣力はござゐませぬ。

私は「今の婦人」を評することを忘れました。

其四

露木雛子

今の婦人は該閣して居た物よりもはるかに内容の充實した是近に稀なる勝れた現象を表はして居る。

げに醉茗氏の同情ある御趣旨の如く、我々女性が矢張り人間としての能力を思ふ儘に發表し得らるべき好機に出遇した事を感謝せしめた。

茜舒子の「美しい血」――は字句ことぐ〳〵く可憐なる少女の紅涙もて寫されたるあはれなる記録である。再三讀み返して袂をしぼつた。うすゆきの「賣約府」――は道徳なく當世女の心裡を表はして居る。山田邦子の「與へられたる生命」は例の鋭い感情をしいてゆるやかにゑがゝれた中に却て意味深き或物を見出る樣に思はれる。

迷へる女の心のねがひ(?)は大方の女心を云ひつくして居るだらう。初鹿野道子の「白き月の沈む頃彼女は眠れり」――本誌中の最もハイカラなる叙情文ならん。只餘りに獨り我點のふし多きが玉にきずなり。月夜花の「避暑の枕に聽く波の音」稍々あきたらぬ恨み有り。

若き奥樣の生活に伴ふ苦勞――外神田より――白木いと子――一々有益なる御物語にそゞろ動かされて、人妻ならぬ身も暫し其人と共に清き世帶苦を味ふ心地して……武藏野より――枝の小鳥――前者より幾分藝術家らしき御述懐、いと御なつかしく拜讀す。小石川より――きみ子――御二人よりはずつと若々しき御はなしぶりなれど何も彼も能く行屆いたお方ならんと想像しながらよみそへぬ。

越路女の「懐姙日記」――泰平なる幸福家庭をありの儘に寫されたる花妻の君のさかしさよ。豊子の「苦勞人の面影」――は眞面目なる追懐録也。小夜しぐれ――私の離縁された一部始終――世間にはよくある事件なれどつい同情の念に胸安からぬ心地して……。新田文子の「早婚の爲に生じたる我家の悲劇」――此文の僞ならぬ涙文字には他事ならぬ憐を催さしむ。

夢の女の「見るも夢覺むるも夢」――若き女の清き心の泉に湧きかへす情熱を、こゝろのまゝに高く美しく微妙に物されたる此のページにはいつしかよむ眼も心もみせられて、よみ終つてなほしみ〴〵名殘りが惜しまれた。若杉薇子の「面がはり」――はさながら筑波根詩人の面影を追ふが如きやさしみこもれる美文である。

我が眼に美しく映じたる色彩――此處は恰度み空に高くかけ渡したる七色の虹の橋にもたとへつべき美しさ――されば艶、美、濃、淡、何れ劣らぬ自

然の色あや强ていづれを擧げて讃ふべき?、唯よむ人に忘られぬ印象を與へられし諸子の御力を尊ぶとのみ。

山崎千代子—死なれぬ女—意義明快なる上に力あまれる御文字、仇ならずよみ返しつ。秋扇、芳子、二子のは二つながら今の女の他よりうくる壓迫に反抗せんと欲する心情を表はしたる物か。白鷗女の雄辯なのと神保千代野の「涙を呑んで運命に從ふ」—は餘りに客に囚はれて充分云ひ表はし得ないのには感服されなかつた。月見草、島守女—二つともよい

長曾我部菊子の「木槿」—は最も勝れたるもの—殊に末段は故一葉女史の筆づかひに似通ひたり、美しき文字に底力ある詞先づ得られぬ才筆ならむ。

鈴木春子の「大川端」—往きよりも復りの方に一しほ興味を添へてよむ、此君達の文をよむと何だか自分の不能なのが身にしみて恥しくなるばかりである。

前島操子の「母に縋りて」—聊かの僞りなき母と子の慈愛をあはれふかく寫し出したる文。野に降る雨の「單調なる生活に從ひ」—浮世に執着ふかき人の苦痛は自ら實際的なり。「假面を脱ぐ」—樂土の草は皺ちしき御述懐一寸面白くよむ。秋香のは同情しながらもさのみ動かされざりしはいかに?、夕がほのは筆致の餘り浮つ調子なるを惜しむ。

婦人の登山記=乙女峠に登る—翠子—一寸の隙もなき氣韻高き登山記にはよみもて行く間に深き印象に心眼みせられてしみ〴〵ページの了るを悲しむ。たまかつらの大山登山記は前者に比して駄言多く興味あるを恨みとす。然れ共中々筆達者らし。

吉田紫花の「夜の自然を愛す」—すら〳〵とよどみなき筆のあと、そぞろふけ行く月の夜にさまよふの樂しさ覺ゆ。安木はる子の「覺めたる日記」—若き女の心的狀態を思ふ儘に氣もちよく胸底をゑがき出されたるいと面白し。さつきのは輕妙圓滑、葛の葉の「夢の記」は一寸變つた出しもの。さくら貝の細君評判記は中々油斷のならぬ筆法と恐縮の外なし。芳惠子の對話は月並なれどよし。はまゆふなる人の何時迄もじみに文學趣味を維持し給ふ御心根には只々敬服の外なき次第なり。星子—若き女のいら〳〵したる心もち充分に見えたり。

其五

千草女

批評をさして頂く前に女子文壇に對する私の立場を一寸申上ます。私は小さい時から本を讀むのが好きでしたものですから、女子文壇は一巻の一號から愛讀して居りました。其頃は文學なんて大きい事は頭にありませんでしたが、一年二年と立つ中に、少しつゝ分るやうになり、皆樣のを拜見する度に、私も早くあんなにと羨しく存じましたが、下手の横好とやら、何も得作らぬ中に、家庭上の事から私も、ふと氣が變りまして四の巻の頃から、御無沙汰いたして居りました。

今年の九月、友は去り、弟は學校に歸て、望なき身も涙催す初秋の夕徒らにすぎ行く若き日を思ひ、欺かれし情なき人を思ひ、縋らんに母の胸なく、握らんに友の腕もなき身を思ひ、幾分の慰を得んと、『女子文壇』を見ました。夫から若き婦人や、都會の婦人や、地方の婦人なども買つてよみました。そして今又「今の婦人」を見たのでムいます。九月號を見て皆樣の進境に驚いたと共に、吾身の退歩を滋々感じ、讀書のゆるがせに出來ない事をつく〴〵悟りました。

扨批評に移りませう。表紙はほめたいですが、今の婦人と云ふ名に對して少しく平凡な所謂色彩美とやらに乏しいやうでムいますねえ。秋の展覽會は美しいですこと、見る人の肩の工合、頭の恰好などの良いこと

私太田樣の繪は好きです。當選作家のお寫眞、日本髮の方、束髮の方皆それ〴〵本文を讀で、更にお姿を見ると、ほんとに興味が深くて、おゝ貴女のお心も這麽でムいますか、私も1と思はず頰ずり致しました。どうか御健在ならん事を祈ります。

ページを繰て初めの、美しい血を一息に讀みました、あゝます子さん、あなたも運命を呪ひたいと被仰いますか、負けたくないと被仰いますか貴女の此痛切な肺腑から出た叫びは、私の心の底の底に秘めた或物に強く〳〵響きました其時の私の心、どんな言葉を以て云へば良いか、私には分りません。何卒ます子樣よりよくなつて、にくらしい人に勝て、仇の前に凱歌を上げて下さい。

賣約濟、人を先で品物あつかひに……と思つたけど、やつぱり娘時代は賣物とやら、レッテルの美しい人はどうしても店晒しにはなりませんのねえ。與へられたる生命、ほんとによく其當時の有樣が書かれてあります。何月のでしたか、山田樣の美文に、北の海と云ふのが出てるのを、何處のお家で見たのか忘れましたが讀みました。乙女十八、紅ゐ深きもみ裏の、袂かさねて、淋しい北の海の響きを聞き乍ら、机の前に坐つて、筆取て被入るお姿が今もなほ、私の心深く殘て居ります。今は東都に被入いますか、それとも故山の秋をふんで被入いますか、幸あらん事を祈ります。



畑の人　千葉縣　石井よし子

小夜しぐれ樣の私の離緣された一部始終は何が原因だか一寸分りませんねえ。見るも夢、覺むるも夢、沈痛な熱のある言葉です、何だか遊暗な闇夜を、餘りの靜かさに下駄の音もはゞかり乍ら步いて行くやうな氣がします乙女として人に見えし終の夜を、心なく輝きし町の灯よ花にそゝぎし雨よ。此句が何となく心に殘りました。

面がはり、私は前から讀まないから知らないが、白山吹とか、とり子とか仰有たのは此方ぢやないのでせうか、更にるり子樣とは、黑百合とやらのヒイロンではムいませんか勿論私は黑百合も讀まず人にも聞きませんけれど、筑波根詩人、病める師の君、それは云はずと知れてますが、先生が妹として敎しへ子として宥して下すつたならば、歎く事も何もな

し、清い乙女で居られたのです、と仰有た言葉を思ふと、もしかそうぢやなからうかと思はれます。間違てたら赦して下さい。三十年の病魔になやむ、優しい痛ましい人を欺いた女は、罪深いと思ひます、素より門外漢の私、深い事情は知りませんが、身にも心にもいえぬ深く傷つけられた、常陸野の詩人を思ふと、知らず〱熱い涙がこぼれます。友に失なはれた花守や、二十八宿が、今更惜しくなりました。願くは夜雨先生より明石の里にも君を思ふ子のある事を心に止めて下さい。女は厭だと仰有るそうですが……。

死なれぬ女、虚榮だとか偉傑だとかと騒いでる今、死と云ふ事を眞面目に考へてる人は少ないやうに思ひます「名はよき油にまさり死ぬる日は生る日にまさる」とやらソロモンも云ひました。私共も人たる務を果して其幸ひなる日を迎へたいと思ひます。

女學校の窓から覗いた世間通、お隠者でしやあ〱した筆つき――ちやないお口、田舎者の私なんか口あんぐり、お顔を見入てお手々をひざにちつと謹聴―荷造なんかおちやまだるッこいでせう、まあ番茶を入れましたからグツト飲んで頂戴―

娘の冷たき心を悲しむ、おいたはしい島守女様、お病氣はまだいえませぬか、暖かい春の夢破れて、紅葉はら〱恋をうつ夕どんなに母戀しの情にお泣きなすつたでせう。秋は淡路島がはつきり見えます、曇つた日はなほ綺麗に見えます。郡家にはなつかしい〱友もあります。女子文壇位お送り致しませう?

鈴木春子様、描寫の細なるに驚きました。明細な觀察眼と忠實な筆と相待て完全な文が出來て居ます。

母に縋りて、母を思ふ可憐な情がよく表はれてます、どうかいつまでも其お心を忘れないで下さい。

夜の自然を愛す、松茸狩に行て顔にくもの巣を張られたり、足を疾でかいたりして、さがしてるのに一ッも取れない。人はと見ると私の後から來てせつせと取て籠へ入れてる。私は此文を讀で丁度其樣な感がしました。何故と私自身も尋ねてもはつきり答へる事が出來ません。ともかく新らしい意味ある事柄だと思ひました。

歌は皆良いやうに思ひます。中でも朝しづくが好き。

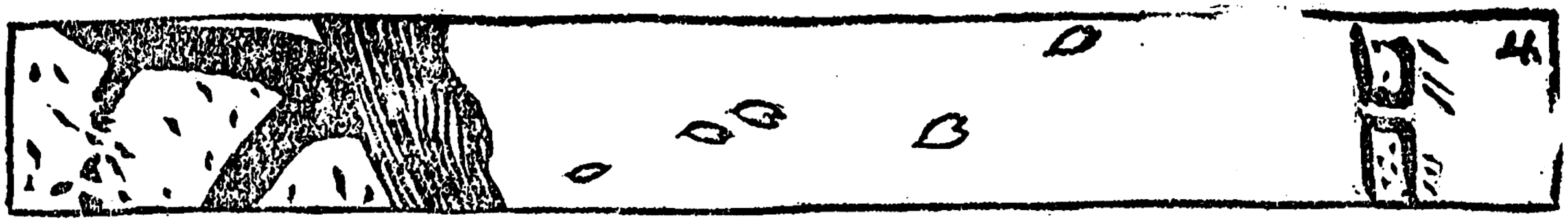
まだ〱申上たい事は澤山有ますが、限りが有ますから之れで置きます。失禮計り申上げて、皆樣のお胸一ッに笑てもおこらないで下さいまし、さよなら。

其六

白光女

現代の女は如何な心持ちのものであるか、久しく女の私の疑問であつた。そこへ現れたのが今の婦人である。「今の婦人」は必ずしも、各階級の婦人を代表しては居ないけれど、所謂今の女を解釋するのに批難はない、その忌憚なく放膽に書いたのは少からず私を滿足させた。そこで今の女はといふ問題になるが、これについては他日書いてみたいと思つてあるので、今は單にまづ、

「美しい血」作者の境遇は確に知られる。この作者は世間をみる事が上手らしい。母親が髮を撫でゝ「皆同じ自分の子です」も誰れが嫌のどの子が好きのといふ事はありませんけれど云々」恰も浄瑠璃にでもありそうな、作者得意の處であらう。處で篇中、所謂現代タイプとでもいふものか、狭い主觀めいたところが多いのは考へものであらう。「要約書」對話といふのは六ケ敷い。しかし作者は何よりかより對話がうまい。このはうは上野よりに比して餘程人物が現代的た



誌友くらぶ

交　際

○四千哩外より

T.K.Sakanaka

124½ East Third St., Los Angeles,

Cal.U.,S.A.

九月の女子文壇で交際をおねがひいたしました處東京の加藤はな子様、荒井こう子様、一枝様石川縣の日下みどり様、栃木の柳田きみ子様、などから御玉章に接しました、それ〴〵當地の名所繪ハガキを封じてお返事いたしました、着きましたでせうか、紙上でおたづねいたします、私は四千哩外にあつて、母國の方々と交際することの出來たのを嬉しく思ひます、なほ皆さま、異境の空から皆樣のなつかしい便りを待つて居ります（米國加州ロスアンジールス市東第三街百二十四番半、坂中文子）

○南洋より

E. Nakashima

P.O.Box 1677

Vancuvuer R. C.

等は親子四人で、永久に此國に居るものですが先年兩親を彼の世に送り只二人にて淋しく日を送つて居ります、只、樂みと云つては女子文壇だけですよ、兄さんは此地に寫眞を營業して居ます、繪はがきも澤山持合せてゐます、誌友の皆樣にも差上たいと思ひますから皆さまおたより下さい（加奈太晩香坡市一六七七、中島英子、（二十四年生）

○亞米利加より

K. J.,

1206 Third St.

Sacramento Cal.

U. S. T.

妾は去年からの愛讀者ですが、誌友の諸姉妹君と御交際申した事はいまゝで一度もありませんので、皆樣とは初めてゞ御座いますが、宜敷お願します、妾は四千哩の海外異郷に於てさみしき月日を送つて居ります、誠につたない者で御座いますが、いつまでも〳〵御交際くださいまし、繪葉書御玉章雜誌等御交換をせつに願ひます（北米合衆國加州櫻府第三街一二〇六番KJ生）

○お心當りの方に

麻布本村町毛利家内

清水多貴美

實踐女學校の方で日比谷より須田町まで同じ電車にて行く途中女子文壇の増刊『今の婦人』を御持なさつて居らつしやつたのを見て、女子文壇愛讀者なる事を知りまして、妾は何んとも云へない樣な懐い思がしてよ、だけれども其の御方の御名前が知れないもので御座いますから、致方なく此の貴重なる誌友くらぶ紙上にて御たづねいたします、もすこしわかります樣に申しますれば、二日ほど同じ電車にて日比谷より須田町まで同行せし君ですよ、何卒御交際を願ひます。

○報　告

本郷のKK女

新年御目出度御座います、七月以來妾と御交際遊ばした方々の事を、御問ひの方も御座いましたから一寸御知らせ致します、男名の方が三十二人で、女名の方が百〇一人ありましたが、色々調べて見ましたら、六十四人は男子の方の女名

で御ざいました、中には女子の寫眞までも御送り下さつた方も十七人で、まことに驚きました、誌上に見えました方々にも、男子の方が御座いましたから、御交際遊ばす方はよく御注意なすつて下さい、北足立郡のHO樣綿戸のKO樣日本橋のKY樣HC樣四谷AT樣GU樣MS樣麴町のIK樣OS樣牛込のUT樣本郷のNM樣兵崎のKJ樣JN樣TN樣大阪THN樣久々御無沙汰致して誠にすみません度々失禮な事ばかり申し上げまして申しわけありませんが、以後永久に妾の事は御忘れ下さる樣に御願ひ致します京都岩田樣御返事出しましたが屆きましたか。

○お斷り

下 枝 子

誌上にて、記者樣御はじめ誌友の御姉上樣方より久しく御無沙汰致しましたが毎月文壇を拜見しますれば發行ごとに、皆々樣には何の御變りもなく發展なさる御事遥かながら御よろこび申してよ八月號にて御交際をお願ひ申しましたら遠近の皆樣幾人となく御親切に御玉章御めぐみ下され有難たく之も皆發行なさる記者樣の御かげと深く御禮致します。其中に男子のお方からも下さいましたが嚴格の家におひたち父兄もきびしく私も男子の方とは交際出來ませんから前以て御斷り申したのであります、只今迄別に頁い考へも御座いませんから其のまゝでありましたが誌上を拜借致して御斷り致します。

○霞ケ浦より

茨城縣新治郡牛渡村 高崎眞之助方

す み 子

誌友の皆々樣よ、私は、霞が浦の北岸に淋しく月日を送つて居る者です、霞が浦は皆さんも定めし御存じで御座いませうが、日本第二の湖水で隨分大きい湖水です、湖上では漁業が盛んで水產物が大層とれます、未だ霞が浦の水產物御存じのない方には送ります、皆さん私は、ほんとうに不愉快でこまりますから何卒繪葉書玉章尙ほ私の寫眞がありますから、早く御交際して下さいね賴みますよ。

○お目出度う

東京市麴町區山本町二の八

增田方 佐藤いつ子

慈はしい皆々樣明けましてお目出たう厶ます、どなた樣のお顏も皆ニコ〳〵で被入ることゝネ記者樣などの昨年の御編輯なさる時にそれはもうシカメ顏して被入つたに此お目出度新年で恐皆御機嫌がお直りになつて笑渦の數々をお見せになつて矢張ニコ〳〵顏ョ、ですから記者樣とは大の仲よしなのよ、又皆々樣も此の由緣で何卒お温にお交り下さいな尙お近い方はお遊びに…

○新年から御來遊に

京都市堀川今出川上ル

要司村靜子

誌友の皆々樣明けましてお目出度う御座います今年も昨年にましてしたしくお交り下さいませ尙京都のお方樣は何卒お遊びにお越し下さい三日からは宅に居りますで是非ともお連樣をお誘いして入らして下さい待つて居ります。新らしい年と共に新らしい思想よりも事にふれ物にふれおうたひになつた和歌俳句のお作をもおもらし下さい。

○おあそびに

小石川區餌差町三五 荒井セイ方

中島惠子

東京に御居の御姉樣方妾は取つて十七の春を迎へました不束者なのですが何卒末久しう御交り御願ひいたします、一時的でなくにね、又御都合にて御遊びにいらしてもよい事よ、待つて居りますわ、誰方樣にても御いとひ致しませんけど殿方のみは堅く御斷りよそれから御遊びにいらして下さるときは、一寸御知らせ下さいませな、失禮な事でもありましたら、それこそ申譯ありませんもの、さらば。

○東京のお方に

岩代河沼郡堂島村岡田

鈴木はかげ

東京市のお方へ私の忘るゝ事の出來ない東京市のお方と御交際を致したうござ います市中の姉上樣方どうぞ哀れな田舍の塵と果つべき不幸な身に花やかな東京の樣子や種々な面白い記事、其他繪葉書文章和歌俳句其他なんでもの御交換を望みます。

○唱歌と校歌

東京深川區東元町一

鈴木美喜子

新年は御目出度う御座います、誌友の姉君樣方新しき年のはじめと共に幾千代かけて末長く御交際を願ひます、妾近頃へたな横好ながら、音樂を學んで居りますので、皆樣方の中で、何か御存じの唱歌校歌等御知らせ下さいませ、校歌はなるたけ東京の學校がよいのです、失禮ながら御禮は致します。よろしく。

○岡山と朝鮮

鳥取市上町長田神社前

岸本八重子

皆様の内で岡山縣の方と朝鮮國京城に御住ひ遊ばす方となりたけ懸境に御出で遊ばす方は一時的でなくしかも眞心を以て御交際下さい。誌友の方々には一時的の方が多いように見受けます私は一時的は大きらひですから男子の方と一時的の方には絶對に御斷り申上ますそして土佐の桃の花樣御さしつかへなくば御住所御知らせ下さい。朝鮮京城も富山も私の懷かしい地なのよ。

○始めて

千葉縣山武郡大總村木戸臺

伊藤美山

妾は今月(十二月)から姉上樣達の御仲間入を御願致す積りです何もかも白狀致しますが妾は先頃不幸にして中途小學校を出まして今は毎日野良仕事に追はれて居りまして文の味も知らぬ少女でありますこの間宿ノ下の濟子樣の所に行つて女子文壇を借りて來ました妾は初めて雜誌の有益なことを知りましたソレカラ妾は何だか心の中に一つの輝が起つた樣な氣がして何を見ても張合があり皆文學化してしまふ樣になりました之が所謂新しい生命を得たとでも云ふのでしようか兎に角皆々樣教導し交際して下さい御互に活動しようではありませんか。

新計畫

▲誌友くらぶの單調を破り、愛讀者の利益を計らんが爲に新しい計畫を試みます。先づ第一回として短冊の交換をやりませう。

▲交換希望者は其旨を記し、和歌と俳句との何れを望むかと云ふことゝ住所姓名とを明記し、別に御自分の筆蹟を添えて「誌友くらぶ短冊交換原稿」として送られたし。

▲記者は之を一々調べて、成るべく筆蹟の同じ程度の方を二人づゝ選み出し、紙上に發表して改めて短冊の交換をして頂きませう。

▲斯くすれば、交換をなさるにも、餘り筆蹟に優劣がなく、同等に近い方と交換が出來ることゝなります。

▲申込は本月十四日迄に本社に着くやうにして下さい、直ちに締切りて、選擇の上、二月號の紙上で交換希望者を發表いたします。

○東京のお方に

茨城縣筑波郡大曾根上中町

戌島柳子

東京に御居……の諸姉樣方に御願ひいたします妾は此の春を迎へて十六歳になる不束者で御座いまして、地方の女學校に居りましたけど、今度東京に參りますの、都には親しい御方つて兄樣より外に御友達とて御一人もなく、ほんとうに、只今より心細い樣に思はれてなりませんの目下は歸省せる兄樣と共に、寂しく田園生活の趣味多き、御正月を送りつゝ遊んで居ります、花やかなる都に御居の姉樣方何卒末久しう御交り下さいましな、本誌を愛讀していらつしやる御方けども殿方よりの御レターはすぐに御返し申しますから。

○英語書

奈良縣高市郡天滿村 石井源四郎方

歌子

妾は數年前からの愛讀者ですが、未だ一度も投書したことは御座いません、本年からは奮發して投書する考で御座いますから誌友の諸姉樣宜しく御交際をね、圖書の交換だの、風景の寫眞、繪葉書の御思附交換を御願致します妾は獨りで英語を聊か物したいとて本誌を愛讀する傍ら學んで居るものですの、依て諸姉樣の內で女學校の英語書の御不用な御方は御讓り下さいませ、御禮は致します

○備中後月郡木の子の里

馬越昌子

文學趣味のある交際は一も二もなく只管にのぞみます。

○淡路津名郡志筑町

田村たみ子

諸國の姉樣先あけまして御目出たう私は千鳥啼き通ふ淡路島に女子文壇をたゞ一の友として樂しき日を送る者です姉樣方レター頂戴ね。

○筑前直方多賀町

中野英子

誌友諸姉樣の中にてヴァイオリン御不用の方がありましたなら御ゆづり下さいませんか御ゆず

り下さいます方は御知らせ下さい。

○　土佐勝賀瀬局下梅木校内
かげ法師

私は八重山中に淋しく日を過しております者折々御手紙下さいまし必ず御返事さし上ます。

○　茨城縣
湖畔の女

誌友諸君より御手紙や御端書頂きまして誠に有がたう。けれども皆、ほんの一時なので困りました、それに女の名で御手紙下さる男子には困ります、欺かれたかと思ふと口惜しうございます、それですから、以後御交りをいたすまいと思ひます、悪からず、男の方を記者様のお力で何とかする事出來ないでせうか。

○　備前八賀町
佐久間緑子

先月末御たより下さつた鳥取市の岸本八重子様私不在中でつい悪戯盛りの妹が彼の繪葉書失ひまして御返事差上げる事出來なかつたの今一度御住所を拜聞させて頂戴ね。

○　廣島縣御調郡三原町
青木綾子

誌友の皆様私はまことに不束なるものですが諸姉様の中で御優しい思召しが御座いましたら永久に御交際なさつて下さい屹度御返事致します

○　福井縣坂井郡中川小學校内
野菊女

姉上様遠ね私は昨年四月に高等女學校を卒業致しまして七月からの愛讀者で御座いますが今後何卒御交際を願ひます御返事出しますからね。

○　福井縣坂井郡鶉村布施田
北利子

誌友の皆様おかはりは御座いませんか次に私は此の頃ふと淋しくなり地の中へ入つて行く様な心地致します御同心なお方はお交り下さいまし

○　大阪市泉南郡貝塚町
記志毛留美香子

私はなぜ恁う淋しいのでございませう、花は咲いても鳥は歌つても、眞に喜ばしい日は一度もありません、何卒皆様この後とも文の友として終生妾を慰めて下さい、どうぞね……

○　群馬縣多野郡藤岡町
山本貴與子

又各地方の女教員の方々及び群馬のお方で本誌を愛讀なさる皆様よ不束の者にても玉章の交換を御願申します今より御待ち申して居ます

○　千葉縣山武郡白里村中里
内山けん子

誌友の姉様方よ、名所の繪葉書リボン編物不用の書物御持の御方は送りください妾は必ず相當の品を送ります又自作物の交換も願ひます。

○　福岡
白露子

誌友の皆様、此福岡にも誌友會を開いては如何ですか、御同意のお方は誌上で……

○　備前國八濱町大字吉澤町
佐久間緑子

賢こき四方の諸姉様よ!! 病床の母をみまもりつつ此淋しき片田舍に、無學の少女あるを思ひ給ひてよ。

乞ふも恐れ多き事ながら博愛多才なる誌友の君よ、かく心さびしき田舍乙女を哀れと思召して御導き下さいな、次に高崎高女の諸嬢様よ私はなんとなく御校のお方がなつかしく感じられてならないのよ唯一度たり共「レター」頂戴よ屹度御返事致します。

○　大阪市天王寺石ヶ辻町五二九二
竹田信太郎方
辻井信子

誌友の皆様明けましてお目出度う尚本年も不變交際を祈る又文學お好の方は文書の交換して頂戴。

○　宮城縣刈羽郡田宮町
井上辰子

姉上様方妾は鳥も通はぬ深山の奥に住むものなのよ御哀み深き皆々様どし／＼御寫眞や繪葉書を頂戴な妾も屹度上げてよ。

○

○皆様御交際をねがひます、玉章、繪はがき其他の交換も好みます、御たより下さい。

○茨城縣稻敷郡阿見村大室　六崎誠子
○下谷區御徒町　谷口桂子
○廣島縣豐田郡東出口村天神丸内
渡邊莊子
○名古屋市外東山村月見坂月見王山
横井梅枝
○仙臺市小田原大行院町二七　落合たま子
○京橋區三十間堀一ノ三小安内　鈴木秋子
○金澤市堅町四八　稻木雪子
○大阪天王寺石ヶ辻町五二九二第高郎内
南光綺
○岐阜縣加茂郡下米田村山本三五五
渡邊雪子
○上野前橋市横山町四二遠州亭内

○和歌山縣伊都郡笠田村笠田中
○同　所
○同　所
○同　所　楠　くに子
○本郷區駒込千駄木林町一四九　山本壽賀子
○岩代耶麻郡熊倉村　羽入　駒子
○岡山市浪花町箏曲教授所内　幸　子
○山梨縣東山梨郡八幡村　飯島代志野
○備後比婆郡敷信村字是松　高田梨葉子
○滋賀縣大津市松本町赤十字社支部病院内　岡　けい子
○埼玉縣兒玉郡丹庄村肥土　中澤たか子
○石川郡石川郡林村道法寺　宮本登美子

たみ子
木下　春子
石原ミツエ
柏本とら子

はる海外の空から洪水の見舞を下さいまして、美しい繪はがきもありがたう存じます。
○滿國大連の森谷つたみさんは、昨年御地方の繪ハガキを澤山お送り下さいましてありがたう

ての御言葉拜承いた
○信濃の山田よしえ[illegible]でも投書は出來ます。
○紙面にて田中落葉さん、繪はがきありがたう。

繪葉書會

○美しい趣味ある繪葉書に自作の和歌や俳句を認めてお惠み下さい姿も拙き筆にてお返し致しますわ（神戸市橘通四丁目、京川艶子）
○新年より誌友の皆様肉筆繪葉書の交換を願ひます。（大阪府北區曾根崎町中二丁目四〇、廣瀨淳子）
○正月早々から皆様盛に繪はがき交換か名刺交換か如何で御座います御同志の方は下名まで（東京府下、淀橋町字柏木三四七栗原方、龜井よしゑ）

書物の交換

○　西多摩郡小宮村　三ケ島よし
▲持つてゐる書物　女子文壇。創作十月號ヨリ
△讀みたい書物　女學世界十巻十號ヨリ十六號マデ
附記お貸し下され候のみにてもよろしく候

誌友くらぶは諸嬢の自由なり

誌友くらぶは諸嬢の自由に任せてあるのですから之を許用すれば興味もあり、利益もあるのは勿論です。不安が伴つたり、故障があつたりするのは、未だ公德心の進まない爲でせうか、苟くも本誌を愛讀なさる以上は誠實にありたいものです。興味と實益とあらしめようとするには何うしても、諸嬢各自に進んで貰はねばなりません多くの人は交際を望むにしても、至極單純で、ありふるしの印刷したる文句其まゝを書いて送られますが、それでは記者の方でも徒らに同じ文字を印刷するに止まりますから、遂には省略して名前だけを出すといふやうなことになるのです。ですから成るべく交際を求められるにしても、せめて文章だけでも少し工夫して頂きたい、勿論挨拶に奇拔な言葉もありますまいが、殊更奇拔でなくとも、只漠然と交際を求めるより、多少の希望を述べるとか、自分の身の上を語るとか、斯う云ふ注文があるとか、こんな意味で書物を求めるとか、今少し複雜した、今少し個性のある方法で、交際を求められたら何うでせう。記者の方でも近々新計畫を考へて、誌友くらぶの刷新を考へますけれど、諸嬢自ちに於ても、此際大いに注意されることを熱望いたします。

記者より

○一色醒川氏の永眠に就いて、逸早く早川花子、町田靜江、宮本こと子の御三名より懇篤なる弔詞をたまはり有りがたうございました。
○九州の一少女さんに、花守、花守日記、二十八宿三部とも、もはや發行所には絕版ですから、お答いたしかねます、御友人からお借りにでもなつたら何うです。
○セレベス島トモホン村の山田鯉登さま、はる

遲まきながら御禮まで。
○京都の並河龍子さん、投書についての御あいさつ正に承りました。
○桐生の石田ふて子さん、初めての投書につい

○
千葉縣山武郡土氣本鄉町越智
石井よし子
▲持つてゐる書物　新版色夜叉。玄雪姫前、後編。やどり木。空中飛行艇。航海奇譚。千坂光

子。心の鬼。今年の女子文壇。
△讀みたい書物　筆子。夏子。己が罪。右御交換を望む。

○山形縣米澤市桐町三、五五六
相田富子
▲持つてゐる書物　小說照子。鬼軍。女子文壇本年四月號五月號十月號第五年五號。少女の友第二巻第三號埒刊。婦人くらぶ第三巻六號。
△讀みたい書物　徳富先生の寄生木。筆子。其他の小說。右御交換下さい。

○大分縣下毛郡中津町豐後町岩田春二郎樣方　下田たみ子
▲持つてゐる書物　「小公子」「浪六傑作集」「夢」「一葉全集」「玉むし」「紅葉全集巻六」「金色夜叉」雜誌ホトヽギス第十二巻八號より第十二號迄。
△讀みたい書物　「即興詩人」「うづまき」「うきくさ」「歌集永日」「歌集舞姫」「獵夫日記」右換讀を望む。豫めハガキにて申込みを願ひます尙先着御申込み三名の方には　耶馬溪エハガキを添へて差上ます。

○府下西多摩郡乙津村　森屋りツ
▲持つて居る書物　「露」「藤村詩集」
△讀みたい書物　「十一月ノ三田文學」「ツルゲネフ散文詩」
あらかじめはがき一枚御願ひ。

○福岡縣絲島郡怡土村末永、笠嵜院内　靑木きみえ
△讀みたき書物　金色夜叉。筆子。夏子。嫁がふち二冊。

▲持つてゐる書物　少女世界。女學世界。婦人世界。美文のしほり。其他諸雜誌
右御送りくだされし御方にはあみ物の栞又は名所絵はがきを右の雜誌にそへて御禮致します。

○越後國岩船郡高根村字黒田　高橋三保子
△讀みたき書物　國語漢文檢定試驗答案。（東京神田錦町大學館發行）右御ゆづりを望む。御ゆづり下さいます方は豫めハガキにて御通知くださいませ。

○鳥取縣鳥取市中町河崎藤吉方　林しづ子
▲持つて居る書物　『最近速記術』『片われ月』『月に立つ影』『二宮尊德翁夜話』『子規俳句集』解釋つき『新體詩入門』『夏草』藤村著『マクベス』附十二夜、『あらし』（シェークスピヤ著譯）『徒然草』『更科日記』『女子文壇』三年より六年迄　但五年は無し。
△讀みたい書物　『思ひ出の記』『一葉全集』其外『朝霧』『青山白雲』『靑鬮集』『花守』『花守日記』『紅葉全集』　晶子先生著述の和歌集何れにてもよし。
右品物到着次第直ちにお送り申します、交換ずみの書は繰り返して目錄をお送り致しますからその中からお選み下さい。

○福岡縣朝倉郡寶珠山村大字福井　仲道すみ子
▲持つてる書物　『社會劇』『小說作法』『美丈夫』上下二冊『女子文壇』明治四十二年五月號より同年十二月號迄（埒刊を省く）
△讀みたい書物　『春』『破戒』
右交換を希望す豫めハガキにて申込を乞ふ。

○金澤市材木町六丁目四十九番地　島益江
▲持つて居る書物　ハムレット。小公子。靑山白雲。筆艸。ちび筆。
△讀みたい書物　紅葉全集。吾輩は猫。玉蟲（醉茗先生著）右交換を望む。御望みの方は豫め葉書にて御通知下さい。

○兵庫縣川邊郡長尾村口谷二〇〇阪上惣太郎方　絹枝子
▲持つてゐる書物　『金色夜叉』全部、『夏子』『不如歸』其他、
△讀みたい書物　『肉彈』『五洲怪奇談』『中學世界』『冒險世界』一巻七號迄、『女子文壇』『少女』右換讀を望む。

○東京府下豐多摩郡下澁谷町三四三　菅野一代
▲持つてゐる書物、『姫百合』『魔風戀風』『初戀』『良人の自白』『玉かつら』『むら雲』『一葉全集』『失戀』『戀か夢か』『バイロン詩集』『夏子』『靑春』『佐保姫』『別離』『夢二畵集』花の巻、『女道樂』『夢の花』『落日』『廿八宿』『小公子』『己が罪』『コブシ』『吉野の雪』『女子文壇』十七冊。
△讀みたい書物　『乙女の秘密日記』『夢二畵集』春の巻、秋の巻、旅の巻、
右換讀を望む。

○芝區田村町十一辻本方　渡邊操子
▲持つてゐる書物　『一葉全集』『三四郎』『小公子』『虞美人草』『亂れ髪』『夢の跡』『殘紅』『紅葉全集』『二十八宿』『花守』『露』『春』『夢二畵集』春、旅

閑書

の卷、『秀才文壇』二十二冊、『女子文壇』七冊、『ハイネの詩』
△讀みたい書物　『夢二畫集』夏の卷、秋の卷。
右換讀を望む。
○　秋田縣山本郡能代港町　建部壽子
△讀いたい書物　『婦人世界增刊』『食物かゞみ
右御不用の方はお讓り下さいませんか。
○　廣島縣庄原町本町通り　倉田眞佐子
▲持つてゐる書物　『一葉全集』『己が罪』三冊『多情多恨』『國子夫人』二冊『女學世界』、外古雜誌小說類。
△讀みたい書物　『眉山全集』『紅葉全集』金色夜叉を除く『嫁が淵』『寄生木』『新夫婦』後篇、『女子文壇』四十二年度
右換讀を望む特に紅葉全集おかし下さいます方には、別に『婦人文庫』『家政要鑑』『食道樂』等一ケ月間はお望によりお貸しいたしませう。
○　加賀山中溫泉西町山田様方　夕星
▲持つてゐる書物　『紅葉全集』卷ノ一、『寄生木』『濱子』『露子夫人』『愛の犠牲』『思出の記』『肉彈』『世界見物』『コブシ』後編、『孝女白菊』其他
△讀みたい書物　『乳姉妹』『我が輩は猫である』『少女の戀』『青春』『夢二畫集』『女波男波』『ハイカラ令孃』『言海』『ハムレツト』其他
右換讀を望む。

大阪の愛讀諸君、誌友會は急に開かれることに決しました（記者）

大阪女子文壇誌友會案內

新年はお目出度う、豫て皆樣に懇望の女子文壇愛讀誌友會を愈よ當地に開きますから同好の御方々偏に御來席を熱望いたします

▲時日　一月二十二日正午半（晴雨不論）
▲場所　浪花俱樂部（板屋橋にて下り北辻東へ入南側）
▲會費　金五拾錢（當日御持參）
▲出席　御婦人方に限る（係員の外男子の入場は一切御斷り）
▲來賓　御出席の承諾左の通り
伊賀駒吉郎先生（夕陽丘高等女學校長）
紀之川種子
▲餘興　箏、獨唱、琵琶、洋樂、朗讀、對話、狂言、福引其他
▲申込　出席御希望の御方は一月十五日迄に南區北高岸町川崎方誌友會幹事宛に御申込下さい

幹事
池田照子　石井重子
小田ならえ　攺野竹子
川崎道江　堤信子
辻井信子　栗本米子

編輯通信

▲本誌の姉妹雜誌『少女』の新年號は美しい表紙、美しい口繪が大小二枚挿入され、記事も選りぬきで、面白いものばかりです、近來此の如く盛粧された雜誌はありません、本誌の讀者諸孃も其令妹達におすゝめ下さい。
▲新年號編輯多忙の爲め、賞品發送が大へん後れまして申譯がありません、それ〴〵發送いたしましたから御落手下さつたでせう、なほ『今の婦人』の分は本月に發送いたします。
▲『婦人ノート』は投稿も集りました、例の通り目さきの新しい、內容の充實した雜誌にいたしますから御愛讀下さい。
▲誌友の寫眞も一向お送りになりませんが、編者は希望してゐるのです、一月は撮影の季節ですから新しいのを撮つて遠慮なくお出しなさい

本誌記者の一員たりし一色醒川は不斷よわ蒲柳の質でしたが、終に前月六日午前七時三十分眠るが如く安らかに此世を辭しました、一色君のことに就ては傳ふべき話もありますから、同人の追悼錄と共に次號に發表いたします。

本誌投稿の特別注意

投稿規定の改正

◎一般の投稿規定は巻末に改正の分を載せてありますから、熟覽を願ひます、此處には特別の注意に就いて二三項書き記します。

◎従來、日記、書簡文、短文などの區別のあつたのを散文といふ一つの欄に收めましたから、多少怪訝の念を抱かれる方があるかも知れませんが、何れにしても散文に相違ありませんから、散文に一つにして了ひました。勿論日記でも、書簡文でも、短文でもかまはないのです、凡て之を散文として扱ひます。

◎短文に限り一人少くも五六篇纏めて一つの題の下に送つて下さい、好い作があれば採用します。

◎初めての投書は成るべく載せてあげたいと云ふ方針から、初作と云ふ欄を設きました、此は散文に限るのです。

◎創作欄の外に、雜錄と云ふ欄を設けました、此方にも大いに投稿を願ひたいのです、特に知名の誌友に依囑した作物を掲載しますが、それと共に一般の投稿も大いに歡迎します。

◎雜錄欄に載せる原稿は、詳しい分類も出來ませんが要するに創作以外の婦人の書いたものならば、何でも宜いのです。告白談もよし、經驗談もよし、不平談もよし、本誌の批評もよし、社會の觀察もよし、都會の寫實もよし、地方の寫實もよし、氣焔もよし、範圍は極めて廣いのです。

◎雜錄欄の投稿は文章の長短を定めません、内容に依つて長くもなれば、短くもなるでせう、長くつてつまらぬものより、短くても氣の利いたものを採ります、掲載した以上は規定の報酬を呈します。

◎小説、詩、和歌、俳句、圖畫の五欄は昨年の通りで、何の變りもありませんが、新詩句は廢しましたから御投稿には及びません。

『化粧問答』の新設

◎婦人の化粧は益す進歩して參りました、化粧は若き婦人方の身だしなみとして、能く心得て置かねばなりません、本誌茲に見る處がありまして、新しく『化粧問答』の欄を設けます、問答欄の主任は多年化粧法に就いて研究もし、經驗もある東京化粧研究所顧問藤波芙蓉先生に托しました、必ず諸孃に滿足を與へ得る答があらうと信じます、此際盛んに疑問と不審を寄稿して下さい。

△『化粧問答』の問は能く要領を得るやうに書いて下さい、問の要領を得ないのは答にも困りますから、成るべく詳細にお書き下さい。△一人一題に限ります、幾題も尋ねて來る方には一題しか答へません。△匿名は自由ですが、成るべく原稿の一端に本名を記入して下さい。△原稿はハガキでも差支ありません、又半紙に書いて普通原稿と同封でも宜しい、但し、必ず『化粧問答質問』の文字を書添へて下さい。△原稿は毎月十五日に締切ります。△質問は一切無手數料です。

社告　本社専用の電話局名は京橋六〇七番と改りましたから皆様も御承知願ふ

雜報

新年の心持

何事にも形式を破壊して、自然に歸らうとする時代に、且又、何事にも實利が伴ふて餘裕の乏しい時代に新年の心持などを味はうとする者は、だん〱少くなつてきた。

人工的に新年を新しくしようと努めた昔の人の殘した型が、追々衰滅に歸してゆく、儀式と云ひ、禮儀と云ひ、出來るだけ簡易を尙ぶやうになつた。

けれども時間の上から新年と云ふものが、必ず三百六十五日目に來る、天然は永劫不變でも時間は刹那刹那進んで行く、我等は時間の歩みの前に、多大の權威を捧げてゐるから、新年來の聲にも同じく、敬意を拂はねばならぬ。

儀式は滅びても、新年は滅びない、各自勝手の方法で新年を思ひ、新年を考へ、新年を謳歌する事は宜しいことである。

新年の表現

新年を表現するものは何であらうか、人間の心持は無論だが、吾等は別に新年の色彩と音調とを其周圍に求めてみよう。

新聞の初刷、雜誌の初刷、年賀狀などは、繪と文字に表はれたる新年であつて、舊い意味と、新しい思想とが混雜して體現されてある、けれども大抵は新年そのものゝ意味を表はしたものに却つて新しいものはない、新年と交涉のない幾多の新しい印刷の中から、我等は時代の進歩を見出すことを娛しむ。

社會には娛樂のシーズンと云ふものもなければならぬ、外光の下に遊樂するのは東京では四月五月を其季節とするが、室內の娛樂期は正月である、室内の遊びは兎角因循になり易いから出來得るかぎり快活に遊びたいものである。

旅行も一つの新年の娛樂である、生活の羈絆から免れて、山に海に放浪するのも好い。

俳句や、和歌に表はれたる新年は凡て舊い、因習を歐つたにすぎぬ、舊い新年を歌ふ材料にはなるが、新しい新年の心持には適しない、新年と文藝とは今少し新しい意味で接近せねばならぬ。

婦人の爲にも新年は、一時の交際期である、盛粧せねばならぬと云ふ虛榮の爲に、幾多の故障はあるけれど、此故障はよろしく一蹴して新年を以て婦人の社交的機會をつくりたいと思ふ

之も新年を表現する一つの美しい現象であらう

大路小路の清らかなる、家々の改まりたる、人の服粧の目に立つは勿論、隅の飾りまで新しくなりたる、皆新年のお現であつて、此を客觀してゐると、其處にも多大の興味を感ずるのである。

誌友の動靜

過去一年間に於て、本誌々友の動靜も隨分ゐつたことゝ思ふ、今、記者は其名を知れる二三の人々に就いて動靜を語つてみよう。

先づ昨年は第一回の誌友會が開かれた、創刊第六年目に初めて此種の會が成立した、而かも多くは文章にも堪能なる人々の集りであつた、秋には京都でも會が開かれた、此も亦誌友動靜中の大きな出來事として記臆すべきものであらう。

數年來、本誌に都會式婦人の思想、殊に上流の消息にも通じて其健筆を振つてゐた某令孃がある博士に嫁がれたるを初めとし、朝井千とせさんは横須賀に、菊池りう子さんは濱松に、細谷鐵子さんは仙臺に、何れも嫁られた。山田邦枝子さん、長曾我部菊子さんの二人は上京して獨立したる職業に就いた、若杉とり子さんも亦同じことである、水野仙子こと服部貞子さんは愈よ檜舞臺に活動を初めた、昔の太田らく子さん、今の白木いと子さんは伉儷睦じく、新家庭の意見も雜誌の上で見ることが出來るやうになつた、其外從前の投書家、今では家庭の主婦となつても折々匿名の下に筆を取つてゐる方も少

くはない。其外地方から上京された方や、東京から地方に行かれた方や、地方で新婚された方や、夭折された方や、其動靜も亦個人〱に就いて云へば一部の小說を作るであらう。

婦人の市長

英國の市長は每年十一月九日を以て總て改選せらるゝ慣例なるが、近着の新聞紙に依り新市長の顏觸れを見るに、英國唯一の婦人市長として有名の倫敦大學醫學士ガレツト、アンダーソン夫人は、今回は退引したやうなれども、更にジーイーエフモルガン孃はウエールス州ブレコン府にサラアンソーヌ夫人は英蘭州オルダム市の新市長に就任し、共に自由黨に列したとの記事があつた。

松方伯の金婚式

去月廿二日金婚の祝典をあげたる松方侯爵は本年七十六歲夫人まさ子は六十六歲にして兩人共體量二十貫以上の肥滿、子女は十二人の內一人缺けしだけで左の如し

長男巖（十五銀行副頭取、四十九歲）二男正治（前羅馬公使、四十八歲）三男幸次郞（川崎造船所長、四十六歲）四男正雄（浪華銀行專務取締役、四十三歲）五男五郞（東洋製糖取締役、四十歲）六男乙彥（日本石油會社、卅一歲）七男正熊（帝國製糖會社、卅歲）八男義輔（日本銀行、廿八歲）長女千代子（亡）二女巖子（卅七）三女鶴子（卅三）四女光子（三十）五女梅子（十九）男子は皆獨立の家をなし女子は梅子孃を除くの外、皆名家に嫁してゐる、兒孫凡て四十餘人

生きた笑話

▲お饒舌女王　此頃嘉悅孝子女史の許へおしやべり女王とは如何なる御方かと問合せの手紙が屆いた、多分孝子女史が南極探檢隊の告別式に於て、イサベラ女王の事を話したのを、おしやべりと聞き違へての事であらう。

▲歩いてやつた　日本橋區茅場町での乘替切符を持て、微醉機嫌の職人體の男、人形町で電車に乘つた、車掌曰く、此の切符は無効です、すると職人啖呵を切つて「ベラぼうめ、茅場町で乘る可き處を此處迄歩いてやつたんだい」

▲馬鹿の賣物　滑稽のやうで實際の話、茅場町に電車が差掛ると丁度坂本公園の方から「大馬鹿に小馬鹿」と刻身賣の聲が聞えた、すると車の內の田舍者が同伴の男に言つた文句が面白い「東京にやア馬鹿の賣物があるのかなア」

東京だより

△小學校の女生徒が毛織物の外套を着だした。

△辻待の車でもゴマ輪ならざるものは場末の外に殆ど見當らなくなつた。

△夕刊が『報知』の外に『やまと』があり、『中央』があり、『每夕』があることゝなつた。

△帝國劇場と、警視廳の外圍ひが取れて、丸の內に巍然たる建築物が二つ現れた。

△電車がます〱こむやうになつた。

△大通りの人道がアスハルトで堅められつゝある。

△片側往來止は到る處に絕えない。

△日本橋は橋の形になつて來た。

△露店は禁止されない。

△飛行器は日本で初めて揚つた。

△偉い博士が少しづゝ永眠して、新しい博士が澤山に出來た。

△每もより寒さが早く來た。

△この暮には火事が多かつた。

△リボンの無地がはやる。

新刊

○東西遊記　北窓瑣談　有明堂文庫

有明堂文庫の中の一冊である、近頃此種の古書飜刻は一種の流行であるが、有明堂文庫の叢書は尤も吾等の意を得てゐる、第一體裁が實に好い、形も大きくなく、小さくなく、恰好である上に、活字も五號と六號との間だから至極讀み易い、校訂の嚴なる、索引の親切なる、今此文庫の特色であつて、製本も善く出來てゐる、和漢洋に涉りて名著を網羅すると云ふから、好文の士は何よりの嚴譽であらう。（定價金八十五錢神田錦町一丁目有明堂書店出版）

○さよなら●●●●　竹久夢二著

『紅の花の如く咲き出でたる、少年の日の物語なれば、われには懷かし、されど小鳥の如く自由なりし、少年の幻影に別るゝかたみなれば、いと悲し、別れゆくいぢらしき後姿よ、さようなら』と其序にもある如く、詩思紛溢したる著者の少年時代の繪物語である、愛すべし、味ふべし。（定價金七拾錢）

○夢二畫集(冬の卷)　同　著

冬の卷出でゝ夢二畫集四卷は全く揃つた、此卷に至りて、著者の面目はいよ〳〵發揮されてゐる、明治の浮世繪として多數の渇仰者を有する夢二の繪は、冬の卷を見なければ、其眞の天才的表現が分らぬ、自分は冬の卷を尤も愛す、一一の繪に就いても何か言ひたいことがあるやうだが、今は單に一卷の紹介に止めて置く。(定價金五十錢)

○飛行機物語　柴田流星著

飛行器は世界的流行となつたが、何人も心得て置かねばならぬのは、飛行器は何うして出來てゐるか、何うしても飛ぶかと云ふやうなことだが、本書はむづかしい學理を避けて、小說として飛行器のことを能く會得するやうに書いてある、時節柄一般の讀者に大歡迎されるであらう。(定價金二十八錢、以上三冊麹町洛陽堂出版)

○百家俳句全集(秋)　參人編

類題の俳句集として近頃尤も評判ある星野素人氏編輯の本書は、茲に秋の卷を出した、一頁に約三十句を收め、八百二十三頁と云ふ大冊であるから、秋の俳句として參考とするには此書一冊で大いに用は足りる、句の選み方も正しく、模範とするには恰好のものを蒐めてある、索引もある、横本で絹糸綴の體裁の好い本である。(定價金六十五錢、博文館出版)

○捨兒　福田琴月著

お伽噺でお馴染の福田琴月氏の作、可憐なる少女小說である。(定價金二十八錢、博文館出版)

○平淸盛　山田美妙著

史外史傳と割註がしてある位だから、銀月程の大した意氣込で書いたものでもあるまいが、美妙の筆が斯う云つた樣な時代の空氣を寫すのに適して居るせいか、事々しい實說太閤記よりは此方が餘程面白い所がある、難解な評論體にしないで、なだらかな小說體にしたのも可い。美妙子の絕筆と號して居る。(定價金六十錢)

○妙な夫婦　同人著

螺旋釘の樣に捩れたネヂ子といふ奇妙な女と、浮戸則安といふお人好の亭主とを骨子として、至極甘い滑稽が書いてある。大分キザな齒の浮く樣な所もあるが、流石に筆は達者なもので、スラ〳〵と面白く讀める。現代の暗い刺戟的な小說に飽いた時に見ると風が變つて居ていゝだらう。(定價金八十錢)

○實說太閤記(上卷)　伊藤銀月著

今までに出た豐臣秀吉の傳記は恐く小說である探るに足らぬといふ見地の下に新に書いた太閤記であるが、それにも拘らず矢張新な史蹟を研究して書いたのでなく、舊い小說的太閤の傳記を只少し新な眼で見たに過ぎないのは少々遺憾である。併し文章は銀月一流のキビキビしたものゝで讀んで心持が善い。(定價金六十錢、以上日本橋區上槇町十番地千代田書房發行)

○源爲朝　兒玉花外著

保元の快男兒鎭西八郎爲朝の事蹟を、熱烈奔放な筆で痛快に書いてある。爲朝の傳記を書いたものは從來にも澤山あるが、これ位活々した書き方のはまだ何處にもない。花外にして初めて爲朝の眞骨頭を傳ふるを得べく、鎭西八郎を描くに於て極めて花外の筆は光彩を生ずる。兎に角從來の歷史以外、傳記以外に超絕せる熱血的氣分は確に此著の特色であらう。(定價金六十錢前同所發行)

○郵便かるた

從來の家族合せや國旗合せなどの單調な遊び道具に慊らないで、娯樂と實益とを兼ねた新カルタである。やり方は、從來の舊式カルタ遊を踏襲した部分もあるが、其中の郵便局遊びといふのは、非常に面白い思ひ附で、もう歌がるたにも飽いたといふ樣な十七以上の人の遊び道具として適當である。(定價金二十四錢神戸市芦原通四丁目岸本文錦堂發行)

○褐色の花　細越夏村著

細越夏村氏の第五集である、散文詩十一章、詩十六章を收めてある、いよ〳〵出て愈よ作る氏の詩才は欣羨に値する(定價金貳拾錢、岩手縣盛岡市、悠々書樓發兌)

○レモンの花の咲く丘へ　國枝史郎著

死に行く人魚、その日のために、と云ふ二つの脚本である、新しい人の試であらう(定價金四拾錢、東京堂發賣)

女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る
▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること
▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること
▲小說と、詩と、雜錄とには振假名をつけること
▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以內、詩と雜錄は行數制限なし
▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす
▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る
▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限
◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す
▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢
▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す
▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す(但し二頁以內の短きものは此限りにあらず)
▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす
定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第一七〇九番

◎定期發行分 ▲毎月一回(一日)
一冊(一回分) 定價金拾五錢……郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊(三月分) 前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊(半年分) 前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊(壹年分) 前金壹圓六拾六錢……同拾八錢 計金壹圓八拾四錢

◎臨時增刊分 ▲年四回(二月、五月、八月、十一月)
一冊(一回分) 定價金貳拾錢……郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分) 前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊(壹年分) 前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

◎定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回
四冊(三月分) 定價六拾三錢五厘……郵税六錢 計金六拾九錢五厘
八冊(半年分) 前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢五厘
十六冊(壹年分) 前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料拂すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絕)、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……部數多く有効に
上等	一頁廿五圓	半頁……比し無類の割安
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓　二行四拾錢

〆切 每號 十五日前

特約取扱　○日本電報通信社　○明治廣告社　○博報堂　○弘報堂

明治四十三年十二月廿五日印刷
明治四十四年一月一日發行

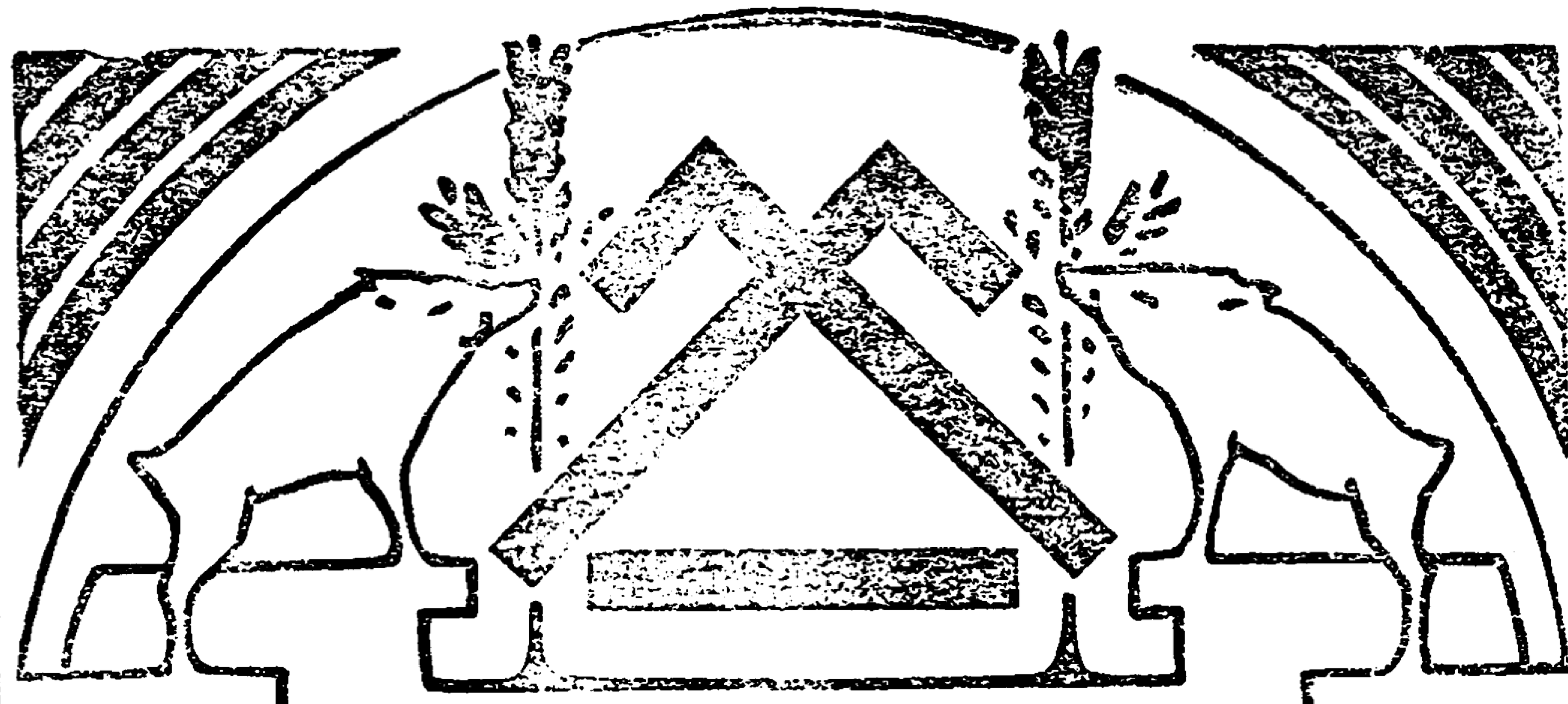
新年號限 定價金貳拾錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區宗十郎町十五番地
印刷者　松本魁
東京市京橋區宗十郎町十五番地
印刷所　國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(京橋六〇七七) 女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂



◎勅題に因みて考案致し候御年玉用帛紗
半衿其他手拭地に至る迄種々陳列致し置候
間何卒御來店御買上の程奉懇願候

恭賀新年

○遠隔の御方は通信販賣課宛御手紙にて御用命
被下候へば即時小包便を以て御送附可申上候

振替口座東京九八

一月元旦

東京日本橋
白木屋呉服店

第七年第一號
（毎月一回一日發行）

女子文壇

明治四十三年
十二月廿五日印刷納本

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）



▲新年號＝定價金貳拾錢 [illegible]